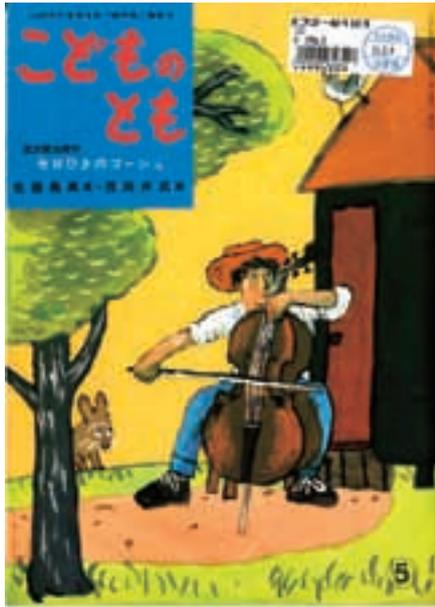


平成22年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録

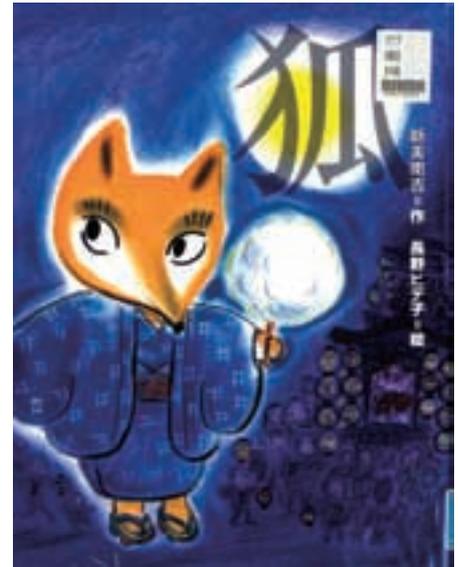
日本の児童文学者たち

2011年9月

国立国会図書館国際子ども図書館



『セロひきのゴーシュ』宮沢賢治原作、茂田井武画 『こどものとも』2号(復刻版)福音館書店、1996(当館請求記号 Z32-B103) p. 12参照



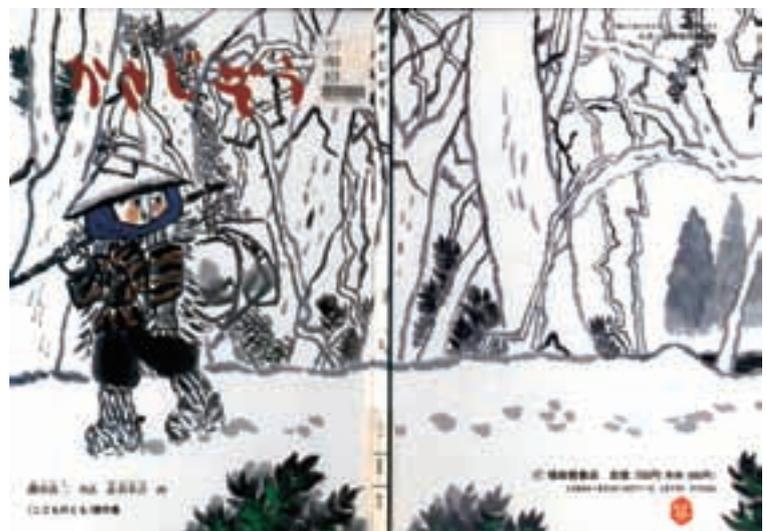
『狐』新美南吉作、長野ヒデ子絵 偕成社、1999. 3(当館請求記号 Y17-M99-648) p. 43参照



『繭と墓：金子みすず童謡集』金子みすゞ著 大空社、2003. 12(季節の窓詩舎昭和45年刊の複製 当館請求記号 Y8-N04-H555) p. 68参照



『山のトムさん：ほか一篇』石井桃子作、深沢紅子、箕田源二郎画 福音館書店、2011. 5(当館請求記号 Y7-N11-J120) p. 90参照



『かさじぞう』瀬田貞二再話、赤羽末吉画 福音館書店、1966. 11(当館請求記号 Y17-M98-809) p. 110参照

平成22年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「日本の児童文学者たち」

目 次

「児童文学連続講座講義録」の刊行にあたって	池本 幸雄 ……	3
凡例	……………	4
賢治童話と子ども読者	宮川 健郎 ……	6
南吉童話の闇と光	遠山 光嗣 ……	23
金子みすゞー読みものとしての童謡ー	藤本 恵 ……	51
石井桃子	小寺 啓章 ……	69
＜ヴィジュアル・ストーリーテラー赤羽末吉＞の世界	吉田 新一 ……	102
日本の児童文学者たちー参考図書紹介	大幸 直子 ……	119
講師略歴	……………	140

「児童文学連続講座講義録」の刊行にあたって

国際子ども図書館では、全国の各種図書館等で児童サービスに従事している図書館員を対象に、国内外の児童書・児童文学に関する幅広い知識の涵養を目的として、「児童文学連続講座」を毎年開講しています。

第1回の平成16年度は「ファンタジーの誕生と発展」、平成17年度は「日本児童文学の流れ」、平成18年度は「絵本の愉しみーイギリス絵本の伝統に学ぶー」、平成19年度は「絵本の愉しみーアメリカ絵本の展開ー」、平成20年度は「日本の昔話」、平成21年度は「いつ、何と出会うかー赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」をテーマとしました。これらの講義録は、国際子ども図書館ホームページでもご覧いただけます。

平成22年度の児童文学連続講座は、「日本の児童文学者たち」をテーマに、平成22年11月8日、9日の二日間、国際子ども図書館のホールで開講しました。

今回は、かねてから話を聞きたいという要望の高かった児童文学者を取り上げ、宮沢賢治、新美南吉、金子みすゞ、石井桃子、赤羽末吉という5人の児童文学者について、宮川健郎講師（総合監修）、遠山光嗣講師、藤本恵講師、小寺啓章講師、吉田新一講師に、時にご自身との交流の思い出を交えながら、それぞれの文学の特徴や読まれ方について考察していただきました。当館からは、大幸直子講師が、それぞれの児童文学者について調べるための当館所蔵資料を紹介しました。

本書はその講義録です。紙面ではありますが、各講師の魅力的な語り口を味わっていただければと思います。講義で紹介された資料のリストを収録し、当館所蔵資料には、請求記号を付しておきました。

施設的な制約のため、受講をお断りせざるを得なかった方々を始め、様々な事情で受講することができない方々のために、本講義録が少しでもお役に立てば幸いです。

末尾ながら、お忙しい中、快く講師をお引き受けいただき、本講座を実りあるものにするためにご尽力いただきました講師の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成23年9月

国立国会図書館国際子ども図書館長
池本 幸雄

凡例

- 本書は、平成22年11月8日と9日の二日間にわたって国際子ども図書館で開催しました「国際子ども図書館児童文学連続講座―国際子ども図書館所蔵資料を使って（総合テーマ：日本の児童文学者たち）」を元に編集した講義録です。
 - *次ページの日程表もあわせてご参照ください。
- 講義当日に各講師が配布した「レジюме」、「紹介資料リスト」もあわせて掲載しました。「レジюме」は講義本文の前に、「紹介資料リスト」は講義本文の末尾に掲載しています。
- 「紹介資料リスト」は、講義の中で紹介された資料についてリスト化したものです。書誌事項は、原則として国立国会図書館の目録の表記を採用しました（所蔵資料を掲載しましたので、書誌事項は初版本とは異なる場合があります）。
 - *所蔵のない資料の書誌事項については、総合目録ネットワークシステム等を参考にしました。
- 「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、国際子ども図書館の請求記号を記載しました。国際子ども図書館が所蔵しない場合は、国立国会図書館東京本館の請求記号を記載し、（本館）と付記しました（所蔵状況：平成23年7月現在）。
- 講師の肩書きは連続講座当時のものです。

平成22年度「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って」
総合テーマ「日本の児童文学者たち」日程表

総合監修 宮川 健郎（武蔵野大学文学部教授、国立国会図書館客員調査員）

○1日目 11月8日（月）

時 間	内 容	講 師
9時30分～ 10時10分	館内見学	
10時10分～ 10時20分	開会、諸注意	
10時20分～12時	賢治童話と子ども読者	宮川 健郎
13時～14時40分	南吉童話の闇と光	遠山 光嗣（新美南吉記念館学芸員）
14時50分～ 15時50分	日本の児童文学者たち—参考図書紹介	大幸 直子 （国際子ども図書館資料情報課長）
16時～17時	研修生意見交換会	

○2日目 11月9日（火）

時 間	内 容	講 師
10時～11時40分	金子みすゞ—読みものとしての童謡—	藤本 恵（都留文科大学文学部初等教育 学科准教授）
12時50分～ 14時30分	石井桃子	小寺 啓章（ノートルダム清心女子大学 非常勤講師）
14時40分～ 16時20分	<ヴィジュアル・ストーリーテラー赤 羽末吉>の世界	吉田 新一（立教大学名誉教授）
16時20分～ 16時30分	修了証書授与、閉会	

レジュメ

賢治童話と子ども読者

宮川 健郎

宮沢賢治の童話は、賢治の生涯や思想とかかわって論じられることが多いけれど、子ども読者は、それをどう読むのでしょうか。講師自身がかつて試みた、子どもたちへのインタビューや調査を踏まえて考えます。また、賢治童話の絵本化や紙芝居化のもつ可能性と問題点についてもふれる予定です。

Ⅰ 賢治童話とメディア

1. 紙芝居

- ・堀尾青史脚本・宇田川種治絵画『キツネノゲントウ 宮沢賢治「雪渡り」より』（ほるぷ出版 1984、原作は日本教育画劇 1942）

2. マンガ

- ・ますむらひろし『風の又三郎』『グスコブドリの伝記』（朝日ソノラマ 1983）

3. 絵本

- ・「やまなし」の絵本化

〈宮沢賢治の作品が誇らしげにふり撒いている魅惑のもっともおおきなものは、並外れて自在な眼のおき方にあるといえる。〉（吉本隆明「宮沢賢治」、『悲劇の解説』筑摩書房 1979所収）

- ・「セロ弾きのゴーシュ」の絵本化

茂田井武の2冊（福音館書店 1966、『こどものとも』1956年5月）

〈トランペットは一生けん命歌ってゐます。／ヴァイオリンも二いろ風のように鳴ってゐます。／クラリネットもボーボーとそれに手伝ってゐます。／ゴーシュも口をりんと結んで眼を皿のようにして楽譜を見つめながらもう一心に弾いてゐます。〉（原作）

〈とらんべつとは、ぷーぱ ぷーぱ ぷぱ、／くらりねつとは、ぼーぼー、／ばいおりんは、ぎーご きーこ。／ゴーシュは、セロを、ごうごう、ごうごう、いっしょうけんめいに ひいて いました。〉（『こどものとも』、佐藤義美による再話）

原作の語りの「三人称」と、小林敏也の絵本（パロル舎 1986）の「一人称」

- ・参考 宮川健郎「賢治の語り、絵本の視点—賢治童話の絵本化をめぐる覚書—」（『日本児童文学』1996年11月）

4. 教科書

- ・高校現代文教科書の「永訣の朝」と、『<新>校本 宮澤賢治全集』年譜篇の永訣の朝。一つのすぐれた「作品」としての「永訣の朝」。

〈瀕死の床にある妹への愛情と、永訣の悲しみ、それを超えた、万人の幸福の祈り。最愛の妹の死に臨んで、作者は深い法華経信仰に基づく天上界への希望を見だし、死に対する恐れと悲しみ、いとおいしい者を失う喪失感を、〈天上界への転生〉という希望へと昇華させていく。死んでゆく妹、そして他者のために、自己の「すべてのさいはひ」を捧げようとする作者の思想から生まれる崇高さが、詩の主旋律である妹への鎮魂を深い祈りで彩っている。〉

（「主題」、『新編現代文』東京書籍・教師用指導書 2008）

- ・参考 堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』（図書新聞社 1966）
- ・「やまなし」と畑山博「イーハトーヴの夢」（光村図書6年、2002～）
- ・「賢治神話」からの解放のために

II 賢治童話と子ども読者

1. 賢治童話は児童文学か

- ・石井桃子他『子どもと文学』（中央公論社 1960、のち、福音館書店）
〈私たちは、宮沢賢治のかなりたくさん作品が、正しい意味で、子どものための文学であり、それが大人をさえ楽しませることができたのだと信じます。〉
作品構成がしっかりしているため、「何かの期待を終わりまで持ちこし、それがとうとう解決されないという気分を」残さないこと。単純で、くっきりと、眼に見えるように描かれていること。子どもの文学にたいせつなユーモアやゆたかな空想力。
- ・神宮輝夫「賢治童話と“児童文学”としての資格」（『どんぐりと山ねこ』大日本図書 1968所収）
〈わたしは作品の完成度の高さよりも、賢治の童話には、子どもの文学としての資格をえたものと資格がないものの二種類があると考えています。〉

2. 子どもはどう読むか

- ・「紳士？ あ、獵師？ 獵師は、あの、おなかがすいててね、……」（小6・男）
- ・〈二人の青年紳士が獵に出て路を迷ひ「注文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却つて注文されてゐたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です。〉（童話集『注文の多い料理店』広告ちらし）
- ・インタビュー→（仮説）→大量アンケート
- ・参考 桑原武夫『『宮本武蔵』と日本人』（講談社現代新書 1964）

3. 「未分化の児童文学」としての賢治童話

- ・ストーリーとテーマ
- ・ストーリーをささえるもの

くりかえし／擬人化／オノマトペ

昔話の語りとの類似性

- ・参考 宮川健郎『国語教育と現代児童文学のあいだ』（日本書籍 1993）

資料

- ① 吉本隆明「宮沢賢治」（『悲劇の解説』筑摩書房 1979所収）より
- ② 『<新>校本 宮沢賢治全集』第一六巻（下）年譜篇（筑摩書房 2001）より
- ③ 石井桃子他『子どもと文学』（中央公論社 1960、のち、福音館書店）「宮沢賢治」（執筆は瀬田貞二）より
- ④ 神宮輝夫「賢治童話と“児童文学”としての資格」（『どんぐりと山ねこ』大日本図書 1968所収）
- ⑤ 「奈良梨採り」（関敬吾編『日本昔話大成』第五巻 角川書店 1978所収）
- ⑥ 山元隆春「読者論の具体的展開」（田近洵一他編『「読者論」に立つ読みの指導』小学校高学年編 東洋館出版社 1995所収）より

賢治童話と子ども読者

宮川 健郎



今回は「日本の児童文学者」というテーマですが、私は宮沢賢治についてお話しします。宮沢賢治は大変大きな、ある深い世界を持った文学者だと皆様もお考えではないかと思いますが、最近ますます論じられることが多くなってきました。ただ、この講座には全国で児童サービスをなさっている現場の中心にいる方がお集まりですから、児童サービスにとって何かヒントになるような形で宮沢賢治を扱えたらと考えています。特に子ども読者との関わりでどんなことが考えられるかという話をしたいと思います。

I 賢治童話とメディア

資料が大きく二つに分かれています。Iを「賢治童話とメディア」、IIを「賢治童話と子ども読者」としました。前半は、どういうメディアを通して子どもたちに賢治童話が渡されているのかを考えてみたいと思います。「メディア」とは媒介というようなことだと思いますが、今、「メディア」というと、映像メディアやインターネットなどの新しいメディアを指すことが多いと思います。賢治作品もいろいろ映像化されていますが、図書館ではまだ映像メディアのことを中心に考えるという状況ではなさそうな気がするので、ここでは映像は省き、紙芝居、マンガ、絵本、教科書を取り上げ、賢治童話がどういう形で子ども読者に渡されようとしているのかを具体的に考えたいと思います。

1. 紙芝居

私は図書館学に詳しいわけではありませんが、児童サービスで紙芝居を扱うことの是非について議論があることは聞いています。紙芝居では、原

作を紙芝居というメディアに合わせて脚色する、つまり紙芝居なりの再話、書換えが行われます。図書館のおはなし会で紙芝居を扱うことも多いと思いますが、原作と結構違うところがあって、かえって原作と子ども読者を結び付ける障害になるという問題もありそうです。一つ、私が気に入っている賢治原作の紙芝居がありますので、皮切りの御挨拶のような感じで演じたいと思います。

「キツネノゲントウ」と「雪渡り」

これは『キツネノゲントウ 宮沢賢治「雪渡り」より』（堀尾青史脚本、宇田川種治絵画）で、戦争中の紙芝居です。戦争中は紙芝居が非常に成熟していった、それが戦意高揚のメディアとして使われたりもしたのでそれはそれで問題なのですが、成熟期にあった戦争中の紙芝居の一つです。（紙芝居『キツネノゲントウ 宮沢賢治「雪渡り」より』を演じる。）

これは「雪渡り」の再話です。「雪渡り」を御存じの方は、大分脚色されていることにお気づきになったと思います。原作では、最後、四郎とかん子をお兄さんたちが心配して迎えに来ます。原作には、お兄さんたちはもう年齢が上になっているのでこの世界に入ることができなくて、子どもたちだけでキツネの世界に紛れ込んでいくということが書かれています。そこが一番大きな相違点かなと思います。

そういう意味では原作と違うとも言えると思いますが、賢治の言葉をうまく生かして、リズムカルな調子でよく出来上がっていて、私は大変好きな紙芝居です。1942年という時代に作られたものですが、今御覧いただいたのは、ほるぷ出版が少し拡大して大きめに作った複製版です。それをた

またま持っていたのでやってみました。この舞台も普通の舞台より大きめです。

先ほど言いましたように、児童サービスの中で紙芝居をどう使うかというのはなかなか難しい問題だと思います。ただ、この紙芝居は傑作だと思いますが、絵本や児童文学に面白くて良い作品とそうでないものがあるのと同じで、紙芝居にもいろいろな作品があり、傑作もそうでないものもあります。傑作は、一つのある独立した世界を作っていきますので、原作との違いがあったとしても、それはそれで一つの作品として楽しめるのではないのでしょうか。児童サービスの中で紙芝居をどのように使えるか、使えないかということは、もう少し皆で考えなければいけないと思いますが、今日は宮沢賢治の作品で紙芝居になっている一つの面白い例を紹介することにとどめることにします。

脚本は堀尾青史さん、宮沢賢治の伝記研究で大変有名な方でもあります。僕は紙芝居の脚本をたくさん書いた人としてよく知っていますが、『年譜宮沢賢治伝』という本を書いたりして、賢治研究、特に伝記研究の基礎を作った一人です。

2. マンガ

賢治童話をマンガや絵本にするということもよく行われていて、子どもたちもよく見ることになるのではないかと思います。マンガや絵本にするとはどういう仕事かという、メディアを変換していきますから、そのときには賢治童話のある作品をどのように解釈するか、どのようにとらえるかという、解釈なり作品論のようなものが発生します。子どもたちはマンガや絵本として出会っていくと思いますが、画家やマンガ家の解釈が入って作品化されていくので、賢治をどのように読んでいるのかという、論文の形ではありませんが、一つの作品論として見ていくことができると思います。

ちょっと書画カメラを使います。今日はますむらひろしさんがマンガにしたものを取り上げます。他の人がマンガにしたものもありますが、ますむらひろしさんが非常によく知られていて、これがアニメーションになったりしました。

「グスコブドリの伝記」

まず、「グスコブドリの伝記」を紹介します。賢治の作品は、生きている間は余り活字になりませんでした。『児童文学』という雑誌の2号に「グスコブドリの伝記」が載っています。版画家で著名な棟方志功が絵を付けていて、この絵もなかなか面白いのです。この「グスコブドリの伝記」がマンガになったものがあります。今言ったように作品の解釈がそこに表れると思います。

「グスコブドリの伝記」というのは、飢饉ききんのときに妹と一緒に森に捨てられた主人公が生き延びて遍歴し、やがて次の飢饉が来たときに、それを科学的な措置—火山を爆発させて気候を変える大事業—によって救い、その中で彼自身は犠牲になるという話です。最後に一人火山島に残らねばならず、その人は命を落とすということになっていますが、いろいろ評価が分かれるところで、自己犠牲がよいかどうか、玉碎的な思想だと言えないと思います。たった一人火山島に残って彼は亡くなってしまいますが、彼が少年の時に経験した飢饉を皆が味わわずに暖かい家庭が守られた、という話です。

途中で科学者のクーボー大博士に出会い、やがて気候を変える仕事を手伝うことにつながっていきます。クーボー大博士の学校に行く場面を原作で読んで一番気にかかったのは、大博士の講義に出てくる「歴史の歴史ということの模型」というものです。童話の中には「歴史の歴史ということの模型」と言葉で書いてありますが、これは何なのか、小学校の5、6年生くらいで読んだときから気になっていました。

ますむらひろしさんが「グスコブドリの伝記」をマンガ化したとき、私が一等初めに見たのは、この「歴史の歴史ということの模型」です。これがクーボー大博士です。ますむらさんは登場人物を全部猫に置き換え、そのことによって日常世界と違うイーハトヴ世界というか賢治世界を創り出すことにかえて成功したと私は思いますが、これも評価が分かれるところで、余り好きでないと言う人もいます。これが「歴史の歴史ということの模型」です。ジャングルジムのようなものにとり手が付いていて、ガチャンガチャンと回すと

いろいろ姿を変えます。ちょっとこれはがっかりしたというか、「え、そうなの」と思いましたが、大変気になっていた言葉の一つで、どうなっているのだろうと思っていましたから、視覚化してくれて面白いなと思いました。

そのように、大人で賢治を読んでいる人は比較できますし、子どもでもよく読んでいる中学生や高校生ならば、原作でイメージしづらい言葉がどのようになっているか、マンガ家の解釈を知ることによって自分たちも考えることができると思います。

「風の又三郎」

「風の又三郎」もマンガになっています。「風の又三郎」は、山の村の小学校に不思議な転校生がやって来てやがていなくなってしまうという話です。山の村の小学校は複式学級で、1年生から6年生までが一人の先生に教わっています。その先生が男性か女性かが気になります。言葉が大変丁寧で女性のような気もしますが、分かりません。最後、転校生がいなくなったことが分かる朝の場面があります。子どもたちが「いなくなったのではないか」と思ってあわてて学校に行くと、本当に昨日いなくなっていた。まだ始業前なので、宿直していたのでしょうか、先生は赤いうちわを持って現れます。

マンガには「日曜なのでみなさんにご挨拶するひまがなかったのです」とあります。これは原作を生かしています。「先生飛んで行ったのですか(原文ママ)」、「いいえお父さんが会社から電報で呼ばれたのです」。この先生はもちろんここで初めて出てくるわけではありませんが、赤いうちわを持った先生は、男性の猫として描かれていて「あ、そうなのか」と思ったりもします。

このように、マンガは童話の解釈として読むこともできるだろうと思います。

3. 絵本

賢治童話の絵本は今、随分たくさん出ていますね。賢治童話はイメージや色彩が豊かだとよく言われますが、それを絵本にどうやって置き換えていくかというのは、大変面白い問題を含んでいる

と思います。

「やまなし」の絵本化

現代を代表する評論家の一人、吉本隆明さんは、宮沢賢治のことを時々書いています。『悲劇の解読』という本に収められている「宮沢賢治」の一部をコピーしてお配りしました。小学校6年生の教科書に長く載っていることでも知られている「やまなし」という作品について書いているところがあります。

これは「小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈」と銘うたれた作品の一部分である。水底にいる「蟹」の視線ですべてが視られている。水のなかの魚をとろうと突然頭から軀を突込んでくるかわせみが、いわば水底から水面を仰向する視覚でとらえられる。また水の表面をながれる樺の花が水底の眼から視られている。けれどマジックにかからないでよく読むとこの「やまなし」の描写は、同時に川の流れをあたかも水槽を外から視ているような位置で観察しているもうひとつの眼の存在なしには不可能である。そしてこの眼は無意識のように作品の言表にびまんしている。水底の「蟹」の眼になった視線と、川の流れを横断面から観察しているもうひとつの架空の眼の二重視がわたしたちを惹きこんでいる。

と分析されていて、ああ、なかなか面白いなと思いますが、こういうところが賢治の魅力なのではないかと思います。

そして、それが「やまなし」の絵本でどのように表現されているか、というのが興味のあるところです。賢治のどの作品もたくさん絵本化されていますが、「やまなし」の絵本も結構たくさん出ています。この図書館にあるものをランダムに見ていきたいと思います。

これは遠山繁年さんの絵です。これが書き出しの

二疋の蟹の子供らが青じろい水の底で話していました。

『クラムボンはわらったよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

というところの絵です。

余り時間がないので次々行きます。これはちょっと新しいもので、イラストレーターの川上和生さんの絵です。ちょっと上から見ているのかなあという感じです。

賢治童話の絵本化には、小林敏也さんの仕事がたくさんあり、いつも面白い角度で描かれています。「やまなし」もあります。

吉本隆明さんが整理してくれたような視点でこれらの絵本を検討していくと、結構面白いいろいろなことが現れてくると思います。「やまなし」なら「やまなし」という作品の作品論だと思います。子どもたちも童話集や教科書と絵本を比べると、面白いことを見付けることがあるのではないのでしょうか。

「セロ弾きのゴーシュ」の絵本化

もう一つ、「セロ弾きのゴーシュ」を絵本化したものを見ていきたいと思います。

「セロ弾きのゴーシュ」の絵本では、茂田井武さんという画家の福音館書店版が大変有名です。雑誌『こどものとも』創刊2号目の作品が今のハードカバーになっています。絵は大体同じですが、本文が、最初の『こどものとも』版では「佐藤義美案、宮沢賢治原作」と書いてあります。僕らが単行本で読んでいるのは宮沢賢治の本文ですが、『こどものとも』で最初に出たときは賢治の本文ではないのです。そのことを、春に吉田新一先生とお話ししていたときに先生がおっしゃって、あっと気付かされました。

レジュメに書き出しの一部を比較できるように書いておきました。単行本の方は、表記は違いますが原作を使っています。

トランペットは一生けん命歌ってゐます。／ヴァイオリンも二いろ風のように鳴ってゐます。／クラリネットもボーボーとそれに手伝ってゐます。／ゴーシュも口をりんと結んで眼を皿のようにして楽譜を見つめながらもう一心に

弾いてゐます。(原作)

最初のオーケストラの練習のところが、原作ではこのように書かれています。そこでゴーシュは、下手なので楽長に怒られてしまいます。

ここだけだとよく分かりませんが、宮沢賢治の童話は擬声語・擬態語、オノマトペにあふれているとよく言われます。例えば「どんぐりと山猫」は余り長くない童話ですが、延べ50数回擬声語・擬態語が出てきます。どこで区切るかなどで勘定の仕方が多少変わってきて、数えるのが難しいのですが、55ほども数えられると思います。大変多いですね。ところが、「セロ弾きのゴーシュ」の場合、もちろんオノマトペはありますが、「どんぐりと山猫」などに比べると少な目です。音楽を題材とする童話なのにオノマトペが少ないのはどうしてだろうと不思議ですが。

『こどものとも』で原作を踏まえて再話をした同じ部分(佐藤義美案)を下に載せました。

とらんぺつとは、ぶーば ぶーば ぶば、／く
らりねつとは、ぼーぼー、／ばいおりんは、ぎー
ご きーこ。／ゴーシュは、セロを、ごうごう、
ごうごう、いっしょうけんめいに ひいて い
ました。(『こどものとも』、佐藤義美による再
話)

少し文体が子どもに分かるような調子になっているのと、たくさんオノマトペを補っているのが特色だと思います。ただ、二つを比べると、原作の方はオノマトペが少ないのに音楽が聞こえてくる。再話は、オノマトペを補っているのに音楽が原作ほど聞こえない。そういう不思議な感じに私は陥りますが、いかがでしょうか。

佐藤義美さんは童謡詩人で童話作家です。童謡では「グッドバイ」などもありますが、最もよく知られた作品は、「いぬのおまわりさん」だと思います。「いぬのおまわりさん こまっちゃまって わんわん わわん わんわん わわん」という歌です。それもオノマトペが使われている童謡でした。

オノマトペとは何なのかということに段々関

わってくると思います。佐藤義美さんはもしかしたらトランペットを思い浮かべて「ぷーば ぷーば ぷば」と書き、「くらりねっとは、ぼーぼー、／ばいおりんは、ぎーご きーこ」というように、実際の楽器の音を思い浮かべ、オノマトペでそれをまねしようとしたのではないかと思います。オノマトペは元々そういうものなのかという問題にさえぶつかってしまいます。

言語学でも少し前までは、自然界が立てる様々な音を言葉でまねしているのがオノマトペだと言っていましたが、言語学の新しいオノマトペ研究、例えば、滝浦真人さんの研究を勉強すると、オノマトペというのは現実の音を言葉で模写するのではなく、ある種の見立てとか例えであり、むしろ言葉で現実を創り出すようなものではないかという意見もあるようです。賢治は「やまなし」で「クラムボンはかぶかぶわらったよ」と言っています。この「かぶかぶ」は現実を模写したのではなく、クラムボンを「かぶかぶ」笑うものとして見立てた、もっと創造的なものだと思います。「どんぐりと山猫」の「まわりの山は、みんなたったいまできたばかりのようにうるうるもりあがって」では、山が「うるうる」盛り上がるものとしてもっと創造的にとらえられたのではないかと思います。

オノマトペが現実の引き写しでなく新しい現実を創り出すものだとすると、佐藤義美は現実の音を思い浮かべてまねしようとして、新しい現実を創り出す形になっていない、だから今一つ音楽が聞こえないのかな、というふうに吉田先生のお話を聞いた後しばらく考え込みましたが、どうでしょうか。

『こどものとも』が創刊された時代は、物語絵本というものを創り出そうとしていて、賢治の原作そのものを絵と一緒に文として使うのではなく、「絵本の言葉」として構成しようとしたのかもしれない。

茂田井武さんの絵は大変魅力的ですが、「セロ弾きのゴーシュ」についてもいろいろな絵本が出ています。ちょっと独特な司修さんの作品や、赤羽末吉さんの作品もあります。最後にゴーシュはうまくなって人を感動させるような演奏をし、ア

ンコールに応えますが、でもなぜ皆が喜んだのか分からなくて、「印度の虎狩」という訳の分からない曲をゴウゴウ弾きます。赤羽さんはそれをこのように描いています。「いきなり舞台へゴーシュを押し出してしまいました」、「ゴーシュはどんどん弾きました」という三人称の文章に見合った形だと思います。

面白いのは小林敏也さんの試みです。もちろん原作の三人称の言葉が書かれていますが、最後のアンコールの場面を見ると、セロを上から見下ろして一生懸命弾いていて、観客が見ているのが目に入って来るゴーシュのまなざしで描いていません。原作は三人称ですが、絵は一人称にしてしまっているのです。作品をぐいっと一人称に作り変えてしまう、この力技のようなものが小林敏也さんの面白いところだと思います。それは一種、絵による再話、あるいは非常に個性的な解釈のようなどころがありますので、賛否はあるかもしれませんが、三人称で書かれた作品が絵によって一人称に変わってしまうところが、私は随分面白いと思います。

今「セロ弾きのゴーシュ」と言っていますが、「ゴーシュ」という言葉が何なのか、分からなかったりします。響きが面白くて、ゴウゴウセロを弾くという場面がよく出てくるので、「G」の音が作品にずっと響いているという意見もあります。宮沢賢治の作品には「ゴーシュ」や「クラムボン」など、独特な言葉がたくさん出てきます。これは賢治語彙とでも言うべき言葉ですが、そのような言葉については『新宮澤賢治語彙辞典』(原子朗著)という、こんなに厚い辞典が出ています。これで「ゴーシュ」を引くと、

【人】(人名)。gauche (仏) フランスでは、左(左手、左側、左派、等)の意から、ゆがんだ、不器用な、等の意味。後者はいかにも童[セロ弾きのゴーシュ]の主人公名にふさわしい。

という解説文になっています。フランス語で左ということから下手くそという意味になると解説しています。様々な賢治固有の語彙がこのような形で説明されています。

今、作家の事典は結構たくさん出ていますが、宮沢賢治については、他に『宮沢賢治大事典』（渡部芳紀編）というのがありますし、間もなく（2010年12月）、『宮沢賢治イーハトヴ学事典』（天沢退二郎他編）というのが出るようです。これは大項目主義で構成された、結構長い読み物のような項目がたくさん入った事典で、私も「教科書」という項目を書いています。賢治の作品がどのように教科書に載ってきたかということ、国語の教科書を中心に書きました。

4. 教科書

宮沢賢治の作品は、絵本だけではなく教科書にも随分載っています。戦後すぐに「どんぐりと山猫」が国定教科書に載りました。今は民間の教科書会社がいろいろな種類の教科書を作って教育現場がそれを選んで使っていますが、敗戦の頃まで、今で言う文部科学省が、ある教科について一種類の国定教科書を作り、全国津々浦々同じ教科書で学ぶことになっていました。敗戦後すぐにそれがなくなったわけではなく、昭和20年代中頃まで国定教科書が使われていました。戦後すぐの小学校国定教科書に「どんぐりと山猫」、中学校に「雨ニモマケズ」が載りました。それから、高等学校では実は「農民芸術概論綱要」が載ったりしています。その後、今のような民間の会社が教科書を作るようになってからもどんどんいろいろな作品が載っています。

童話だけでなく詩も載っています。例えば「永訣の朝」という作品が、高等学校の現代文の教科書には必ずのように載っています。「永訣の朝」なら「永訣の朝」という賢治の作品が、教科書を通してどのように子どもたちに渡されているかということもちょっと踏まえておいてもよいことかと思えます。公共図書館で仕事をなさっている方が多いと思いますので、学校図書館とはまた違うと思いますが、子どもたちが学校でどんなふうに学んでいるのかということを知っておいてもいいと思います。

教科書には、先生がどのように教えるかということを書いた指導書があります。指導書で「永訣の朝」の教え方といった部分を読むと、随分たく

さんのことが書いてあります。たまたまピックアップした東京書籍の教科書、今年度も使われているはずですが、その教師用指導書を見ると、「永訣の朝」の「主題」としてこんなふうに書いてあります。レジュメの2ページ目です。

瀕死の床にある妹への愛情と、永訣の悲しみ、それを越えた、万人の幸福の祈り。

最愛の妹の死に臨んで、作者は深い法華経信仰に基づく天上界への希望を見だし、死に対する恐れと悲しみ、いとおしい者を失う喪失感を、＜天上界への転生＞という希望へと昇華させていく。死んでゆく妹、そして他者のために、自己の「すべてのさいはひ」を捧げようとする作者の思想から生まれる崇高さが、詩の主旋律である妹への鎮魂を深い祈りで彩っている。

なかなか名文という感じがしますが、一つ注意しなければならないことは、ここでは「主題」の中に「法華経信仰に基づく」とかそういうことが入り込んでいて、作品だけから受け取れることを教えるだけではなくて、その背後にある作者の思想のようなものを合わせて教えようとしている。それが教師用指導書の「主題」というところに、もうはっきりと表れていますね。「作者の思想から生まれる崇高さ」のようなこともはっきり書いてあるわけで、作品の背後にある作者の思想あるいは生涯と一緒に教えることが、教師用指導書では意図されていると思います。そのことが子どもたちにとってよいかどうか。作品だけでなく作者の思想や生涯を合わせて教えることの是非といったことを感じています。これが「Ⅱ 賢治童話と子ども読者」という話と関わってくる部分ですが、まず、高校の「永訣の朝」についてももう少し話したいと思います。

今「永訣の朝」が出ている現代文の教科書を書画カメラで映し出しました。今、高等学校の1年生は「国語総合」をやり、その後2、3年生は「現代文」あるいは「古典」という形でもう少し深めていきます。これはもちろんトシという妹との実際の別れを踏まえて書かれた作品です。そのことをもう少し考えてみたいと思います。

2009年にようやく完結した『<新>校本宮沢賢治全集』年譜篇からのコピーをお配りしました。宮沢賢治の作品は、余り生前活字にならないで原稿のまま残されていた。亡くなってすぐに幾つもの全集が出たりしましたが、あるとき、もう亡くなりましたが、賢治の弟の宮沢清六さんの原稿にもう一度立ち戻った全集を作ってほしいという意向を受けて『校本宮沢賢治全集』が編集され、70年代に完結しました。それがいろいろな意味で改訂された『<新>校本』が15年間かかって2009年に全巻完結しました。

資料は、年譜篇で実際にトシを見送ったことが書いてあるところ。大正11(1922)年、賢治は26歳です。

11月27日(月) みぞれのふる寒い朝、トシの脈拍甚だしく結滞し、急遽主治医藤井謙蔵の来診を求め。医師より命旦夕に迫るをしらされ、蒼然として最愛の妹を見守る。この一日の緊張したありさまは<永訣の朝><松の針><無声慟哭>にえがかれている。

「^{めいたんせき}命旦夕に迫る」は、命が本当に切迫しているということです。「けふのうちに とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ」はここから来ていると思います。

いよいよ末期に近づいたとき、トシの耳もとお題目を叫び、トシは二度うなずくようにして午後八時三〇分逝く。享年二四歳。押入れに首をつっこんで慟哭する。

なお、この日の夕方、青森・北海道方面へ巡教にむかう国柱会教職長^{たきともひろ}滝智大の花巻通過に際して、賢治は関徳弥とともに花巻駅頭へ出て、出迎え、面会する。

この記述は、『<新>校本』の年譜で初めて入ったのだと思いますが、非常にびっくりしました。「永訣の朝」を読んでいるときは、「命旦夕に迫」っていますから、朝から妹の枕元にいて一椀の雪をあげたりしながらずっと見守っていたことしか思い浮かびません。しかし、この年譜を見ると、8時

半に亡くなっていますが、朝「命旦夕に迫る」を知らされたにも関わらず、夕方に賢治は花巻駅へ行っているのです。

国柱会というのは、彼が非常に篤い信仰を寄せていた宗教団体です。本部はこの図書館の近くにあったようです。賢治はわざわざまとまった期間東京に出てきて、食うや食わずの生活をしながら国柱会の仕事をした時期もあります。国柱会の先生が花巻を通過するということがたまたまあり、その先生に会いに行ったのです。関徳弥は、一緒に国柱会に入った非常に親しい親戚の青年で、弟のような存在でした。亡くなったトシと同級生だったと思います。

このことは非常に複雑な感じで読みました。幾つかのを感じますが、賢治は賢治で現実を生きているわけ。 「永訣の朝」は実際にトシが亡くなった日のことを書いているのですが、ある切り取りをして一つの作品に仕立てている。現実にはいろいろなことがある中で、妹への思いを純粋に切り取った作品になっている。やはり「永訣の朝」は優れた作品なのだ、と思います。賢治は賢治で現実を生きているので、花巻駅へ先生が来たらやはり抜けて行くということもあったのだと思います。

この春にゼミの学生と花巻へ行きました。余りきちんと測れませんでした。賢治の家から花巻駅へは歩いて20分くらいかかると。賢治は足が速かっただろうと思いますが、1時間が1時間半くらいは留守にしているのではないのでしょうか。そのことは非常に意外でした。でも逆に、日常の中にいろいろな問題がある中で、この場合は妹に対する別れということを純粋な形で切り取って見せたという意味で、「永訣の朝」がいかに優れた作品なのかがかえって分かるような話だと思えます。

国柱会に入っている賢治と家の宗教が違うので、妹を見送るにもいろいろなことがあった、ということがその後書いてあります。賢治が花巻まで面会に行ったことは、国柱会の方の資料で見付かったと、この全集を編まれた一人である実践女子大学の栗原敦先生が、年譜篇が出る前に雑談の中で話してくださいました。

「永訣の朝」が一つの自立した作品だとすると、その背後に割とストレートに作者の思想や生涯を重ねて見ることは是非について、改めて考えさせられてしまいます。作者の思想や生涯と短絡的にくっつけて教室で扱うことがどうなのだろう、とちょっと疑問に思うのですが、どうでしょうか。

ただ、「永訣の朝」に限らず、賢治の作品は賢治の生涯や伝記とくっつけて教えることが割合普通です。小学校では「やまなし」が光村図書の6年生の教科書に載っていますが、隣に畑山博さんが「イーハトーヴの夢」という賢治の伝記を書いています。伝記と併せて「やまなし」を読むという仕組みになっていて、「永訣の朝」と同じようなことが小学校でもあります。東京書籍では、5年生で「注文の多い料理店」を読み、6年生で西本鶏介さんという作家・評論家が書いた賢治の伝記を読むという、5年生、6年生と段階を踏んで作品と伝記を読むということをしています。作品といわゆる賢治神話、賢治にまつわる様々な神話化された事柄を一緒に扱って教えようというところが教科書にあって、授業でもそのような場合が多いのではないかと思います。そのことがいいかどうかということですが、そのことがいいかどうかというのは次の話から考えたことでもあるので、次に進みたいと思います。

レジュメに書いてある『年譜宮沢賢治伝』は「キツネノゲントウ」の堀尾青史さんの本です。堀尾さんは伝記研究の先駆者ですが、堀尾さんの本には「永訣の朝」の当日に花巻に行ったということは書いてありません。むしろ「永訣の朝」に描かれている状況を物語化して伝記として書いたような傾向のもので、対比として挙げておきました。

関徳弥さんという人は賢治の身近にいた青年だったので、賢治が亡くなった後もいろいろと本を書いたりし、伝記研究に資料を提供する本を書いた人でもあります。一緒に先生に会って、関徳弥は先生について行ってしまいました。

II 賢治童話と子ども読者

1. 賢治童話は児童文学か

前半の最後に言いかけた、賢治の作品を思想や生涯と結び付けて読むことの是非は、これから申

し上げることを通して考えてきたことですので、後半の話をしたと思います。

賢治童話は児童文学かという議論が、以前から時々起こっています。子どもにふさわしい文学だという意見もあり、そうだろうかという意見もあります。議論は歴史の中で何度か繰り返されたので拾うことができます。

1960年代で対立する意見を拾ってみました。一つは、よく話題になる本ですが、石井桃子さんたちの『子どもと文学』です。この本は、1960年に石井桃子さんや児童書の編集者だった福音館書店の松居直さん、岩波書店の編集者だったいぬいのみこさんなど、編集者でもあり子どもの文学の書き手にもなっていくような人たちが集まって日本のそれまでの児童文学の在り方を検討し、議論した結果を分担して書きました。当時非常に尊敬されていた小川未明、浜田広介、坪田譲治をかなり批判的に扱い、まだ余りよく知られていなかった一宮沢賢治はある程度知られてきていましたが一賢治、千葉省三、新美南吉をかえって高く評価したという構図の本です。

賢治については

私たちは、宮沢賢治のかなりたくさん作品が、正しい意味で、子どものための文学であり、それが大人をさえ楽しませることができたのだと信じます。

と書いてあります。賢治についての章は、『指輪物語』の翻訳などで知られる瀬田貞二さんが執筆しました。今のようなことを言う理由として、「作品構成がしっかりしているため、『何かの期待を終わりまで持ちこし、それがとうとう解決されないという気分を』残さないこと。単純で、くっきりと、眼に見えるように描かれていること。子どもの文学に大切なユーモアやゆたかな空想力がある、といったようなことを挙げて、こういう評価をしています。かなり肯定的な、全面肯定に近い評価です。賢治は亡くなった後、にわかには知られるようになり、戦後、教科書に載ったこともあって大分知られてきましたが、子どもの文学として良いと割とはっきり言ったのはこの本だと思いま

す。その後70年代頃に、子どもがたくさんいる時代になり、児童書がたくさん出る時代になりましたが、『子どもと文学』の意見もあって賢治を子どもの本として作って渡していくことが盛んになっていったのではないかと思います。そういう意味で画期的な意見だったと思います。

それに対して1968年、子ども向け賢治童話の本の一つとして、大日本図書から『どんぐりと山ねこ』という童話集が出ました。原作では山猫の「猫」は漢字ですが、子ども向けの童話集なので「ねこ」というのを平仮名に開いたタイトルになっています。その巻末に神宮輝夫先生が、本を与える大人たちに向けた「賢治童話と“児童文学”としての資格」という文章を書き、その中でちょっと石井桃子さんたちの意見とは違う意見を述べています。

わたしは作品の完成度の高さよりまえに、賢治の童話には、子どもの文学としての資格をえたものと資格がないものの二種類があると考えています。

と書いていて、半ば否定的です。この辺りに少し対立を見ることができます。同じ60年代のこともありますし、石井桃子さんやそのグループも神宮輝夫さんも、どちらも英語圏の児童文学に大変素養の深い専門家たちです。その専門家たちが賢治の童話を見たのだけれど、ちょっと違う評価になっているということです。

石井桃子さんの評価と神宮さんの文章は資料にもしておきました。③の資料が石井桃子の評価です。初期、中期、後期と検討して、この作品は1・2年生、この作品は3・4年生というふうに、この年頃にはこの作品が良いのではないかという作品のリストを掲げている表をコピーしました。

以上、初期、中期、後期の作品の特徴を見てきたすえに、百に近い彼の作品から特に子どもに楽しまれると思うものを、読者の年齢にあてはめて考えた一つの試みをかかげておきましょう。異論がありましたら、これを子どもに読み聞かせて、「そつと質問して試ためしてごらんにな

れば」はっきりすると思います。もちろん、賢治の思想全部をわからせるというのはむりです。その年ごろなみに感銘をうけ、長くおぼえているかどうかを目安において、私たちの身边から、また報告から、前ページの表はかりに作られたものにすぎません。

というコメント付きで載っています。

神宮さんの文章には、「子どもの文学としての資格をえたものと資格がないものの二種類」ある具体的な作品名がおしまいの方に挙がっています。この童話集には「注文の多い料理店」と「どんぐりと山猫」と「ほらくま学校を卒業した三人」の三つだけが入っています。神宮さんの文章はその解説ですが、この三つはもちろん児童文学の資格を得たものとして載せています。逆に資格がないものに挙がっているのが、「カイロ団長」や「四又の百合」、「雁の童子」、「十力の金剛石」で、「グスコブドリの伝記」、「銀河鉄道の夜」も子どもの文学とは言えない作品とされています。もう少し後のパラグラフに、子どもの文学に数える作品、子どもの文学ではないものに数える作品が書かれています。

今の神宮さんの文章に挙がっているタイトルと、先程の石井桃子さんたちの本の表を比べてみてください。特定の作品で評価が違っているものがあります。石井桃子の表だと、中期の作品の最初に「カイロ団長」が挙がっていて、1・2年生に特に薦められる作品の一つとされています。5・6年生で「グスコブドリの伝記」、中学生ですが「銀河鉄道の夜」というタイトルが見えてきます。これらは神宮さんが子どもの文学の資格を得ていないと名指しした作品の幾つかです。子どもの文学としてふさわしいと言ったり、子どもの文学としての資格がある・ないと言ったり、具体的な作品タイトルでも二者の意見は対立していますが、これをどう考えたらよいのでしょうか。それは「児童文学とは何なのか」ということに逆になるのではないかと思います。

2. 子どもはどう読むか

実は昔、このことについて考えないといけないのではないかと思って真剣にやっていた時期がありました。卒業論文で、ここで何とかしないと自分は先に進めないのではないかと思ったのです。これは「児童文学とは何なのか」という問題に関わるので、両者の意見の対立について考えてみようと思いました。つまり、実際に子ども読者はどう読み得るのかという問題を何らか考えてみないとこの対立はクリアできないと思ってしまったのです。それで、子どもたちの意見を実際に踏まえて考え直そうと思ったのですが、日本中の子どもの意見を聞くことはできませんし、どのくらいの人意見を聞けばよいのかとか、難しい問題がすぐに出てきます。

統計学的にどうかという問題はありますが、分野違いではあるものの、桑原武夫の『『宮本武蔵』と日本人』という本が参考になりました。児童文学研究の中では、私がこのことを考えようとした70年代にもほとんど読者研究はありませんでしたし、その後もほとんどありません。不思議なくらいです。児童文学は子どもがいて成り立つ文学であるにも関わらず、児童文学研究は読者のことを考えるということをほとんどしてこなかったのです。参考になる研究がないのです。それで参考にしたのが、大衆文学である吉川英治の『宮本武蔵』を日本人がどう読むかということについて書いた本です。桑原武夫さんはフランス文学者ですが、文学と社会という問題に大変関心があって、その関心から『宮本武蔵』の読まれ方も考えたというわけです。

『『宮本武蔵』と日本人』の中では、『宮本武蔵』は長いので、最初の1冊だけを4人の大人に読んでもらってインタビューをします。インタビューの中で、主人公の男が女に対する思いを捨てて剣の修行をしていく、こういうところがいいんだよね、と言う人がいるわけです。それは日本人にとって非常に根本的な感性の一つなのかもしれないといったことが、インタビューを通して仮説として浮かび上がってきます。そういう項目をいろいろそろえて、今度は270人ほどの大量アンケートをします。そこではもう『宮本武蔵』は外し、

「男が女に対する思いを捨てて世間に義理を立てていくという考え方が好きですか、嫌いですか、どちらでもないですか」というふうにアンケートを取って行って、ある傾向を見ていくというやり方でした。

このことがヒントになって、賢治について考えていこうと思いました。まず、ある地域文庫に出かけて行って協力してくれる子どもを募りました。手を挙げた子どもが、小学4年生から中学2年生まで、男女取り混ぜて7人いました。「注文の多い料理店」と「どんぐりと山猫」のコピーを渡しておいて、一人ひとり対面でインタビューをしました。私は大学4年生でした。いろいろ面白いことがありました。その一部を紹介したいと思います。

さらに、インタビューで出てきた問題をアンケートで確かめようと思いました。この場合、作品を外すことはできなくて、学校で先生をしている知り合いに頼み、インタビューをした小学4年生から中学2年生に重なる学年のクラスで「注文の多い料理店」と「どんぐりと山猫」の読み聞かせをしてもらい、その上で簡単なアンケートに答えてもらいました。300人くらいのアンケートを集め、その中で浮かび上がってきたことから、あくまで仮説ですが、それまで余り見えなかった種類の問題が少しは見えてきたのではないかと思います。

例えば、「注文の多い料理店」について6年生の男の子に話を聞きました。こちらは余りいろいろ言わないで、自由に話してもらってその中から問題を拾おうと思ったのですが、「さあ話せ」と言われても話すことはできないので、例えば「二人の紳士が出てくるけれど、どのように思ったか」のようなことを聞きました。私は二人の若い紳士についてどう思ったか、と聞いたのですが、6年生の男の子は「紳士？」と問い返しました。そして「あ、獵師？」と言って「獵師は、あの、おなががすいててね、…」と語り始めました。「あっ」と思ったのですが、この子は、二人の青年紳士という形で出てくる主人公たちを「紳士」という言葉ではとらえていない、むしろ「獵師」という言葉でとらえている、ということが分かります。

そのような話を聞きながらすぐに思い浮かべたのは、童話集『注文の多い料理店』の広告ちらしです。『注文の多い料理店』は賢治が生前に唯一出した童話集ですが、自費出版のような形だったので、協力した人もいたかもしれませんが、自分で広告を書いたと思います。広告ちらしの中に「注文の多い料理店」に関して

糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です。

と、一ちょっとねじれているような文ですが一都会文明なり、いい加減な放恣な階級なりに対する反感を書いたのだと断っているところがあります。作者のコメントはあまり当てにならない気もしますが、「注文の多い料理店」の場合は、「すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて」、ただ獣たちの命を奪いにだけ来た紳士たちが、自然界の代表のような山猫たちに批判されていく物語のようにも読めますね。そのように読んでいくと広告ちらしの意見はそれなりに当てはまるなと思います。作者の意図を読むということと言うと、紳士としてとらえることは大変重要です。紳士が批判される話として読んでいけると、作者の意図したところには近付けないような気がします。

でも、はなからこの6年生の男の子は紳士としてとらえていないですね。猟師だと思っている。これは作者のコメントを知らなくても、作品の本文からだけでも、とらえ方が違うことがわかります。というのは、「注文の多い料理店」は、すっかりイギリスの兵隊のかたちをしてぴかぴかする鉄砲をかついだ紳士たちが、西洋料理店の看板にだまされていく話ですね。最後に彼らを救ってくれるのは^{みのぼうし}蓑帽子をかぶった猟師で、猟師の団子を食べて救われるという話です。イギリスの兵隊のかたちをした紳士たちが西洋料理店の看板にひかれてだまされていったのを、蓑帽子の猟師の団子が救うという、非常に皮肉な話なのです。このように、紳士と猟師は作品の中では随分対比的に扱われていますから、紳士と猟師を混同することは、

踏み外した読みということになって、なかなか作品って読めないものなのだな、と思いました。

3. 「未分化の児童文学」としての賢治童話

作者の意図とすれ違っているのですが、この子にとって「注文の多い料理店」は面白くなかっただろう、悪かったな、と思いましたが、念のために「で、面白かった？」と聞きましたら「すっごく面白かった」と言うのです。どうしてこの人はこの作品をこんなに面白がることができるのかと思って、「じゃあ、どこが面白かったの」と聞くと、扉を次々開けながらだまされていくプロセスが面白かった、という意味のことを言いました。

「ははーん」と思いました。この子の「注文の多い料理店」の読みは、作者の意図している「都会文明に対する反感」という言葉で表されるようなテーマには関心がゼロだけれど、ストーリー展開には非常にひかれていくという読み方だと思いました。

「注文の多い料理店」自体は、非常に優れたストーリーにテーマがうまく乗ったウェル・メイド (well-made) な作品だと思いますが、子どもの方はストーリーだけにひかれて、テーマへの関心は置き去りにするという読み方なのだということが、インタビューの中で段々に分かってきました。

これはこの6年生の男の子についてだけ言えるのか、子どもたち全般が大体「注文の多い料理店」をこのように読んでいるのか、と思いました。それを確かめるため、読み聞かせをしてもらった4年生から中2の子たち300人にしたアンケートの中に「紳士とは一言で言うとどんな人だと思いますか」という項目を混ぜておきました。そうすると「馬鹿」、「単純」、「間抜け」、「食いしん坊」、「飢えた人」など、作品の中で現象している紳士に対する評価が半分くらいの子どもたちから出てきました。現象している側面をとらえて評価していて、反感の対象というとらえ方では余りないので、作品の意図と重なっているとはいえないのですが、これらは紳士について批判的な意見なのかなずけます。

ただ、不思議なことに、「面白い人」とか「愉快

な人」とか、肯定的な評価があるのです。それは作品が面白いということと登場人物の位置付けを混同している。それから、「かわいそうな人」とか「いい人」とか「気の毒な人」といった評価があります。これは作品の語りの構造と関係があると思います。「注文の多い料理店」は紳士たちが経験していくことを読者も一緒に経験していくという仕組みですから、紳士は読者自身なのです。紳士と一緒に作品世界を経験した読者も、もろともに批判されるというのが「注文の多い料理店」の世界だと思えます。一緒に作品世界を経験してきた紳士を自分と切り離して評価することが、4年生から中2ではうまくできなくて、むしろ「だまされてしまってかわいそうな、気の毒な人」とする評価も、かなりまとまった数ありました。

詳しく言う時間がもうありませんが、大体においては、先程の6年生の男の子が典型的に示してくれたような読みが、どの子にも生まれているという感じです。繰り返しになりますが、テーマにはほとんど関心がない、でもストーリーの面白さにはひかれているという、作品の片面だけ、半面だけを読むような読み方なのではないかと思いました。

ストーリーはどうなっているかという、扉を繰り返し開けていくとか、山猫が擬人化されているとか、いろいろなオノマトペがたくさん出てくるとか、そういう特徴のあるストーリーです。これは、昔話の語りと似ていると思います。昔話は口で伝える口承文芸なので、話を行き渡らせるために繰り返します。繰り返しや擬人化やオノマトペがあって昔話の語りと似ている賢治のストーリーには大変心ひかれるのだけれど、そこに乗ってきた近代的な問題はなかなか受け取れない、というのが、賢治を読むときの子どもの読書の在り方ではないかと思っています。これは後に『国語教育と現代児童文学のあいだ』という本に割合長い論文として収めてあります。若いときの文章なので読みづらいのですが、これを見ていただけ

ればもう少し具体的に書いてあります。

賢治童話は児童文学かという問いにもう一度戻ると、それは、言わば「半分だけ児童文学」ということになりそうです。「半分だけ児童文学」という言い方が変ならば、「未分化の児童文学」と言ってもいい。「未分化の児童文学」というのは、古田足日さんが小川未明について言った言葉です。未明はある時期まで小説も書いた人ですが、未明の童話は小説という大人の文学からはっきり分化した児童文学になっていないという批判の言葉でした。この言葉を借りて、宮沢賢治の童話も「未分化の児童文学」と言ってもいいかもしれません。十分に児童文学になっていないという意味で。ただ、「未分化の児童文学」というのは、丸ごと全部を子どもが理解できる「理想の児童文学」を想定した上の言葉でしょうから、そういう理想形を想定できるかどうかという議論もあり得ますけれど。

賢治についていろいろなことが言われて、教科書では小学校でも作者の生涯や思想と結び付けて教えようという意図も明らかですが、子どもたちは、二人の若い紳士のことを「紳士？あ、獵師？」などと言いながらもストーリーはとても楽しむような読書をする人たちだということをもっとよく踏まえて、その上でどうやってその子たちと物語を楽しみ、一緒にいろいろなことを考えることができるかということを探求していくことが、私たち子どもの本に関わる大人たちが進むべき道なのではないか。そんなことを、賢治を子どもたちがどう読むかということについて子どもたちと一緒に話をした経験から考えています。そのようなことを最後に申し上げて、少し中途半端ですが、ここで一旦切りたいと思います。どうもありがとうございました。

(みやかわ たけお 武蔵野大学文学部教授、国立国会図書館客員調査員)

「賢治童話と子ども読者」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館所蔵

※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	児童文学		複製版 アリス館 1984	Z12-628 (本館)
2	悲劇の解説	吉本隆明著	筑摩書房 1979. 12	KG311-237 (本館)
3	やまなし	宮沢賢治作 遠山繁年絵	偕成社 1987. 11	Y18-2937
4	やまなし：画本宮沢賢治	宮沢賢治作 小林敏也画	パロル舎 1985. 7	Y18-2302
5	やまなし	宮沢賢治作 はやしほじろう絵	ペンギン社 1985. 11	Y18-2361
6	やまなし	宮沢賢治作 安藤徳香絵	福武書店 1986. 5	Y18-1924
7	やまなし	宮沢賢治作 末崎茂樹絵	チャイルド本社 1999. 10 (2刷)	Y17-M99-1186
8	やまなし	宮沢賢治作 川上和生絵	三起商行 2006. 10	Y17-N07-H507
9	新宮澤賢治語彙辞典	原子朗著	東京書籍 1999. 7	KG567-G111 ※
10	『こどものとも』2号 セロひきのゴーシュ	宮沢賢治原作 茂田井武画	復刻版 福音館書店 1996	Z32-B103
11	セロひきのゴーシュ	宮沢賢治著 茂田井武絵	福音館書店 昭和41	Y7-471
12	セロひきのゴーシュ	宮沢賢治文 司修画	富山房 1986. 4	Y18-1837
13	セロひきのゴーシュ	宮沢賢治作 いもとようこ絵	白泉社 1993. 4	Y18-7755
14	セロひきのゴーシュ	宮沢賢治作 いもとようこ絵	金の星社 2005. 12	Y17-N06-H121
15	セロ弾きのゴーシュ	宮沢賢治作 赤羽末吉絵	偕成社 1989. 10	Y18-4392
16	セロ弾きのゴーシュ：画本宮沢賢治	宮沢賢治作 小林敏也画	パロル舎 1989. 4	Y18-4569
17	セロ弾きのゴーシュ	宮沢賢治文 佐藤国男画	福武書店 1992. 3	Y18-6579
18	セロ弾きのゴーシュ	宮沢賢治 (著)	くもん出版 1992. 10	Y18-7235
19	セロ弾きのゴーシュ	宮沢賢治原作 天沢退二郎監修 Roger Pulvers 英語 司修絵	ラボ教育センター 1998. 12 (2刷)	Y17-M99-1098

賢治童話と子ども読者

20	子どもと文学	石井桃子等著	福音館書店 1967	909-1583k-h ※
21	どんぐりと山ねこ	宮沢賢治著 谷内六郎絵	大日本図書 昭和43	Y7-1118
22	国語教育と現代児童文学のあいだ	宮川健郎著	日本書籍 1993. 4	FC76-E273 ※
23	特集 いま, 賢治童話を読む 『日本児童文学』42(11) p. 13-79	日本児童文学者協会編	日本児童文学者協会 [1996. 11]	Z13-450 ※
24	現代文		新版 教育出版 2008. 1	Y351-J2
25	精選現代文		東京書籍 2008. 2	Y351-J10
26	現代文 1		改訂版 大修館書店 2008. 4	Y351-J11
27	高校生の現代文		明治書院 2008. 1	Y351-J13
28	国語六：希望. 下		光村図書出版 2005. 6	Y311-H194
29	新編新しい国語六年. 下		東京書籍 2005. 7	Y311-H182
30	風の又三郎：賢治に一番近い風	ますむらひろし著 宮沢賢治原作	朝日ソノラマ 1983. 9	Y16-6626
31	グスコープドリの伝記：賢治に一番近い波	ますむらひろし著 宮沢賢治原作	朝日ソノラマ 1983. 9	Y16-6625
32	年譜宮沢賢治伝	堀尾青史著	中央公論社 1991. 2	KG567-E56 ※
33	年譜宮沢賢治伝	堀尾青史著	図書新聞社 1966	910. 28-M674 H3m ※
34	『宮本武蔵』と日本人	桑原武夫著	講談社 1964	910. 28-Y859Km (本館)
35	<新>校本宮沢賢治全集. 第16巻 下 年譜篇	宮沢賢治(著) 宮沢清六他編	筑摩書房 2001. 12	KH361-E15 ※
36	日本昔話大成. 第5巻	関敬吾著	角川書店 1978. 9	KG745-97 ※
37	「読者論」に立つ読みの指導. 小学校 高学年編	田近洵一(ほか)編	東洋館出版社 1995. 2	FC77-E151 (本館)
38	宮沢賢治大事典	渡部芳紀編	勉誠出版 2007. 8	KG567-H86 ※
39	宮澤賢治イーハトヴ学事典	天沢退二郎, 金子務, 鈴木貞美編	弘文堂 2010. 12	KG567-J49 ※

レジュメ

南吉童話の闇と光

遠山 光嗣

他者と自分は全く違う意識の世界にいて人間は本質的に孤独であること。自分は自分で思うほど正しくない弱い存在であること。南吉童話には、この人間についての二つの真実を知るという体験が描かれています。そこにある孤独や不安という闇、そして誰もが美しく生きられる可能性という光について考えます。

1. 新美南吉と国民的童話「ごんぎつね」

大正2年（0歳）

7月30日、愛知県知多郡半田町（現半田市）岩滑で畳屋を営む渡辺家に生まれる。本名正八。

大正6年（4歳）

11月、母りゑ病没。

大正8年（6歳）

2月、継母志ん入籍。同月、異母弟益吉生まれる。

大正10年（8歳）

7月、生母りゑの実家、新美家の養子となるが寂しさに耐えられず、12月、渡辺家に戻る。

大正15年（13歳）

3月、半田第二尋常小学校を卒業。4月、半田中学校に入学。

昭和2年（14歳）

この頃から、童謡や童話を創り始める。

昭和6年（18歳）

3月、半田中学校卒業。岡崎師範学校を受験するが体格検査で不合格。4月から8月まで半田第二尋常小学校に代用教員として勤務。『赤い鳥』に「南吉」の筆名で童謡童話を投稿。この頃から初恋の女性、木本咸子との交際が始まる。10月、「ごん狐」の草稿を執筆。年末、異聖歌を頼って初上京。

昭和7年（19歳）

東京外国語学校英語部文科に入学。

昭和8年（20歳）

北原白秋と鈴木三重吉の訣別により、4月号を最後に『赤い鳥』への投稿を止める。12月、「手袋を買いに」執筆。

昭和9年（21歳）

初めての咯血をし、一時帰郷。

昭和10年（22歳）

5月、「でんでんむしのかなしみ」など幼年童話約30編を創作。夏、縁談が持ち上がった木本咸子との結婚に踏み切れず別れる。

昭和11年（23歳）

東京外国語学校を卒業し、東京商工会議所内の東京土産品協会に就職。10月、2回目の咯血をし、翌月帰郷。

昭和12年（24歳）

病と孤独に苦しむ。ドフトエスキーの作品を読み、人間のエゴイズムと愛について考える。4月、河和第一尋常高等小学校の代用教員となる。同僚教師の山田梅子と交際。9月、杉治商会に就職。鴉根山畜禽研究所に住み込みで勤める。

昭和13年（25歳）

4月、恩師のはからいで安城高等女学校の教諭となり、1年生を担当する。

昭和14年（26歳）

1月、中山ちゑとの結婚を考える。2月から生徒と共に詩集を作る。5月から『哈爾賓日日新聞』に作品を寄稿する。

昭和15年（27歳）

6月、中山ちゑ死去。『婦女界』や『新児童文化』に作品を発表し、活躍の場が広がり始める。

昭和16年（28歳）

10月、初の単行本『良寛物語 手毬と鉢の子』（学習社）を出版。12月、血尿が出る。

昭和17年（29歳）

1月、腎臓を患い通院。4月～5月、「おじいさんのランプ」「牛をつないだ樁の木」など後期の代表作を次々に書き上げる。10月、第一童話集『おじいさんのランプ』（有光社）を出版。

昭和18年

病状悪化、自宅で療養しながら「狐」「疣」など最期の作品を執筆。3月22日、喉頭結核のため永眠。

- ・教科書教材としての「ごんぎつね」
- ・昭和31年に初採用され、昭和55年からは全社採用。
- ・これまでに6,000万人が教室で読む。
- ・数多くの絵本化
- ・海外でも紹介
- ・来年は「ごんぎつね」誕生80年

2. 二つのジャンル

- ・「ごんぎつね」は18歳、「手袋を買いに」は20歳で、共に早い時期の作品。
- ・その後、動物の主人公が人間と関わる童話は書かれなくなる。
- ・安城高等女学校時代になると二つのジャンルに集約されてくる。

	心理描写型	民話的メルヘン	その他
昭14	「久助君の話」 哈・ラ	「最後の胡弓弾き」 哈	
昭15	「屁」 哈 「川」 新・ラ		
昭16	「嘘」 新・ラ		「うた時計」 他・ラ
昭17	「貧乏な少年の話」 ラ 「耳」 他・牛	「おじいさんのランプ」 ラ 「百姓の足、坊さんの足」 花 「和太郎さんと牛」 花 「花のき村と盗人たち」 花 「牛をつないだ樁の木」 牛 「烏右エ門諸国をめぐる」 花	「ごんごろ鐘」 ラ 「草」 牛
昭18	「狐」 牛 「小さい太郎の悲しみ」 牛 「疣」 牛		

哈…『哈爾賓日日新聞』
新…『新児童文化』

ラ…『おじいさんのランプ』
牛…『牛をつないだ樁の木』

花…『花のき村と盗人たち』
他…そのほか

3. 心理描写型

- ・子どもの心の動きを克明に描く。
- ・個性の強い脇役が生き生きと描かれ面白い。
- ・共通の主人公である久助が登場し、「久助もの」と呼ばれる。

何度目かに久助君が上になって兵太郎君を抑えつけたら、もう兵太郎君は抵抗しなかった。二人はしいんとなってしまう。二町ばかり離れた路みちを通るらしい車の輪の音がからからと聞えて来た。それがはじめて聞いたこの世の物音のように感じられた。その音はもう夕方になったということを久助君にしらせた。

久助君はふいと寂しくなった。くるいすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。もうやめようと思った。だがもしこれで起たちあがって、兵太郎君がベソをかいていたら、どんなにやりきれぬだろうということを、久助君は痛切に感じた。おかしいことに、取っ組み合いの間中、久助君はいっぺんも相手の顔を見なかった。今こうして相手を抑えていながらも、自分の顔は相手の胸の横にすりつけて下を向いているので、やはり相手の顔は見えないの

である。

兵太郎君は身動きもせず、じっとしている。かなり早い呼吸が久助君の顔に伝って来る。兵太郎君はいったい何を考えているのだろう。

久助君はちょっと手をゆるめて見た。だが相手はもうその虚に乗じては来ない。久助君は手を放してしまった。それでも相手は立ちなおろうとしない。そこで久助君はついに立ちあがった。すると兵太郎君もむっくりと起きあがった。

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、何もいわないで地平線のあたりをややしばらく眺めていた。何ともいえないさびしそうなまなざしで。

久助君はびっくりした。久助君のまえに立っているのは、兵太郎君ではない、見たこともない、さびしい顔つきの少年である。

何ということか。兵太郎君だと思いきや、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くるっていたのである。

久助君は世界がうらがえしになったように感じた。そしてぼけんとしていた。

いったい、これは誰だろう。じぶんが半日くるっていたこの見知らぬ少年は。…

なんだ、やはり兵太郎君じゃないか。やっぱり相手は、ひごろの仲間の兵太郎君だった。そうわかって久助君はほっとした。

だが、それからの久助君はこう思うようになった。——わたしがよく知っている人間でも、ときにはまるで知らない人間になってしまうことがあるものだと。そして、わたしがよく知っているのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったもんじゃない、と。そしてこれは、久助君にとって、一つの新しい悲しみであった。

「久助君の話」

・否定され続けた「久助君の話」

「孤独で神経質で煩悶型の、いわゆる紅顔の少年とはかけはなれた人物」

「子どもの世界にひたることのできぬ、醒めきった少年」

佐藤通雅著『新美南吉童話論—自己放棄者の到達』（昭和45・牧書店）

・見直される「久助君の話」

「いま、南吉は新しい。「子どもが孤独〈ひとり〉でいる時間〈とき〉」の内的成長（自分への目覚め）が注目され、南吉が描いた子どもの負の内面・心の屈折が脚光を浴びる時代になったからだ。」

谷悦子「南吉が描く〈子どもの孤独と懷疑〉—幼年期から思春期へ—

『日本児童文学』平成5年3月（特集：50年後の新美南吉）所収

小学5年生から中学2年生までの約800人を対象にアンケート（谷・昭和50）

→8割以上が久助君に共感

4. 民話的メルヘン

- ・郷土および農民たちを詩情ゆたかにえがいている。
登場人物はすべて善人であるが、こどもが主役となることがない。
長い時間の経過で人物の行為を追求するという構成をとっている。
民話的童話文体を確立させた。

浜野卓也著『新美南吉の世界』（昭和48・新評論社）

- ・戦後、高く評価された民話的メルヘン

「おそらく宮沢賢治につぐ位置をあたえられるべき人」

「新美南吉の本領がストーリー型の作品にあることは、もうおわかりだろうと思います。」

『子どもと文学』（昭和35・中央公論社）

- ・「心理描写型」作品には否定的

「この「疣」で描いている子どもの空虚感といったものは、児童文学作品の中心主題とするべきものでしょうか。そして、「川」における罪の意識、「かぶと虫」における孤独な感情、「貧乏な少年の話」における劣等感といったものも、どうようです。」
「こういった作品が必要か」

『子どもと文学』（昭和35・中央公論社）

- ・「百姓の足、坊さんの足」

- ・民話的メルヘンの多くでテーマとなるエゴイズム

「人間の心を筍の皮をはぐようにはいでいって、その芯にエゴイズムがあるということを知る時われわれは生涯の一危機に達する。つまり人というものは皆究極に於いてエゴイストであるということを知るときわれわれは完全な孤独の中につきおとされるからである。」

(昭和12年3月1日の日記)

「しかしここでへたばってはいけない。ここを通りぬけてわれわれは自己犠牲と報いを求めない愛との築設に努めなければならない。こういう試練を経て来た後の愛はいかにこの世をすみよいものとするのであろう。」

(同)

「人間は皆エゴイストである。常にはどんな美しい假面をかむっていようと、ぎりぎり決着のところではエゴイストである。——ということをよく知っている人間ばかりがこの世を造ったらどんなに美しい世界が出来るだろう。自分はエゴイストではない、自分は正義の人間であると信じ込んでいる人間程恐ろしいものはない。かゝる人間が現代の多くの不幸を造っているのである。」

「人間に胃の腑と生殖器がある以上人間がエゴイストであることはやむをえない。人間が悪いのではないのである。」

(共に昭和12年10月27日の日記)

「ほんとうにものわかった人間は、俺は正しいのだぞというような顔をしてはいないものである。自分は申しわけのない、不正な存在であることを深く意識していて、そのためにくぶん悲しげな色がきつと顔にあらわれているものである。」

(昭和17年4月22日の日記)

- ・人間が本質的に持っているエゴへのこだわり
- ・ではどうすれば？ →自分の弱さ、エゴの深さを自覚して生きる。

5. 現代へのメッセージ

作家として自分の作品世界を確立していった晩年の作品には、

- ・他者と自分は別個の意識の世界にいて人間は本質的に孤独であるということ
 - ・自分は自分で思うほど正しくない、弱くエゴに満ちた存在であるということ
- この二つの、いわば人間についての真実を知るという体験が描かれている。

「私は大げさな絵はかきません。つつましい絵をかきます。つつましい絵の中に半分の夢と半分の現実をつきまぜるのです。」

「私は、蛍を見ると、自分の絵に似ていると思います。蛍をとりまく闇黒を現実にととえるならば、蛍が、それをたよりにして生きている、あのかすかな青い火は、蛍の夢でなくて何でしょう。世の中に蛍に心をひかれる人があるうちは、私のようなものの描いた絵も、誰かに、静かに愛されてゆくだろうと思うのです……」

絶筆の小説「天狗」

- ・「狐」 平成11年絵本化（長野ヒデ子絵・偕成社）
もっと子どもの話を聞き、子どもを向き合うこと
愛されていること、愛していることを感じる（確認する）こと
- ・自分のエゴを深く知ることで他人を許せる（愛せる）ようになる。
「何でもゆるすこと。何でもうけ入れること。」（昭和17年7月4日の日記）

南吉童話の闇と光

遠山 光嗣



御紹介いただきました、新美南吉記念館の遠山光嗣と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。先ほど宮川先生の講義の後半を聞かせていただきました。聞きながら皆さんの名簿を見ていたのですが、愛知県からの参加者はいないようで少しほっとしています。でも、北海道から来ていらっしゃる方のお名前を見て、びっくりしました。新美南吉の初恋の人の弟の息子さんのお嫁さんが来ていらっしゃるのです。とてもびっくりしました。新美南吉の初恋の人は木本^{きもとみなこ}咸子さんという方なのですが、平成7（1995）年まで御存命でした。南吉の故郷岩滑^{やなべ}で別の男性と結婚していたので、自主規制をして、お名前も写真も一切出さませんでした。ですから皆さんの図書館にある南吉の関係資料にも、恐らく咸子さんのことは写真も一切出ていないと思います。その方の弟さん—もう亡くなられてしまったのですが—が元気だった頃にお姉さんの話を聞かせていただきました。その御遺族の方が来ていらっしゃるのと、ちょっとどきどきしています。

今回の連続講座の講師に指名していただき、大変光栄なのですが、他の講師の方の顔ぶれと比べるとどうも場違いで、「私などでいいのかな」という感じがしております。

恐らくは、宮川先生が今年春陽堂からお出しになった『名作童話を読む未明・賢治・南吉』の中で、南吉の部分の鼎談に加わらせていただきましたので、その御縁でということでしょうか、私は新美南吉記念館という個人の作家を紹介する記念館の学芸員ですから、関心がどうしても南吉という人に偏っています。

例えば、東京での学生時代はどこで下宿していたのだろうかということです。実は何年も前に東

京に調査に来ました。中野の新井に南吉の下宿が残っているのです。「手ぶくろを買いに」を書いた部屋です。南吉の日記に出てくる、当時少女で今はおばあちゃんが住んでいます。この夏に取り壊されるはずだったのですが、片付けが終わらず延び延びになってしまっていて、まだ壊されていないというので、明日こっそり見に行ってみようと思っています。片付けができなくて大変だから来ないでくださいと言われていたのですが…。

そんな調査をしたり、恋人のことや、女学校教師時の生徒への作文指導はどのようなだったかとか、全集が出た後で発見された手紙の内容、そこからどんなことが読み取れるのか、といったことを研究の対象にしています。そうした調査や資料に基づいた作家新美南吉へのアプローチをしているわけですが、どうも大勢いる日本の童話作家の中の一人として南吉という人を相対的に見ることができているか、というところちょっと自信がありません。

3年後の平成25（2013）年は、新美南吉生誕100年、没後70年に当たります。新美南吉は亡くなってから間もなく70年にもなるうとしているのです。目下の関心も、そんなにも昔に書かれた作家の作品が、現代において読まれることにどんな意味があるのか、ということにあります。今日もそうした視点のお話になりますが、御容赦いただきたいと思います。

1. 新美南吉と国民的童話「ごんぎつね」について

新美南吉と言えば、宮沢賢治と並んで、日本の近代童話界を代表する作家です。しかし、皆さんのように日頃から児童書に携わっておられる方は

別ですが、一般にはどんな経歴の人だったか意外に知られていません。そこで、まず南吉について簡単に紹介をします。

新美南吉は今から97年前の大正2（1913）年に、愛知県知多郡半田町、現在の半田市の岩滑という田舎町に生まれました。

【半田運河】



半田市は昔からお酒や酢の醸造が盛んな所です。株式会社ミツカン（酢）の本社が江戸時代からずっと半田にあります。半田運河辺りに酢の蔵が立ち並んでいます。とても風情のある所です。

【潮干祭】



また、半田というと、こういう山車を引き回す山車祭が盛んな所です。市内に31台もの山車があります。これだけ狭い範囲に山車が集中している所も珍しいと思います。南吉が生まれた岩滑という所にも山車が2台あります。「狐」という童話

には山車のお祭りの様子が出てきます。写真は潮干祭というお祭りの写真です。国の重要文化財に指定されています。砂浜に山車が引き下ろされていく面白いお祭りです。

南吉は半田市の中心からちょっと離れた岩滑という所で生まれ育ちました。

【生家】



実家の渡辺家は街道筋で小さな畳屋をしていました。

【多蔵】



お父さんは渡辺多蔵という人でした。残念ながらお母さんの写真が残っていません。お母さんのりゑは産後の肥立ちが悪く、南吉は近所のお姉さんに子守りをしてもらっていました。そして南吉が4歳のときにお母さんは病気で亡くなってしまいます。

その後、継母が来て弟も生まれるのですが、間

もなく生母の実家の新美家に養子に出されることになります。8歳、小学校2年生のときのことで

【養家】



【志も】



ここのおばあちゃん、とは言っても、南吉のお母さんの継母に当たる人です。血のつながらないおばあちゃんの新美志もさんの写真です。結局、養子先での生活に馴染めず、戸籍上は新美家のまま、半年足らずで渡辺家に帰されます。生母が亡くなる前後からこの養子時代にかけて、家族の愛を十分に受けることができず、南吉は非常に寂しい思いをします。

学校の成績は優秀で作文が得意でした。3年生のときの作文には先生が「この分では小説家ですよ」と赤ペンで書いてくれたほどです。

【小学校卒業写真】



小学校の卒業写真です（中央の少年が南吉）。やはり何となくきりっとした、ものを考えているような顔立ちをしていますね。全然関係ありませんが、岩滑小学校の後輩に巨人の槇原投手がいます。

【半田中学校】



その後、旧制半田中学校に入学します。今の半田高校です。当時は知多郡で唯一の中学校でした。知多郡中から秀才が集まってきました。御存じの通り、戦前に中学校まで上られる子どもはそういっていませんでした。勉強ができるだけでなく、やはり家庭が豊かでないとなかなか中学まで行けません。その中で、小さい豊屋の子が中学に上がるのは珍しいことだったようです。ちなみに一学年下に、経団連の会長をされた平岩外四さんがいらっしゃいます。それからずっと後輩に『極道の妻たち』を書いた家田荘子さんがいます。

中学校2年生の頃から創作を始め、雑誌に投稿するようになります。

【横を向いた写真】



これは昭和6（1931）年の中学校卒業のときの写真です。右端のふいと横を向いているのが南吉です。同級生の方にお話を伺いますと、南吉は「孤高の人だった、一人高みにいて、僕らとはちょっと違ったよ」とおっしゃった方がいました。横を向いている南吉の姿にそんなイメージが重なります。

中学校を卒業した南吉は、小学校の先生になるために師範学校を受験しますが、やせすぎていたために体格検査で落ちてしまいます。非常にショックを受けます。このときは恩師の世話で、母校の小学校の代用教員を半年間だけしています。

【代用教員時代（男子児童と）】



2年生の担任をしました。実は先ほどお話をし

ました、南吉の恋人の弟さんがこの中にいます。前列右から二人目の、一人だけ洋服を着ている子です。織物工場の経営者の家だったのでやはり裕福だったのでしょうか。この代用教員時代に童謡や童話が『赤い鳥』に入選するようになりました。

作家になる希望を膨らませた南吉は、翌昭和7（1932）年から東京外国語学校に入学して、東京生活を始めます。

【語劇リア王】



語劇と言って、自分たちが習っている言葉で演じる伝統行事がありました。南吉は、「リア王」の父を裏切ってしまう悪い娘の役をやっています。

文学では北原白秋に師事して、兄弟子に当たる詩人の巽聖歌や与田準一からとてもかわいがられます。

【巽の家族と（上野公園）】



左端が南吉です。子どもを抱えているのが巽聖歌さんです。右から二人目が巽さんの奥さんで洋

画家の野村千春さんです。一番右端にいらっしゃるのが、少し前に亡くなられてしまいましたが、童謡詩人の清水たみ子さんです。

【宮沢賢治友の会】



南吉が東京にいる間に宮沢賢治が亡くなります。その翌年、早速「宮沢賢治友の会」が東京で開かれます。草野心平や高村光太郎の呼び掛けで、賢治に関心のある作家や画家が集まりました。岩手出身の巽さんに誘われたのだと思いますが、南吉も参加しています。南吉は賢治のことを非常に尊敬していました。彼は天才だと日記にも書いています。

しかし、東京外語を卒業した昭和11（1936）年の秋に血を吐いて倒れてしまい、帰郷せざるを得なくなります。帰郷してから後、自分は故郷でどう生きていったらいいのか悩み、職も転々として苦しい時代を迎えます。

しかし、中学時代の恩師から救いの手が差し伸べられ、昭和13年（1938）から県内の安城^{あんじょう}という町の高等女学校で正教員として勤めるようになります。

安城と言えば、「日本デンマーク」と言われた先進的な農業経営で日本中から視察団が来ていたような町です。女学校の正教員になったことで、ようやく経済的にも精神的にも安定を得ることができました。

【田園に建つ安城高女】



【女学生たちと】



女学生たちとの幸せな一場面です。南吉はどの子を見ているのでしょうか。たぶん、右から三人目の子を見ているのだと思います。高正惇子さんという南吉が非常にかわいがっていた生徒なのですが、転校してしまうのです。そのときに撮った写真です。かわいがっていた生徒の転校ということで、日記に、もう学校で意識せずに済むというようなことを書いています。もしかしら女性としても見ていたのかもしれませんが。

作品も雑誌や新聞に載り始め、昭和16（1941）年には処女出版となる『手毬と鉢の子：良寛物語』を、翌昭和17（1942）年には第一童話集の『おぢいさんのランプ』を出版しました。

【昭和17年頃の南吉】



これが昭和17年ごろの南吉です。なかなか元気そうです。「弥厚翁」という本を持っています。安城に用水を引いた明治用水というのがありますが、明治用水の発案者である都築弥厚^{つづきやこう}という人の伝記を書こうと意気込んでいた頃の写真です。しかし、この翌年に亡くなってしまいます。昭和18（1943）年3月に結核で亡くなります。まだ29歳7か月でした。

非常に若くして亡くなった人です。その短い一生の中で、今一番多くの人に読まれ、代表作と言われている「ごんぎつね」がいつ書かれたかというと、実は中学を出たばかりの、小学校で代用教員をしていた昭和6（1931）年です。弱冠18歳の作品なのですね。

【草稿「権狐」】



「ごんぎつね」の草稿です。ノートの左側のページに「赤い鳥に投ず」と書いてあります。これを

清書したものがあって、それが『赤い鳥』に送られているわけです。残念ながらその清書稿は残っておりません。昭和7（1932）年1月号の『赤い鳥』に発表されます。

この作品がこれほどまでに有名な作品になった理由は、御存じの通り、長年教科書の教材として読まれてきたからです。

【教科書に載った「ごんぎつね」】



昭和31（1956）年に初めて小学4年生の教科書に採用されました。それからだんだん採用する会社が増えてきまして、昭和55（1980）年からは全社採用するようになりました。今でも5社全社が採用しています。来年から新しい教科書になりますが、新しい教科書でも全てに載ります。

南吉記念館で、これまでにどのぐらいの人が「ごんぎつね」を読んだのだろうと数えてみたことがあります。全社採用になるまでは、だいたいこの会社はこのぐらいのシェアがあったからと、おおよその数で計算しました。すると、昨年までで6,000万人が「ごんぎつね」を教科書で読んだことになるようです。他に全社採用されているのは、1年生の「おおきなかぶ」ぐらいだそうです。非常に珍しいことなのですね。

賢治の場合と対照的ですね。賢治はいろいろな作品がばらばらにいろいろな教科書に載っていますが、南吉は「ごんぎつね」が圧倒的に支持されて教科書に載っています。

たくさんの絵本にもなっています。黒井健さん、いもとようこさん。長年光村図書一國語の教科書で一番シェアを持っている会社ですが一の挿

絵はかずや昌宏さんの挿絵でした。ですからこの絵を覚えている方がたくさんいます。古くから絵本になっている箕田源二郎さんの『ごんぎつね』、遠藤てるよさんの『ごんぎつね』。そして村上勉さんの『ごんぎつね』、これはシリーズの中の一冊になっていてなかなか見る機会がないのが残念なのですが。

外国語でも紹介されています。黒井さんの『ごんぎつね』がフランスで出版されています。中国、韓国でも出版されています。国内での出版ですが、英語、エスペラント語にも訳されています。

余談ですが、来年(2011年)は昭和6(1931)年に書かれた「ごんぎつね」が誕生して80年になります。記念館でも当然、特別展や記念行事を行います。皆さんの図書館でもちょっと話題にさせていただけるとうれしいなと思います。

2. 二つのジャンル

さて、この「ごんぎつね」が余りにも有名なために、多くの方にとっては南吉童話＝「ごんぎつね」で、南吉が書いた「ごんぎつね」というよりも、「ごんぎつね」を書いた南吉という印象を持っている人が多いようです。あと、同じく教科書で読まれてきて、多くの絵本にもなっている「手ぶくろを買いに」、こちらは3年生ですが、この作品を思い浮かべる人も多いですね。

余談ですが、海外では「手ぶくろを買いに」の方が広く紹介されています。特に黒井健さんの「手ぶくろを買いに」はフランス、韓国、アメリカ、ドイツ、中国で出版されています。海外では「ごんぎつね」よりも「手ぶくろを買いに」の方が受け入れられるというのは興味深いですね。「ごんぎつね」の舞台や時代背景が余りにも日本的過ぎるからなのか、それともあの悲しい結末がそうさせるのか、面白い課題です。いずれにしても「ごんぎつね」と「手ぶくろを買いに」、この2作品の存在感は国内でも海外でも大きいということです。

しかし、「ごんぎつね」が18歳、「手ぶくろを買いに」でも20歳に書いた作品です。南吉にとって早い時期の作品ですので、その後に完成していく南吉独自の作風と言いますか、作品世界をこの2

作品をもって語ることは難しいのです。こうした動物を主人公にして、人間と関わっていくという型の話はその後、全く書かれなくなっています。

ですから今日は、南吉が短い創作人生の中でも急速に成熟していったその晩年、安城高等女学校時代の作品を中心に、南吉文学の魅力や現代における意味を考えていきたいと思えます。

レジュメを御覧ください。安城高女時代の主な作品を表にしてあります。南吉が安城に赴任したのは昭和13(1938)年ですが、南吉の創作人生の中で、珍しくこの年だけは童話を書いていないのです。それだけ苦しい境遇から抜け出して得ることができたこの女学校教師という仕事に、真剣に取り組もうとしていたのではないかと思います。

しかし、昭和14(1939)年になると、満州で新聞記者をしていた東京時代の友人に頼まれて、『ハルビン^{ハルビン}日日新聞』という新聞に童話や小説を発表するようになります。「久助君の話」、「最後の胡弓弾き」、「屁」がそうです。「家」や「花を埋める」といった作品もそうですが、小説になりますので、この表からは省きました。

その後、巽聖歌が創刊した『新児童文化』という雑誌に「川」と「嘘」が載ります。昭和17(1942)年には、非常にたくさんの作品を創作しています。これは南吉にとって初めてとなる童話集の出版を巽聖歌が世話してくれることになったため、その本は『おぢいさんのランプ』という書名で昭和17年10月に出版されます。

これと並行するように第二、第三の童話集の話も巽聖歌や与田準一から持ちかけられ、昭和17年、18年の作品は全てこの3冊の本のいずれかに入っています。ただ、第二童話集の『牛をつないだ樁の木』も、第三童話集の『花のき村と盗人たち』のいずれも南吉の生前には出ず、死から半年後に出されています。

このように、安城時代の作品は、ほとんど全て発表されることを前提に書かれています。投稿作品の「ごんぎつね」や発表する当がなかった「手ぶくろを買いに」とは違います。ですから、それぞれの媒体に合わせた作品にしていますし、南吉自身の中でもだんだん作風というか、書きたいものが固まってきます。

彼の場合、二つのジャンルに集約されていきます。それが心理描写型と民話的メルヘンです。それではそれぞれ見ていきましょう。

3. 心理描写型

心理描写型というのは、子どもを主人公に、子どもの社会の中で、子ども同士の交渉を描いています。いわゆる「生活童話」と言われていたものに当てはまります。しかし、多くの「生活童話」がリアリズムに走りすぎた余り、全くと言っていいほど面白くないのに対して、心理描写型の南吉作品は、実に克明に子どもの心の動きを描いていて、それが非常に面白いのです。

「貧乏な少年の話」

例えば「貧乏な少年の話」です。優等生の加藤大作君がある日、村の生け垣の路地を歩いていると、キャラメル箱が落ちていました。それを拾おうとして、待てよ、これはきっと空のキャラメル箱を道に置いてそれを拾わせるいたずらに違いない、と思って左右をきょろきょろと見ると、案の定友達が出てきて、「ああひっかからなかったね、大作君もこの茂みに入って見ていようよ、きっと貧乏な家の子が拾うから」と言うわけです。つつい引き込まれて一緒に生け垣の中から見ていると、向こうから男の子がやって来ます。その子は何と自分の弟でした。弟はキャラメル箱を拾ってポケットに入れて行ってしまいます。そして、気まずい雰囲気が流れます。こんなささいな事件がきっかけで、大作君は何をするにしても自信がなくなり、消極的になってしまいます。しかし、最後には、人の価値が何にあるのかということに気付いていく話です。

「屁」

それから、「屁」という話もあります。これも優等生の春吉君という子が主人公です。クラスに石太郎という屁の名人がいました。みんな石太郎のことをばかにしています。ある日、春吉君は朝から腹の具合が良くなかったのですが、図工の時間に粘土工作に集中する余り、それを忘れて、音もなくすーっとおならをしてしまいました。し

まったと思います。しばらくたってクラスの子が臭い、臭いと言いだします。春吉君は顔が真っ赤になるのですが、どこからか石太郎だという声が上がります。いつも石太郎が屁ばかりしているのですから、当然みんなは石太郎だと思っているわけです。先生も来て石太郎の頭をこつんと小突きます。春吉君は優等生で正しく生きてきたと思っていたのですが、とうとう、自分がやりましたとは言えませんでした。自分の正しさに泥をかけられたような嫌な気持ちが残るといってお話です。

何でもないような事件を扱っているわけですが、その事件を巡る主人公の心の曲線と言いましようか、揺れ動きが非常に巧みに描かれていてとても面白いのが、心理描写型の作品です。

それから、出てくる人物も面白いのです。ひょうきんで突拍子もない兵太郎とか、都会から来て嘘ばかりつく太郎左衛門、屁の名人の石太郎といった非常に個性の強い脇役たちが登場することも、心理描写型作品の面白さです。一人一人の性格がよく描かれていて実に生き生きとしています。

「久助君の話」

これらの心理描写型作品を「久助もの」と呼ぶことがあります。それは「久助」という共通する主人公が登場する作品が幾つもあるからです。その最初の作品が「久助君の話」です。

久助君は、5年生になるとき学術優等品行方正で表彰されました。喜んだお父さんは、学校から帰ったら必ず1時間勉強するという決まりにしています。久助君はうれしくありません。勉強が終わって外に行っても友達はどこかに遊びに行ってしまうと、それを探さなくてはなりません。

ある日、いつものように友達を探している久助君ですが、なかなか友達が見付かりません。あちこち探し回っていると、干草の積んである所で「ほら兵」とあだ名が付けられているお調子者の兵太郎と出会います。

「みんな何処どこに行ったか知らんかア。」

と久助君がきいた。

「知らんげや。」

(中略)

「徳一がれに居やひんかア。」

と、久助君がまたきいた。

「居やひんだらア。」

(中略)

「あんまり耳糞がたまつとるで、ちょっと掃除してやらア。」

と言って久助君が兵太郎を草の先でくすぐっていたずらします。そうすると兵太郎が飛びかかってきて、二人はふざけながらわらの上で取っ組み合いを始めます。

でもしばらくすると、もしかすると兵太郎は本気になってやっているんじゃないだろうか、と思えてきます。その証拠に、力が強く入っていて抑え付けるときの腕がぶるぶる震えている。そうかと思うと、久助君の手が誤って兵太郎の脇の下から懐に潜り込んだときには、クックツと笑っています。どっちか分からないまま、取っ組み合いは夕方まで続きます。

何度目かに久助君が上になって兵太郎君を抑えつけたら、もう兵太郎君は抵抗しなかった。二人はしいんとなってしまった。二町ばかり離れた路を通るらしい車の輪の音がからからと聞えて来た。それがはじめて聞いたこの世の物音のように感じられた。その音はもう夕方になったということを久助君にしらせた。

久助君はふいと寂しくなった。くるいすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。もうやめようと思った。だがもしこれで起ちあがって、兵太郎君がベソをかいていたら、どんなにやりきれぬだろうということを、久助君は痛切に感じた。おかしいことに、取っ組み合いの間中、久助君はいつべんも相手の顔を見なかった。今こうして相手を抑えていながらも、自分の顔

は相手の胸の横にすりつけて下を向いているので、やはり相手の顔は見えていないのである。

兵太郎君は身動きもせず、じっとしている。かなり早い呼吸が久助君の顔に伝って来る。兵太郎君はいったい何を考えているのだろう。

久助君はちょっと手をゆるめて見た。だが相手はもうその虚に乗じては来ない。久助君は手を放してしまった。それでも相手は立ちなおろうとしない。そこで久助君はついに立ちあがった。すると兵太郎君もむっくりと起きあがった。

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、何もいわないで地平線のあたりをややしばらく眺めていた。何ともいえないさびしそうなまなざしで。

久助君はびっくりした。久助君のまえに立っているのは、兵太郎君ではない、見たこともない、さびしい顔つきの少年である。

何ということか。兵太郎君だと思いで、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くるっていたのである。

久助君は世界がうらがえしになったように感じた。そしてぼけんとしていた。

いったい、これは誰だろう。じぶんが半日くるっていたこの見知らぬ少年は。……

なんだ、やはり兵太郎君じゃないか。やっぱり相手は、ひごろの仲間の兵太郎君だった。

そうわかって久助君はほっとした。

だが、それからの久助君はこう思うようになった。——わたしがよく知っている人間でも、ときにはまるで知らない人間になってしまうことがあるものだ。そして、わたしがよく知っているのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったもんじゃない、と。そしてこれは、久助君にとって、一つの新しい悲しみであった。

この作品、のちに南吉が最初の童話集を出版するとき本タイトルにまでしようとしていた作品です。最終的には異聖歌のアドバイスで『おぢいさんのランプ』という書名になります。それだけ南吉は相当自信を持っていたようですが、戦後

長い間この作品は否定され続けました。

佐藤通雅さんは、著書の『新美南吉童話論—自己放棄者の到達』の中で、「孤独で神経質で煩悶型の、いわゆる紅顔の少年とはかけはなれた人物」とか「子どもの世界にひたることのできぬ、醒めきった少年」と評しています。

こうした受け止め方がされたのは、児童文学は理想主義で向日的でなくてはならないという考え方が日本の児童文学界に根強くあったからです。

しかし、現在の評価は変わってきています。今から17年前、南吉没後50年を記念して雑誌『日本児童文学』が特集を設けた中で、谷悦子さんという研究者がこう書いています。

いま、南吉は新しい。「子どもが孤独ひとりでいる時間」の内的成長（自分への目覚め）が注目され、南吉が描いた子どもの負の内面・心の屈折が脚光を浴びる時代になったからだ。

（『日本児童文学』平成5年3月号「南吉が描く＜子どもの孤独と懷疑＞—幼年期から思春期へ—」）

谷さんは、「久助君の話」に対する低い評価に随分前から疑問を持っておられて、昭和50（1975）年に大阪の小学校5年生から中学2年生までの約800人を対象に、「久助君の話」を読んでもらって、アンケートを取ったのだそうです。そうしたら、どの学年も8割以上が久助君に共感したというのですね。大人からすると変なことを考えるなあとも思うのですが、現に今そうした体験をしつつある思春期の子どもたちにとってはとても共感できるわけですね。

この自分が今まで何の疑問もなく信じ切っていたこと、どんな奴がよく分かっているつもりで結び合っていた友達との関係が、さあっと足元から消えるように無くなってしまい、自分だけがぼつんとこの世に立っているという孤独感、不安感を感じる時期というのは、多かれ少なかれ誰でも経験していると思います。

私も「久助君の話」を読んで、思い出しました。小学校の5、6年生の頃でした。この世界は自分が見て知っているだけの範囲のことで、テレビで

見る外国などはそれを私に信じさせるために作られたうそで、歴史も本当は今があるだけで過去の出来事はみんなうそなんじゃないか、自分が居なくなれば全て終わってしまうんじゃないだろうか。これは友人だけではなく家族も含めてです。そういう不安に取り付かれていた時期があったのです。映画の「マトリックス」の仮想現実のようですが、久助君の不安にも通じるものがあると思います。

南吉は、なぜ「久助君の話」のような、寒々と心に北風が吹くような作品を書いたのでしょうか。それは、人間というものは孤独なんだぞ、普段は互いによく知っているつもり友人でも、結局は別々の意識の世界に居て、本当のところ何を考えているかなんて分からない。だから人間は社会の中にあっても本質的には独りぼっちなんだぞ、という、南吉が常に苦しみ、しかし眼をそらさなかった人生の真理を、何とか童話という形で書きたかったのではないかと、思います。

この作品が『哈爾濱日日新聞』に発表されたのは、新聞という大人が読む媒体なら出しやすかったからではないか、とも谷さんはおっしゃっています。

南吉は、「久助君の話」が書けたからその後の久助ものが書けたんだと言っていたようですから、最初は大人向けに試したこのテーマを次第に子ども向けに書いていったのではないかと、思います。

このテーマが、南吉にとっていかに大きかったかということ、死の間際に書いた一連の「狐」、「小さい太郎の悲しみ」、「疣いぼ」も、人間の本質としての孤独、そしてその結果として生まれる自分の存在に対する不安や社会に対する懷疑といったものを描いているということからも見て取れます。

「小さい太郎の悲しみ」

「小さい太郎の悲しみ」にはおばあさんと住んでいる太郎という子どもが出てきます。恐らく南吉がおばあさんの家に養子に出された頃を思い出して書いていると思うのですが。太郎がカブトムシを捕まえておばあさんに見せに行きますが、相手にしてもらえません。これを使った面白い遊びがあるに違いないと思って、友達の家に行きに行

きます。最初金平ちゃんの所に行きますが、金平は腹が痛くて寝ているんだと家族に言われます。次に恭一君という一つ年上の少年の家に行きます。しかし、恭一君は親戚の家にもらわれていったと言われます。恭一君とはもう遊べないのと聞くと、盆や正月には帰ってくるから遊べるよと言われます。今度は車大工の家の安雄さん—もう青年になっているのですが、子どもの遊びが上手で、子どもたちから尊敬されていた人です—の所に行きます。安雄さんはお父さんから仕事を仕込まれていて、真剣な顔で仕事をしています。太郎が声をかけようとする、お父さんに、安雄はもう大人になったんだ、だからお前らとは遊ばないんだ、子どもは子どもと遊べ、と言われてしまいます。太郎はびっくりして帰っていきます。

小さい太郎の胸にふかい悲しみがわきあがりました。

安雄さんはもう小さい太郎のそばに帰っては来ないのです。もういっしょに遊ぶことはないのです。お腹が痛いなら明日になればなおるでしょう。三河にもらわれていったって、いつかまた帰って来ることもあるでしょう。しかし大人の世界にはいった人がもう子供の世界に帰って来ることはないのです。

安雄さんは遠くに行きはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎はべつの世界にいます。いっしょに遊ぶことはないのです。

もう、ここには何にもものぞみがないのでした。小さい太郎の胸には悲しみが空のようにひろくふかくうつろにひろがりました。

或る悲しきは泣くことができます。泣いて消すことができます。

しかし或る悲しきは泣くことができません。泣いたって、どうしたって消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しきは泣くことのできない悲しみでした。

「疣」

それから「疣」という話では、田舎の松吉とい

うお兄さんと杉作という弟の所に町からいとこの克巳という少年が遊びに来ます。しばらく一緒に遊んで仲良くなります。その後、農作業が秋に終わって、あんころもちを作ったので、それをいとこの家に届けてくれと親から頼まれ、二人は喜んで町へ行きます。親戚の家に行けばきっとお小遣いがもらえる、そのお小遣いで帰りは電車に乗って帰れると期待します。そしていとこの克巳に久しぶりに会えるとわくわくしながら町に行きますが、残念ながらいとこの克巳は留守でした。そこで帰りを待たせてもらい、とうとう克巳が帰ってくるのですが、克巳はたたたと2階に上がって行ってしまいます。そして町の他の友達と遊んでいて、松吉と杉作を無視するのですね。

松吉は、つきおとされたように感じました。じぶんの立っている大地が、白ちゃけた寂しいものにかわってしまいました。

松吉にはわかりました。—克巳にとっては、田舎で十日ばかり一しょに遊んだ松吉や杉作は、何でもありやしなないんだと。町の克巳の生活には、田舎とちがっているいろんなことがあるので、それがあたりまえのことなんだと。

二人さみしく家に帰っていきます。この後も少し展開があるのですが、こんな話を書いています。人間の本質としての孤独、その結果として生まれる自分の存在に対する不安や社会に対する懐疑を、南吉は死の間際に書いています。南吉にとってはそれだけ大切なテーマだったのだなと思います。

4. 民話的メルヘン

では、次に民話的メルヘンと呼ぶ作品群の方を見てみましょう。この民話的メルヘンというのは、亡くなられた浜野卓也さんが次のように定義しておられます（『新美南吉の世界』）。

- (1) 郷土および農民たちを詩情ゆたかにえがいている。
- (2) 登場人物はすべて善人であるが、こどもが主役となることがない。

- (3) 長い時間の経過で人物の行為を追求するという構成をとっている。
- (4) 民話的童話文体を確立させた。

そして、そのほとんどが、亡くなる前年の昭和17(1942)年の春から初夏にかけて書かれています。実は、戦後、南吉作品が本格的な評価を受けるようになったのは、主にこの民話的メルヘンが評価されたのでした。特に昭和35(1960)年に出た『子どもと文学』は、「おじいさんのランプ」、「百姓の足、坊さんの足」、「牛をつないだ樁の木」などを取り上げて、その作者である南吉を「おそらく宮沢賢治につぐ位置をあたえられるべき人」とまで評してくれました。

この本は石井桃子さんが中心になって、海外の児童文学事情に詳しい方が集まって勉強会をして書いているのですが、童話は、「面白く、はっきり分かりやすくなくてはならない」ということで、それを基準に小川未明、浜田広介、坪田譲治、宮沢賢治、新美南吉、千葉省三を論じています。

その結果はどうかと言うと、それまで非常にもはやされていた小川未明、浜田広介、坪田譲治は、子どもにとって面白くないし、分かりにくい、一方、宮沢賢治と新美南吉はとても面白いし、分かりやすいと言うのですね。

そして、「おじいさんのランプ」、「百姓の足、坊さんの足」、「牛をつないだ樁の木」、「花のき村と盗人たち」などを「ストーリー型」と呼んで、南吉の本領はここにあると言っています。

ところが、先ほどの心理描写型の作品については、

この「疣」で描いている子どもの空虚感といったものは、児童文学作品の中心主題とするべきものでしょうか。そして、「川」における罪の意識、「かぶと虫」における孤独な感情、「貧乏な少年の話」における劣等感といったものも、どうようです。

と書いて評価していません。なお、「かぶと虫」は、先ほど御紹介した「小さい太郎の悲しみ」というのが原題です。

ストーリー性がないとは言っていないので、やはりこれらの作品で扱った孤独とか、そこから生まれる不安や懐疑といったテーマが児童文学にふさわしくないと見たようです。こういった作品が必要か、とまで述べて、強い疑問を呈しています。

こうした、当時の感覚では「変な作品」も書いている南吉ですが、それでも「宮沢賢治につぐ位置をあたえられるべき人」とまで評価されるのは、それだけ民話的メルヘン、『子どもと文学』では「ストーリー型」と呼んだ、昭和17年の作品群を買っているということですね。

「百姓の足、坊さんの足」

それでは民話的メルヘンの中から一つ御紹介しましょう。「百姓の足、坊さんの足」という作品です。

雲華寺うんげじの和尚と貧しい百姓の菊次の物語です。和尚さんと菊次は「米初穂こめはつほ」と言って、その年に獲れた初めてのお米を、檀家を回って集めているのですが、烏谷の百姓の家で酒を振る舞われます。二人ともお酒を飲んでいい気分です。もう一軒奥に檀家の家が残っているのですが、もう帰ろうとします。すると、その奥の家からおじいさんが追いかけて来て、お椀に一杯のお米を差し出します。和尚さんはそれを受け取って菊次に渡します。菊次は入れ物がいっぱいになっていたの、入れ物の上にそのお米をぽんと置いて運ぼうとしますが、酔っ払ってしまいましたのでバランスを崩してお米をこぼしてしまいます。慌てて拾い集めようと思いますが、和尚は石や土が混ざってしまったからもうだめだと言って、足で蹴散らしてしまいます。菊次はびっくりしましたが、和尚さんを見習って一緒にお米を足で蹴散らして帰ってしまいました。

二日後、菊次が家に帰ったところ、家の前で息子が泣いています。訳を聞くと、御飯粒をむしろのほこりの中に落としてしまったら、おばあさんが拾って食べると言う。それが嫌だから御飯粒が取れないようにぎゅっと押し込んだら、すごく怒られて立たされていると、泣きながら言うわけです。

菊次が、そこまでしなくてもいいじゃないかとおばあさんに言うと、落とした御飯を拾って食べるのは当たり前のことだと言います。そこで菊次は、そんなことで罰が当たるはずがないと、この間のことを話します。驚いたおばあさんは、罰が当たらないやいいが、と言います。罰なんて当たらないと思っていたところ、足がずきっと痛んできてくる。痛みは全く取れません。菊次はきつと和尚さんも罰が当たって足が痛くなっているに違いないと思って、足を引きずって見に行くのですが、和尚はびんぴんしていました。

家に戻って、天は不公平だと愚痴をこぼします。するとおばあさんに、心得違いをしているとまたしかられます。

その夜、菊次は夢を見ました。白い米の幻を夢で見て、ふと気が付きます。和尚さんは説教などをしているけれど、百姓が米を作る苦労を本当には知らないのだと。だから罰が当たらなかったのだと。自分は米を作る苦労を本当に知っているのにあんなことをしたから罰が当たったのだと。そのとき菊次は本当にすまなかったと思います。

「ほんとうに、すまなかっただ。ほんとうにすまなかっただ……。」

と菊次さんは、ほの白い米のまぼろしに向かってわびました。それから、びっこをひきひき坂道を追っかけて来て、その一畝の米をとどけた年よりの百姓にもわびました。そして天にもわびました。地にもわびました。お母さんにもわびました。十五年前に死んだお父さんにもわびました。みんなに心の中でわびました。

すると、翌朝、まだびっこは引いたままなのですが、足の痛みが抜けていました。菊次はそれを感謝してそれからの人生を生きていきます。

40年が過ぎて、同じ日に和尚も菊次も死にます。二人であの世の道を歩いている場面になります。今頃になって、和尚さんの足が痛み出してきたので、菊次が背負いましょうと言うと、和尚は何の遠慮もなしに背負われていきます。

向こうから人力車がやって来て、5月3日の午後亡くなったのはどちらか、雲華寺の門前に住

んでいたのはどちらか、と訪ねます。和尚さんは5月3日の午前に死んだのですが、極楽から自分に迎えが来たのだと思っていますから、それは間違いだ、と言って勝手に人力車に乗ってしまいます。菊次は5月3日の午後亡くなっているのですが、「足はまだ痛みますか」と和尚を気遣いながら、自分は後から歩いてついて行きます。

やがて、道が二股になっていて、誰か立っています。菊次は右、和尚は左へと言われます。菊次は、和尚さんは極楽へ行き、自分は地獄へ落ちると思って、和尚さんのお供をさせてくださいとお願ひしますが、これだけは許してもらえませんのでした。菊次は諦めて右へ歩いていきます。人力車に乗った和尚さんが菊次の方を見ると、菊次はもうびっこを引いておらず、体から光が差し始めています。自分の行く方を見ると、暗い雲が立ち込めている。和尚さんはやっと自分が地獄へ落ちるんだと分かるというお話です。

浜野さんの言う民話的メルヘンの定義をしっかりと満たしていますね。しかし、私がこの作品を取り上げたのには、別の理由があります。それは、民話的メルヘンは、童話としてのスタイルだけでなく、描こうとしているテーマという点で見ても、幾つかの作品に共通するものがあると思うのですが、そのテーマが一番分かりやすく現われているのが「百姓の足、坊さんの足」だからです。

では、そのテーマは何かというと、人間は善人と悪人に分かれるように見えるけど、実は大して差はないのだ、根本的には皆エゴを持っていて弱く不正な存在なのだ、ということです。

例えば「おじいさんのランプ」では、孤児の境遇からランプ売りになって立派に身を立て、人々の役にも立つ商売をしてきた巳之助ですが、電気の時代になって自分の商売ができなくなる状況に立たされると、誰かを恨まずにはいられなくなり、恩のある区長さんの家の牛小屋に火をつけようとしてしまいます。

また、「牛をつないだ樁の木」では、人々のためにみんなが使える井戸を掘ろうと、大好きな甘いものも食べずにこつこつと資金を貯めた人力曳きの海蔵さんですが、いざ掘る段になって、病気に伏せている地主がそれを許してくれない。困っ

ている海蔵さんを見た地主の息子は、父が死んで私の代になったら掘るのを許してあげましょう、と言ってくれます。これを聞いた海蔵はつい地主が死ぬのを願ってしまいます。

人というのはそんなに強く正しいものではない。心の底には誰でもエゴを持っていて、思わぬときにそれが出てきてしまうものなのです。この誰でもエゴから離れられない、というのは、南吉の創作を考える上で非常に大切なキーワードだと思っています。

まず、このエゴというのは心理描写型の作品でテーマとなった不安や懐疑、その元である孤独と密接に関わっているということです。

不安や懐疑は幼児期のそれをテーマにした「家」という小説があるように、人にとっては物心付いたときから付きまといまいます。そして、思春期のある時期からその元である孤独というものに気付いていきます。しかし、自分の意思で何でもできるように思える大人になっても孤独は変わらない。ますます募ってくる人もいます。それはなぜかという、孤独の原因は人間のエゴにあるからなんだと、南吉は考えていたのです。

南吉が病で東京から帰郷し、ふるさとの人々からも、かつての恋人からも、両親からさえも受け入れられず、孤独に苦しんでいた時期、彼は日記にこう書いています。

人間の心を筍の皮をはぐようにはいでいて、その芯にエゴイズムがあるということを知る時われわれは生涯の一危機に達する。つまり人というものは皆究極に於いてエゴイストであるということを知るときわれわれは完全な孤独の中につきおとされるからである。

(昭和12年3月1日)

では、孤独から免れるために南吉はどうしようとしたかと言いますと、

しかしここでへたばってはいけない。ここを通りぬけてわれわれは自己犠牲と報いを求めない愛との築設に努めなければならない。こういう試練を経て来た後の愛はいかにこの世をすみ

よいものとするのであろう。

(昭和12年3月1日)

愛されるのを求めるのではなく、こちらから愛することで他者との関係を満たそう、ということです。

しかし、現実は厳しかったのです。とくに安城高等女学校に迎えられる直前、民間の飼料会社に勤めていた頃ですが、東京外語出という言わばエリートである自分の才能が認められず、社内での競争に汲々として、他人を思いやる余裕を全く無くしている自分に気付いてしまった南吉は、次第に考えを改めていきます。

人間は皆エゴイストである。常にはどんな美しい仮面をかむっていようと、ぎりぎり決着のところではエゴイストである。——ということをよく知っている人間ばかりがこの世を造つたらどんなに美しい世界が出来るだろう。自分はエゴイストではない、自分は正義の人間であると信じ込んでいる人間程恐ろしいものはない。かゝる人間が現代の多くの不幸を造っているのである。

人間に胃の腑と生殖器がある以上人間がエゴイストであることはやむをえない。人間が悪いのではないのである。

(昭和12年10月27日)

これ、そのまま「百姓の足、坊さんの足」の菊次と雲華寺の和尚に当てはまりませんか。これは民話的メルヘンが書かれる5年も前の日記ですが、その後もこういう考えは変わらず持っていたようで、昭和17年4月22日の日記にこう書いています。

ほんとうにものわかった人間は、俺は正しいのだぞというような顔をしてはいないものである。自分は申しわけのない、不正な存在であることを深く意識していて、そのためいくぶん悲しげな色がきつと顔にあらわれているものである。

(昭和17年4月22日)

昭和17年4月と言うと、まさに民話的メルヘンを書こうとしている時期です。これらの日記から、人間が本質的に持っているエゴというものに、いかに南吉がこだわっていたかが分かります。そして、同時に、ではどうすればいいのか、ということも知ることができます。つまり、自分の弱さ、エゴの深さを自覚し、謙虚に生きていくということです。まさに菊次の姿ですね。

その他の作品で見てもそうです。「おじいさんのランプ」の巳之助は、恩のある区長さんにあだなそうとしている自分の間違いに気づき、気付くことできっぱりとランプ屋を辞め、再び正しい道に戻っていきます。

「牛をつないだ樁の木」では、「人の死ぬのを待ち望んでいるのは悪いことだぞや」と母から叱られたことで、海蔵は、自分が目的にとらわれる余り、恐ろしい心になっていたことを気付きます。すると奇跡が起こります。自分のエゴを素直に認め、心から詫げる海蔵に、これまで欲に固まって生きてきた地主は、井戸を掘るのを認めるばかりか、「もし資金が足りなかったらいくらでも援助しよう」と言ってくれます。エゴを認める謙虚な気持ちが人を動かしたのです。

小さな出来事ですが、これは社会を美しく変えていく可能性であり、人と人が本当に心を通わし、孤独という闇から救われる希望の光なのです。

5. 現代へのメッセージ

さて、このように南吉の作品、とくに作家として自分の世界を確立してきた晩年の作品には、まず、他者と自分は別個の意識の世界にいて人間は本質的に孤独であるということ、そして、自分は自分で思うほど正しくない、弱くエゴに満ちた存在であるということ、この二つの、言わば人間についての真実を知るという体験が描かれています。そこにある孤独・不安・懐疑というのは正に「闇」ですが、同時にエゴを知り、謙虚になることで、誰もが美しく生きられる可能性を持つという「光」も描かれています。

この「闇」と「光」というのは、南吉が最後に書こうとした未完の絶筆である「天狗」という小説にはっきり書かれています。

「天狗」の冒頭部分で、主人公の画家が自分の絵について語っていますが、この画家を作家に、絵を童話に置き換えれば、そのまま南吉が自分のことを語っていることが分かります。

私は大げさな絵はかきません。つつましい絵をかきます。つつましい絵の中に半分の夢と半分の現実をつきませるのです。

(中略)

私は、蛍を見ると、自分の絵に似ていると思います。蛍をとりまく闇黒を現実にととるならば、蛍が、それをたよりにして生きている、あのかすかな青い火は、蛍の夢でなくて何でしょう。世の中に蛍に心をひかれる人があるうちは、私のようなものの描いた絵も、誰かに、静かに愛されてゆくだろうと思うのです……

「闇」、「闇黒」が現実で、「光」—この場合は「蛍の火」ですね—それが夢であり、自分は半分の夢と半分の現実をつきませるのだと言っています。この、現実という厳しさを恐れず、逃げずに描く。だけどそれだけじゃない。夢という可能性も忘れずに描く。どちらもきちんと描いているということに、現代において南吉童話を読む意味があるのではないか、と思っています。

「狐」

今、世の中の間人間関係について様々なことが問題にされていますが、その多くの場合において南吉童話は私たちに大切なことを教えてくれる気がします。例えば、最近、耳を疑うような幼児虐待のニュースが多いですね。幼い子ども二人をマンションに閉じ込めたまま死なせた母親のニュースなどは、聞いていると胸が苦しくなってきます。今、母親の愛が絶対とは言えない時代になってしまいました。ああいうニュースを聞くといつも思い出すのが、南吉が亡くなる2か月前に書いた「狐」です。

これは、この作品を最初に絵本にしてくれた長野ヒデ子さんの『狐』です。その長野さんが、講

演などで時々「狐」を取り上げてくださっているようです。

「狐」では、夜のお祭りから帰って来た主人公の文六ちゃんが、たどたどしくその日あったことを寝る前に報告するわけですが、お母さんがそれを面倒くさがるところか、とても楽しそうに聞いてくれるのです。それがとても自然で、いつもいつもこうしてくれているのだろうな、とよく分るのです。特別なことではないのだけど、こういう母と子の触れ合いをもっと大切にしくちやいけないと、長野さんはおっしゃるのですね。

このメッセージは、2007年にNHK名古屋放送局の「金とく」という番組で南吉を特集したときのテーマになって東海地方で放送されました。実によく出来た番組で、反響を呼んで結局全国放送になりました。長野ヒデ子さんの『狐』を通して南吉の世界に触れたという方は、とても多いようです。やはり、文学作品を読者の手元に届けるという意味では、絵本の力は大きいと思うわけですが、そうした方々から、よくお手紙を頂きます。それだけこの作品がテーマとした母と子のきずなが、今危機感を持ってとらえられているということなのでしょう。

その中のお一人で、絵本コーディネーターのこがようこさんという方が、御自身で出している「サマーサンタクロース」という手作り新聞を送ってくださいました。その中で、こう書かれています。

わたしは今こそ、現代に生きるおかあさんたちにこそ、この絵本を声に出して読んでほしいと願います。読んでもらった子どもたちは、これだけ自分は思われている、望まれた子どもであると感じるはずですよ。そして、おかあさんにとっても、自分もまた文六ちゃんのお母さんと同じ思いで、子どもを産み育てたと思ひ起こすことができるでしょう。そんな確認をさせてくれる本です。

「狐」では、文六ちゃんは夜に新しい下駄を下ろしたことで自分には狐が付いたんじゃないかと不安がります。普段は親切にしてくれる友達も、今

夜ばかりは怖がって誰も近付こうとしません。急に自分は独りぼっちになってしまったんじゃないかという不安に襲われます。南吉が「心理描写型」作品で繰り返し描いた孤独・不安・懐疑ですね。不安になった文六ちゃんは、母親に「もし僕が本当に狐になったらどうする？」と問います。

お母さんは、しんからおかしいように笑いだしました。

「ね、ね、ね、」

と文六ちゃんは、ちょっとてれくさいような顔をして、お母さんの胸を両手でぐんぐん押ししました。

「そうさね」と、お母さんはちょっと考えていてからいいました、「そしたら、もう、家におくわけにやいかないね」

文六ちゃんは、それをきくと、さびしい顔つきをしました。

「そしたら、どこへゆく？」

「^{からすねやま}鴉根山の方にゆけば、今でも狐がいるそうだから、そっちへゆくさ。」

「母ちゃんや父ちゃんは どうする？」

するとお母さんは、大人が子供をからかうときにするように、たいへんまじめな顔で、しかつべらしく、

「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かわいい文六が、狐になってしまったから、わたしたちもこの世に何のたのしみもなくなってしまったで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」

「父ちゃんも母ちゃんも狐になる？」

「そう、二人で、明日の晩げに下駄屋さんから新しい下駄を買って来て、いっしょに狐になるね。そうして、文六ちゃんの狐をつれて鴉根の方へゆきましょう。」

文六ちゃんは大きい眼をかがやかせて、

「鴉根って、西の方？」

「^{ならわ}成岩から西南の方の山だよ」

「深い山？」

「松の木が生えているところだよ」

「狐師はいない？」

「狐師って鉄砲打ちのことかい？山の中だか

らいるかも知れんね。」

「獵師が撃ちに来たら、母ちゃんどうしよう？」

「深い洞穴の中には行って三人で小さくなっていけば見つからないよ」

「でも、雪が降ると餌がなくなるでしょう。餌を拾いに出たとき獵師の犬に見つかったらどうしよう」

「そしたら、いっしょうけんめい走って逃げましょう」

「でも、父ちゃんや母ちゃんは速いでいいけど、僕は子供の狐だもん、おくれてしまうもん」

「父ちゃんと母ちゃんが両方から手をひっぱってあげるよ」

「そんなことをしてるうちに、犬がすぐうしろに来たら？」

お母さんはちょっと黙っていました。それから、ゆっくりいいました。もうしんからまじめな声でした。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆっくりいきましよう。」

「どうして？」

「犬は母ちゃんに噛みつくでしょう、そのうちに獵師が来て、母ちゃんをしばってゆくでしょう。その間に、坊やお父ちゃんは逃げてしまうのだよ。」

文六ちゃんはびっくりしてお母さんの顔をまじまじと見ました。

「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。そいじゃ、母ちゃんがなしになってしまうじゃないか。」

「でも、そうするよりしょうがないよ、母ちゃんはびっこをひきひきゆっくりゆくよ」

「いやだったら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじゃないか」

「でもそうするよりしょうがないよ、母ちゃんは、びっこをひきひきゆっくりゆっくり……」

「いやだったら、いやだったら、いやだったら！」

文六ちゃんはやめきたてながら、お母さんの胸にしがみつきました。涙がどっと流れて来ました。

お母さんも、ねまきのそででごっそり眼のふ

ちをふきました。そして文六ちゃんのはねとぼした、小さい枕を拾って、あたまの下にあてがってやりました。

母親は、どこまでいっても「私はあなたを守るわよ」ということをしっかり伝える。子どもはそれを何度も何度も確かめようとするわけです。やっぱり、親子のきずなが絶対のものではなくてきている現代では、こうやって確かめ合うことが必要になってきているんじゃないかなと、こがようこさんはおっしゃっていましたが、私も全く同感に思うのです。

南吉は昭和16年1月11日の日記にこう書いています。

愛されなかったので愛することを知らない。熱を加えられなかった物体がどうして温かくなりえよう。こうして、孤児は子供であるときも大人になってからも不幸である。

いま虐待事件を起こしている親を責めても仕方がないわけです。その親たちは、多分、子ども時代に「私は愛されてるんだ」と実感できる文六ちゃんのような体験を余りしてこなかったのだろうと思います。南吉の言う「愛されなかったので愛することを知らない」状態ですね。

でも南吉は、孤児—それは生母を亡くした自分も含めてかもしれませんが—のことを指してそう言っているのですが、今は両親がいてもそういう状態にある子が増えてきているんじゃないか、そうして育った子どもが大人になって親になっているんじゃないか、と思います。そう考えると、やはり南吉の「狐」はもっともっと読まれていい作品だ、それも親子で一緒に読んでほしい作品だと思うわけです。

次に今問題になっているのが、クレーマーとかモンスターペアレントだとか、相手の落ち度はいささかも許せないという不寛容な人たちが増えてきていることです。幸い、南吉記念館のお客様にそういう方はほとんどいらっしゃいませんが、皆さんの図書館ではどうでしょうか。

だいたい、クレーマーとかモンスター何々と言

われるような人たちは、自分のことは棚に上げていることが多いように思いますから、つまり自らのエゴには気が付かないか、目をつむっているわけです。

そうではなくて、南吉が昭和17年4月22日の日記に書いたように「自分は申しわけのない、不正な存在であることを深く意識」することができれば、自然に他人を許せるようになる、いえ、許さざるをえなくなります。

南吉は昭和17年7月4日の日記に、「何でもゆるすこと。何でもうけ入れること」とぼつんと一行、書いています。南吉自身がこの心境にまで達することができたかは分かりませんが、南吉がエゴの自覚の先に目指した、人の在り方というのは、これなのだと思います。

作品の中では、「牛をつないだ樁の木」の海蔵は地主の死を願ってしまうような自分の心の弱さ、恐ろしさを自覚したからこそ、欲の張った地主に対して「井戸のことは、もうお願いしません。またどこか、他の場所をさがすとします。ですから、あなたはどうぞ、死なないでください」と地主を地主のままに受け入れられました。

菊次も米を蹴散らした自分の過ちを素直に認め

られたからこそ、そっちだけ罰が当たらないで不公平だと不満に思っていた坊さんを「米を作る苦勞を知らないでしたのだから罰が当たらなくても当然だ」と許すことができたのだと、そう思います。

このように現代の問題に対して南吉童話が教えてくれることは、まだまだあります。賞味期限はまったく切れていない。むしろ、今こそ読んでいただきたい。子どもにも大人にも。是非、皆さんの図書館でも勧めていただきたいと思います。

この後、「参考図書紹介」で御紹介くださいますが、良い本も出ています。今日は触れられませんが、南吉の幼年童話などは一杯絵本になっています。これも短いながらよく出来たストーリーで、テーマも様々です。南吉の世界を凝縮したような小さな宝石です。是非手に取って見てください。

なんだか生誕100年という決算期を控えて、営業しているセールスマンみたいな話になりましたが、少しでも南吉という作家に関心を持っていただけたなら幸いです。

ありがとうございました。

(とおやま こうじ 新美南吉記念館学芸員)

「南吉童話の闇と光」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館所蔵

※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	国語四：はばたき. 下		光村図書出版 2005. 6	Y311-H192
2	新編新しい国語四年. 下		東京書籍 2005. 7	Y311-H180
3	小学国語4. 下		大阪書籍 2005. 6	Y311-H186
4	みんなと学ぶ小学校国語四年. 下		学校図書 2005. 7	Y311-H198
5	ひろがる言葉小学国語4. 下		教育出版 2005. 6	Y311-H174
6	ごんぎつね	新美南吉作 黒井健絵	偕成社 1986. 9	Y18-2604
7	ごんぎつね	新美南吉作 いもとようこ絵	金の星社 2005. 5	Y17-N05-H499
8	ごんぎつね	新美南吉作 かすや昌宏絵	あすなる書房 1998. 6	Y17-M99-19
9	ごんぎつね	新美南吉文 みたげんじろうえ	ポプラ社 昭和44	Y17-379
10	ごんぎつね	新美南吉作 遠藤てるよ絵	大日本図書 2005. 2	Y17-N05-H239
11	日本名作絵本 23 のらいぬ ごんぎつね	新美南吉文	ティビーエス・ブリタニカ 1993. 1	YU71-88 (本館)
12	さとのはる、やまのはる：他一編あめだま(新美南吉・幼年童話えほん；1)	新美南吉作 村上勉絵	チャイルド本社 2005. 4	Y17-N05-H371
13	こうし：他一編おかあさんたち(新美南吉・幼年童話えほん；2)	新美南吉作 かさいまり絵	チャイルド本社 2005. 5	Y17-N05-H478
14	でんでんむし：他一編こぞうさんのおぎょう(新美南吉・幼年童話えほん；3)	新美南吉作 村上豊絵	チャイルド本社 2005. 6	Y17-N05-H566
15	きのまつり(新美南吉・幼年童話えほん；4)	新美南吉作 岩本康之亮絵	チャイルド本社 2005. 7 (第3刷)	Y17-N05-H691
16	あかいろうそく：他一編かにのしょうばい(新美南吉・幼年童話えほん；5)	新美南吉作 くすはら順子絵	チャイルド本社 2005. 8	Y17-N05-H830
17	ひよりげた：他一編あし(新美南吉・幼年童話えほん；6)	新美南吉作 長谷川知子絵	チャイルド本社 2005. 9	Y17-N05-H944
18	おうさまとくつや：他一編げたにばける(新美南吉・幼年童話えほん；7)	新美南吉作 和歌山静子絵	チャイルド本社 2005. 10	Y17-N05-H1178
19	ながればし：他一編にひきのかえる(新美南吉・幼年童話えほん；8)	新美南吉作 渡辺有一絵	チャイルド本社 2005. 11	Y17-N05-H1237

南吉童話の闇と光

20	くまのこ：他一編きよねんのき（新美南吉・幼年童話えほん；9）	新美南吉作 よしざわけいこ絵	チャイルド本社 2005. 12	Y17-N05- H1413
21	こどものすきなかみさま：他一編きつねのおつかい（新美南吉・幼年童話えほん；10）	新美南吉作 いむらかずお絵	チャイルド本社 2006. 1 （第5刷）	Y17-N06-H72
22	てぶくろをかいに（新美南吉・幼年童話えほん；11）	新美南吉作 柿本幸造絵	チャイルド本社 2006. 2 （第5刷）	Y17-N06-H168
23	うまやのそばのなたね（新美南吉・幼年童話えほん；12）	新美南吉作 梅田俊作絵	チャイルド本社 2006. 3	Y17-N06-H336
24	うまやのそばのなたね	新美南吉作 かみやしん絵 保坂重政編	につけん教育出版社 2001. 12	Y17-N02-43
25	里の春、山の春	新美南吉作 石倉欣二絵	につけん教育出版社 2002. 3	Y17-N02-403
26	木の祭り	新美南吉作 司修絵	につけん教育出版社 2002. 10	Y17-N02-1154
27	あめだま	新美南吉作 長野ヒデ子絵	につけん教育出版社 2003. 4	Y17-N03-H425
28	ひろったらっぱ	新美南吉作 葉祥明絵	につけん教育出版社 2003. 8	Y17-N03-H877
29	子どものすきな神さま	新美南吉作 渡辺洋二絵	につけん教育出版社 2004. 5	Y17-N04-H627
30	がちょうのたんじょうび	新美南吉作 黒井健絵	につけん教育出版社 2005. 2	Y17-N05-H247
31	でんでんむしのかなしみ	新美南吉作 井上ゆかり絵	につけん教育出版社 2005. 5	Y17-N05-H596
32	でんでんむしのかなしみ	新美南吉作 かみやしん絵	大日本図書 1999. 7	Y8-M99-613
33	新美南吉童話大全		講談社 1989. 8	KH436-E69 （本館）
34	おじいさんのランプ（わくわく！名作童話館；6）	新美南吉著	日本図書センター 2006. 4	Y8-N06-H525
35	子どもと文学	石井桃子等著	中央公論社 1960	909-1583k （本館）
36	新美南吉童話集	新美南吉著	角川春樹事務所 2006. 11	KH436-H268 （本館）
37	校定新美南吉全集 第1巻～別巻2		大日本図書 1980. 6-1983. 9	KH436-88 ※
38	新美南吉30選	新美南吉著	春陽堂書店 2009. 2	Y8-N09-J360
39	名作童話を読む 未明・賢治・南吉	宮川健郎編著	春陽堂書店 2010. 5	KG411-J22 ※
40	久助君の話（てのり文庫）	新美南吉作 遠藤てるよ絵	大日本図書 1989. 3	Y8-6135

41	おじいさんのランプ (てのり文庫)	新美南吉作 遠藤てるよ絵	大日本図書 1988. 9	Y8-5666
42	ごんぎつね (てのり文庫)	新美南吉作 遠藤てるよ絵	大日本図書 1988. 7	Y8-5466
43	花をうめる (てのり文庫)	新美南吉作 遠藤てるよ絵	大日本図書 1989. 4	Y8-6297
44	和太郎さんと牛 (てのり文庫)	新美南吉作 遠藤てるよ絵	大日本図書 1989. 2	Y8-6058
45	ごん狐 (新美南吉童話傑作選)	新美南吉作 石倉欣二絵	小峰書店 2004. 6	Y8-N04-H620
46	花のき村と盗人たち (新美南吉童話傑作選)	新美南吉作 長野ヒテ子絵	小峰書店 2004. 6	Y8-N04-H621
47	おじいさんのランプ (新美南吉童話傑作選)	新美南吉作 篠崎三朗絵	小峰書店 2004. 6	Y8-N04-H622
48	花をうめる (新美南吉童話傑作選)	新美南吉作 杉浦範茂絵	小峰書店 2004. 7	Y8-N04-H720
49	赤いろうそく (新美南吉童話傑作選)	新美南吉作 太田大八絵	小峰書店 2004. 7	Y8-N04-H721
50	子どものすきな神さま (新美南吉童話傑作選)	新美南吉作 二俣英五郎絵	小峰書店 2004. 7	Y8-N04-H722
51	がちょうのたんじょうび (新美南吉童話傑作選)	新美南吉作 渡辺洋二絵	小峰書店 2004. 7	Y8-N04-H723
52	Gon the fox	Nankichi Niimi 著 Yasuko Takaku 訳 Shiro Ishiguro 絵	Bungeisha 2010. 7	Y18-B540
53	手ぶくろを買いに	新美南吉作 黒井健絵	偕成社 1988. 3	Y18-3108
54	てぶくろをかいに	新美南吉作 いもとようこ絵	金の星社 2005. 7	Y17-N05-H911
55	てぶくろをかいに	新美南吉作 若山憲絵	ポプラ社 昭和45	Y17-3371
56	手毬と鉢の子：良寛物語	新美南吉著 清原齊畫	学習社 1941. 11	Y8-N03-H906
57	ごん狐 『赤い鳥 (復刻版)』昭和7年1月号)		日本近代文学館 1968	Z13-890 ※
58	新児童文化		有光社 1940-1942	Z32-B249
59	おぢいさんのランプ	新美南吉著 棟方志功絵	有光社 昭和17	児952-23
60	牛をつないだ樁の木	新美南吉著 大沢昌助絵	大和書房 昭和18	児971-66
61	花のき村と盗人たち	新美南吉著 谷中安規絵	帝国教育会出版部 昭和18	児952-35-(6)

南吉童話の闇と光

62	新美南吉童話論：自己放棄者の到達	佐藤通雅著	アリス館牧新社 1980. 9 改訂版	KG582-123 ※
63	特集：50年後の新美南吉 『日本児童文学』平成5年3月	日本児童文学者協会編	日本児童文学者協会 1955-	Z13-450 ※
64	新美南吉の世界	浜野卓也著	新評論 1973	KG582-29 ※
65	狐	新美南吉作 長野ヒデ子絵	偕成社 1999	Y17-M99-648
66	Le petit renard Gon	texte, Nankichi Niimi ; illustrations, Ken Kuroi ; traduction Helene Morita	Editions Grandir c1991	Y19-A22
67	Des gants pour mon renardeau	Nankichi Niimi, auteur ; Ken Kuroi, illustrateur ; Helene Morita, traductrice	Editions Grandir c1992	Y18-A230
68	花木村和盗賊们	新美南吉著 周龙梅, 彭懿译	贵州人民出版社 2008. 6	アジア言語 OPAC Y9-AZ5240
69	去年的树	新美南吉著 周龙梅, 彭懿译	贵州人民出版社 2008. 6	アジア言語 OPAC Y9-AZ5242
70	금빛여우	니이미 난키치 지음 ; 조양옥 옮김	현대문학 2006. 6	アジア言語 OPAC Y9-AZ5135
71	꽃나무마을에 간 도둑들	니이미 난키치 글 ; 유기송 그림 ; 전아현 옮김	계수나무 2005. 7	アジア言語 OPAC Y9-AZ5028
72	小狐狸买手套	新美南吉著 周龙梅, 彭懿译	贵州人民出版社 2008. 6	アジア言語 OPAC Y9-AZ5241

レジュメ

金子みすゞ—読みものとしての童謡—

藤本 恵

童謡は、現代児童文学の中ではマイナーなジャンルです。にもかかわらず、金子みすゞの童謡は消費し続けられています。みすゞ童謡の特徴や魅力を紹介しつつ、子どもが、童謡を歌うのではなく詩として読むことの意味やおもしろさ、子どものための詩というジャンルの可能性を探ってみたいと思います。

今日の内容

1. みすゞの生涯と、その伝説化 ……資料1・2
2. 国語教科書の中のみすゞ ……資料3・4
3. みすゞ童謡の読まれ方と、その問題点……資料5
4. 童謡をもっと楽しむために ……資料6

金子みすゞ

—読みものとしての童謡—

藤本 恵



今、御紹介に預かりましたように、私は藤本と申します。皆さん御存じかどうか分からないのですが、都留文科大学、山梨県の都留市にある市立大学の教員です。都留市は大月から富士急行線で20分ほどのところにあります。車で30分くらい行くと、もう富士山の登山口に着くというようなところです。普段はそこで、小学校の教員を目指す学生に対して講義をしています。その中には学校司書教諭の免許を取ったり、あるいは教員よりもむしろ司書に憧れているという学生がいたりします。今日ここで司書の皆さんにお話をすると、学生にすぐうらやましがられました。今日はどうぞよろしく願いいたします。

最初に講座で使用する資料を確認したいと思いますので、お手元に御用意いただけますでしょうか。A4版を横にして見る形で、真ん中に「金子みすゞ—読みものとしての童謡—」とタイトルを入れた7枚です。まず表紙から見ていきたいと思います。

表紙には、「今日の内容」を目次のような形で示しています。この順番に従い話を進めていくつもりです。また、資料の番号を、大体このように対応していますということで示していますので、参考になさってください。1、2、3、4と内容を分けておりますので、2が終わったところで休憩を取れるといいかなと思っています。

皆さんがどのぐらい金子みすゞのことを御存じか分からなかったのですが、配布された講義内容を見たり、国際子ども図書館でこの講義を受けることになる前から金子みすゞのことを知っている方はどのくらいおられるでしょうか。挙手していただいてもいいですか…。全員。すごいです。図書館の方だから当たり前なのかもしれません。

んね。ともあれ、最初に金子みすゞの紹介から入りたいと思っております。それから徐々に、みすゞ童謡の読まれ方や読み方、これからどうしようというような話に進んでまいります。

1. みすゞの生涯と、その伝説化

資料1（金子みすゞの生涯と伝説化）を御覧ください。彼女が女学校の頃、10代半ばくらいの写真を右下に入れてあります。みすゞの写真は何枚か残っているのですが、中でも私が一番気に入っている写真を載せました。きゅっと、カメラをしっかり見つめる強い視線と、右手に本を持っているのが印象的です。

生まれたのは明治36（1903）年4月ですから、もう100年以上前のことになります。出身地は山口県の仙崎というところです。山口県の北の方で、日本海に面した漁師町に生まれています。先ほどざっと受講者名簿を拝見したところ、山口県からいらした方はいらっしやらないようでした。ちなみに私は、みすゞと同じ山口県出身ですが、瀬戸内海の方で風土が全然違います。同じ山口県でも、仙崎のある日本海側は寒くて雪も降るので、瀬戸内の方は御存じのように暖かい気候です。仙崎を最初に訪れたときは、ちょっとびっくりいたしました。

みすゞの父と母は資料に名前が出ていますとおりです（父金子庄之助、母ミチ）。家族はこの他に、祖母と兄がいました。みすゞ2歳のときに弟正祐が生まれ、この頃、父庄之助は日本を離れます。下関にあった上山文英堂書店の支店長として中国に渡ったのです。この上山文英堂書店というのは、みすゞの母ミチの妹フジの嫁ぎ先に当たります。その縁でみすゞの父親は支店長として中国に

資料1～金子みすゞの生涯と伝説化

*年譜は、『新装版金子みすゞ全集』（JULA 出版局 S59・8所収）より抜粋

写真は、『別冊太陽 日本のこころ122号 金子みすゞ生誕100年』（平凡社 平15・4）より抜粋

●年譜●

明治36年(一九〇三)	0歳	4月11日、山口県大津郡仙崎通村大字瀬戸崎浦七百九十番屋敷にて、父金子庄之助、母ミチの長女として生まれる。本名テル。
38年(一九〇五)	2歳	2月23日、弟正祐生まれる。 父庄之助が、下関の上山文英堂書店支店長として清国に渡ったのは、この年か。
39年(一九〇六)	3歳	2月10日、父庄之助、清国營口にて死去。金子家は、仙崎にて書店を営む。
40年(一九〇七)	4歳	1月19日、弟正祐、上山文英堂書店店主上山松蔵・フジ夫妻と養子縁組。
41年(一九〇八)	5歳	4月1日、兄堅助、瀬戸崎尋常小学校入学。
43年(一九一〇)	7歳	2月28日、瀬戸崎浦八百六十一番屋敷に本籍変更。 4月1日、瀬戸崎尋常小学校入学。
大正5年(一九一六)	13歳	3月20日、瀬戸崎尋常小学校卒業。 4月11日、郡立大津高等女学校入学。5月、校友誌『ミサヲ』第3号に「ゆき」発表。
6年(一九一七)	14歳	5月、『ミサヲ』第4号に「我が家の庭」。
7年(一九一八)	15歳	5月、『ミサヲ』第5号に「さみだれ」。 11月8日、上山フジ死去。
8年(一九一九)	16歳	5月、『ミサヲ』第六号に「社会見学の記」。 8月26日、母ミチ、上山松蔵と再婚。金子家は、祖母ウメ、兄堅助、テルの三人となる。
9年(一九二〇)	17歳	3月24日、郡立大津高等女学校卒業。以後、下関の母のもとに度々でかけている。9年から12年の間に、兄堅助、大島チウサと結婚。
12年(一九二三)	20歳	5月3日、下関市黒川写真館にて写真撮影。4月末から5月初ごろに下関の母のもとに移り住み、間もなく西之端町商品館内の上山文英堂書店支店で働き始める。 6月初ころより、ペンネーム「みすゞ」で童謡を書き、雑誌に投稿を始める。雑誌『童話』9月号に「お魚」「打出の小槌」、『婦人倶楽部』9月号に「芝居小屋」、『婦人画報』9月号に「おとむらひ」、『金の星』9月号に「八百屋のお鳩」を発表。『金の星』を除く三誌は、西條八十の選。以後、昭和3年までに、五十六編を発表する。
13年(一九二四)	21歳	4月、西條八十渡仏。
14年(一九二五)	22歳	この年、童謡詩人会発足。 佐藤義美、島田忠夫、渡辺増三等の『曼珠沙華』に参加。自選詩集『琅玕集』を始める。
15年(一九二六)	23歳	2月、上山文英堂書店で働いていた宮本啓喜と結婚し、下関市大字関後地村一七二四に新居をもつ。後に上新地に転居。 3月、西條八十帰国。 童謡詩人会に入会。7月発行の『日本童謡集』（童謡詩人会編）に「大漁」「お魚」の二編がのる。雑誌『童話』は、7月号で廃刊となる。 11月14日、長女ふさえ生まれる。
昭和2年(一九二七)	24歳	夏、下関駅で西條八十に会う。 8月12日、祖母金子ウメ死去。 10月、熊本市の宮本家に里帰りする。11月14日、下関に戻る。
3年(一九二八)	25歳	3月、島田忠夫、商品館にみすゞを訪ねるも、上新地の自宅に病臥して会えず。 11月号の『燭台』に「日の光」、『愛誦』に「七夕のころ」を発表。これ以後発表作なし。
4年(一九二九)	26歳	娘ふさえの言葉を採集する『南京玉』を書き始める。
5年(一九三〇)		2月9日、『南京玉』止む。 2月27日、宮本啓喜と離婚。3月9日、下関市亀山八幡宮隣り三好写真館にて、最後の写真を写す。3月10日、上山文英堂書店内で死去。享年満二十六歳。



<女学校時代のみすゞ>

渡ることになるのですが、実はその中国で亡くなっています。金子みすゞの童謡と生涯が発見されてからずっと他殺だと言われてきて、それが金子みすゞという人の悲劇性を高めていたのですが、最近になり他殺ではなかったことが分かりました。これも御存じの方があるかもしれません。『金子みすゞふたたび』という本が出ました。みすゞの父親がどのようにして亡くなったのかを今野勉さんという方が詳細に調査されています。このように、まだ生涯に関して調べが進んでいるような段階にある人で、父親は病死だったと訂正されたのも最近のことです。いずれにしろ、みすゞの大変幼い頃に父親が亡くなったことに変わりはありません。

残された家族は仙崎で書店を営みます。更に少し複雑な事情がありまして、弟の正祐が、書店を経営していた、みすゞにとっては叔父と叔母に当たる夫婦（松蔵とフジ）の養子になります。これで、仙崎に住んでいる金子家は母親のミチと祖母ウメ、兄堅助、そしてみすゞ（本名テル）ということになりました。これがみすゞの幼少時代の家族です。

その後小学校に入学し、それから高等女学校へ進みます。高等女学校とはどういうものか皆さん御存じでしょうか。今の学校で一番近いのは恐らく私立の中高一貫制の女子高で、そのようなものを想像していただくといいかと思います。この高等女学校卒業が彼女の最終学歴になります。高卒かと思われるかもしれませんが、当時女学校に通えた人というのは非常に少なかったのです。現在の大学進学率は5割ぐらいであるのに対して、この頃高等女学校に通えた女性は1割程度です。ですから、みすゞは経済的にも家族の理解にも恵まれていたと、この時点では言っているのではないかと思います。

高等女学校を卒業する頃、下関の上山家に嫁いでいた叔母のフジが亡くなります。このことがみすゞの生涯を変えていくことにもなります。松蔵がフジの代わりにミチを妻にするからです。ミチは妹の後妻に入ったということになります。「うそー」と思われるかもしれませんが、これも戦前には家を維持していくためになされたことです。

これでみすゞも母親を介して下関と縁が出来ることになります。みすゞは女学校を卒業して、下関に出掛けるようになりました。20歳の頃には下関に移り住み、上山文英堂書店の支店で店員として働き始めます。

ここでみすゞにとって良かったこととして、店員をしながら空いた時間に好きなだけ本が読めたことを挙げられます。当時は折しも児童文学、特に童話・童謡の大ブームが起こっている時期でした。恐らく一番有名なのが雑誌『赤い鳥』です。この雑誌が大正7（1918）年に創刊されて軌道に乗り、空前、そして恐らく絶後だと私は思っているのですが、童話・童謡ブームが起こります。『赤い鳥』の他にも『童話』や『金の星』という童話・童謡の専門誌が次々に創刊されていきます。これらにはそれぞれ専属の詩人がいました。例えば『赤い鳥』には北原白秋、『童話』には西條八十、『金の星』には野口雨情、というように。これらの雑誌を中心に、童話・童謡運動が展開され、今でも歌われているような童謡がたくさん作られました。

北原白秋の童謡だと、皆さんどのような歌を御存じでしょうか。童謡は作者の名前と歌が結び付きにくいジャンルだと思うのですが、「ゆりかごの歌」とか「この道」は白秋が作者です。西條八十だと「かたたたき」。『金の星』の野口雨情だと、「七つの子」が一番有名でしょうか。そういう童謡が生まれていきます。

みすゞにとって大きかったのは、これらの雑誌ではプロの詩人たちが童謡を書いているだけでなく、読者の童謡も募集していたことです。みすゞも刺激を受けたのでしょうか。自分で書いた童謡を雑誌に投稿し始めます。一番初めに創刊されたのは『赤い鳥』で、後続の雑誌として『金の星』や『童話』はありました。ちなみに『赤い鳥』を創刊した鈴木三重吉は、こういう後続の雑誌を、自分が起こしたブームに乗った「猿真似雑誌」だなどと言っていたのです。ですが、みすゞはなぜか最初に投稿するとき、『赤い鳥』ではなく、『童話』と『金の星』を選んでいきます。恐らく投稿詩人たちは、この雑誌にどういう詩人が書いているか、どういう作曲家が付いているか、といった好みに従って雑誌を選んだものと思われる。み

すゞはこの二つを選び、投稿してすぐに取り上げられます。例えば『金の星』だと、「八百屋のお鳩」。作者名は「下関市金子すゞ」となっていますが、これは「みすゞ」の誤植でしょうか。このように投稿したものが童謡欄に取り上げられていきます。

それから『童話』の方はすごく大きくみすゞを扱っています。見開き1ページです。最初の投稿なのに、「お魚」と「打出の小槌」の2作品が、見開きを使って挿絵入りで紹介されています。破格の取り上げ方だったと言っていいと思います。そのせいもあってでしょうか、みすゞは『童話』読

者の童謡を選んでいた西條八十を先生として慕うようになっていきます。

このようにして彼女の詩人歴は始まりました。注意していただきたいのは、今ここに来てくださっている皆さん全員が御存じであるぐらい有名なみすゞが、実はプロの詩人ではなかったということです。詩を書いてお金をもらって生活を立てていた人ではありません。生涯ずっと投稿詩人でした。雑誌に投稿して、それが取り上げられれば活字になるという立場にあった人なのです。

ここで、この頃の童話・童謡ブームがどうい

資料2～大正期の童話・童謡ブーム

A 雑誌『童話』通信欄

①私は今受験準備中で苦しめられておりますが、其苦痛を、童話の綺麗な気持ちのよい筆の力で慰められてゐるのです。どうぞ大好きな、かあいらしい皆さんと、遊戯室で一しよに遊ばせて下さい。(鈴木基 大9・5)

②私は紺の前だれかけの商人です。私の頭は毎日お金儲けのことばかりで毛虫のやうになつてゐます。けれど童話が、私に新しい力を与えてくれます。私は甘いお乳をのむ様にこの清新な雑誌をむさぼり読むのです。私はその時は幸福を感じます。(山田月草 大11・6)

③現代の大人がもつと真面目に童話や童謡を読んでいゝと考へます。「童話」の童謡欄につどふ人々を最もなつかしく思ひます。(原つねを 大正13・12)

④私は今三越の寄宿舎にゐるのです。(中略)夜、ひとりて読書室などにゐると、遠い故郷のことなどが思い出されてひとりて、涙ぐましくなつて来ます。さういふ時には「童話」(中略)をよんで慰められてゐる孤独なさみしい少年です。(松野とし光 大15・1)

B 関英雄「大正期童謡と西条八十」(『日本童謡』昭45・12)

雑誌『赤い鳥』の創刊(大正七年)に始まる大正期の新童謡運動は、日本に初めて児童文学の黄金時代を現出した。児童文学を語るものは、すべて、一どはこの時代をふり返らねばならない。

この期の芸術的児童文学の主潮は、いわゆる“童心主義”であり、“童心文学”だが、その童心文学の本命は、童話よりもむしろ童謡にあった、とかえりみて確信できる。この空前にして、多分絶後といえるだろう童謡の花園時代をつくった、北原白秋、西条八十、野口雨情の三人の代表的詩人の中で、少年時代のわたしは、八十の童謡に最も多く親しみ、その作品の心底からのファンのひとりだった。というのは、小学校上級から、小学校卒業後の二、三年に至る間に、わたしの愛読していた雑誌『童話』の巻頭に、八十の新作童謡が発表されていたからだ。(中略)八十が選者をしていた雑誌『童話』の投稿童謡欄の作品には八十に影響された感傷主義的作風の童謡が多く、のちに一家を成した佐藤義美をはじめ、平林武雄や天折した渡辺増三、金子みすゞ、鹿山映二郎ほか雲のご

とく集まって、『赤い鳥』の投稿童謡欄とはちがう魅力で青少年詩人たちの道場となっていた。

C 和田北斗「童謡を書くということ 『童話』童謡投稿欄と西条八十」(『リテラシー史研究』第二号 平21・1)

『童話』の投稿欄を見ると、同時代の若き人々にとって、八十の童謡は、書き手としての自らの未来を見出し得るものであり、それゆえに『童話』投稿欄にはこれほど多くの人々が集まったと考えられるだろう。(中略)「童話」投書会」を結成したというような読者の動きは通信欄などにたびたび現れている。小学生の投稿者たちは教師の指導の下、学校を媒介に創作することができたが、そのような指導システムに属していないティーンエイジャー以上の投稿家たちにとっては、か細いネットワークであっても、創作を続けるうえでは重要な場であつただろう。大正期にメジャーな童謡作家が雑誌で新作童謡を発表するということは、読者のネットワークやコミュニティに刺激を与えることでもあつたのである。(中略)大人たちの創作・投稿意欲に、雑誌が支えられたからこそ、大正期の童謡は短期間に多くの傑作を生み出したとも言えるのである。

D 西条八十『現代童謡講話』(新潮社 大13・7)

読者の側から云へば、最も優れた童謡とは、単に児童が誦して興味あるばかりでなく、その親たる成人が誦して見ても、どこか或る深き啓示を受くるが如き作品を意味するのである。さうしてまた一方作者の側から云へば、その謡は単に児童を欣ばしめるのみならず、どこまでも作者の個性がはつきりと印象されたものでなければ、而して作者の芸術的道念を満足させるものでなければならぬ。

これを要するに、童謡は遂に詩でなければならぬ。詩の中に偶々発見されるところの、児童にも解し易い作品、——それぞ曇にも述べたやうに真の意義の童謡でなければならぬ。

これを要するに、私たち詩人が童謡制作の目的は、従来の児童教育に於ける唱歌なるものが、或は単に教化のため、又は知識普及のため等、主として所謂「手段としての童謡」であつたことに慚らず、芸術的香気ある歌謡、——即ち詩を直接に児童教育の上に働かさんとするに在る。

*引用は、『西条八十全集 第十四巻 童謡・民謡論』(国書刊行会 平5・7)による。

思いますので、資料2（大正期の童話・童謡ブーム）を御覧ください。そこにA、B、C、Dと四つ挙げています。A（雑誌『童話』通信欄）に挙げましたのは、『童話』の読者投稿欄で、『童話』という雑誌の読者層が分かる資料です。例えば①は鈴木君という人で、「私は今、受験勉強中で苦しめられているのだけれども、それを童話で慰められている」というようなことを書いています。②山田さん、これペンネームだと思いますが、「私は商人です」と自己紹介して、童話を読むことで新しい力を得ていると書いておられます。③の方もそうですね、「現代の大人がもっと真面目に童話や童謡を読んでもいいじゃないか」と主張しています。④の方は「今自分は三越（デパート）の寄宿舎にいる」と書いています。三越の店員さんだったのでしょうか。そういうような読者の状況が推測できます。

受験準備中、商人や三越の寄宿舎と言っていることから分かりますように、読者は子どもだけではなかったのです。むしろ大人たち。みすゞが童謡を書き始めたのは20歳くらいでしたが、ちょうど20歳前後の若者たちによって、このころの童話・童謡は支えられていました。投稿者も若い人が多かったと思います。大正時代の児童文学ブームというのは、文学史の中でも日本史の中でもよく取り上げられますが、一面こんなふうに若者たちの文化であったと言えます。

投稿を始めたみすゞが選んだ雑誌は『童話』でした。では、その『童話』は他の雑誌に比べてどういう特徴があったのかを少し御紹介したいと思います。続けて資料2のB（関英雄「大正期童謡と西條八十」（『日本童謡』昭45・12））を御覧ください。これはリアルタイムで大正時代の童話・童謡ブームを経験し、後に児童文学の研究者、作者になられた関英雄さんという方が書かれた文章です。簡単に御紹介しますと、まず雑誌『赤い鳥』によって大正時代に童話・童謡ブームが起こったということが書かれています。それから北原白秋とか西條八十、野口雨情の名前が出てきます。少年時代、この方は西條八十の童謡が最も好きで、ずっと雑誌『童話』を愛読していた。『童話』の中の主な投稿作家、投稿詩人として名前が挙げられ

ている中に、金子みすゞの名前があるのがお分かりでしょうか。このような投稿作家、投稿詩人たちが雑誌『童話』には雲のように集まり、『赤い鳥』の童謡欄とは違う魅力で、青少年の詩人たちの道場となっていたというところがポイントだと思います。雑誌『童話』は他の雑誌に比べて、こういう若い投稿詩人たちを育てることに熱心であったようです。そういうところに目を付けて、みすゞも童謡を投稿し始めたと言っているのではないかと思います。

資料C（和田北斗「童謡を書くということ 『童話』童謡投稿欄と西條八十」（『リテラシー史研究』平21・1））も、やはり『童話』がティーンエイジャー以上の投稿者たちにとって重要な場だったということ、それから、大人たちの創作意欲に支えられて大正時代の童謡には傑作が生まれたのだということ述べています。

資料D（西條八十『現代童謡講話』（新潮社 大13.7））は、少し古い文章で読みにくいかと心配しながら持ってきました。読んでみると、選者であった西條八十自身も、童謡というのは成人が読んでも深い啓示を受けるような作品が良いのだ、作者の理想を満足させるものでなければならない、と言っています。

このように、私たちが今考える童謡と当時のブームの中の童謡は少し異なっていたと思うのです。今童謡と言うと、恐らくNHKの「みんなのうた」で流れているような、子どもが歌うための童謡が頭に浮かんでくると思います。それとは少し違って、西條八十が言っているように、童謡が大人のための詩でもあったということ。もちろん作曲された童謡も多いのですが、先ほど御紹介しましたように、雑誌に載った投稿童謡は作曲を前提にはしていません。そういう意味でも、読むもの、詩であったということ。むしろ子どもよりも大人が楽しむもの、自分で作り、口ずさんだりして楽しむものだったということ、少し頭に置いていただくとよいかなと思います。

本来、童謡というのは子どものために作られるべきもの、子どもを楽しませるべきものであるのに、このように大人たちが占有したことは、戦後ものすごく批判されます。子ども読者の実情を無

視したものだと言われたりもするのですが、一面では大人が真剣に童話や童謡に取り組んだからこそ、よいものが生まれ、みすゞのような詩人も生まれてきたと言えるのかなと思います。

少し話がそれましたが、こうしてみすゞは20歳前後の頃に詩人歴をスタートさせています。年譜に戻ります。しばらく書店員をしながら詩を書いていくのですが、結婚の時期が来ます。23歳のとき、書店で働いていた宮本啓喜と結婚します。これはみすゞが積極的に望んだわけではなく、当時としてはよくあったことで、家を維持するための結婚でした。このことは皆さん御存じかもしれませんが、あまり幸せな結果にはなりません。ともあれ結婚し、しばらくは童謡も書きます。雑誌だけではなく『日本童謡集』（童謡詩人会編）など単行本の中でも、みすゞの詩が紹介されるようになっていきます。それから娘が生まれたり、師であった西條八十に面会したりという出来事があります。

年譜の25歳のところを御覧ください。島田忠夫さんという人物一雑誌『童話』の投稿仲間だった青年です—が、わざわざ下関にみすゞを訪ねています。ところが、みすゞは自宅に病臥していて会えなかったとあります。これ、病気とあるのは、実は淋病でした。このことは伏せられていたり、あまり研究しない方がいいと言う方もいらっしゃいます。今この病名を聞くと、ちょっとぎょっとすると思うのですが、日本の国民病と言われた時期もあったくらいの病です。みすゞ自身が華やかな恋愛歴を持っていてこうなったというわけではありません。先ほど幸せな結婚にはなりませんと申しましたが、夫が下関にあった遊郭に通う人だったのです。当時は公娼制度というのがあり、男性が遊郭で女性を買うことは、信じられないことですが、公に認められていました。その一方で姦通罪というものもありまして、結婚し夫を持つ女性が、他の男性と性的な関係を持つと、相手の男性と共に刑事的に罰せられたのです。そのような法律、あるいは社会制度がありました。ですから、みすゞに華やかな男性経験があったというわけではなくて、夫が持ってきた病気をうつされたということになります。そのようなこともあり

まして、夫婦仲はあまり良くなかったのです。口論の果てでしょうか、夫に詩作、童謡を書くことを禁じられています。それから、島田忠夫さんのような投稿仲間と文通することも禁じられたのです。

それで、26歳の頃には自分で童謡を書く代わりに、自分のではなく、幼い娘が折々つぶやく詩のような言葉を集めて、冊子『南京玉』を作ったりしています。

そして昭和5（1930）年、とうとう夫と離婚。離婚のときに娘ふさえをどちらが引き取るかということで、親権をめぐるもめています。その最中の3月10日に、実家と言っていいでしょう、実の母の嫁ぎ先である書店内で死去しました。死因は、病気ではなく自殺でした。芥川龍之介と同じ睡眠薬を飲んで亡くなったと言われていました。朝からこういうドロドロした話になってしまっすみません。自殺した理由はいろいろに言われていて、今、私は断言することができません。皆さんもそれぞれにお考えになるところがあるかもしれませんが、自殺の理由は断言できませんが、みすゞの人生をこうやって見ていくと、どう言い繕ってみても、幸せだとは言えなかったような気が私にはしています。

ただし、語弊があるかもしれませんが思い切って言ってしまうと、みすゞがした家のための結婚とか、夫が遊郭で遊んで病気をうつされたことは、当時の女性にとっては割にありふれた出来事、ありふれた不幸だという気がいたします。みすゞが他の人と違い、ありふれていなかったのは、詩を書いたことだと私は思います。つらい生活の中で童話・童謡ブームを利用し、詩を書くことができた。その点が他の女性と違ったところだと考えています。最後まで生ききれなくて亡くなってしまったのは非常に残念ではあるのですが、詩を書きそれが今残っているということ。これが彼女の最大の特性です。

みすゞは若くして亡くなり、プロの詩人でもありませんでした。全集も出ていませんので、しばらく忘れられたようになります。ただ、細々と語り継がれるのです。例えば昭和の初めに出了子ども向けの文庫や『日本童謡集』などの本で、み

すゞを知っていた人たちが紹介していきます。あるいは、みすゞの童謡仲間が戦後になってから詩集を編んだりして、細々と紹介をされて生き残り、知っている人は知っている、そういう詩人であったと思います。

一気に金子みすゞが有名になるのは、戦後しばらく経ってからです。矢崎節夫さんという方が、金子みすゞの詩、それから人物に非常にこだわりまして、十数年間探し求めます。その結果、当時まだ生きていた弟正祐に巡り会い、みすゞが書き残した詩を発見して、全集を出します。1980年代のことです。みすゞが童謡を書き残した3冊の手帳を、昭和59（1984）年2月に3冊版の全集（『金子みすゞ全集』）という形で出しました。最初、水色の表紙の限定版を出していて、矢崎さんと出版を引き受けたJULA出版局は、どれくらい売れるか自信がなかったのだと思います。その限定版の反響がとても大きかったので、同年8月に白い表紙の新装版が出ました。

どちらも入っている詩は全く同じです。でも、最初の限定版には「思ひでの記」という別冊が付いていて、そうそうたるメンバーが文章を寄せています。与田準一さんに始まり、多分皆さんも御存じですよ、まど・みちおさん、先ほど紹介した関英雄さん、みすゞの弟の上山正祐さん…。限定版は部数が限られていたので、私も持っていません。今日、皆さんにお見せしているのは、国立国会図書館東京本館から持って来ていただいたものです。多くの人が手にできる新装版には、この「思ひでの記」ではなくて、矢崎さんがまとめられた「金子みすゞノート」という、みすゞの生涯などを紹介した別冊が付いています。

その頃、本当に全集の売れ行きが良かったのでしょう。こういう選集（『わたしと小鳥とすずと』JULA出版局 昭59.3）も出ます。これは今でも新しい版になっていて、本屋さんなどで手に取れると思います。1980年代にこういうものが出ました。小学生だった私は、瀬戸内の小さい町でこれを最初に手に取ったときのことを覚えています。当時小学校5年生ぐらいだったでしょうか。小さい町の書店でも、山口県の詩人ということで紹介されていたのだと思います。こうして現代を生き

る私たちにみすゞの童謡が広く紹介されるようになっていきました。

90年代に入りますと、これも矢崎さんの労作『童謡詩人金子みすゞの生涯』という評伝が出ます。新聞で紹介されたりもして、金子みすゞブームが起きました。今では町おこしの材料にも使われていて、仙崎の大通りを歩くと、みすゞの詩があちこちの商店の扉、窓などに貼られています。今では電話ボックスなんてあまり使わないとは思っていますが、仙崎の町で電話ボックスに入ると、途端にみすゞの童謡にメロディーが付いたものがタララーと流れてきます。付箋やノート、鉛筆などたくさんみすゞグッズがあり、そういうふうにもみすゞ自身は想像もできなかったような広がり方もしています。

2. 国語教科書の中のみすゞ

ですが、何よりみすゞの詩の普及に力があつたのは、国語の教科書だと私は思っています。資料3（みすゞの童謡）を御覧ください。

ここには後半読んでいこうと思っているみすゞの童謡を幾つか挙げています。このうち「私と小鳥と鈴と」、「大漁」、「星とたんぼぼ」、「不思議」が国語教科書に載った作品です。詩の後にそれぞれ教科書会社の名前を記載しています。③とか⑤とあるのは、学年を表わしています。また、平成何年から教科書に採用されたかを御参考までに記してあります。

教科書ってすごいですね。平成8（1996）年から教科書に採られるようになり、みすゞの詩は爆発的に広がっていきます。先日、小学校の図書室の司書さんに、最近の子どもの読書はどうですかと聞いてみました。最初は「まあ、あまり読みませんよね」みたいないつもの会話だったので、読むとしたらどんなものですかと重ねて聞くと、ディズニーや絵が付いているものと言われました。それも予想の範囲内ですよ。絵が主役になっているもの。それから、教科書に載っているものを子どもたちは学校の図書室にやって来て読むというのです。活字好きの私にとって、これは意外でした。皆さんはどうでしょうか。本を読むことが好きな者にとって、学校の教科書で読んだものを図書室でもう一回読む

資料3～みすゞの童謡

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、
地面を速くは走れない。

私からだをゆすつても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんながちがつて、みんないい。

光村図書出版③平8～
大阪書籍③平12、14

大漁

朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鱈の
大漁だ。
濱は祭りの
やうだけど
海のなかでは
何萬の
鱈のとむらひ
するだらう。

日本書籍⑤平14、16

星とたんぼ

青いお空の底ふかく、
海の小石のそのやうに、
夜がくるまで沈んでる、
昼のお星は眼にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ。
見えぬものでもあるんだよ。

散つてすがれたたんぼの、
瓦のすきに、だまつて、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根は眼にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ。
見えぬものでもあるんだよ。

学校図書⑤平14、③平17

不思議

私は不思議でたまらない、
黒い雲からふる雨が、
銀にひかつてゐることが。

私は不思議でたまらない、
青い桑の葉たべてゐる、
蠶が白くなることが。

私は不思議でたまらない、
たれもいぢらぬ夕顔が、
ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、
誰にきいても笑つてて、
あたりまへだ、といふことが。

東京書籍④平8～
大阪書籍③平17

雀のかあさん

子供が
子雀
つかまへた。

その子の
かあさん
笑つてた。

雀の
かあさん
それみてた。

お屋根で
鳴かずに
それ見てた。

芒とお日さま

—もうすこし、
—もうすこし。
芒はせい伸びしてゐます。

あまり照られてしほれそな、
白いやさしいひるがほを、
どうにか、蔭にしてやろと。

—もうすこし、
—もうすこし。
お日はぐづぐづしてゐます。

まだまだ籠は大きいに、
あれつぼちしかよう刈らぬ、
草刈むすめがかあいそで。

こころ

お母さまは
大人で大きいけれど。
お母さまの
おこころはちひさい。

だつて、お母さまはいひました。
ちひさい私でいつばいだつて。

私は子供で
ちひさいけれど、
ちひさい私の
こころは大きい。

だつて、大きいお母さまで、
まだいつばいにならないで、
いろんな事をおもふから。

*引用は、『新装版金子みすゞ全集』(JULA 出版局 S59・8)による

のはちょっとよく分からない行為です。別のものを
読めばいいのと思うのですが、本が苦手な子たちは、
教科書で読んだものをもう一回図書室で、ああ、
これ知ってる知っていると読んでいくのだそうです。
子どもの活字離れが広がれば広がるほど、教科書の
存在感が増すのかなと思ったりもしました。

ともあれ、みすゞの童謡が国語の教科書に載り
ます。童謡ですから作曲される可能性もあるので

すが、音楽の教科書ではありません。詩として、
読み物として、国語教科書に載っていくことにな
ります。資料3にある「私と小鳥と鈴と」から「不
思議」まではそのようにして教科書に載った作品
です。

先ほども申しましたように、金子みすゞは矢崎
節夫さんという方の努力によって私たちの前に現
れてきました。その矢崎さんがどのようにしてみ

資料4～国語教科書の語るみすゞ

*『国語5下』（教育出版 平12・6）より

みすゞさがしの旅
—みんなちがって、みんないい

矢崎節夫

1
金子みすゞという美しい名前をもった女性詩人を知ったのは、昭和四十一年（一九六六）年、わたしが大学一年の時でした。

『日本童謡集』という本の中に、金子みすゞの『大漁』という作品が、一編だけあったのです。

大漁

朝やけ小やけだ
大漁だ
大ばいわしの
大漁だ。

はまは祭りの
ようだけど
海のなかでは
何万の
いわしのとむらい
するだろう。

この作品を読んだ時、わたしは強く心を動かされました。大漁を喜ぶ人々の、お祭りのようににぎわうはま辺を見つめながら、そのうらにかくれている、海の魚たちの悲しみを見つめた、一人のやさしい詩人の目を感じたからです。

食べる人間も食べられる魚も、同じ命だと、この詩人はうたっているのです。それは人間中心の考え方ではなく、もっと深いやさしさでした。

—金子みすゞという人は、いったいどんな人なのだろう。
—金子みすゞの作品を、もっと読みたい。

『大漁』という一編の作品に出会ったことで、わたしはみすゞの人と作品にひきつけられ、「みすゞさがし」が始まったのでした。

大学への行き帰り、古本屋街に行っては、金子みすゞの名前や作品がのっている本をさがし歩きました。

（中略）

三さつの手帳と写真を前にして、上山さんは、みすゞのことをこんなふうに話してくれました。

「みすゞは、明治三十六（一九〇三）年、山口県の、日本海

に面した^{おおつ せんぎき}大津郡仙崎、今の^{ながと}長門市仙崎という、小さいけれど美しい漁師町で生まれました。両親と祖母、兄とみすゞとわたしの、六人家族でした。わたしは生まれてすぐに、下関で上山文英堂を営んでいる親類に養子に出たので、姉とは姓がちがうのです。みすゞの本名は、金子テル。みすゞはペンネームで、この言葉が好きでつけたと言っていました。小学校のころから、だれにでも好かれる、人のいやがることは決して言わない、やさしい少女だったといえます。それから、一つのものを見て、たくさん言葉を考える—例えば、落ち葉、かれ葉、かれっ葉というように考えて、その時、その時で、自分にぴったりの言葉を使うのが好きな人でした。女学校を卒業して、およめに行くまでの間、下関のわたしの家に来て、商品館内にあったうちの支店の手伝いを始めました。一人で店番をしながら、ひまを見つけては本を読み、童謡を書き、そして初めて『童話』にとうこうした作品が、西條先生のすいせんでけいさいされたのです。」



小学生のころ

「それからとうこうするたびに西條さんに選ばれて、ついには『わかい童謡詩人中の巨星』とまでいわれるようになったのですね。」

6

三さつの手帳には、それぞれとびらに、『美しい町』『空のかあさま』『さみしい王女』と題が書かれ、全部で五一二編もの作品が書かれてありました。これまでわたしが読むことのできた三十編の、なんと十七倍もの数でした。

みすゞは、これだけの作品を、二十才から二十五才までの、わずか五年間に書いたのです。

『大漁』に出会ってから十六年、みすゞさがしの旅は、多くの人の協力と、姉を思う弟、上山雅輔さんのおかげで、みすゞの全作品としようがいにとどり着くことができました。

そして、わたしは、二年後の昭和五十九年二月、三さつの手帳をもとにして、『金子みすゞ全集 全三巻』を世に出すことができましたのです。

金子みすゞの作品は、小さなもの、力の弱いもの、そこにあるのに気がつかれないもの、本当は大切なものなのにわすれてしまわれがちなもの—この地球という星に存在するすべてのものに対し、深いやさしいまなざしを投げかけたものばかりです。

みすゞは、この世に存在するすべてのものが、それぞれちがうからこそすばらしく、一人一人がちがうからこそ大切で、すてきなのだということを、こんなふうにうたってくれています。

すゞと出会い、忘れられていた詩人を探し当てたか、その様子も実は読み物として国語の教科書に載っています。資料4(国語教科書の語るみすゞ)にはそれを一部抜粋して載せました。

「みすゞ(ず)さがしの旅——みんなちがって、みんないい」とタイトルが付いた文章です。「金子みすゞという美しい名前を持った女性詩人を知ったのは、昭和41(1966)年、わたしが大学1年の時でした」と始められています。矢崎さんは『日本童謡集』という本に一編だけ載っていたみすゞの詩に出会いました。「大漁」です。強く心を動かされた、そのときの印象が次のように記されています。

はま辺を見つめながら、そのうらにかくれている、海の魚たちの悲しみを見つめた、一人のやさしい詩人の目を感じたからです。

食べる人間も食べられる魚も、同じ命だと、この詩人はうたっているのです。それは人間中心の考え方ではなく、もっと深いやさしさでした。

みすゞはどんな人だろう、作品を読みたい。ここで、矢崎さんのみすゞ探しが始まるわけです。何年もかけて、やっとたどり着いたのは3冊の手帳と写真、そしてまだこのときは御存命だった弟さんでした。弟さんの思い出話も、ここには載っています。みすゞは小さい頃誰にでも好かれた、人の嫌がることは言わない優しい少女だった、というようなことが語られていますね。矢崎さんは、みすゞの残した手帳と弟に出逢った。そのお陰で全作品と生涯について書くことができた。みすゞの作品は、小さいもの、気が付かれないもの、忘れられがちなものに対して、深い優しいまなざしを投げかけている。この世に存在する全てのものが、違うからこそすばらしいということを歌っている、と文章は続きます。この後にみすゞの一番有名な詩「私と小鳥と鈴と」の引用があります。資料4では省略しましたが、「私と小鳥と鈴と」は先ほどの資料3にも載せてありますので、御確認ください。

この矢崎さんの文章で皆さんに注目していただ

きたいのは、ある言葉のリフレインです。矢崎さんは金子みすゞを発見して現代の私たちに知らしめてくれた方ですから、この方の言葉は国語教科書に載る前から強い影響力を持っていたと思います。今御紹介した文章の中では、「やさしい」という形容詞がリフレインされているのです。例えば「大漁」の引用の後、4行目「一人のやさしい詩人の目を感じた」とか、この詩人が歌っているのは「深いやさしさ」であるとか。それから弟さんの思い出話として、小さい頃、彼女は「だれにでも好かれる、人のいやがることは決して言わない、やさしい少女だった」。最後に「私と小鳥と鈴と」を紹介する前にも、みすゞはこの世に存在する全てのものに「深いやさしいまなざしを投げかけ」ているとあります。このようにして、みすゞの詩や童謡、あるいは人物イコール「やさしい」という一種の公式が作られたと思います。

良くも悪くもこの枠組みの中でみすゞの詩は受容されていきます。矢崎さんの文章だけではなく、教科書の指導書を見ても同じ枠組みの中で紹介されることが多いです。作者の優しい視点を感じ取りましょうという学習目標で、彼女の詩は解釈され、受容されていくことになるのです。それはそれとして、この後もみすゞの受容史は続いていくと思います。このまま進んでいくのかどうかというところにつきましては、休憩後にお話しするつもりです。

3. みすゞ童謡の読まれ方と、その問題点

後半は資料3と資料5(「私と小鳥と鈴と」の読まれ方)、資料6(読者の描くみすゞ像「金子みすゞは、どんな人?」)を参照しながら進めていきたいと思います。まず資料3を見てください。幾つかみすゞの童謡を載せました。教科書に載っているものや、そうでなくても、小学校の授業で既に使われているものを選んで載せています。みすゞはアマチュアの詩人ではありましたが、割にしっかりと自分なりの詩の作り方、作法のようなものを持っていたと思います。資料を見ながら、そうした詩の作り方をまず見ていきましょう。

最初に申し上げたいのは、何に気を配って詩を作っていたのかということ。それはまず、音数律

資料5～「私と小鳥と鈴と」の読まれ方

a. 村中李衣「金子みすゞ・その創作空間」(『文藝別冊 [総特集] 金子みすゞ』平12.1)

うずもれていた郷土の童謡詩人として、十年くらい前から彼女のことが話題にのぼるようになって、私にはさしたる関心がなかった。ただ、小学校や中学校を訪れば、校長先生の達筆でみすゞの童謡が清書され額に入っていたり、色紙として飾られていたり。卒業式や入学式では、決まってどれかの挨拶に引用されたり。なるほど、教育現場は、「みんなちがってみんないい」のことに敏感なんだなあ、ぐらいにしか思っていなかった。ところが、今年四月、小学三年生になる娘の授業参観に出掛けたことで、みすゞの童謡と改めて向き合うことになった。「わたしと小鳥とすずと」(光村凶書)の授業だった。

教室では、班別ごとに工夫した群読の発表を行っていた。どの班も、読み方の違いこそあれ、小鳥パート、鈴パート、みすゞパートに別れ、順番に読んでいくことに変わりはない。ところが、娘たちの班だけが違っていた。徹頭徹尾ひとりの子が読み通したのだ。そして、他の子供達は机に顔をふせていて、一連めの「私のように」、二連めの「私のように」、そして三連めの「それから私」のところだけ、顔をあげてことばを重ねてみせた。その意表をつく表現に、教室は大笑い。しかし、班の子供達はおおまじめで、

「この詩はみんなで読まんほうがいいと思いました。」「みすゞは、『私のように』『私のように』って、ずっと『自分のこと』を考えてるような気がするから。」「小鳥やら鈴やらの気持ちも声も聞こえんから、みすゞの声だけでやったほうがええと思いました。」

極め付けに娘が立って『みんなちがって、みんないい』と書いてあるけど、ほんとそんな風に思えんから、『みんないいと思えたらいいなあ』と考えたんじゃないかなあ』といっていた。教室じゅうが、しーんとなった。先生が、「なかなかユニークやね」といって、それでおしまいになった。教室のうしろの大人たちの緊張がほどけた。でも……。

これまでみすゞ作品については、「技法そのものだけについて学んだり、分析的に読んだりすると、みすゞの世界が心の中にすーっとしみ込んでこないような気がしてなりません。」(阿部勉)というような捉えられ方が主流であったように思う。しかし、実際には「みすゞの世界」といいながら、多くの読者が、選ばれたことばの意味内容に終始し、なぜそのことばを選ばずにはいられなかったのかという、みすゞ自身のこのころのありようにまなざしを向けようとはしていなかったのではないか。そこで、いったん感傷的な読みをやめ、その表現形式の側から目を凝らして見ることで時代と生活背景の中でみすゞがつくりだした童謡空間を問うてみたいと思った。

(中略)

このように、ながめてきて、みすゞの世界について臆げながらみえてきたことがある。まず、創作全般にわたって対比表現が多いことについては、レトリックの未熟さという問題もあるが、そのものの価値が単独で認められがたい状況とその中でいつもあたりを見回し、まわりとの折り合いをはかりはかり生きなくてはならなかったみすゞの心の縛りのようなものが現れているのではないか。しかしそれゆえ、じっと

身をひそませ、片隅から目を凝らすことで思いもよらぬもの捉え方、一連ごとの視点の転換の大胆さといった、みすゞ特有の表現も一方で生み出されたような気がする。また、精神的に追い詰められた時に却って、後者肯定、或いは後者容認の対比表現がみられたことについても、みすゞにとって、童謡を書くということは、「自分の存在をなんとか自分自身で意味あるものと認めていこう」とする、祈りにも似た作業だったのではないかと推測される。

(中略)

いろいろ思いを巡らせた結果、娘のひとことにもういちど立ち返ることとなった。みすゞは「みんなを好きになれないから」「みんなちがってみんないいと思えたらどんなに心が楽になるだろう」と、ことばの世界に救いの道を求めたのではないか。詩や小説に比べ寓意性が強く個人の表現とは言い難いとされる童謡をあえて表現ジャンルに選び、その中にひっそりとしのぼせた「私へのこだわり」こそ、みすゞ童謡の魂だったのかもしれない。

b. 川崎節子「教科書に入った金子みすゞの童謡詩」(『言語科学研究』平14.3)

教育現場の多くでは、「一人一人が違うことの良さ」として、この詩の主題を規定しているが、それは臨教審の「世界の日本人」を育成するための重要な柱の一つである「多様な文化の優れた個性を深く理解する能力」を強調しようとするあまりに主題を歪曲したのではないだろうか。金子みすゞの詩そのものの中には、自己の内面をみつめる姿勢があるだけであり、この世の中の人々一人一人を示唆してなどない。

(中略)

この村中の指摘をさらに分析する形で、「みんなちがってみんないい」を、「他者との対立点」を含むものとしてとらえる人に詩人長谷部奈美江がいる。長谷部は「彼女は『みんなちがって、みんないい』とお札のように繰り返す人たちは違つて他者との対立点がちゃんと見えていた」(『みすゞと『わたし』』総特集金子みすゞの没後70年・文藝別冊・河出夢ムック』2000)と、詩人の「こだわり」の構造をときあかしている。

みすゞの詩の中の「わたし」とは、詩を書くことによるのみ、自分自身の存在を自覚している当の本人であり、「みんなちがってみんないい」とは、みんなの生き方のことを言っているのではなく、「わたし」自身の生き方を言いたいために使った言葉なのである。すなわち「みんなちがってみんないい」とは、違ったみんなの多様性や個性を認め合おうという意味で使っているのではなく「みんなと違う自分を貫いて生きる」という詩人自身の自己意識、自己肯定の意志であることを、村中も長谷部も指摘しているのである。

教育現場では、みすゞの詩の「みんなちがってみんないい」が、詩人の強烈な自己意識の表れにほかならないことを軽視している。教科書本文中の解説や、指導書の主題、また道徳副読本もすべて、「人はみんなそれぞれに良さがある」ということを主張する詩として解釈している。

です。当時の口語を使って書かれた詩なのですが、多くの詩で音数律が整えられています。例えば、資料に挙げた中で一番きれいなのは、「星とたんぼぼ」でしょうか。1行目の「青いお空の底ふかく」の音数を数えてみてください。「あ・お・い・お・そ・ら・の」で7音、「そ・こ・ふ・か・く」で5音になっていることにお気づきいただけると思います。他の行もみてください。全て1行が12音で作られていて、七五調を形成しています。

先ほど、当時の童謡は読み物という側面が大きかったとお話ししましたが、それでも散文とは違い、あるリズムがあります。作曲はされないまでも、声に出して読んだときに気持ちがいいということを考えて作られています。これはみすゞの先生であった西條八十からも、もっと歌の調子を整えなさいと言われ、工夫したことのように。

ちょっと変形ですが「大漁」も七五調です。「星とたんぼぼ」は本当にきれいな七五調になっていて、声に出して読むと気持ちがいいので、休憩ついでに音読してみませんか。私が1行読みますので、どうぞ皆さん音数を意識しながら斉読してみてください（読む）。特に大人は、あまり声に出してもものを読むことをしませんが、童謡は声を出しても気持ちがいいように作られています。みすゞの作品には七五調が多いですが、「雀のかあさん」のように、四四五のリズムで作られているものもあります。

音数律の他に、もう一つよく使われているのが、対比です。例えば「大漁」だと、浜の様子と海の様子が対比されています。浜では人間が大漁に喜んでいるのに、海ではいわしたちが悲しみ、お弔いをしている。このように対照的なあるものとあるものを取り出して比べてみせることで、読者に何かを考えさせるのが対比というレトリックです。詩に即して言うと、大漁は喜びだと思っている私たちの常識。それを、魚の方から見ると悲しみだと対比で示して引っくり返していく。

今、皆さんが読んでくださった「星とたんぼぼ」でも見える・見えないの対比を使いながら、見えないものはないのではなくあるのだ、という常識とは少し違う主張をし、読者に再考を迫るわけです。この手法をどこまで意識して選んだのかは分

かりませんが、多くの詩で採用しています。

このような詩の作り方をしていたということ踏まえて、資料5のみすゞ作品の読まれ方を見ていきたいと思います。まずa（村中季衣「金子みすゞ、その創作空間」(『文藝別冊 [総特集] 金子みすゞ』平12.1))から御覧ください。8年ほど前、金子みすゞ没後70年に合わせて出された雑誌に載っていた、村中季衣さんの文章を引きました。村中さんは御自身が児童文学の作家であり、研究者でもいらっしゃる方です。山口県在住で娘さんがおられます。

「うずもれていた郷土の童謡詩人として、十年くらい前から彼女のことが話題にのぼるようになって、私にはさしたる関心がなかった」、こう書き始められています。お子さんがいらっしゃるので学校に行くと、校長先生の達筆でみすゞの童謡が額に入っていたり、誰かが引用したり、教育現場はあの「私と小鳥と鈴と」の最終行、「みんなちがって、みんないい」に敏感なのだなあとしか思っていなかった。ところが、小学三年生になる娘さんの授業参観に出掛けて、この作品「私と小鳥と鈴と」に向き合うことになった。三年生の教室では群読の発表が行われた。(小学校三年生の教科書で「私と小鳥と鈴と」は主に音読の教材として扱われていますので、これはセオリーどおりの授業だと思います。) 大体どの班も小鳥、鈴、みすゞのパートに別れて、順番に読んでいった。ところが村中さんの娘さんたちの班だけが違っている。徹頭徹尾一人の子が読み通した。他の子どもたちは机に顔を伏せていて「私のように」と「それから私」のところだけ声を重ねた。意表をつく演出で教室が大笑い。しかし村中さんの娘さんをはじめとする班の子どもたちは大真面目だった。

「この詩はみんなで読まんほうがいいと思いました。」「みすゞは、『私のように』『私のように』って、ずっと『自分のこと』を考えてるような気がするから。」「小鳥やら鈴やらの気持ちも声も聞こえんから、みすゞの声だけでやったほうがええと思いました。」

極め付けに娘が立って「『みんなちがって、みんないい』と書いてあるけど、ほんとはそんな

風に思えんから、『みんないいと思えたらいいなあ』と考えたんじゃないかなあ』と喋った。教室じゅうが、しーんとなった。先生が、「なかなかユニークやね」と喋って、それでおしまいになった。教室のうしろの大人たちの緊張がほどけた。

ここで皆さんに考えていただきたいことがあります。村中さんの娘さんたちの班が示した、「私と小鳥と鈴と」の読み方は間違っているでしょうか。改めて、「私と小鳥と鈴と」を御覧ください。資料3の一番初めに載せてあります。見ていきますと、「私と小鳥と鈴と」は第1連でやはり対比が使われています。「私」と「小鳥」の対比です。続けて第2連では「私」と「鈴」が対比されています。注目していただきたいのは、この詩の中では常に「私」と「何か」を比べているのであり、「鈴」と「小鳥」は比べていないということ、つまり、「私」中心の対比が形作られているということです。最後の連も「鈴と、小鳥と、それから私」と、「私」を最後に持ってきて強調してから、「みんなちがって、みんないい」と言います。

ここで使われているのは、みすゞの得意なレトリックである対比です。詳しく見ていくと、「私」を中心にした対比だということも分かります。この詩の自己主張は意外に強く、「私こんなことできないけれども、でもこんなことできるもん。だから私も、ついでに、みんなもいいんだもん」と言っているような詩だと私は読んでいます。その強い自己主張を、幼い少女を思わせるような「私」の口調や「小鳥」、「鈴」という言葉のイメージで和らげているのです。

詩では、言葉のイメージを操作することもすごく重要だと思うのですが、そういう話を大学で学生にしたら、この詩の替え歌(?)を作ってくれたことがありました。自分は、「小鳥」のところを「カラス」に、「鈴」のところを「鐘」に替えて読んでみたというのです。すると、言葉のイメージが変わりますよね。小さいかわいらしいものから、大きくどっしりしたものに。けれども「小鳥」を「カラス」にしても、「鈴」を「鐘」にしても、音数は変わらないから読んで気持ちのいいリ

ズムはそのまま残ります。替え歌と比べてみれば分かるように、「私と小鳥と鈴と」は、うまい具合にかわいい小さいものを登場させて、全体の調子を和らげている。かわいいものとして私たちに詩を受け取らせています。

これで「私と小鳥と鈴と」をしっかり鑑賞できたと思いますので、先ほどの問いの結論を言います。私は、村中さんの娘さんたちがした「私と小鳥と鈴と」の読み方は、間違っていないのではないかと思います。対比の構造を考えていくと、確かに「私」中心の強い歌なのです。なので、読み方の工夫として、「私のように」とか「それから私」を強調するやり方は有りだろうと思います。しかし教室の中では、それは笑われてしまう。責められないまでも先生に「ユニークだね」と言われて流されてしまう。そういう読み方です。

教科書の中の金子みすゞ作品、特に「私と小鳥と鈴と」は、前半の最後に紹介したように、地球上の全てのもが一人一人違っているからいいのだと言っていて、深いやさしさを読むべきなのだとされています。ですから、この詩を「私」を強く主張している詩だというふうに読むのは、少し問題なのでしょうね。不正解とはいかないまでも、ちょっと困ったなあという感じになってしまうのが、この例から分かります。

その側面をとらえたのが、資料5のb(川崎節子「教科書に入った金子みすゞの童謡詩」(『言語科学研究』平14.3))の文章です。金子みすゞの詩が教科書に採られたとき、臨時教育審議会の方針を強調しようとして、主題が歪曲されたのではないかと指摘しています。「私と小鳥と鈴と」の中には、「自己の内面をみつめる姿勢があるだけであり、この世の中の人々一人一人を示唆してなどいない」とあります。そのようにも読めますよね。他者ももちろん肯定していますが、「私」が中心にあるわけですから、そこを学校では読めていないのではないかと指摘しています。そういうことに気付いた人たちとして、村中さんの例が挙がっていたり、その他の詩人の例が挙がったりします。

最後の一段落分だけ、特に御注目ください。

教育現場では、みすゞの詩の「みんなちがっ

資料6～読者の描くみすゞ像

「金子みすゞはどんな人？」

- ①多面的な視点で一つの物事を見られる人。また読者にもその点を考えさせてくれる人だと思います（院1）
- ②詩を通して読む人にたくさんのことを考えさせることのできる人物だなと思った。人と人との関係や、その他のつながりをとても上手に言葉にして私たちに伝えているなーと思った（初教2）
- ③日常の一場面を、多方面から見ることのできる人だと感じた。対比が多いのも、作者の物に対する見方が柔軟であったからであると思う。ただ、少しものさびしい印象を受ける作品が多かったので、日常のわびしさなんかを感じている人であったかもしれないと思った。（初教2）
- ④きっと日常生活で見逃してしまうようなことを気づける人で、それに気づいた時の自分の切なさや悲しみなどの感情を例えるのが上手な人なんだろうと思った。（初教2）
- ⑤色々な人のことを考えすぎる優しい人だと思いました。自分が幸せでも、相手の側から見たら、そうではないということには、なかなか気付けないけれど、同じものを見ている、様々な角度から、物事を見ている気がして、詩を読んでいて、はっとすることがたくさんありました。（国文2）
- ⑥自分以外の者の立場をすごく大切にしていた人なのではないかと思います。三作品とも、さまざまな目線から書かれているところからそう考えました。（「こころ」は本来の自分とはちがう、子どもという目線になっている）。（国文4）
- ⑦つねに物事を色々な確度から見ようとすると人だと思いました。自分が思うこと、相手が思うことをいつも考えている…。対比が多いのはそのためだと思います。（初教2）
- ⑧小さいもの、弱いものに注目したり（雀のかあさん）、芒と

お日さまのように、それぞれの思いやりの気持ちの温かさ、だけど両方ともうまくいかない無力さなど、弱いものがどうにもできない切なさのようなものを詩から感じます。金子さんも女性なので当時の社会の中でそういった思いを感じたりしたのかなと思いました。（社会3）

- ⑨小さなもの、弱いもの、はかないものに心を寄せている詩が多いな、と思う。金子みすゞ自身、自分は小さい、弱いというコンプレックスを抱えていたのではないだろうか。だから、自分と似た立場に置かれていることを対象とした詩をたくさん書いているんだろう。（社会3）
- ⑩やわらかいイメージの詩が多いのだが、作者自身を思わせることも多く、エゴイストのような気もする。いい意味でとれば、自分をしっかりと持っている人だと思う。（初教4）
- ⑪あまり幸せそうな人生ではなかった印象を詩から受けます。自分は弱い者で、強い者や社会に打ち勝つことができずに、自分のような小さき者へのいたわりの心や理解を詩に反映して、心を解放させようとしたのかも知れないという感じを受けた。（英文4）
- ⑫3つの詩に使われていた対比の技法から、観察力のある良い意味で「よそ見」のうまい人だと思った。詩の内容が日常のことからそれがより感じられた。（初教2）
- ⑬現実主義な方だと思います。子供や生活の中でのことをとらえていることや、思いやりがすれちがっていたり、雀の詩でもあったような、あたたかさだけでなく切なさを表現しているところが、そう思った理由です。（初教2）
- ⑭どこか客観的に見ていると詩の中から感じられるので…評論家ですかね（社会4）

*都留文科大学の授業「国語教材研究C」（平成二二年度前期）の受講生が、授業内で教員の求めに応じて寄せたコメントより引用。各コメント末の（ ）内で、「初教」は初等教育学科、「国文」は国文学科、「英文」は英文学科、「社会」は社会学科、数字は学年を表す。

てみんないい」が、詩人の強烈な自己意識の表れにほかならないことを軽視している。教科書本文中の解説や、指導書の主題、また道徳副読本もすべて、「人はみんなそれぞれに良さがある」ということを主張する詩として解釈している。

「私と小鳥と鈴と」は、今申しましたように、「私」をいいよねと肯定するときに、一応他者にも言及して、「みんなちがってみんないい」という他者肯定をする。自己肯定と他者肯定、この二つの要素を持っていると思います。他者を肯定しながら自己主張していくという詩です。ところが学校にこれが持ち込まれたときには、詩の内容、詩の示すものだけでは済まなくて、もちろん何らかの必要があるから導入されているのですが、教育的

あるいはその背後にある政治的な意図が加わってしまうわけです。そして授業で読んだときには、この読みがよくて、あの読みはバツじゃないけれども何かちょっと違う、となってしまいます。金子みすゞの詩は教科書に採られたからこそ、こんなに広く知られるようになったと思います。でも、教科書に採られることにより、解釈するときの不便さというか、窮屈な部分も出てきてしまったのではないかと考えています。

4. 童謡をもっと楽しむために

皆さんは、私も含めて、まだ教科書で金子みすゞを習った世代ではないと思います。ですが、今の大学生は小学校の教科書の中で、つまり教育的な意図の下で、金子みすゞの詩に出会ってから大学に入ってきています。私は、そのような学生を相

手に普段授業をしています。これから金子みすゞをどう読んだら楽しいかを考えるために、学生たちが今どのように読んでいるかを材料として御紹介したいと思います。資料6を御覧ください。

これは私が前期に大学で担当した授業で、学生にお願いし、コメントを書いてもらったものです。許可を得て転載させてもらいました。作品を幾つか読んで、金子みすゞという人物、あるいはその作品をどう思いますかと質問を発して書いてもらったものです。前期の授業の中盤で書かれたもので、資料3の「雀のかあさん」、「芒とお日さま」、「こころ」を既に読んでいます。私が皆さんにお話ししたようなみすゞの生涯を、学生たちはこのコメントを書いた段階では知りません。授業の中ではあえて紹介しませんでした。それから「私と小鳥と鈴と」の読み直しもまだしていません。ただ皆さんにお示したように、金子みすゞは音読して気持ちがいいように童謡を書いているとか、対比というレトリックが得意だとかいうことを話し、幾つかの詩を読み深めているという状態です。そのような中、出てきた意見だとお考えになって御覧ください。

まず①から④を紹介したいと思います。①の学生は院生ですが、多面的な視点で物事を見られる人だ、読者にもその点を考えさせてくれる人物であろう、と書いています。②の学生も、詩を通して読む人にたくさんのことを考えさせる人物だ、「人と人との関係や、その他のつながりをとても上手に言葉にして私たちに伝えている」、言葉にして伝えるのがうまいという指摘です。③の学生は、物事を「多方面から見ることのできる人」。④の学生は「日常生活で見逃してしまうようなことを気づける人」で、自分の「感情を例えるのが上手な人」だ、と書いています。作品を読んだときに浮かんでくるのは、金子みすゞが多面的なものの見方や考え方をする人だということのようです。表現がうまくて、読者を考えさせる、そういう詩人だというイメージを持つことも分かります。

読者を考えさせる詩人という見方は、実は小学校の国語教科書の指導書などを見ると出てきません。国語の教科書の指導書では、みすゞは感性の

豊かな人だと書かれているのです。細かいことはあまり考えないで、読むことを感じることを詩を通して楽しみましょう、と指導されるのです。でも、大学生になって読んでみると、彼女は人を考えさせる詩人で、そういう作品を書いているという考え方が生まれてきます。

とはいえ⑤から⑦のように、金子みすゞは優しい人だという見解もやはり出てきます。⑤の学生は「色々な人のことを考えすぎる優しい人だ」と言っています。⑥の学生も「自分以外の者の立場をすごく大切にしていた人」、⑦の学生も「自分が思うこと、相手が思うことをいつも考えて」いるということで、公式どおり、みすゞは優しいという読み方が表れています。この感想を読んでいて気付いたことがあります。それは、みすゞの詩の中には弱いものや小さいものがよく出てくるのですが、みすゞを優しいと言っている人たちは、その弱者とみすゞは別物だと読んでいるということです。だから、自分はそんなに弱くないのに、弱い他者のことを思いやる詩を書いている優しい人だという見解になるようなのです。

それと少し違っているのが⑧から⑪です。⑧の学生は、みすゞ自身も女性だということから、想像を膨らませています。当時の社会の中で女性つまり弱者としての思いを感じたりしたのかな、と推測しています。⑨の学生も「みすゞ自身、自分は小さい、弱いというコンプレックスを抱えていたのではないだろうか」と書いています。⑩も、作者自身を思わせる詩が多く、エゴイストのような気がする、自己主張しているという見解です。⑪の学生も、自分は弱い者という認識があったのだろう、詩の中に弱者を登場させて心を解放させようとしたのかもしれない、としています。というわけで、詩の中に出てくる弱者をみすゞ自身だというふうに考えると、みすゞは詩の中で他者を思いやっていて優しいわけではなく、そういうものに託して自己主張をしているのだという読み方になるわけです。

私は別にどちらが正解と言いたいわけではありません。一つの詩を読んでも、とらえ方が違っていると、このようにイメージが分かれてくる。公式どおりにはいかないこともあるということを示したいと

思っ、御紹介しました。

残りは少し個性的なものを挙げました。絶対に国語の教科書や指導書からは出てこないコメントだと思っています。例えば⑫の学生は、対比の技法を見ると「観察力のある良い意味で『よそ見』のうまい人だ」。いろいろな方向を見られるということ「よそ見」という自分の言葉で、この学生は表現しています。⑬の学生は「現実主義な方だ」と評しています。単純に感覚が豊かだとか感性が豊かだと言うのではなく、現実をきちんと見ている、現実の厳しさや切なさをきちんととらえているから、と理由も加えています。⑭の学生も、どこか客観的な視線があり、評論家みたいだ、という個性的な言葉を残してくれています。

こうして公式から離れて読み直してみると、読者それぞれの作品の解釈や作者像が浮かび上がってきます。読むことは、ここから面白いのです。ある種の公式を離れて、そこから学生や子どもの読み方が出てくる、言葉が発せられる。そうして、自分の読み方やイメージを作っていくのが楽しいのだと思います。だから、教科書にみすゞの詩が入っていることを否定するつもりはありません。教科書でみすゞの詩と出会うことで、基盤が出来るわけです。ほとんど他の詩を読まない子どもたちが、みすゞの詩を知っている、詩に触れることができる。それを生かして、更に自分の読み方に発展させていけないかということを考えています。それが小学校の教室で無理なのであれば、学校図書室や公立の図書館で、あるいは大人になっ

てから読み直すことでやっていけないでしょうか。子どものときに深く考えずに読んでも構いません。読んで楽しいリズムがあり、気持ちのいい詩なので、繰り返し口ずさみやすい。口ずさんでいるうちに、新しい読み方が浮かんでくることもあるでしょうし、図書館で出会い直すことで別の読み方が生まれることもあるでしょう。あるいは大人になってから、再会することで生まれる豊かな解釈もあるだろうと思っています。そういう機会をたくさん持つことが大切なのでしょう。

付け加えれば、教科書に入っている作品は、みすゞの詩のように、二重性を持っているものが多いのではないかと思います。一方で教科書的な道徳性、教訓性も受け取れるのですが、読み深めるとあれっと思わされる、「私と小鳥と鈴と」のような作品が、編者の方の苦勞を経て多く選ばれているのではないかと思います。あまきみこさんの作品やまど・みちおさんの詩もそういうところがあり、一回出会い、それから繰り返し読んでいくことをしたい作品が多いようです。皆さんは国語教材をどんなふうにとらえていらっしゃるでしょうか。そして今日の受講を経て、みすゞの作品をどのように読み直されたでしょうか。期待と不安、両方感じつつ、これで話を閉じたいと思います。

(ふじもと めぐみ 都留文科大学文学部初等教育学科准教授)

「金子みすゞ—読みものとしての童謡—」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館所蔵
 ※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	金子みすゞ全集	与田準一 (ほか) 編	JULA 出版局 1984. 2	KH248-381 (本館)
2	金子みすゞ全集	与田準一 (ほか) 編	新装版 JULA 出版局 1984. 8	KH248-391 ※
3	童謡詩人金子みすゞの生涯	矢崎節夫著	JULA 出版局 1993. 2	KG561-E140 ※
4	金子みすゞふたたび	今野勉著	小学館 2007. 10	KG561-H164 ※
5	日本童謡集. 上級用	西条八十編 初山滋等絵	興文社 昭和2	児乙部全集 -S-48
6	日本幼年童話全集. 7 (童謡篇 7)	巽聖歌等著 初山滋絵	河出書房 昭和29	児913. 8-N6912
7	日本童謡集	与田準一著	岩波書店 1983. 3	KH14-38 ※
8	繭と墓：金子みすゞ童謡集	金子みすゞ著	大空社 2003. 12	Y8-N04-H555
9	金子みすゞ：没後80年：みんなちがって、みんないい。	矢崎節夫監修	JULA 出版局 2010. 3	KG561-J97 ※
10	わたしと小鳥とすずと：金子みすゞ童謡集	金子みすゞ著	JULA 出版局 1984. 3	KH248-392 (本館)
11	『赤い鳥』大正12年9月号		複製版 日本近代文学館 1968	Z13-889 ※
12	『童話』大正12年9月号 (複製版タイトル：『雑誌童話』)	コドモ社 (編)	復刻版 岩崎書店 1982	Z32-B89
13	『金の星』大正12年9月号 (複製版タイトル：『金の船・金の星』)	金の星社 (編)	復刻版 ほるぶ出版 1983	Z32-B88

レジュメ

石井桃子

小寺 啓章

石井桃子（1907～2008）の仕事は、創作、翻訳、編集、出版、批評など子どもの本の全般にわたります。『子どもの図書館』、『児童文学の旅』などの著書には「かつら文庫」の記録や英米の児童図書館員の姿も詳述。彼女の残した仕事や著書から、彼女が求めた子どものための文学と児童図書館とはいかなるものであったか考えます。

「プー」の本にかぎって、私は、あえて、分析しようとは思わない。魔法は魔法でとっておきたいからである。
（石井桃子「プーと私」『石井桃子集6』p.13）

1. 石井桃子の仕事

①戦前 『幼ものがたり』と『クマのプーさん』

どんなことが、どんな拍子に、子どもの心に深く跡を残すかということは、私には見当もつかない。しかし、その条件については、たいへん興味をそそられる。そして、もうひとつおもしろく思われるのは、いま書いたようなことが、私自身が内がわから外界を見たようでなく、まるでもう一人の私が、自分を外がわから見ていたように、あたりの情景もろとも、心に描けることである。

（「幼ものがたり」『石井桃子集4』p.5）

埼玉県浦和生まれ（1907. 3. 10～2008. 4. 2）

記憶 『幼ものがたり』

弟の誕生（「早い記憶」）

祖父と昔話

学級文庫

子どもの感性（「子どもの一年」石井桃子『こどもとしょかん66』東京子ども図書館 1995. 7）

鋭敏な視力と聴力

編集

菊池寛と文藝春秋 文筆婦人会（「小学生全集」88巻）

文藝春秋で「モダン日本」「婦人サロン」（昭和4～8年12月）編集記者

「童女」（永井龍男『東京の横町』講談社 1991. 1） 子ども性

漢籍整理（犬養毅 犬養道子『花々と星々と』1969）

『プー横町にたった家』昭和8年12月

『日本少国民文庫』（全16巻 新潮社 昭和10年11月～12年8月）山本有三 吉野源三郎 恒藤恭里見淳 「文章の呼吸」

翻訳「一握りの土」（ヴァン・ダイク作）「わが橇犬プリン」（グレンフェル作）

（『世界名作選（二）』山本有三選 1936. 12）

②戦中 白林少年館と『ノンちゃん雲に乗る』

あるくもつた日、わたくしは高台のある駅の、高いプラットフォームに腰をかけて、電車を待っていました。走ってくる電車の上に、きゆうに日がさして、パツとかがやき、電車はその光をのせたまま、わたくしのほうへ突進してきました。わたくしは目がくらみそうになり、その光の中に、さいしょのノンちゃんを見たのです。
(『ノンちゃん雲に乗る』あとがき 光文社 昭和26年4月初版)

白林少年館 昭和13 (1938) 年?

①白林少年館 (児童図書館)

「とびたとうとする鳥」(『家庭文庫研究会会報』第1号 1958 冊子資料 p.8)

四谷 犬養仲子

②白林少年館 (出版部) 吉野源三郎・小林勇「あたたかい人」(『回想 小林勇』 筑摩書房)

昭和15年11月『たのしい川邊』(中野好夫訳 白林少年館)

昭和16年1月『ドリトル先生「アフリカ行き」』(井伏鱒二訳 白林少年館)

『クマのプーさん』の翻訳 (冊子資料 口絵写真)

昭和15年12月『熊のプーさん』(石井桃子訳 岩波書店)

昭和17年6月『プー横丁にたった家』(石井桃子訳 岩波書店) ←昭和8年12月

「あの文体は児童書の規矩を逸脱…、破調、破格が…全体を新鮮で大胆なものに」(生野幸吉)

「真の新風革命を樹立した」(瀬田貞二)

『ノンちゃん雲に乗る』執筆 吉田甲子太郎 藤田圭雄^{たまお} (大地書房 1947.2発行 野上彰編集)

③戦後 多彩な仕事—編集・翻訳・批評・図書館・創作

ずいぶん前、私はふたつのことをしたいと考えていた。一つは、小さい農場を経営(というほど大きなことではなかったが) することと、子どもの図書室をつくることだった。

(「子どもの本屋」1952『石井桃子集7』p.3)

「岩波少年文庫」1950.12創刊(「少年少女讀物百種」委員会のリスト)

「私にとって『喜びの訪れ』と感じられる本のリスト作りに熱中していった」

(石井桃子「喜びの地下水」『図書』1990.7)

「岩波の子どもの本」1953.12創刊

『子どもと文学』(いすみ会)

『線路ぎわの子どもたち』イーディス・ネスビット作“The Railway Children, 1906”

中川宗弥さし絵『子とともに』1965.4-1966.3 愛知県小中学校校長会・愛知県小中学校PTA
連絡協議会編集 愛知県教育振興会発行

2. 子どもの図書館—よろこびの地下水

「あのとき、あなたは、病気の友だちのために『プー』を訳したことを話してくれたね」と、スミスさんはいった。

「あなたは、あのとき、ある本にクリエイティブなものがあるとき、その本は、ほんとうの『本』になるのだとおっしゃいましたね。そして、創造性と真実をもった本を識別し、それを次の代に手渡すのが図書館の役目だって。」と、私はいった。「私は、いまもそれを信じているんです。」

「モモコ、信じることに、それがだいじなんだよ。」と、スミスさんはいった。

(『児童文学の旅』『石井桃子集6』p.303-304)

かつら文庫 昭和33 (1958) 年3月1日 発足

1954年渡米 “How exciting! How challenging!” (『石井桃子集5』p.188-198)

先達女性児童図書館員の姿と精神

- キャロライン・M.ヒューインズ Caroline M.Hewins (1846~1927) ハートフォード市図書館
- アン・キャロル・ムア Anne Carroll Moore (1871~1961) ニューヨーク公共図書館
- リリアン・スミス Lillian Helena Smith (1887~1983) カナダ・トロント公共図書館

- 『児童文学の旅』「一九七二年初夏 イギリスへの旅」を一年間『図書』に連載 (1973.1~12)
(『石井桃子集6』1999)
- 『子どもの図書館』(岩波新書 1965.5) (『新編子どもの図書館』『石井桃子集5』1999)
- 『子どもと本の世界に生きて 一児童図書館員のあゆんだ道』アイリーン・コルウェル著 石井桃子訳 こぐま社 1994
- 『児童文学論—児童文学の批判的考察』リリアン・スミス著 石井桃子 [ほか] 訳 岩波書店 1964.4

『子どもの読書の導きかた』石井桃子著 国土社 1960.6

新しい視野—ポンピドゥー・センター図書館

(中村真一郎「近代文学館への夢」『日本近代文学館館報』1994.9~11)

3. 石井桃子の文学—クリエイティブ

「六〇年代のはじめ、僕等は頭でっかちに「児童文学」を論じていた。性急な問題意識で、既成の作品を斬りすてていた。それなのに、この人には手が出せない。自分達の論点を超えて、否定のしようのない魅力があるのだ。・・・僕等は石井桃子氏を別格官幣大社扱いとせざるを得なかった。」

宮崎 駿 (『石井桃子集』パンフレット 1998)

『ノンちゃん雲に乗る』(光文社 昭和26年) 第一回 (芸術選奨) 文部大臣賞

「子どもの論理の発見」

「トムの教育」(『少年少女』 昭和23年3月号 中央公論社)

「緑色の消防自動車」翻訳 モート・コーニン作 (『少年少女』 昭和23年8/9月号)

「山のさち」随筆 (『銀河』 昭和23年5月号 新潮社)

「おソバの茎はなぜ赤い」(『銀河』 昭和24年5月号)

短編

- 「草ぼうぼうの原っぱ」(毎日新聞 1952. 2. 9) 「ハツコマ山登山」(時事新報 1951. 7)
「セミとり」(読売新聞 1953. 8. 29) (以上3点『石井桃子集7』所収)
『昭和児童文学全集18 北島八穂・石井桃子集』(東西文明社 1958)
「パチンコ玉のテポちゃん」「秘密」「ハツコマ山登山」(以上、1951年作)
「ある山のかげで」(1953) 「さんちゃんとバス」(1957) 「山のトムさん(抄)」
「からだも心もじょうぶに自分の足で立つ人になってください」(サイン)

単行本

- 『三月ひなのつき』(朝倉撰絵 1963)
『べんけいとおとみさん』(山脇百合子絵 福音館書店 1985)
『山のトムさん』『幼ものがたり』『迷子の天使』
『幻の朱い実』(上・下)
「人生の幸福は重大な事件ではなく、日常の些事によって決まる」(埼玉新聞 1994. 4. 18)

「子どもにうたえる文章」石井桃子(『現代作文講座3 作文の条件』明治書院 1977)

- ①形容語が少ないこと
- ②説明(描写)がないこと
- ③感情が抑制されていること

簡素な力強さの芸術—北欧の作家(「散文芸術論」『ラフカディオ・ハーン著作集7』恒文社 1985)

昔話に学ぶ

『ちいさなねこ』

「石井さんが訳文を経験深いおとなの眼で点検したというよりは、すなおに読み、こどもの立場そのものに自分を置いてわかりにくい箇所の不審を感じたのだということである」

生野幸吉「遠いこと近いこと」(『幼年文学』第4号 矢立出版 1978)

「別格官幣大社」(宮崎 駿)

「ある本にクリエイティヴなものがあるとき、その本は、ほんとうの『本』になる」

石井桃子

小寺 啓章



こんにちは。紹介していただいた小寺と申します。「石井桃子」というタイトルでお話しします。

石井桃子さんは、平成20（2008）年4月2日に101歳でお亡くなりになりました。皆さん御存じのことと思います。図書館の児童室には、石井さんの著書や絵本、英米の物語や絵本の翻訳が多く、蔵書の核をなしていると思います。創作や翻訳を始め、いろいろな仕事を残されました。

そういったことを初めに紹介し、本日は、石井さんの図書館に対する思い、子どもの本と文学に対する考えをお話しできればと思っています。

この上野の図書館には一ここは昔、国立国会図書館の上野支部図書館でした一石井さんもよく通っていました。資料を見ると、石井さんが20歳代から、この図書館で調べ物をしていたことが分かります。アメリカの図書館員であるキャロライン・M. ヒューインズ（1846～1927）の *Books for boys and girls; a selected list*—「子どもにとっての良書100選」とでもいうものの増補改訂版—もこの図書館で見付けました。ですから、上野の図書館は石井さんにとって大事な場所だったのではないかと思います。

石井さんは、1954年に初めてアメリカへ行きますが、そのかなり前の1930年代から、アメリカの図書館員や編集者の仕事に注目していました。

私は2、3年に1回くらいの上京でしたが、上京すると、荻窪の石井さんのお宅を訪問し、お話をいろいろ伺っていました。頻繁に伺えないので、首都圏の図書館員に「東京の人はいいなあ、いつでも石井さんのところに行けるから」と言ったら、「図書館員で石井さんのところに行っているのは小寺さんだけですよ」と言われ驚きました。石井さんは、田舎の町立図書館を大事に思ってい

てくださったのだと思い、これは私が図書館員を代表して、石井さんの話を聞かなくてはならないと、お話しされることを時々メモしていました。

また、石井さんから手紙やハガキも頂きました。100通ほどあって、今となっては、貴重な資料です。幾通か紹介できればと考えています。

『資料でみる石井桃子の世界』

石井さんの仕事の話全部すると大体、6時間か7時間かかります。私が平成15（2003）年に浦和で石井さんについて話をしたとき、石井さんから手紙が来て、そんなことは無理だと思えますから、とにかく私のことはあんまり言わないように、「どうぞ事実に基づいて地味にやって下さいまし」と書かれていました。そういうところが石井さんらしいと思います。できるだけ地味に事実のみを話していくつもりです。恐らく今日も全てお話しできないので、お配りした冊子『資料でみる石井桃子の世界』（小寺啓章編著）の中に仕事の全てを書いていますので、お帰りになってからゆっくり御覧ください。

石井さんは、地方にある私の図書館を気遣って、御自分の著書や訳書が出ると必ず「著者謹呈」または「訳者謹呈」として送っていただきました。それがかなりの量になり、リストみたいなものができる面白いのではないかと作ったのが、巻末にある作品年譜です。石井さんは御自分の作品年譜を作ろうなんて絶対に思わないし、また、作ってもらったら困ると思っている人なので、石井さんから頂いた著・訳書を中心に、私が勝手に作った次第です。

石井さんのことば

石井さんとは、私の30歳代の頃からお話していただいたのですが、「石井先生」なんて言うと本当に困られて、「お友達というふうに扱ってほしい」と。とにかく対等でした。

お会いすると「太子町では、今、子どもたちはどうしていますか」と真っ先に尋ねられ、図書館現場での子どもたちの様子、どういう本に反応があるかということに常に興味を持っておられました。子どもへの好奇心が強く、いつも子どものことを考えている方でした。

うれしかったことや楽しかったことを報告しますと、「ああ、それは本当にようございましたね」と丁寧です。石井さんの作品に『いぬとにわとり』（いしいももこ作、やしまみつこ絵）という短いお話があります。犬がニワトリを困らせますが、最後にはニワトリが逆襲するという話です。その場面転換のときに、「次の日はお天気がたいへんようございました」と出てきます。『小さい牛追い』（マリー・ハムズン作、石井桃子訳）でも、「次の日、お天気は、すばらしくようございました」ということばが出てきます。これは一見、古めかしい表現と思われるかもしれませんが、「次の日は晴れだった」と言うよりも、穏やかな日和を迎えたという印象、暖かい印象がありますね。ことばの面白さとともに、だれに対しても丁寧で、穏やかなことばを用いられます。ですから話をしていても、筆記すればそのまま文になる、このまま録音しておきたいようなお話でした。

そして、90歳を過ぎたら、結構、おばあさんなのですけれども、おばあさんに見えないのです。とにかくかわいいのです。本当におかしな話なのですが。そのかわいらしさを最後まで失わなかった。それは石井さんが末っ子として育った、ということもあるのでしょうかね。

石井さんからの手紙

亡くられる何か月か前に石井さんから手紙が来ました。それが最後の手紙になりました。もう代筆でした。私の退職のとき、新聞記事が出たので、記事を後輩の図書館員たちが、図書館報とともに石井桃子さんにも送ったのです（竹内 慥 先

生の自費出版『あなたは、読んでいますか?』の巻末に収録。2010年4月刊)。私は退職したときの挨拶状を出さなかったので、後輩が写真の載ったその記事を送ったそうです。それを見た石井さんからのお手紙でした。それはこういうふうな書き出しでした（『書窓』というのは図書館報です）。

小寺様

先日は太子町の図書館の跡を継いだ方々から「書窓」四月のを送っていただきました。ながい間いつも小寺さんから送っていただく時とちがって、ちょっと心打たれながら拝見いたしました。小寺さんとかわいい子どもの写真、つくづくと眺めいりました。いかにもおじいちゃんとお孫さん、という感じでした。

100歳の方から「おじいちゃん」と呼ばれるのは、内心、抵抗がありますけれども（笑）。それは壮馬君という4歳の子に、私が絵本を読んでいる写真でした。それに続けて、

あなたに置いていかれた人たちがきつとさびしいことでしょう。どうぞ小寺さんの足跡が消えないように、ちょいちょい図書館をお訪ねになって下さい。あなたの蒔いた種が消えることのないように後押しをしてさし上げて下さい。どうぞ精一杯お願いします。（後略2007.5.10）

と、依頼されることがだんだん強くなるのですね（笑）。石井さんは本当に貧乏性な方ですね。御自身「自分がひどく貧乏性で、心配性なのではあるまいかと感じずにはいられなかった」と書いています（『石井桃子集 6 児童文学の旅』p.77）。

退職して、私は35年の図書館員生活がようやく終わったとホッとしていたら、「図書館の後押しを」と書いてあるので、びっくりしました。

早速、手紙を持って図書館に行き、後輩の図書館員たちに「こういう手紙が来たよ」と言うと、「図書館にも石井先生から、おハガキが来ています」と言うのです。見ると、「太子町立図書館を跡継ぎなさった方々へ」と始まります（笑）。

(前略)

小寺さんがご退職になってから、最初の「書窓」を頂きました。朝日の記事、あたたかくいい記事でしたし、まず小寺さんと小さい子の写真がとても気に入りました。この二人の後にとってもよい家庭が控えているような気持ちさえ感じてしまいました。太子町立図書館に来る人たちの雰囲気に含まれているのであれ、という気持ちになりました。どうぞみなさま頑張って、この図書館の将来があたたかく明るいものであるように、お育てになってください。

(後略)

このように、後輩への思いと想像力、後に残された人に対しても気遣いされる人でした。

石井さんの文章にも、石井さんの丁寧な生き方が感じられます。例えば、石井さんのあるエッセイに、雨の日のポストに手紙を入れる話が確かありました。投函のとき、雨の日はしづくで手紙がぬれてしまいますね。万年筆で書かれたハガキや手紙は、雨でにじんで届きます。あるとき石井さんがポストの前を通り掛かったら、ある婦人がタオルでポストの投函口をふいてから手紙を入れる姿を見て感心した、と書いています。石井さんは日常の小さなことをよく「観察」していて自分の心を沿わせる人ですね。

記憶と想像力と観察

リアン・H.スミス (1887～1983) は、『児童文学論』の中で、「私たちおとなが、幼い子どもの知能と性情を親しく知るのには、記憶と想像力と観察によってできるのだと、私には思われる」(p. 203)と言っています。

A.A.ミルンも『今からでは遅すぎる：ミルン自伝』で「私が子どもの心をどう理解するかということに限っていえば、その理解は三つのことを基点にしている」と「観察と記憶と想像力」(石井桃子訳 p. 452)を挙げています。

後でお話しする『幼ものがたり』の記憶と『子どもの読書の導き方』と『子どもの図書館』に見られる子どもたちの様子の観察。観察といっても、私たちの見るものと同じではなく、記憶と想

像力を重ねた着想を見出します。そして、作家としてだけでなく人間としての想像力。この三つの能力、それも、優れた能力をあわせ持った石井桃子という人の人となりを見ていきます。

私は図書館員で、文芸の批評家でもないのに、いろいろな図書資料や書簡を使いながら、お話をしたいと思います。そういう意味では、「資料が語る石井桃子の世界」という話になるということをお断りしておきます。(以後文中、敬称略)

1. 石井桃子の仕事

石井の話をするのは大変難しいのです。本日のタイトルも「石井桃子」としか書きようがないのです。結末でも述べますが、特に石井桃子という人は、本当に分析のしようがない。私の貧弱な言葉では表現できないのです。

ですから、レジュメには石井の書かかれた文章や言葉を入れてあります。私の貧弱なことばによる解説よりも、「石井桃子のことば」を直接読んでもらった方が、石井桃子の本質に迫れると思います。「石井桃子」という人をそっくり楽しめばよいのではないかと思っています。

創作、翻訳、編集、批評、図書館

前半は石井桃子の仕事についてお話をしていきます。『ノンちゃん雲に乗る』のような創作、それから『クマのプーさん』(A. A. ミルン作) や『たのしい川べ』(ケネス・グレーアム作) などの翻訳、これはたくさんあります。また、「岩波少年文庫」の編集、さらに『きかんしゃやえもん』(阿川弘之文、岡部冬彦絵) や『ちびくろさんぼ』(へれん・ぼんなーまん文、ふらんく・どびあす、岡部冬彦絵) といった「岩波の子どもの本」の編集の仕事もありました。それから瀬田貞二たちと研究をした『子どもと文学』という本もありますが、批評の仕事も残されています。最後には、皆さんもよく御存じの「かつら文庫」という私設図書館を作りました。荻窪の自宅で昭和33 (1958年) 年に始まり、今は東京子ども図書館に引き継がれています。

とりあえず便宜的に、創作、翻訳、編集、批評、図書館という五つに分けました。この順を追って

石井桃子の仕事が進んでいるわけではなく、それら五つがいろいろ絡み合って、円環のようになっています。石井の仕事を考える時、子どものための文学、子どものための図書館を、こうした円環から考えていけばよいのではないかと思い、資料を作りました。

① 戦前『幼ものがたり』と『クマのプーさん』前置きが長くなりました。

石井桃子の仕事を追っていきます。戦前、戦中、戦後と大きく三つに分けています。

『幼ものがたり』

レジュメに『幼ものがたり』に書かれた石井の文章があります。

どんなことが、どんな拍子に、子どもの心に深く跡を残すかということは、私には見当もつかない。しかし、その条件については、たいへん興味をそそられる。そして、もうひとつおもしろく思われるのは、いま書いたようなことが、私自身が内がわから外界を見たようでなく、まるでもう一人の私が、自分を外がわから見ていたように、あたりの情景もろとも、心に描けることである。

石井桃子は明治40（1907）年3月10日に浦和に生まれました。6人兄妹—8人いたのですが一番上の兄と一番下の弟は早世しました—の末っ子として育てられました。『幼ものがたり』には、兄姉や父母、祖母、特に祖父について、詳しく書かれています。石井さんにとって「身近な人びと」が、愛情を持って描かれている文章です。

『幼ものがたり』冒頭に「早い記憶」という章があって、「弟の生まれるところを見た」とこのように書いています。

私は、母の胎内からみょうなものがすべりだしてくるのを見た。いま思いますが、そのときの私の感じは、きみわるいでも、いやだでもなかった。ただ見たという事実である。

先ほども言ったように、事実のみが書かれています。事実をありのままに書くのは、石井の特徴で、このことは、後半で話す物語の中のエピソードに表れます。両親や兄姉に聞くと、弟がいつ生まれたかが分かりますが、そのとき石井は1歳数か月でした。ですからこれが福音館書店の『子どもの館』に連載されたとき、本当にここまで記憶が遡れるのだろうか話題になりました。今でもこの本を読むと驚きます。ですが、石井の記憶は、私とは大きく違って、非常に印象深く、絵となって残るのでしょう。

祖父のことは詳しく書かれていて、石井さんは亡くなる前には、おじいさんのことをよく思い出すとおっしゃっていたそうです。その祖父は石井さんが4歳11か月のときに亡くなっています。石井さんは色の白い女の子でしたので、おじいさんは桃子を「桃や」と呼ばずに「たまごや」と呼んでいました。そして「背中がかゆい」と言って、脂っこいにおいのする背中に手を入れて背中をかこうとすると、背中にゆでたまごが入っている、「耳がかゆい」と言うので、のぞいてみると、耳の中に五厘りんせん銭がはまっていることもあったとかね。ユーモラスなおじいさんですね。この詳細な描写は、石井が4歳11か月までのおじいさんとの時間でしたので、石井の記憶に優れていることが分かります。おじいさんからは、昔話をいろいろと聞いていて、それを最晩年まで思い出されていたみたいです。おじいさんの印象が晩年ずっと強くなり、先ほどの新聞記事の私と4歳の男の子の写真を見て、石井さんがおじいさんと重ねられたのかもしれない。そういうところも、石井さんらしいですね。

外側から見る感覚

先ほど「自分を外がわから見ていた」と書かれていましたが、朝日新聞の「自分と出会う」というエッセイも興味深いものです。

現実の自分が、確かに「もうひとり」の自分によって外から見られたと思える記憶が何度かある（中略）その目は、ピントの合った写真のようにその場の様子を映しだす。（中略）

人間の心には何かの衝撃を感じたとき、外側から自分の姿をかつちり捕らえ、その記憶を一つの通過儀礼、または生きてゆく支えとするような力が備わっているように思えてならない。

これは『石井桃子集 7 エッセイ集』(p.252)にありますので、読んでみてください。こういう感覚の持ち主なのです。この会場にも「私もそういう感覚がある」という方もいらっしゃるかもしれませんが。私は全然無いのですが。

子どもの感覚

石井桃子は、浦和の埼玉県立女子師範附属小学校に通います。今の浦和駅のすぐ近くにその小学校がありますから、浦和の北のはずれにある自宅からはかなりの距離です。子どもの足では30分はかかると思います。ある文章の中で、こういうふうに書いています。

小学校時代、町はずれの家から、これも反対がわの町はずれの学校まで、幼い足にはかなり遠い道を「アラビアン・ナイト」や「鉢かつぎひめ」に読みふけりながらいったり来たりした。「とびたとうとする鳥」家庭文庫研究会会報昭和25年4月)

当時の小学校には珍しく学級文庫があり、巖谷小波の『日本昔噺』や「世界お伽噺」があったそうです。

あるエッセイに、「年をとると、ごく幼いころの記憶の断片が、ひょいひょいと心に浮かび、それといっしょに、そのできごとの周辺をふりかえり、いわば老人の目でいろいろ思いめぐらすはめになることが度々である」という書き出しで、4歳のときのことを書いています。

私が満四歳のとき、二歳年上の姉が小学に入学するという、私にとっての大事件がおこった。姉は、もう朝から家の内外をぶらぶら遊び歩く風来坊ではなく、目的をもつえらい人になったのだと、私は思った。

そのころ、私は、「来年」と「さ来年」の区別

を、心ではわかっていた。しかし、口がまわらないため、両方の年をひっくるめて、「来年」とよんでいた。そして、「来年は私も学校へ行く」と、ひとにも言っていたらしい。

ところが、ある日、ひとりの大人からそのまちがいを指摘された。そのときの私の無念の思い！なぜなら、私はちゃんと「さ来年」を意味していたのだから。なぜその大人は、それがわからないのかと、私は思った。

(『こどもとしょかん66』1995年夏号 東京子ども図書館)

自分ではそれを意味して言っているのに口にすることができない。自分の頭の中では分かっている。分かっているけれど、音として、言葉にして表現できない。この子どもの感覚は私たちにもあったのではないのでしょうか。石井は、こういう幼い時の感性を失わなかった人なのです(参照:「さらいねん」『石井桃子集 4 幼ものがたり』p.134-135)。

これは、子どもと本との関係を考える場合に、大変重要です。子どもたちに絵本や『クマのプーさん』、『たのしい川べ』を読んでやる、お話をする、それによって子どもたちは頭の中にある意識を、物語に通じる豊かで正確なことば、文学のことばで伝えられるようになります。このことから、子どもたちに本を読む、ストーリーテリングをする図書館員の仕事の重要性が分かってきます。

石井は、「なぜ大人は分からないのか」と書いています。こういった機会に、もう一度、私たちの中にある子どもの感覚を取り戻していきたいと思えます。そういう子どもを理解するヒントは石井の『幼ものがたり』やエッセイ集の随所にあります。私たち自身が『幼ものがたり』やエッセイ集を読むことによって、改めて自分自身の幼年時代と向き合うことができる。これは一つの文学的な体験でもあると思えます。こういった子どもの感性、後でお話しますが、非常に「鋭敏な視力と聴力」を石井桃子は持っていたと思えます。

文藝春秋社での仕事

成長して、石井桃子は、日本女子大学校に通います。目白の日本女子大の裏に菊池寛が住んでいました。菊池は高松出身で、高松市立図書館の3階に菊池寛記念室があり、菊池寛が書いた本や編集した本が並んでいます。そこに「菊池寛を語る」というビデオがあり、石井さんが菊池寛について語る映像が約30秒あります。高松へ行かれることがあったら御覧ください。石井さん—80代後半でしようか—の声が聞けます。

当時、菊池寛は、津田英学塾や日本女子大学校などを出た女性たちを募集して、文藝春秋社に「文筆婦人会」を作り、作家の口述筆記や原稿の清書、蔵書整理のため派遣していました。蔵書整理は1日3円でした。菊池寛の経営の才があるところだと思います。石井も菊池の下で、外国からやってくる雑誌や小説の翻訳をしていたといいます。菊池寛は、「小学生全集」という88巻の叢書を白秋に対抗して2年間で出しました。表紙は菊池寛識あるいは芥川龍之介識となっていますが、2年間で88冊を二人で訳すことは不可能ですから、女子大を出た女性たちが訳していたというわけです。

昭和の初め、文藝春秋社は『モダン日本』、『婦人サロン』など、半年に1回くらい新しい雑誌を創刊するという時代で、勢いのあるときでした。石井も文藝春秋社に出入りしている間に正規の社員になりました。昭和5～6（1930～1931）年ではないかと言われています。

当時、『婦人サロン』の編集者だったのが、永井龍男でした。のちに作家となります。その編集部には石井桃子がいました。永井龍男は、後年こう書いています。

私が文藝春秋社に入社出来たのは、ちょうどこの頃に当り、「小学生全集」編集部に所属を命じられた。翌朝、和室二間続きの同部へ新参者として加えられた。昭和二年、私は二十三歳の未熟者であった。それと云うのは、女性ばかり同室六七人の中に加わって、どこへ顔を向けて好いのか戸まどい、息苦しくて廊下へ逃げ、邸内を行ったり来たりした。勤めとは、このように周囲の人々に気をかねるものかというのが初

経験であった。後日当時を振り返って、美人が多かったからそれに気圧されたのだとやや余裕を持って回顧した。その一日限りで、私は別の部署に移してもらった。

（『東京の横丁』永井龍男著 p. 225）

女性ばかりで逃げ出した、という感じですね。「才媛の名に相応しい美人ぞろいでもあった」（p. 101）とも書いています。先の文に続けて、

これらの女性のうちには、後日望まれて作家の夫人になった人も数人に及んだが、ただ一人このグループに「童女」がいて、児童文学に生涯を籠めた。石井桃子氏と云えば、現在も専心児童文学に励まれていることはいまさら口にするまでもない。（『東京の横丁』 p. 225）

この「童女」という表現が面白いですね。辞書を引くと「子どもっぽい女」とあります。石井には、当てはまらないと思うのですが、この「童女」というのを覚えていてくださいね。

小里文子と『熊のプーさん』

『文藝春秋三十五年史稿』という本に、昭和6（1931）年頃の編集部の写真があり、20代半ばの石井が写っています。回覧します。そこにもう一人、和服を着て、少し前髪を垂らした目の大きな美しい女性がいます。『幻の朱い実』に登場する大津路子おおつふきこのモデル、小里文子おりふみこという人です。どちらも F.O です。昔の小説家は、イニシャルを合わせたりしたのです。この女性は、信州の松本市の初代市長、小里頼永よりながの娘です。小里頼永は30年も松本市長を務めた人で、松本城が国宝になるために奔走しました。小里文子は日本女子大の1年先輩だと思います。文藝春秋社で会って、後に文子は結核で亡くなるのですが、彼女のためにも石井は『クマのプーさん』を訳しました。小里文子がいなかったら『クマのプーさん』の翻訳はなかったかもしれません。

時間が前後しますが、石井桃子が日本女子大を卒業するかしないかの頃だったのではないかと思うのですが、犬養家では、漢籍の整理に困り、手

伝う人を捜して、石井が行くことになりました。犬養道子の『花々と星々と』には、石井の20代前半の姿が出てきます。引用が長くなりますが読みます。「お祖父^{たける}ちゃま」というのは、犬養毅、「父」は犬養健のことです。

彼は決して見かけほどひまな「植木屋」ではなかったのである。そしてまた、四ツ谷に移り住んでからは、彼の腹心の秘書となった父も、書物は大の好きながら、蔵書整理を手つだうひまはとても持てないのであった。

「たれかよい人はおらんかの」

私たちの家の茶の間の、長火鉢の向うからお祖父^{たける}ちゃまが父にそう言ったのはいつごろだったろう。

「漢文は出来ぬでもエエ。図書の好きな人ならエエわ」

(中略)

「聞いてみますよ」と父は言った、「菊池にでも聞いてみますよ。きっと見つかりますよ」

菊池とは、文芸春秋の菊池寛さんのことだった。そしてある日「お父さん、いい人が見つかりましたよ。菊池君が、あの人なら、と、いろいろ探したりしらべたりしたあとで、太鼓判を捺してくれましたよ」

「おお、そうか」とお祖父^{たける}ちゃまは、ビスケットの罐をひっぱり出して数えたときのような可愛い笑顔を見せた。

「その人はいつ来るね」

「お父さんのいいときに。いつでも」

「おお、そうか。それは有難い」

その人の来たその日を、私は決して忘れない。有難いのはお祖父^{たける}ちゃまだけにとどまらないことまではまだ予測しなかったけれど。

その人との出会いのおかげで、その後の長い歳月をどれほどにか豊かなものにされた母にとって、父にとって、私にとって、弟にとって、その日は記念すべき日であったのである。

どうにも手がまわらず、ぎっしりの書物がただ積み重ねてだけあった「土蔵」と呼ばれる書庫のみが、その人の恩恵を受けたのではなかった。

母が先ですね。これはこの後の伏線になります。

意外に若い人だった。

もっと意外だったのは、女の人であったことで。海老茶の袴をはいていたとは、私の記憶ちがいかしらん。

「石井桃子です」

と、その人は、それこそお祖父^{たける}ちゃまの丹精の、バラのように薄ら紅い頬に笑みを湛えて自己紹介をした。若々しいが地味であった。地味だが明るかった。清潔で温かかった。

「これはいい人にちがいない」少女の直感で私はそう思った。

背中を丸めた老人と、日本女子大を出た若い桃子さんとの取合わせは、ことにそれが漢書を仲だちにしてのものであるだけに、ちょっと見には異様でもあった。

が、彼女が来るようになってから、お祖父^{たける}ちゃまのどこかしらにまつわっていたあのあわれっぽい雰囲気、さっぱり取れてなくなったのを私はじきに発見した。それも、桜の花びらの舞う季節であったと憶えている。最後の重い任を負って死んでゆく、ほんの僅か前のことだった
(『花々と星々と』犬養道子著)

「若々しいが地味であった。地味だが明るかった。清潔で温かかった」いい表現ですね。これは全く変わりません。生涯このとおりだったと思いますね。

この後、昭和7(1932)年5月15日、首相官邸を襲撃した将校たちの手に掛かって犬養毅は殺害されます。五・一五事件です。このとき石井は、官房長官官邸に駆け付けています。

私が石井さんの来歴に興味を持ったのは、1984年5月に石井さんが太子町立図書館に初めて来られ、翌日、隣の龍野の町を案内したときです。兵庫県たつの市は三木清という哲学者の出身地です。三木清の歌碑の前で、石井さんがポツリと言うのです。「三木さんには岩波でお会いしましたよ」と。三木清は、昭和20(1945)年9月26日に豊多摩刑務所^{かいせん}で疥癬で亡くなりました。敗戦後の

三木清の死をきっかけとして、たくさんの人が解放されたわけですね。このことばを聞いたときに、この人は、近代の歴史を生き、出版文化の中で、著名な文人との関わりがあったのだ、ということを知ったのです。

さて、五・一五事件の翌年、昭和8（1933）年12月のクリスマスに、石井さんが犬養健邸を訪れたとき、クリスマス・ツリーの下に、ミルンの*The house at Pooh Corner*（『プー横丁にたった家』の原書）が置いてあり、それを犬養道子さんと康彦さんの姉弟がせがんだので、その場で読んで聞かせました。即興で訳しながらと、これもまた、すごいことなのですけれどもね。康彦さんが面白がって転げ回ったとあります。不可思議な、あたたかい世界にスーッと入ったということを「プーと私」というエッセイなどに書かれています。

これが、プーとの最初の出会いでした。

この『クマのプーさん』のお話は、小里文子が病床に伏したときに、少しずつ訳して読んでやりました。すると、文子は、聞くだけでは満足しないで、紙に書け、と言います。

誰でも行くといふ三途の河原といふところへ私も行ったら、幼くして亡くなった子供たちを集めて、幼稚園を開きたい。でも、その時、プーが日本語を話してゐないと、私はどもつてしまいます。

と、『熊のプーさん』（岩波書店 昭和15年）の「あとかぎ」に出てきます。

「日本少国民文庫」

文藝春秋社にいたのは4年ほどだったと思います。毎月出る雑誌を担当するというのは大変だったようです。昭和8（1933）年12月に退社しました。辞めるとすぐに、「日本少国民文庫」（全16巻）という叢書を新潮社から発行するからと、山本有三や吉野源三郎から声がかかり、「日本少国民文庫」編集部に入ります。

山本有三は編集者として非常に厳しかったようです。吉野源三郎が、今度こそはと原稿を持って山本に伺うと「ダメ、落第！」と言われてがっか

りしたそうです。石井さんは、この山本有三の、子どもにこそ優れた本をと願う編集態度、編集センスをよく観察して、学んだと思います。

文藝春秋でもそうでしたが、この編集部でも多くの作家、文人のいい文章に出会いました。「日本少国民文庫」13巻の『文章の話』は里見淳^{とん}が書いていますが、校正で読み合わせを徹底するそうです。その編集部で原稿を校正することにより、「いい文章に出会ってきた」、「句点、読点ひとつでもうるさかった」と聞きました。石井さんから、「里見淳などは文章の呼吸が分かる」と聞いて感心したことがありました。これらの仕事から、文章作法はもとより、句読点の打ち方まで学んだことは大きかったと思います。その後の石井桃子の創作や翻訳の文章の基礎をなしたと思われるからです。

第1巻の『人間はどれだけの事をして来たか。1』の著者、法哲学者の恒藤^{つねとうきょう}恭は、本が出来たとき、「今まで作ったどんな本よりうれしかった」と石井への手紙に書いたそうです。

石井自身も「日本少国民文庫」15巻『世界名作選。2』（山本有三編纂）で「一握りの土」（ヘンリ・ヴァン・ダイク著）と「わが樞犬ブリン」（サー・ウィルフレッド・グレンフェル著）を訳しています。国際子ども図書館には、こうした古い本が所蔵されているので紹介できます。この2冊は1998年に新潮社から復刊されました。

この貴重な図書についてはデジタルアーカイブが進められて、かなりの本がこれからはネット上で見られるようになると期待しています。私のように地方にいる人間にとっては、上野へ来て、あるいは、神田の古本屋へ行ってとわざわざ上京しなくても、在宅でごく簡単に見られ、調べられることになるのは有り難いことです。

アメリカやイギリスでもデジタルアーカイブが進んでいまして、昨年（2009年5月）出た『児童文学論：瀬田貞二子どもの本評論集。（上巻・下巻）』（瀬田貞二著）を作るときも、ニューヨーク公共図書館や大英図書館で調べたりしました。

②戦中 白林少年館と『ノンちゃん雲に乗る』

白林少年館

さて、戦中に入ります。その頃か、もう少し前からでしょうか、石井桃子は子どもの図書館を作りたいと思っていました。かつら文庫は昭和33(1958)年からですが、実はそれより20年も前に子どもの図書館を試みているのです。

それが白林少年館という子どもの図書館です。昭和12(1937)年から昭和13(1938)年にかけての30歳くらいではないかと思うのですが。

白林少年館について、石井は、家庭文庫研究会の会報の創刊号(昭和25(1950)年4月)に「とびたとうとする鳥」という文章を書いています(『資料でみる石井桃子の世界』p. 9に一部掲載)。

いつごろ、私の頭にそういう考えが生まれたのか、私にもわかりません。とにかく、子どものためのたのしい図書室というものは、ここ二十年ものあいだ、いつも私の頭にえがかれていました。

それは、「夢」などということばを使うには、あまりに平凡で、毎日的なすがたをもっていました。具体的にお話しするなら、それはあまりりっぱすぎない、あまり広くない、ひとつの部屋でした。そして、部屋の一つのがわは本棚になっていました。本棚の前には、子どもがいく人かいて、坐ったり、ねころんだりして、本を読んでいます。私の頭のなかの子どもたちは、おぎょうぎとは、あまり関係がありません。ただし、おぎょうぎなどは忘れて、本に読みふけているというのが、私の図書室の不可欠の条件になっていました。

(中略)

こんなことを考えるのは、私ひとりではない証拠には、もう二十年近くまえ、私が、ある夫人にこの話をしたら、その人は、即座に、その人のもっていた借家を、一軒無料提供してくれました。私は、それこそ夢中で、本をかき集め、家の掃除をし、壁に絵をはり、そして、子どもをかき集めました。

土曜日ごとに、子どもが本をよみに通ってくるようになりました。

しかし、それは、もう中国との戦争がはじまっている頃でした。つぎつぎにおこる悪条件のため、すべり出した小図書室は、何ヶ月かでおしまいになりました。

「ある夫人」とは犬養伸子のことです。犬養毅の息子の犬養健は衆議院議員でした。戦後に造船疑獄で指揮権を発動した一指揮権を発動したのは、日本ではこの1回だけですーときの法務大臣です。この人の奥さんが犬養伸子で、伸子とは親交が続きます。四谷にある犬養家の借家だったのか、書庫か離れだったのか、はっきりしませんが、伸子の世話で、そこを借りて図書館を開きます。

このとき、白林少年館に出版部をつくり、子どもの本の出版も試みます。石井は、岩波書店に入った吉野源三郎に出版の相談をし、吉野の紹介で現れたのが小林勇でした。

話半ばにあらわれたのが、小林勇さんであった。その日、小林さんは、すでにどこかで大分聞こし召していらしたらしく、部屋にはいつてくるなり、きげんよく、大声で話しはじめた。しかし、話の内容はきびしく、

「あんた方、いまの時世に、なに、ばかなことをやろうとしているの。そんなことができる時代じゃないんだよ。とにかく、やめなさい」これが、小林さんの話の主旨であった。

(中略)

私たち女三人の出版社は、小林さんの忠告にも拘らず、細々とはじまり、しょぼしょぼとしぼんだ。

(「あたたかいひと」『回想小林勇』 谷川徹三、井上靖編 p. 22-26)

出版社はつぶれたけれども、白林少年館出版部は、2冊の本を出しました。『たのしい川邊』と『ドリトル先生「アフリカ行き」』(ロフティング著)です。それぞれ、訳を中野好夫さんと井伏鱒二さんに頼みました。よい本がないのならば自分で作ればよい、手に入らないのだったら、自分が作って子どもに提供する、それはごく当然でしょう、というのが石井の素朴で素直な考えだったと思い

ます。

『熊のプーさん』、『プー横丁にたった家』

ちょうどその頃（1940年～42年）、『熊のプーさん』、『プー横丁にたった家』が石井桃子訳で岩波書店から出版されました。初めての本です。『資料でみる石井桃子の世界』の口絵の2冊です。国際子ども図書館の蔵書にはないので是非収集して、公開してほしいと思います。

この翻訳について、『ふしぎの国のアリス』（ルイス・キャロル作）やアロワ・カリジェの『大雪』（ゼリーナ・ヘンツ文）を訳し、詩人で東大の独文の先生でもあった生野幸吉は次のように書いています。

石井さんの『クマのプーさん』は、児童書の翻訳のなかで私の知るかぎり、もっともすぐれた文体を持つものだと思う。プーさんの唄をはじめとする、さまざまな形のユーモアが、ひとりで読むものの心に入ってくる、いわば、完全にひとり立ちした本である。子供という存在に対する石井さんの没頭については言うまでもないが、原文に感動しながらそれをじかに子供たちに訳してきかせるという、ほとんど創作行為そのものような場のなかで、あの文体はおのずと生まれたものだろう。さらに言えば、一々を指摘はしないが、あの文体には、児童書の規矩を逸脱するといってい、石井さん独特の言い廻しや、破調、破格が読んでゆく先々にあり、それが全体を新鮮で大胆なものにしている。

（生野幸吉「遠いこと近いこと」『幼年時代』第4号 1978.3）

「規矩」は「コンパスと定規」という意味で、そういう枠のことを言っているのです。

そして、瀬田貞二はこう書いています。

真の新風革命を樹立した（中略）それは、ほとんど創作といたいほど内発的な共感をくぐってしなやかな翻訳を生み、戦後もいくどか版を新たに、今日私たちの前に生きている。

今日の新しい児童文学の作家のほとんどが石井訳のプーの洗礼を受けてから生まれたことを考えれば、この本の誕生を革命とよんで過ちでなからう。

これは『児童文学論：瀬田貞二子どもの本評論集、下巻』にも収めてあります（p. 144-145）。

『クマのプーさん』の訳文は、当時とほとんど変わっていませんから、それを今も私たちは楽しむことができます。

戦中に『たのしい川邊』、『ドリトル先生「アフリカ行き」』、『熊のプーさん』、『プー横丁にたった家』の4冊の出版は、特筆すべきことでした。

『ノンちゃん雲に乗る』

戦争末期、石井桃子は荻窪で『ノンちゃん雲に乗る』を執筆していました。山本五十六が戦死した頃といえますので、昭和18（1943）年4月頃です。そして戦後その本が出るのです。『ノンちゃん雲に乗る』についてはレジュメ「②戦中」に、光文社版の「あとがき」を引用しました。

あるくもつた日、わたくしは高台のある駅の、高いプラットホームに腰をかけて、電車を待つていました。走ってくる電車の上に、きゆうに日がさして、パッとかがやき、電車はその光をのせたまま、わたくしのほうへ突進してきました。わたくしは目がくらみそうになり、その光の中に、さいしょのノンちゃんを見たのです。（『ノンちゃん雲に乗る』光文社 昭和26年4月）

戦時中の非常に貧しく、いろいろ統制のある時代に、「あるつましい社宅の中の路地を通りかかると、四、五人の女の子が、一人は小さい台の上に立ち、あとは手をつないでその台をめぐり、忘我の状態でおどっていた」（『石井桃子集 7』p. 127）。光り輝く雲とおどる子どもたち、この二つの出来事が心にしまわれ、『ノンちゃん雲に乗る』の執筆につながったそうです。

「ノンちゃん」を書くには、六か月ぐらいかかったらうか。私には、私ひとりの家で、時間を惜

しんで、わら半紙のような原稿にせっせと書きつけたという記憶しかない。私は、そのころ、いまもいる荻窪のおなじ場所にあった、山小屋のような家に住んでいた。庭の木は、たきぎにし、あとには野菜をうえ、晴れた日には、隣家のひとと、その小さい畑をいっしょうけんめい耕した。

空は青く、雲は白かった。あんなに心にしみる青空や白雲を、その後、見たことがないような気がする。私の働く場は、だんだんせばまり、私は心屈していたので、酸素不足の金魚のように、空をあおいであっぷあっぷした。雨の日など、じっと考えているとからだは透明になってくるような気がするのだった。

(『ノンちゃん雲に乗る』あとがき 角川文庫 1973)

と書いています。

このお話は、兵営にいてやはり心屈していた友人を慰めるために書き、ひとまとまりすると、郵便で原稿を送ったそうです。友人は「読んでいるときだけ人間になっている」と言い、わら半紙様の紙に書かれた原稿は、回し読みされたそうです。

敗戦後、石井桃子は宮城県の栗駒山のふもとで開拓をしていましたが、その原稿を吉田甲子太郎が尋ね、「最後のところだけ書き直してとどけ」るようにと要請されました。

昼は百姓仕事、夜は薄暗いランプの下で、長い間心に育んだ題材を、コツコツ1枚2枚と書きためていきました。山に入って2年目、実業之日本社の『赤とんぼ』編集部の藤田圭雄に宛てた石井桃子の手紙です。

けふへとへとになって畑から戻って来たらお手がみでした。納屋の前に干しておいたソバ、大豆、小豆などをむしろにくるんで納屋にしまひ、庭をはきながら、片手にお手がみをにぎり、夕暗にすかしすかし拝見しては有りがたう有りがたうを心の中でくり返しました。

(中略)

いろんなことが思い出されました。でも一ばん心に強く来たのは、この冬、零下十度にもなる

掘立て小屋で、夜、とぼしい石油を使うことを友人に気がねしながら、おそくまで、ノンちゃんのおしゃべりを一言一句もあやまたずに写し取ろうとがんばった一月のことです。

さらにその手紙の中頃に、

ノンちゃんが本になるのを骨折って下さった方々には、きっとノンちゃんが御恩返ししてくれるでしょう。私は出来るだけのことをしたのですから。こう申上げれば、親馬鹿だとお笑いになるでしょうか。

(1946. 10. 16 神奈川県近代文学館所蔵)

山村で働きづめでしたが、手応えのある暮らしを送っている、その真剣さが伝わってくる手紙です。田舎は大切に、人間的なものを引き出し「してくれる」といつか私は伺ったこともありました。

この原稿を藤田圭雄が預かり、野上彰が大地書房という出版社を始めたとき、一番先に持ち込んだと光文社版の解説に藤田は書いています。

昭和22(1947)年2月20日、一種の児童文学ブームの中で『ノンちゃん雲に乗る』は大地書房から出版されました(装幀・松本かつち 挿画・桂ユキ子)。

③ 戦後 多彩な仕事—編集・翻訳・批評・図書館・創作

敗戦後、平和が訪れ、石井桃子の仕事が多彩になります。

また時間が前後しますが、たまたま昭和20(1945)年8月15日、石井は、宮城県の栗駒山のふもとに開拓するために入っていました。38歳です。農業はやりがいはあるが、それだけではやっていけない。『少年少女』、『銀河』などの雑誌に作品や翻訳を发表或し、『ティモジーの靴』(J.H. ユウイング作)を翻訳したりしていました。また半年に一度ほど、宮城から上京し、岩波書店の小林勇や吉野源三郎に、百姓より「するべき仕事がある」と言われていました。

「岩波少年文庫」

編集者としての仕事の話に入ります。

1950年5月、石井桃子は、小林、吉野から勧められ、岩波書店編集部へ嘱託として入ります。43歳でした。組合が了解していなかったため、編集部の隅っこに置かれたデスクで、石井は仕事をしましたそうです。

重要なのは「岩波少年文庫」の創刊です。そのころ、岩波書店では、少年少女読物百種委員会（吉田甲子太郎ら委員11名）を作り、「悲惨な戦争と戦後の混乱の中から新しい将来を開こうとしている少年少女諸君の健康な成長のために、日々の糧となる読み物を百種選定して、広く推せんしたい」として、田中美知太郎や、清水幾太郎など知識人からアンケートを集約して「少年少女読物百種」を選定しようと企画したのです。

入社したばかりの石井桃子も少年少女読物百種委員会の会議の末席に連なって発言もしたそうです。その結果は『図書』1950年12月号の特集になっていて、『少年少女読物百種』選定経過報告」と「少年少女読物百種委員会選定目録」（リスト）が出ています。

外国篇33点、日本篇67点の100タイトルを決定。この100点とは別に、「世界的にすでに声価の決定しているものを児童読み物の古典として百種から分けて別に推せんするという方法」を採り、その外国古典篇が60点で、合計160タイトルの作品を挙げています。

「喜びの訪れ」

ところが、ここからが興味深いところですが、石井は少年文学の叢書の企画編集を任せられると、この百種リストにとらわれませんでした。

あのなつかしい岩波書店旧館の大きな教室のような編集部の部屋の片すみに「少年文庫編集部」のための机が、たった一つおかれた日のことである。

岩波書店の首脳部の人たちと編集会議をしたという記憶はない。私にはそのみんなと離れた一つの机で、『宝島』『ふたりのロッチェ』『あしな

がおじさん』……と、私が読んで楽しめる本、私にとって「喜びの訪れ」と感じられる本のリスト作りに熱中していったということだけが確かなのである。

（「喜びの地下水」『図書』493号 1990.7）

これが石井さんの面白いところですね。偉い人によって選定されたはずの「少年少女読物百種」を顧慮せず、自分にとって「『喜びの訪れ』と感じられる本」、「私が読んで楽しめる本」を自分一人でリストアップします。

アメリカ、ハートフォード市図書館のキャロライン・M.ヒューインズの話は、この上野の図書館で調べていたと冒頭にお話ししました。石井は、昭和25（1950）年の『図書』15号に「子供のためのブックリスト、ふたつ」というヒューインズについてのエッセイを書いています。これは最近復刻されて読めるようになりました。（『児童文学の戦後：1946-1954』（現代児童文学論集；第1巻）日本児童文学者協会編）

彼女（ヒューインズ）は、こういう本を全部、書棚からとりのぞき、あとを自分が良書と認めた本でおぎなってゆくという許可を館長からとりました。（『図書』15号 1950.12）

石井さんも勇気付けられたと思います。

これは、数年後の話ですが、リリアン・スミスも、「トロントに帰って、まず最初にしたことは、何だったか」という石井の質問に、こう答えています。

図書館の棚にある、気にいらぬ本を、全部すててしまうことであつた。すててしまうと、棚はがら空きになつたから、そのあとに、これこそという本を、一冊一冊、時をかけてうめてゆくことであつた。

（『児童文学論』あとがき p.393）

二人とも、並んでいるひどい本を取り除き、そこに、これこそ子どもたちにとつた本を、1冊1冊、時間をかけて選んで並べるという方法を採

りました。

岩波少年文庫の編集

昭和25(1950)年、岩波書店は、「岩波少年文庫」を5冊創刊しました。その年のクリスマスに出た『宝島』(スティーブンソン著、佐々木直次郎訳)、『あしながおじさん』(ウェブスター著、遠藤寿子訳)、『クリスマス・キャロル』(ディケンズ著、村山英太郎訳、佐藤敬絵)、『小さい牛追ひ』(M.ハムズン著、石井桃子訳)、『ふたりのロッチェ』(ケストナー著、高橋健二訳、ワルター・トリヤー絵)の5点です。

この5冊は、僅か3か月で2万部が売れたと言われていて(一説に3万部とも言われています)。当時重役の小林勇や長田幹雄も喜んでくれたそうです(注1)。

その頃、石井桃子は岩波書店を訪ねてきた瀬田貞二と初めて会うことになります。この経緯については、斎藤惇夫著『子どもと子どもの本に捧げた生涯：講演録瀬田貞二先生について』の「石井桃子と瀬田貞二の出会い」(p.41-72)に詳しいのでお読みくださればと思います。また「瀬田さん」という石井の追悼文の中にも出てきます。

「岩波少年文庫」は、現在まで5回装丁を変え、2000年に創刊50周年を迎え、造本、装丁などを一新して刊行されました。『宝島』の訳者も、佐々木直次郎から阿部知二になり、現在は、海保真夫と訳者が変遷しています。

創刊の5冊に続いて、翌年昭和26(1951)年3月から⑥『牛追いの冬』(M.ハムズン著、石井桃子訳)、⑦『りこうすぎた王子：プリンス・プリジオ』(A.ラング著、光吉夏弥訳)という具合に、以降毎月2冊ずつ刊行していきます。少年文庫出版のノルマは1か月に2冊でしたから大変だったようです。

後年、石井はこう語っています。

そのころ岩波では組合が強くて、朝九時に行って午後四時には仕事をやめなくちゃいけないというので、家へ持って帰って夜やって、そして朝の六時から起きて、行く前に仕事しましたよ。ほんとに机に向かっていない時がなかったよう

な気がするの。

(『図書』1995.6)

「一生懸命やりました。闇雲に」と自分で語るほど働きました。昭和29(1954)年5月の退社まで、4年間に、岩波少年文庫は76巻になっていました。

石井自身の翻訳も、創刊の『小さい牛追ひ』、翌年3月の『牛追いの冬』に続いて、11月の『ゆかいなホーマー君』(マックロスキー著・絵)、『トム・ソーヤーの冒険』(マーク・トウェイン著)、『ハンス・プリンカー：銀のスケート』(M.M.ドッジ著、ヒルダ・ファン・ストックム絵)、『とぶ船』(H.リュイス作、ノーラ・ラヴリン絵)と編集部在籍中に6点あります。編集と同時に翻訳という、並みの編集者では考えられない仕事をしています(注2)。

「岩波のこどもの本」

この間に小型版の絵本の企画と編集が始まりました。岩波書店は、外国絵本の蒐集家だった光吉夏弥の協力を得て、昭和28(1953)年12月、「岩波のこどもの本」シリーズの6点を創刊しました。

「岩波のこどもの本」(後、「岩波の子どもの本」)は、当時から現在までほぼ同じ判型です。「岩波少年文庫」と同様、廉価で普及をとというコンセプトでした。「岩波のこどもの本 幼・1・2年向け」(平均64ページ)が130円、「岩波のこどもの本 3・4年向け」(平均96ページ)が150円でした。38年前、私が図書館員になったとき(1972年)は、若干値上げされ180円と200円でしたが、安いお陰で『ひとまねこぎる』(エッチ・エイ・レイ文・絵、岩波書店訳編)、『ちいさいおうち』(ぼーじにあ・りー・ぼーとん文・絵、岩波書店訳編)や『きかんしゃやえもん』、『かにむかし』(木下順二文、清水崑絵)など同じ本を何冊も購入でき、子どもたちに渡すことができました。年間の図書購入費が、全体で70~80万円だった図書館で働く地方の図書館員にとって、二つの叢書でどんなに助けられたか分かりません。後年、この判型は、しばしば原書と異なると批判されましたが、石井桃子も「日本では安くすることが多勢の人に普及することになるので、安くすることを真剣に考えました」と述べています(『月刊絵本』)。現在は、大型絵本

も出版されています。

昭和28(1953)年12月の創刊は『ちびくろさんぼ』、『ねずみとおうさま』(岩波書店編、土方重巳絵)、『みんなの世界』(マンロー・リーフ文・絵)、『スザンナのお人形・ピロドウさぎ』(マジョリー・ピアンコ文、高野三三男絵)、『山のクリスマス』(ルドウィヒ・ペーメルマン文・絵)、『ふしぎなたいこ：にほんむかしばなし』(岩波書店編、清水崑絵)の6点です。

翌昭和29年4月には、第2回の配本として、6点出しています。こうして、1年間(1953.12.10～1954.12.10)に4回配本して24冊刊行したわけです。24冊のうち、光吉夏弥が13冊を翻訳し、石井は、11冊を担当しました。『ふしぎなたいこ：にほんむかしばなし』、『おそばのくきはなぜあかい：にほんむかしばなし』(岩波書店編、初山滋絵)、『ねずみとおうさま』、『スザンナのお人形・ピロドウさぎ』、『まいごのふたご』(あいねす・ほーがん文、野口弥太郎絵)、『ちいさいおうち』、『うみのおばけオーリー』(マリー・ホール・エッツ文・絵)、『どうぶつのかどもたち』(サムエル・マルシャーク著)、『百まいのきもの』(エリノア・エステーズ文、ルイス・スロボドキン絵)、『こねこのぴっち』(ハンス・フィッシャー文・絵)、『ツバメの歌』(レオ・ポリティ文・絵)で、9冊が翻訳、2冊が日本の昔話です。

「岩波のこどもの本」でも、これだけの仕事をしていますから本当に忙しかったと思いますね。そういうところから、「岩波少年文庫」と「岩波のこどもの本」は創刊、編集されたのです。

最近、45年前の石井さんの翻訳を見付けました。イーディス・ネスビット(Edith Nesbit)の「線路ぎわの子どもたち」という作品です。『子とともに』という愛知県の教育雑誌に連載されたものでした(注3)。完訳ではありませんが、なかなか味のあるお話です。これは余り注目されず、石井さんも忘れていたのではないかと思います。

さて、石井さんの来歴を話すと時間が無くなって、あと僅かな時間になってしまいました。「無理ですよ」と言われたのは、本当だと思いますね(笑)。

2. 子どもの図書館—よろこびの地下水

では、石井桃子は、子どもの図書館や子どもの文学について、どういうふうにかえたのかということを書いていきたいと思います。

ずいぶん前、私はふたつのことをしたいと考えていた。一つは、小さい農場を経営することと、子どもの図書室をつくることだった。

(「子どもの本屋」1952『石井桃子集』7 p.3)

こう書いているように、石井は、戦前から子どもの図書館を開くことを常に考えていました。

昭和29(1954)年5月に岩波書店の編集者を辞め、8月に子どもの本の出版事情や、子どもの図書館の活動を見るため、ロックフェラー財団の支援で1年間アメリカに行きます。この事情は『児童文学の旅』の冒頭に出てきます。

そして、帰国後、いよいよ「かつら文庫」を開きます。昭和33(1958)年3月1日です。石井桃子51歳直前でした。1930年代後半に一度、児童図書館「白林少年館」を試みましたが、時局悪化のため挫折していました。かつら文庫の最初の7年間の記録が岩波新書の『子どもの図書館』です。これを読んで図書館員になった、という方が本日の会場にもいらっしゃいましたね。

“How exciting! How challenging!”

『子どもの図書館』の後半に、英米の児童図書館員が登場します。このところは、駆け出しの図書館員であった私には、大変印象的でした。

アメリカで、石井が児童図書館員たちに、日本の貧しい公共図書館事情を嘆いたとき、彼女ら外国の児童図書館員の反応は予期せざるものでした。

国の公共図書館にたいする無理解、図書館の不足、よい本の不足、国語国字問題などについて、苦情をならべ、なげいてみせたものでした。

そういう時、外国の児童図書館員たちが示す反応は、私をかなりおどろかせました。彼女たち—というのは、外国の児童図書館員は、ほと

んど例外なく女性ですーは、目をかがやかして、「ちっとも知らなかった。How exciting! How challenging!」というようなことばを発するので

す。
私は、はじめ、みょうなことをいうと思いました。学校でならった英語では、これを「なんておもしろい」とか、「なんて挑戦的な」と訳したくなりますが、それではおかしいし、彼女たちの表情に合致しません。二、三回こういうことばを聞いているうちに、それは、「なんて興味のある問題なんでしょう！なんてやりがいのある仕事でしょう！」といういみだとわかってきました。

そして、かの女たちは、「あなた方は、開拓者なのね。アメリカでいえば、ミス・ヒューインズやミス・ムーアがやった仕事ではありませんか。」というのでした。

私は、何度かこうした彼女たちの出かたを経験してからは、イギリス人やアメリカ人と、日本人のあいだには、かなり問題との対決のしかたがちがうのだなと考えて、しばらくしてからは、もう愚痴をこぼすことをやめました。

(『石井桃子集. 5 新編子どもの図書館』 p. 189-190)

こういうふうな、ものごとのとらえ方ですよ。アメリカの図書館員、特に女性の児童図書館員の。私も町の図書館で24年間、館長でいたのですが、年間に何度かは苦しいときが来るわけです。行政の中で図書館という業務をやっていくということは、時に衝突したり、時に配転をにおわされたりすることがあります。図書館への理解の無さに無力感に陥ることもありました。本当に「今日は、もう仕事に行きたくない」と思うときもあるのですね。そういうときに、

“How exciting! How challenging!”

と耳に聞こえると、その事態を好奇心を持って見ることができ、自分の逆境さえも楽しむことができました。“How exciting! How challenging!”のお陰で、長いスパンでものごとを考えられ、気持がポジティブになり、常に新鮮なもの見方で、35年間、図書館員を続けられたと思っています。

図書館員の精神

私は昭和47（1972）年に25歳で、かなり遅れて図書館員になりました。昭和48（1973）年に岩波の『図書』に1年間連載された石井さんの「一九七二年初夏イギリスへの旅」は繰り返し読みました。イギリスのヘンドンの児童図書館員だったアイリーン・コルウェル（1904～2002）の運転で南イングランドを旅しながら、コルウェルが語ることばにも感心しました。

「図書館というところは、まず図書館員が良識を持って選択した本をおくところだと、私は思うから。もっとも、その図書館員は、子どもの心を知っていなくちゃならないけれど」だとか「物には波がある。質的にも、時間的にも」という言葉もありました（『図書』1973.6）（注4）。

彼女の自伝『子どもと本の世界に生きて：一児童図書館員のあゆんだ道』には、

児童図書館の主たる目的は、本の中にある喜びと美しさを、子どもに知らせることです。

（石井桃子訳 こぐま社 p. 62）

とあります。子どもたちに、「本の中にある喜びと美しさ」を伝えるのが、皆さん児童図書館員の仕事ですね。

こうして、石井桃子は、図書館員の姿と精神を、生きた形で私たちに伝えてくれました。ヒューインズ、アン・キャロル・ムーア（1871～1961）、カナダのリリアン・スミス、それからイギリスのアイリーン・コルウェル。ヒューインズは1926年に亡くなっていましたが、初めての渡米のとき（1954年）、アン・キャロル・ムーアはまだ健在でした。

確かに図書館学では「児童サービス論」があって、子どもへの図書館サービスはどういう方法で行うか、ということは書かれてはいます。しかし実際に、英米の児童図書館員の生き生きとした姿を目に見える形で、児童図書館員の精神をそのことばで、日本の図書館員たちに示してくれたのが石井桃子だと思うのです。

石井は、こういった「児童図書館界の先達」と言われる人たちの姿をよく見て（観察）、紹介しま

した。また、ムーア、スミス、コルウェルら、稀代の児童図書館員に信頼され、愛されたのはなぜでしょうか。後輩の図書館員から見ると、そばに近寄るのものはばかれる英米の先達ともいうべき人に好意を持たれ、愛されるというのも石井の特徴です。小柄でかわいい、ということではなく、石井自身がそういった魅力を持っていると思います。不思議ですが、これも石井桃子の一つの特徴です。

石井桃子の「ケイデンス」

『児童文学の旅』に出てくるのですが、カナダ、トロントで児童図書館員のトムソンさんという人が、「あなたと話していると気が休まる。あなたの英語には一種のケイデンスがあるのよ」（『石井桃子集 6』p. 282）と言います。Cadenceとは、詩の律動、韻律、抑揚、詩人に特有なリズムです。お話を伺っていても、石井さんの中にはそういったものがありました。

石井桃子の文で見えます。例えば『ちいさなねこ』（石井桃子さく、横内襄え）。

ちいさな ねこ、
おおきな へやに
ちいさな ねこ。

おや、ちいさな ねこが にわに おりた。お
かあさんねこが みていないまに、
ひとりで でかけて だいじょうぶかな。

あ、はしりだした。
もんをでて どんどん はしっていく。

こどもが こねこを つかまえた。
でも、こねこは
こどもの てを ひっかいて
にげだした。

こういった韻律があります。声に出して読むと、よく分りますね。

それからディック・ブルーナの『ちいさなうさこちゃん』。

おおきな にわの まんなかに
かわいい いえが ありました。
ふわふわさんに ふわおくさん
2ひきの うさぎが すんできます。

『ちいさなうさこちゃん』は特に七五調のリズムに近いですね。音数律にはまると、悪くすると都都逸^{とといつ}みたいになってしまうのですが、それを巧みに超えて、耳に心地よいことばにしています。生野幸吉は「破調、破格」があると言っていましたね。特に、人に読んでもらうと、「ことば自体が楽しめる」のも、石井桃子のお話の特徴です。

『児童文学論』

昭和39（1964）年には、『児童文学論』を瀬田貞二、渡辺茂男と共に翻訳し、岩波書店から出版しました。著者のリリアン・スミスは、トロント市公共図書館青少年少女部の部長として活躍しました。原書名 *The Unreluctant Years*（「心のびやかな時代」）、副題が *A critical approach to children's literature*（「児童文学の批判的考察」）です。この本は、子どもの本を文学として評価することを論じ、図書選択の基準を示しました。児童文学を技術面から論じた本はたくさんありますが、子どもの本について深い考察をまとめ、具体的な作品を挙げて、明確に論じた本は他にないと思います。

この本のあとがきで訳者たちは「子どもと文学との、特別で緊密なかかわりあいのなかで、子どものための文学の質的な基準とは何かを、純粹に、具体的に、全力をかたむけて説きあかしている、もっとも本質的な概論である」と書いています。

私にとって、『児童文学の旅』、『子どもの図書館』、『子どもと本の世界に生きて』、それからこの『児童文学論』とは、図書館員として仕事をしていく上で、指針となる4冊でした。私はこの石井桃子の著書と訳書から、図書館員の仕事のイメージを持つことができました。ヒントや示唆に富み、どれだけ励まされ、助けられたか分かりません。第一、面白いのです。これから児童図書館員を志向される方にとっても、この4冊は基本図書になると思います。

もう一つ忘れてはならないのは、『子どもの読書の導きかた』（石井桃子著）という本です。これはどういった事情か、復刊されません。内容から言うと、岩波新書の『子どもの図書館』よりもこちらの方がずっと単刀直入です。子どもと本との関わりが具体的に書かれていて、ヒントを得ることがたくさんあります。雑誌『ユリイカ』の平成19（2007）年7月号の「石井桃子特集」には、この本の半分くらいが復刻されました。

15、6年前になりますが、荻窪のお宅で、石井さんから『日本近代文学館』という日本近代文学館の館報を勧められ借りて帰りました。巻頭に当時日本近代文学館理事長の中村真一郎の「近代文学館への夢」という連載がありました。

中村真一郎は、自分の「空想の図書館」の発想のもととなったパリのポンピドゥー・センター図書館を紹介して、「その書棚の列はそれまで私の中に漠然と自然発生状態に生れていた、「文学」という観念に、一挙に具体的な形を与えて目の前に見せてくれたのである」として、この図書室で会った学習院の白井健三郎教授も

若者のように目を輝かせて、その図書室が彼の追及している最も新しい主題に、いかに広大な、信じられないほどの明るい視野を開いてくれるか、（中略）いかに日々、自分が進歩しているかを語って倦まなかった。

このパリの、一般市民のための新しい公開図書館が、私なり白井なりに与えてくれた、新しい視野とは何であったのか。それは、一言をもってすれば、現代世界のあらゆる国の文学を、世界的視野のもとに見る、という立場であり、それが文学の現場の雰囲気にも合致し、その部屋に入った人間を狭い偏見から解放してくれる、というところにある。

（『日本近代文学館』139～142号 1994.9-11）

と書いていました。

「新しい視野」は、まだ発掘されていない内なる鉱脈を発見することでもあると思います。自分の中にある豊かな鉱脈を、自分で発見する、つまり、新しい自分の発見の喜びです。そこに図書館が関

わって、図書館員が手伝うわけですね。図書館で子どもたちから返却の本を受け取るとき、「この本、ドキドキしたわ！」と、目を輝かせて語る、この子どもの時代こそ、まさに毎日が新しい自分の発見なのだと思います。

若者のように目を輝かさせる図書館、この中村真一郎の文章に、石井桃子の考える図書館があるのではないかと思います。“How exciting! How challenging!”の精神とも相通じます。

ある日の石井さんからの手紙に、「もし、私が図書館に形容詞をつけるとすれば、クリエイティブという言葉にします」とありました。

岩波新書『子どもの図書館』を読んで図書館員になった、という人もいます。石井さんからのハガキの中に、今日ここに来られている方のお名前も出ています。

「高校生時代に『子どもの図書館』に出会い、またまた偶然私のとなりの家に友人が下宿していて、「かつら文庫」にいらしたことがあるのだそうです。年とってから、自分のまいたタネが、こうしてあちこちで芽びていることを知り、何ともいえない慰さめをかんじます」（1997.2.10）とありました。

3. 石井桃子の文学—クリエイティブ

敗戦後、出版界は、僅か2年ほどの間にたくさん本や雑誌が出版され、児童向けの雑誌も次々創刊されました。1946年末までに100誌を超えて、児童文学ブームを巻き起こしました。『幼年倶楽部』（講談社1945.10）、『赤とんぼ』（実業之日本社1946.4）、『子供の広場』（新世界社1946.4）、『銀河』（新潮社1946.10-1949.8）、『少年少女』（中央公論社1948.2-1951.12）などがありました。

『ノンちゃん雲に乗る』は、大地書房がつぶれて宙に迷っていましたが、昭和26年春、光文社の創作童話の第1冊として新装出版されるやベストセラーになり、戦後第1回の文部大臣賞（芸術選奨）を受けました。

この物語には、それまでの児童文学作品にみられなかった「子どもの論理の発見」があり、決してありきたりの良い子の物語ではなく、生き

生きとした本当の子どもの姿が描かれていた。
（『昭和：二万日の全記録 第8巻』）

子ども向けの創作の2作目が、昭和32（1957）年に光文社から出版された『山のトムさん』（深沢紅子絵）です。これは前に『少年少女』（中央公論社）という雑誌の昭和23年3月号に「トムの教育」として発表されたものです。

「パチンコ玉のテボちゃん」

短編も幾つかあります。未発見の短編もまだ幾編かあるのではないかと思います。『昭和児童文学全集 18 北畠八穂・石井桃子集』（高山毅等編）の中に、レジュメに挙げた6編があります。最初に出てくる「パチンコ玉のテボちゃん」は短編の中では比較的長いお話です。このお話を紹介します。

宮城県のある村に、5歳のテボちゃんがいました。テボちゃんの家は、ちょうど辻のカドにあるので「マガリカド」と呼ばれています。村一番のお店で、配給も扱っていたので、いつも店はごったがえしていました。お父さんもお母さんも忙しいものですから、テボちゃんが駆け戻ってくると、すぐにあめ玉を口に放り込まれて外に出されてしまいます。外から家へ、家から外へと玉の如く動くので、テボちゃんは「パチンコ玉」というあだ名をもらって村でも有名になるのですね。ある寒い日、隣村の山のアキラさんが、牛車にワラを積んでいました。アキラさんが「テボちゃんは、まだひとりで、山さ、とまりに行かれねえな？」と声をかけると、「行かれるう！」とテボちゃん。テボちゃんが山へ行くと、お母さんも大喜びです。

「ツンダツンダツン！ シ（セ）ナカニルック
サック、ピョンピョンハイ！ アカイネツ（ク）
タイ、マドロシ（ス）パイプ、チョイトシ（ス）
マシテハイチ（キ）ングウ！ ツンダツン、ツ
ンダツン、ツンダツンダツン！」

と、歌いながら山に向かいます。

山の家には、大きいお婆さんと小さいお婆さん

とトシちゃんがいて、テボちゃんが泊まりにきたのでびっくり。山の生活に慣れて、山羊と牛に餌をやったりして大活躍です。テボちゃんは、お父さんもお母さんも一向に引き取りに来ないので、山にいることになります。

この5歳のテボちゃんは、全く字が読めないのです。テボちゃんがカルタで遊びたいと言うので、『山のトムさん』の主人公でもある女の子のトシちゃんがカルタを作ってやります。「いろはカルタ」です。テボちゃんは全部覚えているのです。字は読めないのに。テボちゃんが「トチは金なり」と言うと、トシちゃんが字札を作ります。「トチ（土地）」ではなくて「トキ（時）」のことなのですが。次は「ぬかるみに丹頂のチル」。これは、「丹頂のツル（鶴）」です。土地ことばそのもので、耳で聞いていて気持ちがいいですね。それから「ニトを追うものは、イットウも得ず」。「それから？」と聞くと、「スッパイはシイコウのもと」。「けんこうはシャッキンにまさる」とかね。「シャッキン（借金）」ではなくて「ヒヤッキン（百金）」なのですが。テボちゃんのことばに、皆、大笑いします。

この短編には、子どもの勢いがあり、私はしばしば紹介します。テボちゃんの姿から、子どもとことば、文学についての示唆やヒントがあると思いませんか。子どものことばの感覚やリズム。鋭敏な視力と聴力。字が一字も読めないからこそ、ことばの音楽性が直観的に楽しめること。ことばと共に動き回るテボちゃんの姿から、子どもの勢いとことばの勢い、生き生きとした子どもの姿が見られる短編です（注5）。

この本（『昭和児童文学全集 18 北畠八穂・石井桃子集』）の表題紙の裏に「からだも心もじょうぶに自分の足で立つ人になってください。石井桃子」とサインが印刷されていました。

さて、他に単行本はレジュメに挙げているくらいであり多くありません。『べんけいとおとみさん』も、図書館員なら語ってみたい、おかしみのある作品です。

石井桃子の創作の表現については、どの作品にも、巧まざるユーモア、そこはかたないおかしみにあふれているのが特徴ですね（これは翻訳にも

言えます)。

簡素な力強さの芸術

石井桃子は、瀬田貞二らと「いすみ会」という子どもの本の勉強会をしていた頃、「ラフカディオ・ハーンが、昔、帝大でした講義を読んで、衝撃といってもいいほどの感銘を受けた」と書いています(「子どもにうたえる文章」『現代作文講座 3 作文の条件』)。

東京帝大での講義録が『ラフカディオ・ハーン著作集』(全15巻 恒文社)に入っています。こんなに興味深い内容を、100年も前に、ハーンは帝大で講義していたのかと私も驚きました。ハーンは「散文芸術論」という講義で、北欧の叙事詩について三つの特徴を挙げています。

一つは「形容語が少ないこと」、

二つ目は「説明(描写)がないこと」、

三つ目に「感情が抑制されていること」

です(『ラフカディオ・ハーン著作集 第7巻』)。これはアイスランドやノルウェーのサガ(叙事詩)を題材にしてなのですが、今、この具体的な例を私たちが知っている本で挙げるとしたら、『三びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウン絵、瀬田貞二訳)が最適でしょう。

むかし、三びきの やぎが いました。なまえは、どれも がらがらどん と いました。あるとき、やまの くさばで ふとろうと、やまへ のぼっていきました。のぼる とちゅうの たにがわに はしがあって、そこを わたらなければなりません。はしの したには、きみのわるい おおきな トロールが すんでいました。ぐりぐりめだまは さらのよう、つきでた はなは ひかきぼうのようでした。

このトロールを、いちばん大きいヤギのがらがらどんがこっぴみじんにして谷川へ突き落とし、三匹のやぎは、山でとても太って、うちへ歩いて帰るのもやつのことと、お話は終わります。

始め、いちばん小さいヤギのがらがらどんが橋を渡りにやって来ても、恐ろしいトロールともトロ

ルが怖いとも書いていない、トロールをこっぴみじんにしても、よかった、うれしかった、とも書いていない。何も感情が書かれていない。けれども子どもたちは固唾をのんで、この絵本に見入ります。図書館でこの本を読んでやると、必ずと言っていいほど子どもたちから「もういっぺん」と再読をせがまれます。1965年に日本で翻訳された『三びきのやぎのがらがらどん』は、半世紀近くなりますが、当時の子にも現在の子にも支持される力を持った絵本ですね。

形容詞や副詞などの修飾語で、子どもにおもねったり、くすぐったりする必要は全くないわけです。ハーンが挙げたサガの物語には、約750語中、形容詞は10個しかないとハーンは語っています。その典型は昔話です。『三びきのやぎのがらがらどん』にも、形容詞は僅かしかありませんでした。

石井桃子も「子どもにうたえる文章」の中で、「ほんとうに彼らの心を打つことばだけで語りかけることを心がけなければいけないのではないだろうか」と書いています。ハーンの講義「散文芸術論」の中のタイトルは「簡素な力強さの芸術」でした。

子どもの眼、子どもの感覚

生野幸吉は、先に紹介した文に、次のように書いています。

「いつぞや『大雪』という絵本を私が訳したとき、ゲラ刷りを見た石井さんから、二、三の箇所を指摘された。それは誤訳というほどではなかったかもしれないが、文章の真意を言いあてていない部分だった。石井さんはドイツ語の原文をごぞんじのわけではない。それゆえにいっそう、その指摘の正確さに私は敬服した。

何よりも私が感じたのは、石井さんが訳文を経験深いおとなの眼で点検したというよりは、すなおに読み、こどもの立場そのものに自分を置いてわかりにくい箇所の不審を感じたのだということである。

『プーさん』の訳文のいわば奔放な生氣と、今述べたような態度とを併せれば、児童文学の翻

訳についての、もっとも望ましいありかたが、おのずと浮かび出てくるだろう。」

(「遠いこと近いこと」)

石井桃子を永井龍男は、「童女」と言いましたが、「子どもっぽい」、「幼稚」ではなくて、石井は、「子どもの眼」を失わなかった。ピーター・ホリンデイル (Peter Hollindale) は著書の『子どもと大人が出会う場所：本のなかの「子ども性」を探る』(柏書房)で、「子ども性」childness について書いていますが、石井は、子どもの心をずっと失わなかった人、つまり「子どもの眼でものごとを見ることができた人」でした。

『山のトムさん』や「パチンコ玉のテボちゃん」、「べんけいとおとみさん」、『ノンちゃん雲に乗る』などの作品は、随所にいろいろなエピソードが出てきます。それは、子どもの持つ素朴な眼で、見たまま、感じたままを、素直に描かれていると思います。『山のトムさん』では、トムの教育の結末に「友だち」という章があり、トムの他にもう一匹ネコが登場します。ありのままを描くことは、物語の構成やバランスを崩す恐れがありますが、そのエピソードが子どもの視点で事実のみが描かれているので、そこに不思議さが残ります。結局、読み終わった後に、そのエピソードが記憶に鮮やかに残っていきます。これも特徴だと思います。

日常の些事

石井桃子の創作作品に共通するのは、日々の暮らしの中の小さく見える事象こそが、子どもにとって、大きな喜びであり、冒険であったりします。そこに人生の深淵や真実も見えてくるという石井の考えです。平凡で穏やかな日々の淡々とした暮らし、そのプロセス。他人から見ればささやかな事象の中に、事件や冒険があること、それから大きな喜びや幸せがあることも、彼女の作品を読むと感じられます。『ちいさなねこ』の文章を再読してください。細部をゆるがせにしないことが分かります。

大江健三郎は、『幻の朱い実』が出た時、文芸時評に「市民の生活の側からこまやかに描いて、時代への視線もひそかに明示しているところ。細

部を書きもらさず、いつまでもそのまわりにたゆたっているようであり、じつは機敏な場面転換と進行」(朝日新聞1994.3.28)と書きました。

一見、ひ弱に見えるけれども、石井桃子の文学世界は、地に足が着いていて、静かに樹木が地に根を張るがごとく、最終的には、地下水同様、静かに浸透していくことになるのではと思います。

あるインタビューで石井はこう言っています。「人生の幸福は重大な事件ではなく、日常の些事によって決まる」(埼玉新聞 1994.4.18)と。

中川李枝子は石井作品について、「幼いときは誰かに読んでもらい、大きくなると自分で読み、親になれば子に読んでやり、子が巣立っていくとまた一人で読むというのが読者の共通点」と言っています。作品は、50年前の子どもにも、現代に生きる子どもにも、また老いてからも迎えられる。彼女の創作には、時代を越えた魅力と生命があり、これからも読み続けられるでしょう。

また、宮崎駿はこう書いています。

六〇年代のはじめ、僕等は頭でっかちに「児童文学」を論じていた。性急な問題意識で、既成の作品を斬りすてていた。それなのに、この人には手が出せない。自分達の論点を超えて、否定のしようのない魅力があるのだ。重量のある祖母のような存在として、僕等は石井桃子氏を別格官幣大社扱いとせざるを得なかった。

(宮崎駿「石井桃子集」パンフレット、1998)

「人間は分析せんとして対象を扼殺^{やくきつ}している」とワーズワース (William Wordsworth) の詩に有名な一節があります(「発想の転換をこそ」『イギリス名詩選』平井正穂編)。私もいろいろな「石井桃子論」を読んだのですが、ピンとがずれていて、かえって批評する人間の全てがあらわになるといった結果です。リリアン・スミスが「児童文学の短い歴史をみると、それぞれの時代の子どもの本に、その時代のもっとも悪い特徴が強く出ていくことがわかる」(『児童文学論』p.41)と書いていますが、中川の言うように、石井桃子の作品は、子どもと楽しむのが一番ですね。

石井桃子も、『クマのプーさん』について、こう

書いています。

頭のわるいクマのプーは、いまだに、ただおもしろおかしいだけでない、「思案のしどころ」へ、たえず私をつれていってくれるのだが、しかし、「プー」の本にかぎって、私は、あえて、分析しようとは思わない。魔法は魔法でとっておきたいからである。

(「プーと私」『石井桃子集 7』p.13)

創造性と真実をもった本

昭和54(1979)年、石井桃子がリリアン・スミスを訪ねたときの対話が『児童文学の旅』の最後に出てきます。これをもって数々の引用の最後になります。スミスの言葉から始まります。

「あのとき、あなたは、病気の友だちのために『プー』を訳したことを話してくれたね」と、スミスさんはいった。

「あなたは、あのとき、ある本にクリエイティブなものがあるとき、その本は、ほんとうの『本』になるのだとおっしゃいましたね。そして、創造性と真実をもった本を識別し、それを次の代に手渡すのが図書館の役目だって。」と、私はいった。「私は、いまもそれを信じているんです」

「モモコ、信じること、それがだいじなんだよ」と、スミスさんはいった。

(『石井桃子集 6』p.303-304)

長生きをしてもらって、石井桃子さんと私たちは同時代を生きることができました、そのことを喜びたいと思います。

初めに紹介しました石井さんの手紙の結末に「どうぞ精一杯お願いします」とありました。これが私宛ての手紙の最後となりました。しかし、これは私だけでなく、図書館の児童サービスに携わる全ての方々に対して、石井桃子さんから皆さんへのメッセージであると思います。子どもたちのために「どうぞ精一杯お願いします」。

長時間、御清聴ありがとうございました。

(注1) 岩波書店「少年文学」(『圖書特集号』) 1950(昭和25)年12月発行の小冊子に「この文庫の特色」が挙げられている。

一、『どうせ子供の読み物だから…』という安易な姿勢をとらない。

二、『書目の選択』では、書目は世界の古典的名作および現代児童文学の傑作から選び、岩波文庫に平行する一大叢書とする。

三、『翻訳と表現』、翻訳は原作に忠実、しかも美しい日本語であること、表現は平易。

四、『印刷・製本』に万全の注意を払う。

五、『値段』は普及のため廉価にするよう努める。という5項目で、「岩波少年文庫」創刊にかかる意気込みが感じられる。

(注2) 岩波少年文庫は創刊の5冊に続いて、翌昭和26(1951)年発行を刊行順に挙げる。

3.15 ⑥『牛追いの冬』

⑦『りこうすぎた王子：プリンス・プリジオ』

4.20 ⑧『ガリヴァー旅行記：小人国・大人国』

⑨『ミツバチ・マアヤの冒険』

5.20 ⑩『ガリヴァー旅行記 続(飛び島・馬の国)』

5.25 ⑪『私たちの友だち』

6.25 ⑫『ドリトル先生アフリカゆき』

⑬『夢を追う子』

8.5 ⑭『ロビン・フッドの愉快的な冒険』

⑮『クルミわりとネズミの王さま』

9.10 ⑯『名犬ラッド』

⑰『ロビン・フッドの愉快的な冒険 続』

10.15 ⑱『ドン・キホーテ』

⑲『青い鳥』

11.15 ⑳『ゆかいなホームー君』

㉑『グリム童話選 上』

12.12 ㉒『あらしの前：レヴェル・ランド』

㉓『三銃士』

(注3) 『子とともに』は、愛知県小中学校長会、愛知県小中学校PTA連絡協議会、名古屋市立小中学校PTA協議会編 愛知県教育振興会発行。「線路ぎわの子どもたち」は、イーディス・

ネスビット作 石井桃子訳 中川宗弥さし絵
1965.4～1966.3の12回連載。

この作品は、角川文庫『若草の祈り』（岡本浜江
訳1971）という邦訳がある。

（注4）昭和48（1973）年、『図書』連載の「一九
七二年初夏イギリスへの旅」は、後年、単行本
『児童文学の旅』に収められたが、この部分
（1973.6の冒頭1ページ分）は転載されず。

（注5）今回の講義をきっかけに、平成23（2011）
年5月発行の福音館文庫『山のトムさん ほか
一篇』に、「ほか一篇」として「パチンコ玉のテ
ポちゃん」が収録された。本冊子の口絵写真。

（こでら ひろあき ノートルダム清心女子大学
非常勤講師）

「石井桃子」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館所蔵
※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	Books for boys and girls; a selected list	Caroline M. Hewins 編	2d ed., rev. A. L. A. Publishing Board 1904	181-63 (本館)
2	資料でみる石井桃子の世界	小寺啓章編著	小寺啓章 2007. 10	Y93-J8 ※
3	いぬとにわとり	いしいももこ作 やしまみつこ絵	福音館書店 昭和43	Y17-283
4	小さい牛追い	マリー・ハムズン作 石井桃子訳 中谷千代子絵	岩波書店 1969	Y7-1700
5	あなたは、読んでいますか？	竹内[サトル] (菟) 著	竹内[サトル] (菟) 2010. 4	UL11-J35 ※
6	書窓	太子町立図書館編	太子町立図書館 1985-	Z21-2289 (本館)
7	石井桃子集. 1～7	石井桃子著	岩波書店 1998. 9-1999. 3	KH196-G152 ※
8	The unreluctant years; a critical approach to children's literature	Lillian H. Smith 著	American Library Association 1953	028. 5-S654u (本館)
	児童文学論	リリアン・H. スミス著 石井桃子, 瀬田貞二, 渡辺茂男訳	岩波書店 1964	909-cS65z-1 ※
9	今からでは遅すぎる: ミルン自伝	A. A. ミルン [著] 石井桃子訳	岩波書店 2003. 12	KS124-H10 ※
10	幼ものがたり	石井桃子著 吉井爽子画	福音館書店 1981. 1	Y7-8644
11	子どもの読書の導きかた	石井桃子著	国土社 1960	019. 2-1583k (本館)
12	子どもの図書館	石井桃子著	岩波書店 1965	016. 25-1583k ※
13	ノンちゃん雲に乗る	石井桃子著 桂ユキ子絵	光文社 昭和26	児913. 6-1583n
14	クマのプーさん・プー横丁にたった家	A. A. ミルン作 石井桃子訳	岩波書店 1993. 11	Y9-800
15	プー横丁にたった家	ミルン作 石井桃子訳	岩波書店 昭和17	児952-281
16	熊のプーさん	A. A. ミルン著 石井桃子訳 E. H. シェパード絵	英宝社 昭和25	児93-M-41
17	たのしい川べ	ケネス・グレアム作 石井桃子訳	岩波書店 1994. 4	Y9-766
18	子どもと文学	石井桃子等著	福音館書店 1967	909-1583k-h ※

19	子どもの館		福音館書店 昭和48. 6-58. 3	Z13-1277 (本館)
20	こどもとしょかん		東京子ども図書館 1979-	Z21-1003 ※
21	モダン日本		モダン日本社 1930-1942	YA5-1044 (本館) (マイクロ資料)
22	婦人サロン		文藝春秋 昭和4-8. 12	YA5-1370 (本館) (マイクロ資料)
23	東京の横丁	永井竜男著	講談社 1991. 1	KH386-E2 (本館)
24	文芸春秋三十五年史稿		文芸春秋新社 1959	O23. 9-B97b (本館)
25	幻の朱い実. 上	石井桃子著	岩波書店 1994. 2	KH196-E229 ※
26	幻の朱い実. 下	石井桃子著	岩波書店 1994. 3	KH196-E229 ※
27	花々と星々と	犬養道子著	中央公論社 1970	GK61-1 (本館)
28	人間はどれだけの事をしてきたか. 1 (改訂・日本少国民文庫; 1)	恒藤恭著	新潮社 昭和17	児935-80-(1)
29	人間はどれだけの事をして来たか. 2 (日本少国民文庫; 第2巻)	石原純著	新潮社 1937. 3	Y5-N06-H49
30	(日本少国民文庫; 第3巻)		新潮社	所蔵なし
31	これからの日本、これからの世界(日本少国民文庫; 第4巻)	下村宏著	新潮社 1936. 6	Y2-N06-H26
32	君たちはどう生きるか(日本少国民文庫; 第5巻)	山本有三著 吉野源三郎著	新潮社 1937. 8	所蔵なし
33	人生案内(日本少国民文庫; 第6巻)	水上瀧太郎編纂	新潮社 1937. 2	Y1-N06-H69
34	日本の偉人(日本少国民文庫; 第7巻)	菊池寛著	新潮社 1937. 9	Y3-N06-H23
35	人類の進歩につくした人々(日本少国民文庫; 第8巻)	山本有三編纂	新潮社 1937. 1	Y3-N03-H179
36	発明物語と科学手工(日本少国民文庫; 第9巻)	廣瀬基著	新潮社 1935. 12	Y11-N03-H487
37	世界の謎(日本少国民文庫; 第10巻)	石原純編	新潮社 1936. 5	Y11-N03-H488
38	スポーツと冒険物語(日本少国民文庫; 第11巻)	飛田穂洲, 豊島與志雄編輯	新潮社 1936. 8	Y5-N03-H256

39	心に太陽を持って：-胸にひびく話-二十篇（日本少國民文庫；第12巻）	山本有三著	新潮社 1935. 11	Y8-N03-H896
40	文章の話（日本少國民文庫；第13巻）	里見[トン]著	新潮社 1937. 4	Y8-N03-H936
41	世界名作選. 1（日本少國民文庫；第14巻）	山本有三編	新潮社 1936. 2	Y9-N03-H337
42	世界名作選. 2（日本少國民文庫；第15巻）	山本有三編纂	新潮社 1936. 12	Y9-N03-H336
43	日本名作選（日本少國民文庫；第16巻）	山本有三編輯	新潮社 1936. 7	Y8-N03-H861
44	児童文学論：瀨田貞二子どもの本評論集. 上巻	瀨田貞二著	福音館書店 2009. 5	KE177-J15 ※
45	児童文学論：瀨田貞二子どもの本評論集. 下巻	瀨田貞二著	福音館書店 2009. 5	KE177-J16 ※
46	回想小林勇	谷川徹三, 井上靖編	筑摩書房 1983. 11	GK75-81 (本館)
47	たのしい川邊	ケネス・グレーム作 中野好夫譯	白林少年館出版部 1940. 11	Y9-N03-H244
48	ドリトル先生「アフリカ行き」	ロフティング著 井伏鱒二訳	白林少年館出版部 昭和16	793-173 (本館)
49	ドリトル先生アフリカゆき (岩波少年文庫；12)	ロフティング著・絵 井伏鱒二訳	岩波書店 昭和26	児933-cl82d1
50	熊のプーさん	A. A. ミルン作 石井桃子訳	岩波書店 昭和15. 12	所蔵なし
51	ふしぎの国のアリス	ルイス・キャロル作 生野幸吉訳 ジョン・テニエル画	福音館書店 1971	Y7-2664
52	大雪	ゼリーナ・ヘンツ文 アロワ・カリジェ絵 生野幸吉訳	岩波書店 昭和40	Y17-59
53	幼年時代	矢立出版（編）	矢立出版 1977-1980	Z7-1080 (本館)
54	ノンちゃん雲に乗る	石井桃子著	角川書店 1973	Y81-9673
55	赤とんぼ	赤とんぼ会〔編〕	実業之日本社 1946-[1948]	Z32-61
56	ノンちゃん雲に乗る	石井桃子著	大地書房 1947. 2	所蔵なし
57	ティモジーの靴	J. H. ユウイング作 石井桃子訳 桜井悦絵	中央公論社 昭和23	児乙部48-E-4
58	図書		岩波書店 昭和24. 11～	Z21-184 (本館)
59	児童文学の戦後：1946-1954 現代児童文学論集；第1巻	日本児童文学者協会編	日本図書センター 2007. 6	KG411-H64 ※

60	子どもと子どもの本に捧げた生涯： 講演録瀬田貞二先生について	斎藤惇夫著	キッズメイト 2002. 6	KC511-H5 ※
61	宝島 (岩波少年文庫；1)	スティーブソン著 佐々木直次郎訳	岩波書店 昭和25	児933-cS84tS
62	あしながおじさん (岩波少年文庫；2)	ウェブスター著 遠藤寿子訳	岩波書店 昭和25	児933-cW37aE
63	クリスマス・キャロル (岩波少年文庫；3)	ディケンズ著 村山英太郎訳 佐藤敬絵	岩波書店 昭和25	児933-cD54kM
64	小さい牛追い (岩波少年文庫；4)	M. ハムズン著 石井桃子訳	岩波書店 昭和25	児949. 6-cH23tI
65	ふたりのロッチ (岩波少年文庫；5)	ケストナー著 高橋健二訳 ワルター・トリヤー絵	岩波書店 昭和25	児943-cK19hT
66	牛追いの冬 (岩波少年文庫；6)	M. ハムズン著 石井桃子訳	岩波書店 昭和26	児949. 6-cH23tI
67	りこうすぎた王子：プリンス・ブリ ジオ (岩波少年文庫；7)	A. ラング著 光吉夏弥訳 塩田英二郎絵	岩波書店 昭和26	児933-cL26rM
68	ガリヴァー旅行記：小人国・大人国 (岩波少年文庫；8)	スウィフト著 中野好夫訳	岩波書店 昭和26	児933-cS97gNi
69	ミツパチ・マアヤの冒険 (岩波少年文庫；9)	ボンゼルス著 実吉捷郎訳 長沢節絵	岩波書店 昭和26	児943-cB72mS
70	ガリヴァー旅行記 続（飛び島・馬 の国） (岩波少年文庫；10)	スウィフト著 中野好夫訳	岩波書店 昭和26	児933-cS97gNi
71	私たちの友だち (岩波少年文庫；11)	バイコフ著 上脇進訳	岩波書店 昭和26	児983-cB15wK
72	夢を追う子 (岩波少年文庫；13)	ハドソン著 網野菊訳 森田元子絵	岩波書店 昭和26	児933-cH13yA
73	ロビン・フッドの愉快的冒険 (岩波少年文庫；14)	ハワード・パイル著 村山知義訳	岩波書店 昭和26	児933-cP99rM
74	クルミわりとネズミの王さま (岩波少年文庫；15)	ホフマン著 国松孝二訳 脇田和絵	岩波書店 昭和26	児943-cH71kK
75	名犬ラッド (岩波少年文庫；16)	ターヒューン著 岩田欣三訳	岩波書店 昭和26	児933-cT31mI
76	ロビン・フッドの愉快的冒険 続 (岩波少年文庫；17)	ハワード・パイル著 村山知義訳	岩波書店 昭和26	児933-cP99rM
77	ドン・キホーテ (岩波少年文庫；18)	セルバンテス著 永田寛定訳	岩波書店 昭和26	児963-cC41d2N
78	青い鳥 (岩波少年文庫；19)	メーテルリンク著 若月紫蘭訳	岩波書店 昭和26	児952-cM18aW
79	ゆかいなホーマー君 (岩波少年文庫；20)	マックロスキー著・絵 石井桃子訳	岩波書店 昭和26	児933-cM12yI

80	グリム童話選 上 (岩波少年文庫；21)	ヤコブ・グリム, ウィルヘルム・グリム著 相良守峯訳	岩波書店 昭和26	児943-cG86g4S
81	あらしの前：レヴェル・ランド (岩波少年文庫；22)	ドラ・ド・ヨンゲ著 吉野源三郎訳 ヤン・ホーウィ絵	岩波書店 昭和26	児949. 3-cJ79aY
82	三銃士 (岩波少年文庫；23)	A. デューマ著 生島遼一訳 長沢節絵	岩波書店 昭和26	児953-cD886s2I
83	トム・ソーヤーの冒険 (岩波少年文庫；37)	マーク・トウェイン著 石井桃子訳	岩波書店 昭和27	児933-cM34tI2
84	ハンス・プリンカー：銀のスケート (岩波少年文庫；48)	M. M. ドッジ著 石井桃子訳 ヒルダ・ファン・ストックム絵	岩波書店 昭和27	児933-cD64hI
85	とぶ船 (岩波少年文庫；70)	H. リュイス作 石井桃子訳 ノーラ・ラヴリン絵	岩波書店 昭和28	児933-cl674tI
86	ひとまねござる (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；10)	エッチ・エイ・レイ文・絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児726. 7-cR45h
87	ちいさいおうち (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；6)	ばーじにあ・ばーとん文・絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児933-cB974tI
88	きかんしゃやえもん (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；22)	阿川弘之文 岡部冬彦絵	岩波書店 昭和34	児726-A234k
89	かにむかし (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；21)	木下順二文 清水崑絵	岩波書店 昭和34	児726-Ki248k
90	ちびくろさんぼ (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；1)	へれん・ばんなーまん文 ふらんく・どびあす, 岡部冬彦絵	岩波書店 昭和28	児933-cB21t
91	ねずみとおうさま (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；3)	岩波書店編 土方重巳絵	岩波書店 昭和28	児963-N677I
92	みんなの世界 (岩波のこどもの本 3・4年向；1)	マンロー・リーフ文・絵	岩波書店 昭和28	児159. 5-cl43ml
93	スザンナのお人形・ピロードうさぎ (岩波のこどもの本 3・4年向；2)	マジヨリー・ピアンコ文 高野三三男絵	岩波書店 昭和28	児953-1922s
94	山のクリスマス	ルドウィヒ・ベーメルマン文・絵	岩波書店 昭和28	児943-cB45yI
95	ふしぎなたいこ：にほんむかしばなし (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；2)	岩波書店編 清水崑絵	岩波書店 昭和28	児913. 8-1922h
96	おそばのくきはなぜあかい：にほんむかしばなし (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；8)	岩波書店編 初山滋絵	岩波書店 昭和29	児913. 8-1922o
97	まいごのふたご (岩波のこどもの本 幼・1・2年向；4)	あいねす・ほーがん文 岩波書店訳編 野口弥太郎絵	岩波書店 昭和29	児933-ch71m

98	海のおばけオーリー (岩波のこどもの本 3・4年向; 5)	マリー・ホール・エッツ文・絵 岩波書店編	岩波書店 昭和29	児933-cE85u
99	どうぶつのこどもたち (岩波のこどもの本 幼・1・2年向; 7)	サムエル・マルシャーク著 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児981-cM36d
100	百まいのきもの (岩波のこどもの本 3・4年向; 8)	エリノア・エスティーズ文 ルイス・スロボドキン絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児933-cE79h1
101	こねこのびっち (岩波のこどもの本 幼・1・2年向; 12)	ハンス・フィッシャー文・絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児726. 7-cF52k
102	ツバメの歌 (岩波のこどもの本 3・4年向; 11)	レオ・ポリティ文・絵 岩波書店訳編	岩波書店 昭和29	児726. 7-1922t
103	子とともに	愛知県小中学校長会, 愛知県小中学校 PTA 連絡協議会, 名古屋市立小中学校 PTA 協議会編	愛知県教育振興会 [1956] -2002	Z7-138 (本館)
104	若草の祈り	E. ネズビット著 岡本浜江訳	角川書店 1971	Y81-7870 (本館)
105	児童文学の旅	石井桃子著	岩波書店 1981. 3	KE177-32 ※
106	子どもと本の世界に生きて: 一児童 図書館員のあゆんだ道	アイリーン・コルウェル著 石井桃子訳	こぐま社 1994. 12	UL422-E1 ※
107	ちいさなねこ	石井桃子さく 横内裏え	福音館書店 1967. 1	Y17-M99-215
108	ちいさなうさこちゃん	ディック・ブルーナぶん・え いしいもこやく	福音館書店 1992. 6	Y18-7090
109	ユリイカ 32 (10) (通号435)		青土社 2007. 7	Z13-1137 ※
110	日本近代文学館		日本近代文学館 1971-	Z21-923 (本館)
111	銀河 昭和23年5月号 随筆「山のさち」 昭和24年5月号 「おソバの茎はなぜ赤い」		新潮社 1946-1949	YAZ-1 (マイクロ資料)
112	少年少女 昭和23年3月号 「トムの教育」 昭和23年8.9月号 「緑色の消防自動車」 (モート・コーニン作) 昭和24年8月号 「郵便机」(余寧金 之助作)		中央公論社 1948-1951	YAZ-2 (マイクロ資料)
113	昭和: 二万日の全記録 第8巻	講談社編	講談社 1989. 4	GB511-E43 ※
114	山のトムさん	石井桃子著 深沢紅子絵	光文社 昭和32	児913. 8-1583y
115	山のトムさん: ほか一篇	石井桃子作 深沢紅子, 箕田源二郎画	福音館書店 2011. 5	Y7-N11-J120
116	昭和児童文学全集 18 北島八穂・ 石井桃子集	高山毅等編	東西文明社 昭和33	児913. 8-Sy961

117	べんけいとおとみさん	石井桃子作 山脇百合子絵	福音館書店 1985. 10	Y8-2861
118	現代作文講座 3 作文の条件	林大, 林四郎, 森岡健二編	明治書院 1977. 1	KF151-65 (本館)
119	ラフカディオ・ハーン著作集 第1 巻～第15巻		恒文社 1980. 7-1988. 9	KS158-247 (本館)
120	三びきのやぎのがらがらどん	マーシャ・ブラウン絵 瀬田貞二訳	福音館書店 昭和40	Y17-48
121	子どもと大人が出会う場所：本のな かの「子ども性」を探る	ピーター・ホリンデイル著 猪熊葉子監訳	柏書房 2002. 9	KE177-H1 ※
122	イギリス名詩選	平井正穂編	岩波書店 1990. 2	KS141-E28 (本館)

レジュメ

<ヴィジュアル・ストーリーテラー赤羽末吉>の世界

吉田 新一

今年2010年は、ヴィジュアル・ストーリーテラー赤羽末吉の、生誕100年、また没後20年、にあたります。その節目の年に、戦後日本の絵本黄金期の一翼を担った、国際アンデルセン賞受賞画家の諸相を、回顧しつつ、その代表作を、ともに愉しみましょう。

●雪

- 『かさじぞう』瀬田貞二・再話、1961年 福音館書店
『水仙月の四日』宮澤賢治・文、1969年 創風社
『つるにようぼう』矢川澄子・再話、1979年 福音館書店
cf. 坪田譲治・安泰『ツルノオンガヘシ』1943年 中央出版協會
木下順二・福田豊四郎『夕鶴』1951年、新潮社

●鬼

- 『だいくとおにろく』松居直・文、1962年 福音館書店
『鬼のうで』作・絵、1976年 偕成社
cf. 松村武雄・米内穂豊『大江山』1939年、講談社の繪本
木島始・文、曼殊院蔵繪卷、宮次男・監修『しゅてんどうじ』1979年
暁教育図書株式会社
『鬼ぞろぞろ』舟崎克彦・文、1978年 偕成社

●ノンセンス

- 『おおきな おおきな おいも』（市村久子の教育実践による）1972年、福音館書店
『そら、にげろ』作・絵、1978年、偕成社

●昔話

①<日本>

- 『ももたろう』松居直・文、1965年、福音館書店
cf. 『桃太郎』松村武雄・文、斎藤五百枝・画、1937年、講談社の繪本
『さるとかに』神沢利子・文、1974年、銀河社
cf. 木下順二・清水崑『かにむかし』1959年、岩波書店
西郷竹彦・福田庄助『さるかにぼなし』1970年、ポプラ社
松谷みよ子・瀬川康男『さるかに』1970年、講談社
『まのいりょうし』瀬田貞二・再話、1973年、福音館書店
『くわずにようぼう』稲田和子・再話、1977年、福音館書店

- 『そばがらじさまとまめじさま』小林輝子・再話、1980年、福音館書店
『したきりすずめ』石井桃子・再話、1982年、福音館書店
『にぎりめしごろごろ』小林輝子・再話、1984年、福音館書店
『かちかちやま』小澤俊夫・再話、1988年、福音館書店
『うまかたやまんば』小澤俊夫・再話、1988年、福音館書店
cf. 『ひょうたんめん』神沢利子・文、1984年、偕成社

②＜他国＞

- 『ほしになったりゅうのきば』君島久子・再話、1963年
上記の改訂版、1976年、福音館書店
『スーホの白い馬』大塚勇三・再話、1967年、福音館書店
『王さまと九人のきょうだい』君島久子・訳、1969年、岩波書店
cf. クレール・H. ビショップ/クルト・ビーゼ『シナの五にんきょうだい』1938年
『チワンのにしき』君島久子・文、1977年、ポプラ社
『あかりの花』肖甘牛・採話 君島久子・再話、1985年、福音館書店

●その他

- 『へそもち』渡辺茂男・文、1966年、福音館書店
cf. Ib Spang Olsen: *The Boy in the Moon*, 1962、『つきのぼうや』
徳永壽美子・中尾彰『アフゲオホゾラ』1941年、正芽社
『牛若丸』[源平絵巻物語]他9冊、今西祐行・文、1971年、講談社
cf. 『牛若丸』大倉桃郎・文、近藤紫雲・絵、1937年、講談社の絵本
『ほうまんの池のカッパ』椋鳩十・作、1975年、銀河社
『やまたのおろち』[日本の神話]他5冊、舟崎克彦・文、1983年、トモ企画

●和紙絵本

- 『お月さん 舟でおでかけなされ』神沢利子・うた、1980年、童心社

●挿絵本

- 『おじいさんのランプ』新美南吉童話集、1965年、岩波書店
『ゼロ弾きのゴーシュ』宮澤賢治、1969年、角川文庫
『ヌーチェのぼうけん』神沢利子、1971年、理論社
『絵本 わらべうた』1977年、偕成社
『春のわかれ』楨佐知子・文、1979年、偕成社

●参考図書

- 赤羽末吉著『絵本よもやま話』偕成社、1979年；増補版1983年
『画集 赤羽末吉の絵本』講談社、2010年

—— ☆ —— ☆ —— ☆ ——

My Choice

『かさじぞう』

『つるにようぼう』

参考：『お月さん 舟でおでかけなされ』

『絵本 わらべうた』 「満州人形巻物」

『そら、にげろ』

『まのいいりょうし』

『うまかたやまんぼ』

『ひょうたんめん』

『くわずにようぼう』

『さるとかに』

『したきりすずめ』

『にぎりめしごろごろ』

『そばがらじさまとまめじさま』

『ほしになつたりゅうのきば』 旧版と改訂版

『王さまと九人のきょうだい』

赤羽末吉（1910～1990）の絵本・挿絵本 [出版年順]

(☆は絵本 ●は挿絵本)

吉田 新一・選

- ☆ 1961 『かさじぞう』 瀬田貞二・再話、福音館書店
- ☆ 1962 『だいくとおにろく』 松居直・再話、福音館書店
- ☆ 1963 『ほしになつたりゅうのきば』 君島久子・再話、福音館書店
1976年に改訂新版『ほしになつたりゅうのきば』 同上
- ☆ 1965 『ももたろう』 松居直・文、福音館書店
- 1965 『おじいさんのランプ』 新美南吉童話集、岩波書店
- 1966 『ヌーチェのぼうけん』 神沢利子・文、理論社
- ☆ 1966 『へそもち』 渡辺茂男・文、福音館書店
- ☆ 1967 『スーホの白い馬』 大塚勇三・再話、福音館書店
- ☆ 1969 『王さまと九人のきょうだい』 君島久子・訳、岩波書店
- 1969 『セロ弾きのゴーシュ』 宮澤賢治、角川文庫
- ☆ 1969 『水仙月の四日』 宮澤賢治・文、福音館書店
- 1971 『源平絵巻物語 牛若丸』 今西祐行・文、講談社
- ☆ 1972 『おおきな おおきな おいも』 市村久子の教育実践による。福音館書店
- ☆ 1973 『まのいいりょうし』 瀬田貞二・再話、福音館書店
- ☆ 1974 『さるとかに』 神沢利子・文、銀河社
- ☆ 1975 『ほうまんの池のカッパ』 椋鳩十・文、銀河社

- ☆ 1976 『鬼のうで』 作・絵、偕成社
- ☆ 1977 『くわずにようぼう』 稲田和子・再話、福音館書店
- ☆ 1977 『チワンのにしき』 君島久子・文、ポプラ社
- 1977 『絵本 わらべうた』 偕成社
- ☆ 1978 『鬼ぞろぞろ』 舟崎克彦・文、偕成社
- ☆ 1978 『そら、にげろ』 作・絵、偕成社
- 1979 『春のわかれ』 槇佐知子・文、偕成社
- ☆ 1979 『つるにようぼう』 矢川澄子・再話、福音館書店
- 1979 『絵本よもやま話』 偕成社
- ☆ 1980 『お月さん 舟でおでかけなされ』 神沢利子・うた、童心社
- ☆ 1980 『そばがらじさまとまめじさま』 小林輝子・再話、福音館書店
- ☆ 1982 『したきりすずめ』 石井桃子・再話、福音館書店
- 1983 『やまたのおろち』 舟崎克彦・文、トモ企画
- ☆ 1984 『にぎりめしごろごろ』 小林輝子・再話、福音館書店
- ☆ 1984 『ひょうたんめん』 神沢利子・文、偕成社
- ☆ 1985 『あかりの花』 肖甘牛・採話 君島久子・再話、福音館書店
- ☆ 1986 『おへそがえる・ごん』 作・絵、福音館書店
 - ①ぼんこつやまの ぼんたとこんたの巻
 - ②おにのさんぞくやっつけろの巻
 - ③こしぬけとのさまの巻
- ☆ 1987 『けちんぼおおかみ』 神沢利子・文、偕成社
- ☆ 1988 『かちかちやま』 小澤俊夫・再話、福音館書店
- ☆ 1988 『うまかたやまんば』 小澤俊夫・再話、福音館書店
- ☆ 1989 『みるなのくら』 小澤俊夫・再話、福音館書店

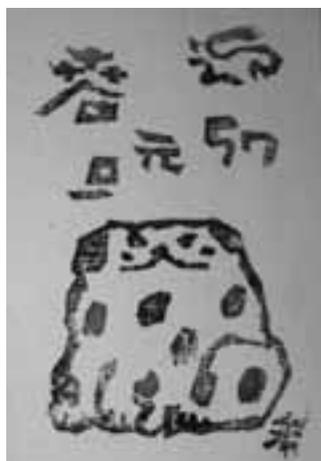
＜ヴィジュアル・ストーリー
テラー赤羽末吉＞の世界
吉田 新一



昨日今日と、密度の高い内容が続きましたが、しんがりの私は＜絵本の世界に遊ぶ＞をモットーに、くつろいでお話をさせていただきます。

私は専ら英米の絵本を中心に学んできました。が、日本人ですから当然、日本の絵本にも関心を持っていました。たまたま3年間程こちらの図書館で客員調査員として、書庫の本を集中的に見る機会を与えられまして、さすがは日本の中心図書館で、他では見られない日本の絵本にもたくさん触れることができました。そこへ、「赤羽末吉」について話さないかとお誘いを受けて、折しも赤羽末吉生誕100年、没後20年の節目の年でもあり、皆さんとこうして赤羽末吉の世界の一端を御一緒に愉しむことになりました。

赤羽さんは1980年に国際アンデルセン賞を受賞されて、そのプラハでの受賞式に、私も渡辺茂男さんや



赤羽さんからの年賀状

斎藤惇夫さんなどと御一緒に、受賞記念の講演をテープに撮って差し上げたりしました。赤羽さんから毎年頂く、干支をテーマとした版画による年賀状は、私のお宝の一つになっています。気取らない、ざっくばらんなお人柄は、本当に懐かしいです。

絵本作家としての赤羽末吉にはいろいろな面がありました。が、視覚表現でストーリーを語ることが、大層お得意で、お好きな方だったというのが、私の強い印象なので、＜ヴィジュアル・ストーリーテラー赤羽末吉＞というタイトルで、今日はお話しさせていただきます。

赤羽さんはイラストレーターとしてもたくさん仕事をされていますが、いわゆる作・絵、お一人でストーリーも絵もなさった作品がけっこうありまして、そこにヴィジュアル・ストーリーテラー振りが強く発揮されていると思いますので、まずはその辺りからまいりましょう。

『おおきなおきなおいも：鶴巻幼稚園・市村久子の教育実践による』

赤羽さんは大変な勉強家でしたが、また御自分の作品の意図や制作のプロセスを率直に吐露なさる方でもあり、お書きになった文章は、我々の作品鑑賞に大変役に立ちます。『おおきなおきなおいも：鶴巻幼稚園・市村久子の教育実践による』についても詳しく書いておられます。絵本の表紙にあるとおり、これは「鶴巻幼稚園・市村久子の教育実践」によって誕生した作品です。たまたま赤羽さんがなさった講演会で、市村さんが御自分の教育実践を披露されました。それは、予定の芋掘り遠足が雨で延期になったとき、子どもたちががっかりするのを、先生が「そんなにさわがな

でもオイモはね、一つねるとムクッ、二つねるとムクムクッ、三つねるとムクムクムクッ、四つねて五つねて六つねて七つねるとね、オイモはいっぱい大きくなって」待ってるよとなだめると、子どもたちが「そのオイモこんなに大きくなってらう？いや、こんなに大きくなっているかな？」と大騒ぎになり、そのお芋の絵を描くから紙ちょうどいとなって、紙を継ぎ足して延々8枚に及ぶ山芋のような長いお芋の絵が完成したという話でした。

赤羽さんはそれを聞いて、エネルギッシュな子どもの想像力に圧倒されて、そのスピーディな想像力の展開は極めて視覚的で、変化に富むから、「これは絵本になる」と思われ、市村さんにテキスト制作を勧めますが、「トテモトテモ」と断られてしまう。しかし、その絵本化の夢はあきらめきれず、ついに赤羽さん御自身による制作が始まったのでした。作家だとまず文章化するはずですが「絵かきの私は、いきなり視覚的な展開でストーリーを進めて（中略）この話のもっとも重要なところは、子どものかいた大きなオイモのだし方で、このところの脚色といおうか、演出といおうか、この表現が、この本のおもしろさを決定づける」と思い、絵本では大きなお芋を「見世物小屋でやっている<チラミ>」のように、「こきざみに展開させてドラマチックに盛りあげてゆくことに」したと言っておられ、作品を見ると、なんと14ページもお芋の絵が続いています、間に「まだ」「まだ」「まだまだ」と言葉を挟んで。

ここに赤羽さんの絵本作りのキーワードがあります、「脚色」です、「演出」です、「ドラマチック」です。「ドラマが展開していく楽しさ」です。赤羽さんは「めくると展開し続くということは、絵本独自のおもしろさ」と言っておられます。そして、巨大なお芋が掘り出された後の、ドラマの展開は全て子どもの想像力を追っての、赤羽さん御自身のクリエイションになりました。お芋・パーティから、空に舞い上がって、芋堀り遠足が、宇宙遠足へと発展していきます。赤羽さんは話の最後は、読者に「自由に無責任に発展させ」ようと考へて、「余白のある絵本もあってよいのでは」と思われたそうです。が、「子どもを空におきざり

にしては、読者が心配するだろう」との意見を受け入れて、絵本の最後は、子どもたちが地上の草原へ下りたところを描いて、「おしまい」とされました。この締めくくり、私は大賛成です。と言うのも、私に子どもの頃の身に覚えが一つあるからです。母はよく私をかまって、顔の目、耳、鼻などを、可愛いからと言って、つまんで食べる真似をしました。私は返して、と叫んで、食べられた全てが返されるまで、気が済まなかったのです。地上から飛び立った子どもたちが、もし空へ上がりっぱなしだったら、子ども読者はお話が中途半端で、納得しないだろうと思うのです。やはり元に戻って、<おしまい>が自然です。

赤羽さんはこの絵本で、文字なしの箇所を意図的に作ったという工夫も、漏らしておられます。なるほど全体で七つ、文字のないページがあります。「作者一人がしゃべっているだけでなく、読者にしゃべらせる——参加させる場をつくったのだ」と言っておられます。

また、ここでは人物がほとんど輪郭線だけで描かれています。例えば、表紙をめくって、見開きの扉と、その一つ前の半ページの絵を見ると、まるでなぐり描きのように、幼稚園児が描かれています。実際に生き生きと、一時もじっとしていない、活動的な子どもの姿が、活写されています。同じく本文の全てのページに描かれている大勢の子どもたちの姿を見てゆくと、私の顔の筋肉は自然と緩んでしまいます。また、お芋と、お芋を連想させる雲や日本列島には、一色の代赭たいしよ色が塗られて、その色彩効果もまた見事です。赤羽末吉のヴィジュアル・ストーリーテラー振りが、まずはここで、存分に味わうことができます。

『そら、にげろ』

これは初めと途中と最後にちょっと言葉が出てきますが、ほとんど文字なし絵本と言える作品です。ストーリーは、主人公が山犬に襲われ、着物の絵柄の鳥たちがびっくりして飛び立ち、それを追いかけるという、シンプルな追っかけ話で、赤羽さんは「これはアニメーション・マンガを、きわめて日本的な歌舞伎調の舞台を背景に、追いかけてこをみせる風変わりな試みをやった、ナンセ

ンス絵本である」と述べておられます。また、表紙カバーの折り返しに、この絵本は「何回もめくっているうちに、初めは鳥を追う旅人しかみえなかったのが、背景に気付き、それが春夏秋冬であることに気付き、その風景の中にまたいろいろなことがみえてきます。(中略)あくまでも絵を視、絵を読む、まったくの視覚的な絵本です」と言い、ここでも「視覚的な絵本」という、赤羽絵本のキーワードが出てきます。

赤羽さんは歌舞伎はもちろん、お芝居、映画が大変お好きで、それらの＜ドラマにおける演出法＞を大いに学んでおられます。絵本でも演出の仕方に大変凝っておられて、ここでも歌舞伎の舞台の書割かきわりを模して、例えば、秋から冬へ移るところでは、秋の書割を押し去り、冬の書割を引き出す、舞台装置係が描かれています。この係が、絵本の表紙をめくった見返しの右端で、芝居の開始を告げる合図をしています。そして、本文が終って裏表紙を閉じる前の見返しでは、芝居の終了を告げるゼスチャーをして立っています。こうしたデザインというかレイアウトは、赤羽さんの他の多くの絵本でも使われていて、いちいち申し上げませんが、本を開き、また閉じる前に、作品の主題に関わるものが、舞台の開始と終了を告げているのに御注目ください。これも赤羽末吉ロゴマークの一つです。

タイトルの「そら、にげろ」は、全体を読むと、「そら」は「空」へ通じる掛け言葉にもなっていますね。本は冊子本の形ですが、絵の連続性はまさに卷子本です。次に取り上げる『まのいいりょうし』と同じ仕立ての本です。赤羽さん御自身の言葉で、「画面いっぱいのかしだれ桜」にはじまって、春の海、富士山、稲妻の走る夏の雨、そして秋の柿、紅葉、冬の山、そして桃色にけぶる花の春と、日本的な風景が転回する。私は子どもに、日本の風景がみせたいのだ」とありますが、それがこの絵本における主たる意図だったのでしょう。

『まのいいりょうし』

これはもちろん日本の昔話ですが、アメリカでの、おおらかなほら話 (tall tales) にととてもよく似

ています。猟師が息子の七つの誕生祝いをするため、山のものでも取ってこようと、出掛けになげしから鉄砲を取るとき、手がすべり石臼にぶつけてしまい、銃先がへの字に曲がってしまいます。が、「臼にあたれば、おおあたりよ」と猟師はその鉄砲を持って出掛けます。まず、池に泳いでいる13羽のカモに弾を放つと、弾がチドリガケに飛んで、13羽全部に命中。それを取るため池に入って、向こう岸の林へ入ると、今度はコイやウサギ、山芋や山鳥とその卵、更にはきのこと、「まのいい」ことが立て続けに起きて、表紙の絵のような姿で、家に帰り着くと、すねのはばきを解けば、池で入り込んだエビが、もんぺを脱げばフナが、踊り出てくる。猟師は「きんじょきんぺんから、ひとびとをよんで」誕生祝いの御馳走を振る舞って、「わたしたちまで、いちごさかえた」と、「まのいいりょうしの話」は終わります。

この絵本は、先にもちょっと触れましたが、絵の提示がなかなか凝ってしゃれています。話がくそしてそれから＞と一続きに進行するので、絵も＜一続きの連続絵＞でなければならない。赤羽さんは、そこで一続きの白い巻紙を使い、絵巻物のように連続するイラストレーションを展開するという意匠で制作されました。その横長の奉書を、糸をクロスハッチングさせた粗い布地の上に置く、という見立てもなさっています。ここでは冊子本の形ですから、ページの端を少しずつずらし重ねてみると、白い巻紙の左右の幅がそれぞれ違っているのに気付くでしょう。すなわち、これによって絵本の見開きで、巻紙左右の縦幅が違って、左端より右端が細くなっていけば、それで視覚的に左右の遠近感が画面に出せるという寸法です。そういった微妙な工夫も凝らされています。また、絵は墨絵を基本としながら、獲物には全体で3色の色が付けられ、初めのカモのところでは、それらが獲得できてから彩色が始まっています。こうした工夫で、話の劇的展開を視覚的に訴えています。最終場面がカラフルで、それまで絵の枠を務めてきた粗い布地の背景も取り払われて、まさにテキストの「いちごさかえた」にふさわしく、絵でも大団円が強調されています。こうして見てくると、ドラマティックな演出が大変お

上手なイラストレーターであることに、改めて共感していただけるのではないのでしょうか。赤羽さんは読者を愉ませようというサービス精神に溢れています、かつ御自身が愉しんでいらっしゃる。それが愉しきあふれる作品を生み出しているのです。

『鬼のうで』

これは室町時代から江戸時代初期に、絵巻物や絵入り写本で庶民の間で普及したいわゆる「御伽草子」の、「羅生門」、「酒呑童子^{しゅてんどうじ}」、「大江山」などの題で知られる有名な物語による、赤羽末吉の作品です。

私は戦中期の少年時代、当時盛んに出版されていた「講談社の絵本」を随分楽しみましたが、その中で今も記憶に鮮やかな1冊は、昭和14年（当時9歳でしたが）に出版された『大江山』（松村武雄文、米内穂豊^{むねとよ}繪）です。京の都で女をさらう鬼が出没して、大將の源頼光^{みなもとのかみみつ}、家来の渡辺綱^{わたなべのつな}らがそれを征伐する話でした。

赤羽さん御自身の言葉によると、「この話は、『御伽草子』にある「羅生門」の鬼退治で、源頼光にまつわる鬼退治は、この前に「大江山」がある。文学的には「大江山」のほうがすぐれているかもしれないが、「羅生門」のほうが、頼光の家来渡辺綱と鬼の知恵くらべて、ドラマ性が強くておもしろく、絵本向きだと思う」と、作品の典拠が語られています。（ここでも<ドラマ性>、<絵本向き>という赤羽末吉の絵本キーワードが出てきていますね。）

私が講談社の絵本で読んだ『大江山』では、まず渡辺綱が頼光に命じられて、茨木童子という鬼の腕を切り落としますが、その腕を鬼に奪い返されてしまいます。鬼の悪さはさらに募るので、今度は頼光自身が綱や坂田金時などを従えて、大江山へ乗り込み、鬼の大將酒呑童子を討ち取るという筋でした。

京都書院から平成9年に出版された、工藤早弓編著『奈良絵本』（上下2冊）には、奈良絵本の「羅生門」と「酒呑童子」が紹介されています。赤羽さんが「より絵本向き」と言われる「羅生門」について、同書の解説を読むと「源頼光はじめ六人

の強者は勅命により大江山の鬼神を退治したが、逃れた眷属が羅生門に出没する。渡辺綱は名剣膝切丸で鬼の腕を切り落とししたが再び奪い返される。その後頼光は病に倒れたが、綱が大和宇多の牛鬼の手を髭切丸で切り落とし持ち帰ると本復した。占いにより鬼の手を七日間守るが七日目鬼は綱の母親の姿で取り返しに来たところを遂に退治される」とあります。前置きが長くなりましたが、こうした予備知識を持って、赤羽末吉作『鬼のうで』を読まれると、作者独自の工夫がよく分かると思います。

絵本の最初、見開きのページにあるのが、今述べた奈良絵本の「大江山」の内容で、前置きとして、酒呑童子が退治された次第が語られて、次の見開きが、鬼の残党一匹が逃げる下り。横長の扇面を見開きの対角線に置き、これからまた都で悪さをして渡辺綱が登場する「羅生門」の話への導入となります。たいへん上手に読者を話の中へいざなっています。次の見開きは、左ページが残党の鬼の悪さ、右ページが綱の登場です。左ページの、女が不意にさらわれる場面は、地が真っ白で、白昼堂々と略奪が行われている様子を示している、と読めます。また、右ページの方はテキストがメインです。後ほど<紙遊び>についてお話しするつもりですが、赤羽さんはテキストを、地色とは別色の和紙を使って表記することを好まれたようで、ここでも草色の地にテキストがプリントされていて、渡辺綱が出陣する白地の絵がその中に貼られています。そして、次と、その次の見開きは、劇画のアニメーション表現になっています。綱が次第に羅生門へ近寄って来る様子を「劇画風にコマをたて割りにして、人物を遠景からだんだん近づかせ、文章では、距離感と雰囲気をつづり、文と絵とのかけあいで見せる試み」をしたと言われています。羅生門の絵については、「<羅生門>は、実際は約十六メートルもある横長の大門だが、まとまりが悪いので小型にした。黒沢明監督の映画『羅生門』も小型であった。やはり同じ理由によるものであろう」と述べて、絵本の題扉に描かれた羅生門も、同じく小型に描かれています。鬼が突如現れ、綱が鬼の腕を切り取り、帰ろうとすると、あっという間に腕を取り返されてしま

う、急転直下の出来事が3見開きに描いて語られています。そして、頼光がたたりで病に臥すと、渡辺綱が、今度こそはと、鬼退治に再出発します。が、一向に鬼は姿を現さず、思案をしていると、見知らぬ女が現れて、道に迷ったという。しかし、女の被り物が風に揺れたとき、青い耳をちらりと見て、さてはと、一刀の元に鬼の腕を切って、頼光の元へ帰ると、頼光の病は治る。この下り、実は歌舞伎の中幕物「戻橋」が使われていて、末吉はこう書いています。「戻橋」は「四、五十分にまとめられたドラマあり、踊りあり、大薩摩^{おおさつま}という三味線の曲弾きあり、最後に大屋根の上で鬼と綱とのチャンバラがあって、宙づりで鬼が逃げてゆくという——子どもにも充分楽しめる劇で、私は子どものときから「戻橋」のファンであった。」

参考に事典で「一条戻橋」を引くと、「渡辺綱が都を見回りに馬に乗って一条戻橋にさしかかると、若く美しい女性が立っていた。声をかけると「五条まで帰る道ですが、道が悪くて困っている、どうか馬に乗せて送ってください」という。綱が女を乗せて、橋を渡ろうとして、ふと水に映った姿をみると、恐ろしい鬼ではないか。綱は刀に手を掛けると、鬼はたちまち正体を現し、綱の首をつかんで、空に飛び上がったが、綱は鬼の腕を切り落とし、鬼は悲鳴を上げて、飛び去った。綱は腕を持ち帰り、箱に入れてしめなわを張っておいた。それから六日目の夜、綱のお婆あさんが訪ねてきて、取った鬼の腕を見せてくれという。綱が腕を見せるや、それをつかんで鬼の姿となって、天井を突き破り、空高く飛び去った」と解説されています。これが『鬼のうで』の最終場面に詳しく描かれていますが、そこでは鬼の腕を守っているのは、源頼光で、鬼が変身して現れるのは頼光の母。腕を奪って、元の姿に戻った鬼と頼光の血みどろの戦いに、綱も加勢して遂に鬼の首をしとめます。「からだを はなれた 鬼めのくびは、空たかく まいあがると、ちからつき、大江山さして ゆらりゆらりと とんでいきよった」と結ばれる最後のページ。作者はこう説明しています——「ラストシーンで、切られて空高く舞いあがった鬼の首が、京の町を下に、ユラユラと飛ぶ場面は、私の好みでつけ加えた場面で、これは読者に

かってな想像をしてもらおう余白である」と、ここにもう一つ、赤羽末吉の絵本キーワード「余白」が登場しています。

絵本を読み終わったら、本を伏せて表と裏の表紙を一面に広げてみましょう。鬼の腕を切り取るという大活劇の瞬間を描いた表紙絵に、裏表紙には芝居の舞台幕がデザイン化されて、芝居がかった話への気品のある視覚化がなされています。語りのハイライト場面はクローズアップを使い、劇画的アニメーションを取り込み、現代風に演出された、まさしくこれは今様の仕立てによる再生古典劇です。

『かさじぞう』

これは絵本作家赤羽末吉誕生の、第一声ですね。福音館書店の「こどものとも」で、茂田井武による『セロひきのゴーシュ』(宮沢賢治著)を見て感動し、1958年春、編集長の松居直氏と初めて会い、すぐに「こどものとも」のイラストレーターに起用されて、同年秋、瀬田貞二さんによるテキスト「かさじぞう」をもらい、翌々年秋に絵を完成、「こどものとも」1961年1月号として出版される…これが、赤羽さんと松居さんの証言を合わせた、作品が誕生するまでの経緯ですね。赤羽さん50歳のときです。制作に、2年近くをかけておられたわけです。旧満州の「乾燥した大陸から日本へ帰ってきて、日本の美しさは、湿気的美しさ、陰りの美しさ」と判断し、そのシメリをあの『かさじぞう』で表現しようとした」と言っておられますが、当時、福島県の会津から柳津へと、只見川線に沿って奥へと向かい、カメラとスケッチで冬の雪国を一生懸命取材されて、その成果が『かさじぞう』に結晶したのでした。

中国画仙紙を使って、墨の滲みを生かした絵で、雪国の景を描かれたことが、成功の第一と言えるでしょう。表裏一面の表紙絵を含め、野外の雪が6面に描かれていますが、それぞれの場と時間で描き方が変えてあります。表紙絵では積もった雪の道を歩く感触が伝わってくるようです。笠を売り歩いている場面では、人の踏み跡がついた町の雪道の様子がよく出ています。吹雪の中を帰りを急ぐ場面と、笠を地藏さんに被せている場面では、

じいさんの気持ちの変化が、雪の描写に投影されています。そして、地藏さんが襦すしを引いてくる場面と、地藏さんが帰っていく場面では、夜明けの時の経過まで描き分けられています。

出来上がった作品で、松居直氏が「画面構成が扇面を生かしていない、扇面の枠が、流れるドラマの連続性をたちきりはしまいか」と、危惧された話は有名ですが、これに対して赤羽さんは「そうかもしれない」と率直に指摘を認めながら、「ここでは扇面といっても、かなり角っぼいし、個々にみてゆくと、思ったより天地の曲線、左右の斜線との関係など、考えてやっているようだ。特に地藏が俵を引いてゆく場面の山脈、道など、扇面の枠を利用して広がり動きを出しているのに安心した。それと、どれだけ計算してやったかわからぬが、結果的にみると、藍の扇面枠のため、雪の白さが強調されていて、まんざらでないと思った」と自己評価されています。

絵本学会の編集で、年1回出している雑誌『絵本 bookend：絵本学会機関誌』の2010年版は、赤羽末吉を特集していて、御子息の赤羽研三氏が父上との思い出を書いておられます——「七〇年代の後半くらいだったと思うが、一度『かさじぞう』の一場面のここがとくに好きだと父に話したことがある。それは、じぞうたちが、米やらをもってじいさんの軒下に置き、帰っていくのをじいさんが見守る第八場面である。じぞうたちはすでに遠くに去っているのだが、一列に並んで進むその姿は、じいさんへのいっぱいのお土産運び終わり、深い雪の中を石の重い体で歩いているためか、ぎこちなく左右に揺れているのである。それは、「のっこのっこ かえっていった」というすばらしい語りによく合っている。すでに夜が明けはじめ、そのじぞうたちの片側に朝日が当たっていて、それは仄かなバラ色で、陰の部分は薄い緑色で表わされている。前景には、家の前に出たじいさんが描かれている。ところが、じいさんは暗がりのなかに没していて、そこで思いがけない贈物もらった驚きの表情はかろうじて読み取れるくらいであり、そのことによって彼の控え目さが感じられるのである。(中略)父は、そのような細かい工夫に気づいてくれたことをとても喜んでくれた。

息子としても、父が強い情熱を注いだ絵を通して、心を通じ合わせられたことが嬉しかった。けっきょくこれは、父の絵の細部に関して交わしたほとんど唯一の機会になってしまい、私には、もっといろいろ話しておけばよかったという後悔を伴って、忘れることのできない思い出である。まさに貴重な親子の会話ですね。

『赤羽末吉の絵本：画集』には『かさじぞう』の習作2枚、地藏さんに笠を被せる場面と、今挙げられていた第八場面が、収められています。作品の同じ箇所と比較すると、扇面を使ったメリットが歴然と分かります。研三氏も「この作品は、次にどうなるかという興味で引っ張っていくというよりは、これといった山場のない、ゆったりとした展開のなかで、その場面場面を楽しんでいくことのできる物語」で「扇面形式が大きな欠陥とはならず、そのよさが生かされる場面が多いように思える」と述べていて、私もこれに同感です。研三氏はこの他に、第八場面についてまた「じいさんの顔のまわりだけ黒いにじみがあって、じいさんの顔の輪郭や表情が浮き出しまわらないように配慮されている。その巧さについては松居氏も「夜明けの寒気を私は感じる」と言っておられる」と指摘して、作品全体を評して「ポエジーを感じる」作と言っておられる。他にも雪を描かれた秀作に『水仙月の四日』(宮澤賢治作)や『つるによぼう』(矢川澄子再話)があり、それぞれさすがに素晴らしい絵を描いておられるが、私個人としては、この『かさじぞう』が最も好きな作品で、研三氏と同じくポエジーを感じて、赤羽さんの最高傑作と思っています。優れた芸術家には処女作が最高、というケースがまま見られますが、赤羽さんにおいてもしかりと言えそうです。みなさんは、いかがでしょうか。

<紙遊び>

『鬼のうで』のところで、赤羽さんの<紙遊び>についてちょっと触れましたが、例えば昔話絵本の『したきりすずめ』(石井桃子再話)、『くわずによぼう』(稲田和子再話)、『そばがらじさまとまめじさま：日本の昔話』(小林輝子再話)などを御覧になると、様々な種類・色合いの和紙を巧みに、

それぞれの持ち味を、楽しみつつ使っておられるのが分かるでしょう。そういった赤羽さんの和紙へのこだわりを、次に味わってみましょう。

おそらく<紙遊び>を最も愉しんで作られたのは、『絵本わらべうた』（赤羽末吉著）と『お月さん舟でおでかけなされ』（神沢利子うた）ではないでしょうか。『絵本わらべうた』は、瀬川康男さんの『わらべうた おおさむこさむ』（「こどものとも」190号、1971年）と並んで、私が愛着する、日本のわらべうた絵本です。まず表紙をめくって見返しを見ると、浅緑の地に小さな千切り和紙が浮いています。次をめくると今度は、淡い灰色地に藍色濃淡の碎片が散った地紙に、濃紺と橙色の和紙片が浮いています。そして次の中扉では、2枚の絵柄和紙を重ねて、平仮名のタイトル文字を縦書きに焦げ茶色で描いてあります。センスのいいデザインの連続で、読者を巧みに本の世界へ引き入れています。30編の唄が、それぞれ見開きページ単位で展開しますが、毎ページの異なるデザインが読者を飽きさせません。模様和紙を使わず、下地を塗って絵を描くところもあります。犬張子、お面、あねさま人形、凧、招き猫、手毬、京団扇、お手玉、羽子板など、古来の郷土玩具や遊具、中には、満州人形を思わせるものなどもあって、それぞれの唄に多様な彩りが添えられており、目を愉しませてくれるわらべうた絵本でもあります。年中行事とか、歳時記とかといった特定テーマを設けずに、唄の順序も自由ランダムで、よく知られた唄あり、初耳の珍しい唄あり、日本人として郷愁をそそられる絵本、赤羽末吉の多様なデザインが楽しめる絵本と、言うてよいでしょう。先ほど瀬川康男の『わらべうた おおさむこさむ』に言及しましたが、たまたま同じ唄が二つ、お二人によって取り上げられています。「おたまじゃくしは／なぜかみゆわぬ／つるつるすべって／かみゆえぬ」と「おおさむこさむ／やまからこぞうがとんできた／なんといつてとんできた／さむいといつてとんできた」（これは2番目が小猿、3番目がうさぎで、共に3番まで収録されています）は、お二人のイラストレーションを比べてみると、片や写実画、片やグラフィック画、またユーモアの込め方の違い等、持ち味の違いが対比できて愉し

めます。（お二人は、野尻湖畔で一緒に仕事をなさったことがあったそうで、瀬川さんがテレビのボリュームをいっぱい上げて仕事をされるのに、赤羽さんがびっくりされた話を聞いたことがあります。両画家は、互いに良きライバルだったのでしょう。）

では次に、神沢利子さんの詩にイラストをした『お月さん舟でおでかけなされ』に移りましょう。テキストの神沢さんの詩は、とても幻想的・神秘的です。アンデルセンの連作童話集『絵のない絵本』では、月が画家に語りますが、ここでは、語り人が月に「お月さん いくつ／十三 七つ／まだ としわかい…」とわらべ唄で呼びかけます。お月さんは「舟で おでかけなされ 小舟のなかでねんねを」産んで、ねんねに乳を飲ませ、赤い雲から赤いべべ、白い雲から白いべべをもらいますが、鯛とひらめにやってしまい、ねんねははだかのいたずら坊に成長し、くじらの背中で滑りながら、波間へと消えてゆきます。お月さんは一人小舟で海原を越え、流水浮かぶ南の海をめぐり、一人ごこぎここいで戻ってきます。あおい波まにくらげがぶかり、聞こえてくるわらい声は、ねんねの声か、くらげの声か、波といっしょにかくれんぼ。「お月さん 旅から おかえりなされ、山にのぼって ザボンたべてござれ 海は むらさき はるぼろ ひかる」と、再びお月さんへの声かけで、幻想詩は幕を閉じるのです。

赤羽さんは「この神沢さんのうたは、日本の南から流水の海までひろがる、まことにスケールの大きな、ファンタジックな不思議な世界である。この内容をどう表現するかをつきつめたとき、詩の抽象性を和紙の模様の抽象性で語ろうと気づき、この方法を発見した。そして「海は むらさき はるぼろ ひかる」のすばらしいひろがり、心とした」と述べておられます。

赤羽さんの「この方法」とは、「和紙だけで構成した、新しい試み」で、「ハリ絵の一種になると思うが、ただワクを描いて和紙を埋めてゆくのとちがう。和紙のもつ独特なもち味に、作者の想像力を加えて、またちがった生命を与え、それにドラマを語らせようとしたものである。レース型の波模様の和紙を、表面にだして、そのまま使ったり、

あるいは、薄紙の底にしずめたり、ちぎって躍動的な波にしたりした。また、漉きこんだ模様のみを、大空の雲の動きにしたり、海面の怒涛^{どとう}にみたり、一つの紙にいろいろのドラマを語らせようとした。典具帖^{てんぐじょう}という薄い和紙の色ちがい何枚も重ねると、絵の具ではなかなかしえなような深い画面がえられた。また、薄紙の活用で幻想的な世界も、容易にできた」と、この和紙絵本の制作について詳細に解説されています。遊びを越えて、道楽の域に達しておられると言いたいところですが、しかし、ではこういう技法以外で、果たして神沢さんの幻想詩にイラストレーションは可能か？と思うと、赤羽さんの苦心の創造があって、初めて詩と絵のコラボレーションが見事に成功しているのです、お道楽という発言は大変失礼な言葉と言わねばなりません。

ここまで具体的に、詳細に赤羽さん御自身の解説を読めば、後は作品を手にとって、ページをゆっくり順にめくって味わうのがベストと思います。各自お手に取ってじっくりと鑑賞なさってください。

『つるにようぼう』

これは赤羽さんの到達された、絵本のイラストレーションでの頂点でしょう。紙遊びも芸として、見事に洗練を遂げています。また、雪の世界を描いたことでは、御自身が『『かさじぞう』の延長上にある』とおっしゃっています。先に引用した『赤羽末吉の絵本：画集』では、この絵本が、「ふっくらとした雪の丸みを出すために屋外の絵は奉書もちいて、絵の具のにじみ具合などもためしたり、屋内用の麻紙では藍色の色紙を裏から貼って暗さを出す試みをしたり」している、と解説されています。物語の冒頭の、手負いの鶴と、よ平が近づいて来る、雪の激しく降る場面。その夜、娘が雪にうずもれるようなよ平の家を訪ねてくる場面。よ平が織物を町へ売りに行った場面。織物が高い値で売れてほくほくしながら家路を急ぐ、雪深い山裾の道の場面。そして「春ちかい、はらかな山なみの上を、小さな鶴が一羽」飛び去っていく最終の2場面。いずれも処女作『かさじぞう』の雪景色と比べて、円熟の極みに達したこの

画家の技を味わうことができます。

この鶴女房の話は、改めて申すまでもなく、戦後間もない昭和24年に、木下順二の作で、山本安英とくぶどうの会>によって初演された芝居で、広く知られるようになりました。実は、木下順二はその2年後の昭和26年に、新潮社「世界の絵本」で、同じタイトルの絵本『夕鶴』を、日本画家福田豊四郎の絵で制作していて、当図書館にも収蔵されています。作者の言では「おとなのための戯曲の中で描こうとしたいろいろの複雑な問題はまた別のこととして、これはこれなりに独立した一編のおはなしとして読まれてよいのだと思います」と、その後書きにあります。同じ作者のものであるから、芝居の『夕鶴』とほぼ似た内容です。

この木下順二のテキストと、赤羽さんがイラストをしたテキストを比べたとき、大人読者として私は、新潮社版に切ない抒情を感じ、惹きつけられます。「鶴女房」話は、例えば、佐竹昭広氏の『民話の思想』によると、民話ですから当然、多くのヴァリエントがあって、青森県五戸の場合は、貧乏な老夫婦の夫が、年取りの米を買いに町へ行き、帰り道で飢えた鶴を見かけて、米を恵んでやる。帰宅した夜、見知らぬ女童^{めらし}が訪ねてきて宿を乞う、そして女童は老夫婦の家の娘となります。このタイプの話が、実は大戦中、昭和18年に中央出版協会から、『ツルノオンガヘシ』（坪田譲治文、安泰画）で絵本化されていました（これも当館に所蔵）。すなわち、鶴の化身が老夫婦の娘になるという話で、いずれも見ると禁が破られて、鶴となって去るのですが、私が木下順二のテキストに惹かれるのは、そこに聖と俗のテーマが潜んでいるからです。

芝居の『夕鶴』の中で、鶴の化身であるくつう>は、自分を救ってくれた与ひょうに、こう独白します——「与ひょう、あたしの大事な与ひょう、あんたはどうしたの？あんたはだんだんに変わって行く。何だか分からないけれど、あたしとは別の世界の人になって行ってしまふ。あの、あたしには言葉も分からない人たち、いつかあたしを矢で射たような、あの恐ろしい人たちとおんなじになって行ってしまふ。どうしたの？あんたは。どうすればいいの？あたしは。あたしは一体どうす

ればいいの？あんたはあたしの命を助けてくれた。何のむくいも望まないで、ただあたしをかわいそうに思って矢を抜いてくれた。それがほんとに嬉しかったから、あたしはあんたのところに来たのよ。そしてあの布を織ってあげたら、あんたは子供のよう喜んでくれた。だからあたしは、苦しいのを我慢して何枚も何枚も織ってあげたのよ。それをあんたは、そのたびに「おかね」っていうものと取りかえて来たのね。それでもいいの、あたしは。あんたが「おかね」が好きなら。だから、その好きな「おかね」がもうたくさんあるのだから、あとはあんたと二人きりで、この小さなうちの中で、静かに楽しく暮らしたいのよ。あんたはほかの人とは違う人。あたしの世界の人。だからこの広い野原のまん中で、そっと二人だけの世界を作って、畠を耕したり子供たちと遊んだりしながらいつまでも生きて行きたかったのに…だのに何だか、あんたはあたしから離れて行く。だんだん遠くなって行く。どうしたらいいの？ほんとにあたしはどうしたらいいの？…あんたといっしょにいさえすれば、それでもうあたしはいいの。…いつまでもいっしょにいてね…遠いところへ行ってしまうわないでね。」

英国の18世紀末に詩人のウィリアム・ブレイクが『無垢の唄』と『経験の唄』という2冊の詩集を子どものために書きました。人間は神から汚れない無垢の子として生まれるが、人間世界で「経験」を積んでいくうちに、人間はすれて墮落していくという、ロマン派の考えがそこから始まるのですが、ここでも、天使の如き聖なるつうが、同じく聖なる与ひょうの俗化し墮落していくのを、懸命に引き戻そうとしますが、ついには二人の絆が切れていく、その哀切の情がそくそくと迫ってきます。木下版にはそういうポエジーがあります。そのハイライト部には、「つうの願いは、お金でも、都でもなく、ただ与ひょうとふたりで楽しく働きながら、いつまでもいっしょに暮らしていきたい、ということだったのです——つうは悲しくて、気がとなくなつてゆくようなこちがしました。|| つうはおもわず雪の中に、走りでてしまいました。きつと誰か悪い人があたしの与ひょうを都へ連れて行くのだ——そう思って、つうはきちがいのよ

うに、あっちこっちへ向かって叫びました。「お願いします。どうぞあたしの与ひょうを引っぱってゆかないで、お願いします。お願いします。」けれども、こたえはなく雪がはげしく降ってくるばかり。つうはとうとう雪の中に倒れてしまいました」聖が俗を嘆く痛切な叫び声が（テキストの||をはさんで）2ページに渡って響きます。

こうしたやや複雑な感情は、福音館書店版には入れ込まれてはいないので、比較的低い年齢の子どもに理解しやすいでしょう。先ほど言及した戦中期の中央出版協会版は男女の愛情さえ込められていないので、もっとシンプルで、更に年齢の低い子どもに適しているでしょう。再話者の坪田譲治は後書きに「我が国にもまだこのやうな話があったのかと、その美しさに心を打たれました。話の筋は素より、眼に浮かぶその情景も、世に比類ない感じであります。雪を描いた文学として、謡曲鉢の木は有名なものであります。然しこの話の描き出す優にやさしき美しさとは、とても比べものになりません。またこれは我が国の昔話に沢山ある動物報恩譚中の一つであります。やはりその中で頂点をなすものでありましよう」と解説されています。しかし、小学生も高学年、いや中学生レベルでは、今は絶版ですが、戦後の新潮社版のテキスト絵本に、私は愛着しています。

誤解のないように申し上げますが、矢川澄子さんのテキストを不可と言っているのでは決してありません。見事なテキストと思っておりますが、ヴァリエントに富む原話の「鶴女房」の奥行きに、私は惹かれていますので、たまたま比較した絵本で、その文学的な感動を話題にしたのでした。

それにしても、赤羽末吉の『つるにようぼう』は見事です、最初にも申しましたように、画家の技の絶頂を物語るものではありませんが、また、「『かさじぞう』の延長線上にある」という作者自身の言葉にも関わらず、私はなお『かさじぞう』の诗情の方に惹かれ続けているのです。

<比較して愉しむ>

最後に、ちょっとくつろいで、赤羽さんのイラストレーションの多様さを愉しんでみましょう。

昔話絵本の『うまかたやまんば』（1988、福音館書店）は、いかにも昔話らしい内容です。ある馬方が、仕入れた魚を馬の背に振り分けて、山道を行くと、山姥が現れて、魚を置いていけと言います。片荷の魚を置いて逃げますが、もう片荷の魚も取られてしまいます。さらに山姥は、馬の脚を要求し、2本目の脚をやった後で、馬方は馬を捨て、池のほとりの木の中に潜みます。山姥が池に映った馬方の影に飛び込んだので、馬方は森の中へ逃げて、見つけた一軒屋に隠れます。が、そこはなんと山姥の住処で、山姥が帰ってくると、寒さに震えて暖炉で甘酒を温め始めて、居眠りをしています。馬方が天井裏から、屋根のカヤで甘酒を吸ってしまい、目覚めた山姥が誰だ飲んだのはとわめくと、火の神、と馬方は天井裏から答えます。今度は山姥が火に餅をかけて、また眠ってしまう。これも馬方が頂戴して、とうとう山姥は本式に寝ることとなり、馬方が火の神の声で木の唐櫃からとを勧めます。そして、馬方は山姥の休んだ唐櫃の蓋に、錐で穴を開け、熱湯を注いで山姥を退治してしまう、という話です。赤羽さんは、馬方が天井裏に上がったからは、横長の絵本を縦開きに変えて、天井裏の馬方と、下の囲炉裏端の山姥とのやり取りを描いて、場面の展開を上手に視覚化されています。全体は昔話の乾いた語りを、そっくり絵画化していて、からっとした昔話の感じをよく表現したイラストレーションだと思います。

この同じ昔話を、実は神沢利子さんが再話したものが『ひょうたんめん』（1984、偕成社）で、こ

れにも赤羽さんがイラストをなさっています。再話ですから、ほとんど同じ話で、「むかし、たねがしまに、おとじろうまごじろうという人がいました」と始まり、ある日馬を引いて塩を買いに行った帰りに、山姥ならぬひょうたんのお化けに襲われて、俵の塩を取られ、馬もやられます。その下り「ひょうたんめんは、耳まで裂けた、その口で、うまにかぶりついて、がぶりぺろりん」という文には、マンガもどきに、ひょうたんお化けが馬の尻に喰らいついた様子が描かれています。また、池に映ったおとじろうまごじろうの影にどんぶり飛び込んで、こぶたんができたひょうたんめんが、帰宅して冷えた体を温めようと思った風呂に、おとじろうまごじろうが蓋をして茹で上げてしまう最後まで、絵は一貫してマンガ調で、滑稽感あふれるイラストレーションが描かれていて、ここでは赤羽さんの絵筆の軽みを愉しむことができます。

他に比較して愉しめるものに、『王さまと九人のきょうだい：中国の民話』という中国の民話と、アメリカのクレール・H. ビショップ文、クルト・ビーゼ絵の『シナの五にんきょうだい』（福音館書店）は同じ話で、中国版とアメリカ版の対照が愉しめます。また、『ほしになつたりゅうのきば』は1963年版と、1976年改訂版の二つがあって、赤羽さん御自身が後に改訂版を出されたもので、これらも両者を並べて読むと、面白い発見ができると思います。

（よしだ しんいち 立教大学名誉教授）

「<ヴィジュアル・ストーリーテラー赤羽末吉>の世界」紹介資料リスト

(本館) → 国立国会図書館東京本館所蔵

※ → 国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	かさじぞう	瀬田貞二再話 赤羽末吉画	福音館書店 1966. 11	Y17-M98-809
2	だいくとおにろく	松居直再話 赤羽末吉画	福音館書店 1967. 2	Y17-M98-801
3	ほしになつたりゅうのきば： 中国民話	君島久子再話 赤羽末吉絵	福音館書店 昭和38	Y17-2939
4	ほしになつたりゅうのきば	君島久子再話 赤羽末吉画	福音館書店 1976. 12	Y17-5037
5	ももたろう	松居直文 赤羽末吉絵	福音館書店 昭和40	Y7-222
6	おじいさんのランプ：新美南吉童話 集	新美南吉著 赤羽末吉等絵	岩波書店 昭和40	Y7-381
7	ヌーチェのぼうけん	神沢利子著 赤羽末吉絵	理論社 昭和41	Y7-579
8	へそもち	渡辺茂男さく 赤羽末吉え	福音館書店 1980. 7	Y17-7142
9	スーホの白い馬：モンゴル民話	大塚勇三再話 赤羽末吉絵	福音館書店 昭和42	Y17-268
10	王さまと九人のきょうだい： 中国の民話	君島久子訳 赤羽末吉絵	岩波書店 1969	Y7-1854
11	セロ弾きのゴーシュ	宮澤賢治著	改版 角川書店 1969	Y81-5021 (本館)
12	水仙月の四日	宮澤賢治作 赤羽末吉画	福音館書店 1969	Y7-1934
13	牛若丸	今西祐行文 赤羽末吉絵	偕成社 1979. 4	Y17-6372
14	おおきなおおきなおいも：鶴巻幼稚園・市村久子の教育実践による	赤羽末吉さく・え	福音館書店 1972. 10	Y8-M98-581
15	まのいいりょうし	瀬田貞二再話 赤羽末吉画	福音館書店 1975	Y17-4543
16	さるとかに	神沢利子文 赤羽末吉絵	銀河社 昭和49	Y17-4227
17	ほうまんの池のカップ	椋鳩十文 赤羽末吉絵	銀河社 昭和50	Y17-4393
18	鬼のうで	赤羽末吉文と絵	偕成社 1976. 12	Y17-5040
19	くわずにようぼう	稲田和子再話 赤羽末吉画	福音館書店 1980. 7	Y17-7141

20	チワンのにしき：中国民話	君島久子文 あかばすえきちえ	ポプラ社 昭和44	Y17-549
21	絵本わらべうた	赤羽末吉著	偕成社 1977. 12	Y17-5637
22	鬼ぞろぞろ	舟崎克彦文 赤羽末吉絵	偕成社 1978. 9	Y17-5967
23	そら、にげる	赤羽末吉作	偕成社 1978. 11	Y17-6096
24	春のわかれ	横佐知子文 赤羽末吉絵	偕成社 1979. 10	Y17-6649
25	つるにょうぼう	矢川澄子再話 赤羽末吉画	福音館書店 1979. 10	Y17-6687
26	絵本よもやま話	赤羽末吉著	偕成社 1979. 5	KC511-29 (本館)
27	お月さん舟でおでかけなされ	神沢利子うた 赤羽末吉え	童心社 1980. 3	Y17-6952
28	そばがらじさまとまめじさま：日本の昔話	小林輝子再話 赤羽末吉画	福音館書店 2008. 10	Y17-N08- J1108
29	したきりすずめ	石井桃子再話 赤羽末吉画	福音館書店 1982. 6	Y17-8567
30	日本の神話. 第3巻 やまたのおろち	舟崎克彦文 赤羽末吉絵	トモ企画 1983	Y8-447
31	にぎりめしごろごろ	小林輝子再話 赤羽末吉画	福音館書店 1994. 1	Y18-8661
32	ひょうたんめん	神沢利子文 赤羽末吉絵	偕成社 1984. 11	Y18-702
33	あかりの花：中国苗族民話	肖甘牛採話 君島久子再話 赤羽末吉画	福音館書店 1985. 1	Y18-918
34	おへそがえる・ごん. 1 ぼんこつやまのぼんたとこんたの巻	赤羽末吉さく・え	福音館書店 1986. 10	Y18-2237
35	おへそがえる・ごん. 2 おにのさんぞくやっつけるの巻	赤羽末吉さく・え	福音館書店 1986. 10	Y18-2237
36	おへそがえる・ごん. 3 こしぬけとのさまの巻	赤羽末吉さく・え	福音館書店 1986. 10	Y18-2237
37	けちんぼおおかみ	神沢利子文 赤羽末吉絵	偕成社 1987. 10	Y18-2883
38	かちかちやま	おざわとしお再話 赤羽末吉画	福音館書店 1988. 4	Y18-3174
39	うまかたやまんば	おざわとしお再話 赤羽末吉画	福音館書店 1988. 10	Y18-3526
40	みるなのくら	おざわとしお再話 赤羽末吉画	福音館書店 1989. 3	Y18-3939

<ヴィジュアル・ストーリーテラー赤羽末吉>の世界

41	ツルノオンガヘシ	坪田譲治文 安泰画	中央出版協會 1943. 10	Y17-N01-914
42	夕鶴 (世界の絵本 大型版：13)	木下順二著 福田豊四郎絵	新潮社 昭和26	Y17-1623
43	大江山	松村武雄文 米内穂豊繪	大日本雄辯會講談社 1939. 7	Y17-N03-H951
44	しゅてんどうじ	木島始著	暁教育図書 1979	所蔵なし
45	桃太郎	[松村武雄] [文] [斎藤五百枝] [絵]	大日本雄辯會講談社 1937. 1	Y17-N03-H998
46	かにむかし	木下順二文 清水崑絵	岩波書店 昭和34	児726-Ki248k
47	さるかにばなし	西郷竹彦文 福田庄助絵	ポプラ社 昭和42	Y17-114- (13)
48	さるかに	松谷みよ子文 瀬川康男絵	講談社 昭和45	Y7-2412
49	シナの五にんきょうだい	クレール・H. ビショップぶん クルト・ヴィーゼえ かわもとさぶろうやく	瑞雲舎 1995. 10	Y18-11201
50	アフゲオホゾラ	徳永壽美子文	正芽社 1941. 6	Y17-N01-873
51	牛若丸 講談社の絵本：8	[大倉桃郎] [文] [近藤紫雲] [絵]	大日本雄辯會講談社 1937. 2	Y17-N03-H999
52	赤羽末吉の絵本：画集	赤羽末吉絵	講談社 2010. 5	KC511-J67 ※
53	奈良絵本：井田架蔵書. 上	工藤早弓著	京都書院 1997. 12	KC16-G1352 (本館)
54	奈良絵本：井田架蔵書. 下	工藤早弓著	京都書院 1998. 1	KC16-G1352 (本館)
55	絵本 bookend：絵本学会機関誌	絵本学会機関誌編集委員会編	絵本学会 2007-	Z71-J938 ※
56	民話の思想	佐竹昭広著	平凡社 1973	KG745-37 ※

レジュメ

日本の児童文学者たち—参考図書紹介

大幸 直子

1. 日本児童文学全般

概要を把握するために

2. 宮沢賢治

詩人、童話作家。1896（明治29）年に現在の岩手県花巻市に生まれ、1933（昭和8）年に病没。生前は、雑誌等に投稿したほかは、詩集『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』を自費出版。

・紹介資料：全集、絵本の例、研究書、雑誌特集、専門誌、インターネット

3. 新美南吉

児童文学作家。1913（大正2）年に、現在の愛知県半田市に生まれ、1943（昭和18）年に病没。本名正八（しょうはち）。10代の頃から幅広く雑誌に投稿。生前に刊行された単行本は『良寛物語 手鞠と鉢の子』と『おぢいさんのランプ』、『牛をつないだ椿の木』と『花のき村と盗人たち』の出版準備はしていたものの刊行は没後。

・紹介資料：全集、絵本の例、研究書、雑誌特集、専門誌、インターネット

4. 金子みすゞ

童謡詩人。1903（明治36）年に現在の山口県長門市に生まれ、1930（昭和5）年に自殺。本名テル。雑誌に投稿して西条八十に認められた後、長く埋もれていたが、矢崎節夫（現金子みすゞ記念館館長）が世に出し、読まれるようになる。

・紹介資料：全集・作品、絵本、研究書、雑誌特集・記事

5. 石井桃子

編集者、翻訳者、児童文学作家。1907（明治40）年に生まれ、2008（平成20）年に亡くなる。

・紹介資料：全集・作品（創作、図書館、児童文学）、翻訳書、研究書、雑誌特集

6. 赤羽末吉

絵本作家。1910年（明治43）年に東京神田で生まれ、1990（平成2）年に亡くなる。

・紹介資料：絵本以外の作品、絵本、平成22年度児童文学連続講座関係、研究書、雑誌論文

7. 国語教材研究

- ・ 紹介資料：全般、宮沢賢治、新美南吉、金子みすゞ

8. NDL-OPAC での検索について

書誌検索⇒タイトル、著者・編者、件名

雑誌記事索引⇒論題名、著者

日本の児童文学者たち

—参考図書紹介

大幸 直子



国際子ども図書館資料情報課長の 大幸です。「日本の児童文学者たち—参考図書紹介」ということで、資料を御紹介してまいります。よろしくお願いたします。

1. 日本児童文学全般

まず、日本児童文学全般についての資料を紹介します。

1-1『日本児童文学大事典』は全3巻の資料です。初めての本格的な児童文学専門の事典で、児童文学について調べる際の基本となるものです。編集した大阪国際児童文学館は、現在は、大阪府立中央図書館に蔵書を移して、大阪府立中央図書館国際児童文学館となっています。

第1巻、第2巻は人名の50音順になっております。第3巻にある索引に注目していただきたいのですが、例えば「赤羽末吉」ですと、赤羽末吉の名前だけでなく、関連するページが幾つも案内されています。事典を使うときにはどうしても索引を使うのを忘れがちなのですが、私自身、この「参考図書紹介」を準備するとき、事典と索引に随分お世話になりました。索引から調べていくと広がりが見え、発見がいろいろありますので、皆さんも是非使ってください。

1-2『日本児童文学大系』は、ほるぷ出版から出ています。全30巻で72名の作家とその作品を収録しています。18巻が「宮澤賢治集」です。先ほど宮川先生のお話にもありました、堀尾青史が編集しています。童話集『注文の多い料理店』収録作品、生前発表作品及び生前未発表作品という形で構成されています。解説は鶴見俊輔と堀尾青史です。28巻は「新美南吉集」で、斎藤寿始子が編集しています。童話や詩、童謡の他に翻訳した詩も

含んでいます。写真、解説、年表、参考文献もあります。請求記号には「Y 7」から始まる数字が記載されていて、国立国会図書館独自の分類で「Y 7」は児童向けの文学を表しています。しかし、内容的には大人でも使える資料だと思います。

1-3『日本児童文学館：名著複製 1』（全32巻、解説書と付録付き）と、1-4『日本児童文学館：名著複製 2』は復刻版です。古い時代の児童文学の初版は当館でも所蔵していないことが多くあります。所蔵していても状態が良くない、カバーや箱が無いなどの理由で、最初に刊行された状態が分からないことが多々あります。しかし、1-3と1-4を合わせて65冊の復刻を読むことができます。今回紹介している児童文学者の著作では、このシリーズの29『風の又三郎』、31『おぢいさんのランプ』、第2集 30『グスコー・ブドリの伝記』、第2集 33『花のき村と盗人たち』を大変きれいな状態で見ることができます。また、付属の解説書も参考になります。

次にそれぞれの作家についての参考図書を御紹介いたします。

2. 宮澤賢治

最初に宮澤賢治です。詩人、童話作家で、1896（明治29）年に現在の岩手県花巻市に生まれ、1933（昭和8）年に病没しています。生前は、雑誌等に投稿した他は、詩集『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』を自費出版したのに止まりました。

紹介資料の内容ですが、初めに全集や絵本の例を提示し、その後に研究書などを御紹介していきます。

全集

全集は2-1『<新>校本宮沢賢治全集』です。全16巻で、各巻が上下2冊に分かれていて36冊、プラス別巻2冊という堂々たるものです。賢治の場合、大変多くの草稿が残されており、それを基に全集が何回か刊行されています。「校本」というのは、例えば写本を照らし合わせて記録して、違いが分かるようにしたものという意味で使う言葉なのですが、『<新>校本』は「本文篇」と「校異篇」に分かれています。「本文篇」はいわゆる定本を定めるものです。定本に至るまでにどのようなふうに原稿などを読み取っていったかが分かるのが「校異篇」です。なかなか使いこなすのが難しそうな資料ですが、いろいろある原稿の中からどれをどのような順番で採用したか、書き直しや推敲の後を追えるようにしているものです。宮沢賢治は生前未発表の作品が多く、本として出されたものは少ないです。書簡もメモも漏らさず収録することを目的に編まれています。例えば、16巻上では、原稿用紙や筆記具の違い、生前批評なども掲載しています。16巻下の伝記資料編に、宮沢賢治の蔵書目録や肖像写真があり、年譜篇は、堀尾青史作成のものを改訂しており、詳細です。別巻には索引が付いているのも、全集の強みだと思います。こうした研究の積み重ねにより、定本ができて、児童向けや教科書などに掲載される作品の選択もきちんとしたものができるようになります。

次に児童向けの全集を御紹介いたします。2-2『新版宮沢賢治童話全集』（全12巻）です。弟である宮沢清六と、研究者の堀尾青史が編んだものです。こちらはやはり研究者が関わっているということで、書簡や学校時代に書いたものも含まれています。1巻から11巻はお話が主で複数の作品を収録しています。12巻には短歌、詩、書簡と、宮沢清六さんが「兄賢治の一生」というのを書いて収めています。画家も多彩で、5. よだかの星は赤羽末吉が挿絵を描いています。岩崎書店は、1964年に同じ編者による『宮沢賢治童話全集』全7巻）を出しているのですが、新版と旧版という形ではなく、それぞれ別の形で編集しています。

絵本：注文の多い料理店（宮沢賢治の絵本の例として）

次に宮沢賢治の絵本の例として、『注文の多い料理店』をいくつか御紹介します。2-3から2-14まで当館で所蔵している絵本12点です。画家は11人に及びます。『注文の多い料理店』と『セロ弾きのゴーシュ』が、一番種類があったように思います。2-14は英語と日本語の対訳になっています。

研究書・評伝など

2-15『評伝・宮沢賢治』（境忠一著）と2-16『年譜宮沢賢治伝』（堀尾青史著）が評伝です。宮沢賢治の研究書は本当に多くて、全部紹介できません。2-15は古いものですが、賢治の生涯について年譜と異なり、文章となっており、著者の解釈が入ることで逆に読みやすいと思います。2-16は1966年に刊行されたものに訂正を加えたものです。

2-17原子朗の『新宮沢賢治語彙辞典』は、語句がどの作品に載っているかだけでなく、読んで楽しめるような解説が付いています。関係する人物についても収録されています。第2版が2000年に出ています。

2-18『データベース宮沢賢治の世界：魅せられし人々の軌跡』は大変多くある賢治に関する文献をまとめたものです。書誌の書誌と言えるものです。研究書の五十音順の一覧、目次、刊行年代順の一覧、執筆者ごとの一覧が収録されています。

2-19『宮沢賢治大事典』は、作品篇は、作品初出、解説、内容紹介、論評、参考文献を含み、一般項目篇には、関係のある人物や関わった雑誌・新聞なども含まれます。2-17と重なるところもありますが、一つの項目が長いので読みでがありません。

2-20『宮沢賢治研究資料集成』は、全21巻、別巻2冊という大変ボリュームのあるものです。1942（昭和17）年9月から1965（昭和40）年12月の雑誌論文などはそのまま再録し、単行本は要旨や目次などを掲載しているので、まとまっているだけでなく、古い論考をたどることが容易になります。専門雑誌の目次や収録している執筆者とタイトルの索引が別巻の1と2に収録されています。

雑誌特集

続いて雑誌の特集です。『日本児童文学』という雑誌から紹介します。2-21「宮沢賢治の再検討(特集)-1-」から2-23「宮沢賢治の再検討(特集)-3-」は、没後40年の特集が3号連続で組まれたものです。雑誌の記事や論文も、時代により書きぶりが違ったりすることがありますが、まとまったものとして御紹介いたします。

2-24「宮澤賢治童話の世界」は『日本児童文学』の別冊として刊行され、丸ごと宮沢賢治を取り上げています。やはりそれだけ重要な作家として扱われていたことが分かります。

2-25「宮沢賢治の現在-1-<特集>」と2-26「宮沢賢治の現在-2-<特集>」は2号連続で宮沢賢治研究の現在ということでもとめられています。1988(昭和63)年です。

一番新しいものが2-27「特集 いま、賢治童話を読む」です。生誕100年に当たる1996(平成8)年に編まれています。

雑誌は長さが十分でないことがありますが、その分エッセンスが凝縮されていたり、いろいろな著者の論文を一度に読めたり、鼎談や対談から研究者の考えの一端が見えたりすることが魅力だと思います。

専門誌

専門雑誌も出ています。2-28『宮沢賢治研究 annual』は研究資料の一覧がビブリオグラフィーとして出ています。前年に刊行された資料をまとめていますので、新しい研究についてはこちらで御確認いただけます。『宮沢賢治研究 annual』を刊行している宮沢賢治学会イーハトーブセンターのホームページでは、同誌掲載のビブリオグラフィーのデータ、1巻(1990(平成2)年)から15巻(2004(平成16)年)までを掲載していますので、少し古い時期の研究成果は、インターネットで調べることができます。

(<http://www.kenji.gr.jp/index.html>)

2-29『宮沢賢治』は最新号が2007(平成19)年に出た17号になっています。宮沢賢治の総合誌のような趣のある雑誌です。研究資料の書影と紹介文があります。16号までは田口昭典さんという方

が「賢治研究の展望」を書いておられて、イベントの紹介もありました。その他編集部による新聞記事紹介などがあります。

インターネット

2-30「青空文庫」は著作権が切れた作品をインターネット上で紹介しているページです。ボランティアが入力しています。賢治の作品は100以上掲載されています(件数は、連続講座当時)。基にしている資料は、選んだ人によって様々です。著作権は切れているので、ダウンロードも自由に行うことができます(特徴です)。(http://www.aozora.gr.jp/index.html)

3. 新美南吉

新美南吉は児童文学作家で、1913(大正2)年に、現在の愛知県半田市に生まれ、1943(昭和18)年に病没しています。本名は正八^{しょうほち}。10代の頃から幅広く雑誌に投稿していました。生前に刊行された単行本は『良寛物語手鞠と鉢の子』と『おどいさんのランプ』です。『牛をつないだ椿の木』と『花のき村と盗人たち』の出版準備はしていたものの、刊行は没後となりました。

全集

全集は3-1『校定新美南吉全集』(全12巻と別巻2巻)が出ています。日記やノート、書簡や画帖、新美南吉の蔵書目録に加え、研究文献目録も収録されています。語彙や登場人物、いわゆるキャラクターの索引もあり、「ごんぎつね」も検索できます。

児童向けの全集として、大日本図書刊行の3-2『新美南吉童話選集』(全10巻)を紹介します。巽聖歌と佐藤通雅が分担する形で編集し、解説を書いています。1973(昭和48)年に巽聖歌が亡くなっていますので、その後を佐藤通雅が引き継ぎました。編者によって巻の大きさ、文字の大きさ、絵の雰囲気は違っています。巽聖歌の方が小さな子どもを意識した作りです。佐藤通雅は、詩も各巻に2~3篇入れ、使用した底本や初出に基づいたことを断っています。

絵本：ごんぎつね（新美南吉の絵本の例として）

『ごんぎつね』の絵本の紹介をいたします。『ごんぎつね』が最も多くの種類が出ています。当館には3-3から3-11まで9冊あり、9名の画家が絵を描いています。なお、同じ絵本を別のシリーズで出したものは除きました。3-3の朝倉摂は、賢治の『注文の多い料理店』の絵も描いています。時代で底本が異なるためか、今読むと違和感があるものがあったり、最後の文があるものとなないものがあったりします。

評伝・研究書など

まず、異聖歌がまとめた2冊、3-12『新美南吉の手紙とその生涯』と3-13『新美南吉十七歳の作品日記』があります。生前、新美南吉を援助して、新美南吉から原稿を託されて出版に尽力した異聖歌のものです。

3-14『ごんぎつねのふるさと：新美南吉の生涯』は、南吉の郷土で南吉の研究をしている大石源三のものです。作品の年譜、略年譜も付いています。

3-15『新美南吉の世界』は浜野卓也の著作で、遠山先生からも御紹介がありました。南吉の生涯と作品を追っているものです。同名の1973年刊行書を文庫にしたものですが、引用元を校定全集にして修正をしています。

3-16『新美南吉童話論：自己放棄者の到達』（佐藤通雅著）も遠山先生の講義に出てきました。当館ではオンデマンド版を所蔵しています。先ほど御紹介した3-2『新美南吉童話選集』に書いた「この本を読んだみなさんへ」という読者向けの解説もそのまま再録しています。

作家でもあるかつおきんやの3-17『「ごんぎつね」をつくった新美南吉：人間・新美南吉』は『「児童文学」をつくった人たち』というシリーズの一つです。1983年刊行の『人間・新美南吉』を改めたものです。

3-18『新美南吉を編む：二つの全集とその周辺』は、書名どおり、二つの全集の編集に携わった編集者保坂重政の著書です。異聖歌は新美南吉の原稿を改変したとずいぶん非難をされましたが、両者の関わり、異聖歌の原稿の改変について、原稿と全集の違いなどの例も見るすることができます。

3-19『講座日本児童文学. 6』です。執筆者の斎藤寿始子は1-2『日本児童文学大系』でも編集を務めています。

雑誌特集

続いて、宮沢賢治と同様、新美南吉も『日本児童文学』の雑誌特集の御紹介です。1968（昭和43）年に最初の特集3-20「新美南吉く特集」が組まれました。

1973（昭和48）年には没後30年を迎え、翌年3-21「新美南吉の再検討く特集」で取り上げられています。これには、例えば鳥越信と浜野卓也の討論も含まれています。

3-22「新美南吉童話の世界」は別冊で出ました。一番新しい特集が、3-23「50年後の新美南吉く特集」です。没後50年の特集です。

雑誌

新美南吉もやはり専門の雑誌が出ています。3-24『南吉研究』と、その一部を引き継いだ形の3-25『新美南吉記念館研究紀要』です。新美南吉記念館のホームページで目次を1号から見ることができます。

(<http://www.nankichi.gr.jp/hakkoubutu/hakkoubutu.htm>)

インターネット

新美南吉は、3-26「青空文庫」には69作品掲載されています（件数は、連続講座当時）。これも典拠が様々ですので、それを踏まえて御利用いただければと思います。

4. 金子みすゞ

次に金子みすゞです。童謡詩人で、1903（明治36）年に山口県の今の長門市に生まれ、1930（昭和5）年に自殺しました。本名はテルです。雑誌に投稿して西条八十に認められた後、長く埋もれていましたが、矢崎節夫（現金子みすゞ記念館館長）が清書した作品ノートを探し出して世に出し、読まれるようになりました。

全集・作品

全集は4-1『金子みすゞ全集』（全4巻＋別冊）があります。最初に部数限定で出て、その後に新装版が出ました。こちらはその新装版の方です。別冊に、矢崎節夫が解題やノート発見の経緯について書いています。

その後、4-2『金子みすゞ童謡全集：現代仮名づかい版』（全6巻）が出ています。雑誌に発表された作品は、巻末に元の形も収録して、発表誌との違いが分かるようになっていきます。金子みすゞは、宮沢賢治や新美南吉のように、作品が、推敲の跡がたどれる形で残っているわけではありません。雑誌に投稿された作品というのは、その作品を選んだ人—例えば西条八十がいますが—の手が入ることが考えられますので、雑誌掲載との違いが確認できるということです。

4-3『繭と墓：金子みすゞ童謡集』は、季節の窓詩舎から1970（昭和45）年に刊行されたものの複製です。雑誌『童話』の掲載作品が主になり、詩人の菊永謙と矢崎節夫の解説が付いたものです。1996（平成8）年に一度大空社から復刻が出されています。

4-4『南京玉：娘ふさえ・三歳の言葉の記録』は娘のおしゃべりを金子みすゞが記録したものです。娘のふさえが保管していた手帳から起こされたものです。

4-5『琅[カン]集：童謡・小曲』は上下巻で出ています。「琅カン」（カンは王偏に干）というのは、緑色の半透明で美しい硬玉で、美しいものに例えるということで、金子みすゞ自身が気に入った作品を書き写したものです。短い解題、掲載作品の書誌、著者についての解説も加えています。元が何か分からないものも含まれていますが、金子みすゞが編集した詩集ということになると思います。

子ども向けの作品を3冊挙げました。4-6『ほしとたんぼぼ』、4-7『明るいほうへ：金子みすゞ童謡集』、4-8『明るいほうへ』です。4-8は「みすゞこれくしょん：金子みすゞ詩の絵本」というシリーズです。

研究書

4-9『童謡詩人金子みすゞの生涯』は矢崎節夫が書いたものです。最初に全集を出したときも矢崎節夫はかなり詳しい解説を書いたのですが、まだ身内の方もいるという事情もあり、自殺の経緯についてはあまり触れないようにするということがありました。その後ようやくまとまったものがこの1冊になります。

4-10は「Kawade 夢ムック 文藝別冊」で『「総特集」金子みすゞ：没後70年』です。作品の紹介の他にも、娘ふさえと矢崎節夫との対談やエッセイ、研究論文、写真があります。また、西条八十の文章、4-11『日本児童文学』の特集「童謡詩人金子みすゞ没後60周年＜特集＞」からの再録などもあり、最初に受容されたときの様子から金子みすゞが発掘された後の経緯を追えるものになっています。参考文献は新聞や講演、詩碑なども含んでいます。年譜には、没後の金子みすゞに関する動向も含まれています。

雑誌特集・記事

雑誌特集・記事では『日本児童文学』が特集を組んで4-11「童謡詩人金子みすゞ没後60周年＜特集＞」が出ています。関英雄、上笙一郎などが座談会形式で評論をしています。

『別冊太陽』の4-12「生誕一〇〇年記念 金子みすゞ」には、大判の誌面を生かして、詩と詩に合った写真を載せ、詩を書いたノートの写真や『琅[カン]集』の元となった手帳の写真も見ることができます。

4-13「研究動向 金子みすゞ」は、金子みすゞの講義をしてくださる藤本恵先生の論文です。金子みすゞについての文献が紹介されています。文献紹介はまだ少ない状況です。

5. 石井桃子

石井桃子は、1907（明治40）年に生まれ、2008（平成20）年に亡くなりました。生まれた年で見ますと、金子みすゞが1903（明治36）年、新美南吉が1913（大正2）年なので、間に位置するのですが、実際の活躍時期のためか、もう少し新しいものを作った人という印象を受けます。業績は、

編集者、創作者、翻訳者、家庭文庫や図書館に関するものと広範囲にわたります。

全集・作品

全集は5-1『石井桃子集』（全7巻）が出ています。7巻の「エッセイ集」に年譜や著作リストがあります。リストは翻訳と創作に分かれています。

絵本作品は5-2『ふしぎなたいこ：にほんむかしばなし』、5-3『おそばのくきはなぜあかい：にほんむかしばなし』、5-4『やまのこどもたち』を挙げています。全集に含まれている作品もありますが、編集者として関わったシリーズです。「ふしぎなたいこ」の初版は1953（昭和28）年ですが、お見せしている資料は1995（平成7）年37刷です。「おそばのくきはなぜあかい」も1954（昭和29）年が初版ですし、長く読まれていることがわかります。

5-5『子どもと文学』は石井桃子、いぬいとみこ、鈴木晋一、瀬田貞二、松居直、渡辺茂男らが共同研究した成果として出しました。新しい児童文学作品の必要性を説いた意欲的なもので、現代の児童文学について、また、石井桃子を語る上では欠かせない文献です。

5-6『幻の朱い実』は大人向けの自伝的な長編小説で、上下巻で出ています。

翻訳書

翻訳もたくさんあります。5-7『クマのプーさん』は1940（昭和15）年が初版なのですが、ここでは新版を紹介しています。少し訳を改めて、岩波少年文庫に入っています。5-8『ちいさいおうち』も、「岩波の子どもの本」シリーズの編集に携わった中で生まれた作品です。

5-9『ちいさなうさこちゃん』、5-10『ピーターラビットのおはなし』のシリーズは、他の方も訳していますが、石井桃子も訳した作品です。

翻訳には子ども向けのものだけではなく、5-11『児童文学論』もあります。石井桃子、瀬田貞二、渡辺茂男の3名で翻訳していて、訳者あとがきによれば、本質的な児童文学の概論として、訳者たちが一致して推した資料ということです。『子ども

の文学』と同じ頃に研究されたものです。訳注が細かく付いているので助けになると思います。著者のリリアン・H.スミスは児童図書館員でした。5-1の全集6巻の『児童文学の旅』、5巻の『新編子どもの図書館』、5-5『子どもと文学』などは、相互に関連する業績と言えるでしょう。

研究書

5-12『講座日本児童文学 8』と5-13『子どもの本の現在』は、どちらも清水真砂子が執筆したものを取り上げています。5-12は、石井の子ども観に疑念をはさみ、5-13では、職業人としての使命感が、元々持っている自由な表現力の制約となっている点を指摘しています。

5-14『一九五〇年十二月二五日戦後児童文学の夜明け：編集者石井桃子：斎藤惇夫講演録』は、編集者としての石井桃子に焦点を当てた講演録です。

5-15『「喜びの地下水」を求めて：石井桃子が児童図書館にのこしたものの』は、副題からも分かるように、児童図書館に関する業績をまとめたものです。本人の文章を引用してまとめ、文献リストは子どもと図書館に関するものに絞ったものになっています。

5-16『石井桃子の世界：子どもの本にささげた百一年の生涯』は作品論と作家論を合わせたような1冊です。

5-17『石井桃子の世界：心を育てる子どもの本の祭典』、5-18『資料でみる石井桃子の世界』は石井桃子の展示会の関連資料です。5-18は、石井桃子の講義をしてくださる小寺先生が執筆されたもので、5-17に加筆して完成されたものです。

5-19『石井桃子展：本は心の宝物石井桃子からのメッセージ』は杉並区立中央図書館で行われた展示会の資料です。

雑誌特集

『こどもとしょかん』の5-21「特集 石井桃子展」は、5-19の杉並区立中央図書館の展示会に関連したもので、作家、翻訳家、編集者、批評家、文庫活動家としての業績を大変コンパクトに紹介しています。また、展示会準備に当たった方々の文章

も載っています。

『ユリイカ』の5-22「特集 クマのプーさん—ピター・スウィート」は「クマのプーさん」が中心ではあるのですが、石井桃子へのインタビューや書誌と年表があります。

同じく『ユリイカ』の5-23「特集 石井桃子—〇〇年のおはなし」は亡くなる少し前の特集です。作品の表紙画像がかなり多く掲載されています。

『飛ぶ教室』の5-24「特集 石井桃子と子どもの本の100年」も、作品の年譜や表紙画像が掲載されています。

6. 赤羽末吉

赤羽末吉は絵本作家で、1910年（明治43）年に東京神田で生まれ、1990（平成2）年に亡くなりました。赤羽末吉は石井桃子ほどではないですが、天寿を全うした感のある方です。最初の絵本は、50歳になってからの1961（昭和36）年と遅くに出て、その後多くの作品を残しています。

絵本以外の作品

赤羽末吉は、自作についてエッセイの形式で、よく絵本の作成過程や絵本についての考えを書いています。6-1『絵本よもやま話』は、そうした1冊です。雑誌に掲載されたものも含まれますが、多くは新たに書かれたものです。

6-3『子どもと絵本の学校』にも赤羽末吉自身の絵本についての文章とともに、絵本紹介の一つとして『スーホの白い馬』が載っています。

絵本

6-4『かさじぞう』から6-9『Suho and the white horse : a legend of Mongolia』まで絵本を紹介しています。外国語に翻訳された絵本は、全部が代表作と言えるのですが、6-9はその一つです。

平成22年度児童文学連続講座関係

6-10『おじいさんのランプ：新美南吉童話集』から6-14『したきりすずめ』は今回の児童文学連続講座で扱う作家の作品に、赤羽末吉が絵を描いたものです。6-13『ひかりの素足』（宮沢賢治作）が赤羽末吉の最後の仕事となりました。

研究書

6-15『赤羽末吉の絵本：画集』は没後に出ています。画像を一覧できる資料で、絵本原画やスケッチも見ることができます。著作目録には、表紙画像も併載されています。

6-16『赤羽末吉』は小西正保が編集したものです。白黒の絵本図版を複数収録し、赤羽末吉の絵の特徴を編集者松居直や本人の文章とともに紹介しています。

6-17『絵本を読む』は赤羽末吉の絵本芸術ということで、松居直が編集者として赤羽末吉と関わってきた中で制作過程について述べています。「猿蟹絵本合戦」として、清水崑、赤羽末吉、瀬川康男の絵を比べながら分析しています。

6-18『絵本をみる眼』も松居直の著作で、赤羽末吉について清水崑、瀬川康男と比較しています。

6-19『研究とエッセー—文学と教育の周縁：根本正義教授定年退職記念出版』には「赤羽末吉の絵本芸術をめぐる」という論文をヤニック・ボナンが寄せています。赤羽末吉の文章を引きつつ、絵の芸術的側面や構成や子どもを対象にすることについて取り上げています。

雑誌論文

『千葉敬愛短期大学紀要』の6-20「絵本画家以前の赤羽末吉—1910～1961の記録を中心に」は、絵本画家になる前の記録を既存の文献からまとめたものです。いろいろな文献をまとめて読むというのはなかなかできることではないので、御紹介します。

6-21「特集 生誕100年赤羽末吉」は絵本学会の『絵本 bookend』の特集です。「かさじぞう」、「したきりすずめ」、「つるにようぼう」、「けちんぼおおかみ」、「水仙月の四日」、「だいくとおにろく」、「王さまと九人のきょうだい」の七つの作品を扱っています。また、息子の赤羽研三が父について語っています。

7. 国語教材研究

児童文学作品は、国語の教材にも多くなっていますし、子どもが文学に触れるきっかけとなるものですので、国語教材研究についても触れます。

7-1『国語教材研究大事典』は、教師でないともあまり見る機会がないと思いますが、国語教育では、例えばこんな形で作品が読まれている、扱われているということで紹介しました。教材研究の方法や指導技術について作品ごとに解説しています。

7-2『文学教材の実践・研究文献目録：復刻合本. 1』、7-3『文学教材の実践・研究文献目録. 1976年10月～1981年9月』。文学教材の研究は、本当にたくさんされているのですが、この2点は作品ごとにまとめています。この2冊を合わせると1955（昭和30）年から1981（昭和56）年まで追うことができます。

7-4『文学の力×教材の力. 小学校編 4年』から7-7『文学の力×教材の力. 中学校編 1年』は全10巻のシリーズの一部です。連続講座で扱う作家のものだけ挙げました。文学研究者や国語教育研究者が組みになってそれぞれの立場で作品を論じています。

7-8『授業に生きる宮沢賢治』や7-9『授業に生きる新美南吉童話』では両作家についての授業の研究がなされています。

7-11『新美南吉「ごん狐」研究』は「国語教育叢書」というシリーズでまとめられました。「ごん狐」は教材として長く扱われていますので、1作だけで研究書が著されています。

7-12『金子みすゞの詩の単元化：「見る目」を育てる授業』も「授業への挑戦」というシリーズの中で1冊本が出ています。国語教材研究の一端と

いうことで御紹介しました。

8. NDL-OPAC での検索について

最後に、検索について一言触れます。世の中の新旧様々な資料を利用するには、やはり、図書館が欠かせません。図書館資料利用の基本は目録検索です。

日本最大の図書館である国立国会図書館の目録がNDL-OPACです。検索では、タイトル、著者・編者名を使っている方が多いと思いますが、是非、件名も使って調べていただければと思います。国立国会図書館の目録では件名にリンクが張ってあるので、付与されている件名から容易に検索し直すことができます。国立国会図書館以外の図書館の目録でも、詳細検索などの画面で件名から検索ができることが多く、よく使う図書館の目録に慣れると多面的な検索ができます。

また、国立国会図書館では、雑誌記事索引という雑誌の記事や論文のデータベースを作っています。図書よりも記事や論文のタイトルが詳しいことが多いため、件名は付与されていなくても、内容が類推しやすく、データにはページ付けもありますから、登録利用者になって自宅から複写を申し込むのに便利です。こちらも活用していただければと思います。

（おおさち なおこ 国際子ども図書館資料情報課長）

日本の児童文学者たち—参考図書紹介

※国立国会図書館蔵書検索・申込みシステム (NDL-OPAC) の書誌データをもとに一部加工して作成しています。

出版地が東京のものは略しています。出版年は西暦に統一しています。

※請求記号欄の無印は、東京本館所蔵資料で、*があるものは、国際子ども図書館所蔵資料です。

※ NDL-OPAC で請求記号で検索する場合は、無印の請求記号で、検索してください。

*がついた請求記号しかない場合は、*を除いて検索してください。

1 日本児童文学全般			
no.	タイトル	注記	請求記号
1-1	日本児童文学大事典 (全3巻) / 大阪国際児童文学館編. 一大日本図書, 1993. 10. 第1巻 人名 あ〜と 第2巻 人名 な〜わ・事項・逐次刊行物 第3巻 叢書・児童文学賞・巻末資料一覧・索引		KG2-E42 *YZ-910-二ホ
1-2	日本児童文学大系 (全30巻) 一ほるぶ出版, 1977-1978. 18. 宮澤賢治集 (編集堀尾青史) 28. 新美南吉集 (編集斎藤寿始子)		*Y7-6287
1-3	日本児童文学館: 名著複製, 1 (全32巻+解説書+付録) 一ほるぶ出版, 1971. 29. 風の又三郎 / 宮沢賢治著; 小穴隆一画, 羽田書店昭和14年刊の複製 31. おぢさんのランプ / 新美南吉著, 有光社昭和17年刊の複製		KH6-23 *YZ-918-二ホ
1-4	日本児童文学館: 名著複製, 2 (全33巻+解説書) 一ほるぶ出版, 1974. 30. グスコウ・ブドリの伝記: 童話 / 宮沢賢治著, 羽田書店昭和16年刊の複製 箱入 33. 花のき村と盗人たち / 新美南吉著, 少国民文芸選 (帝国教育会出版部昭和18年刊) の複製		KH6-23 *YZ-918-二ホ
2 宮沢賢治			
no.	タイトル	注記	請求記号
全集			
2-1	<新>校本宮沢賢治全集 (全16巻36冊+別巻2冊) / 宮沢清六 (ほか) 編纂, 一筑摩書房, 1995-2009.		
	第1巻. 短歌・短唱. 短歌 歌稿 A. 歌稿 B. 短唱 冬のスケッチ	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第2巻. 詩. 1. 春と修羅. 春と修羅 (宮沢家本). 春と修羅 補遺	「本文編」「校異編」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第3巻. 詩. 2. 春と修羅 第2集. 春と修羅 第2集補遺	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第4巻. 詩. 3. 春と修羅 第3集. 春と修羅 第3集補遺. 詩ノート	「本文編」「校異編」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第5巻. 詩. 4. 口語詩稿 阿禰達池幻想曲 ほか. 疾中 病床 ほか. 補遺詩篇 1 <松の針はいま白光に溶ける> ほか	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第6巻. 詩. 5. 三原三部. 東京. 装景手記. 補遺詩篇 2 <這ひ松の> ほか. 生前発表童謡 あまの川. 生前発表詩篇 花巻農学校精神歌 ほか. 句稿. エスペラント詩稿 Printempo ほか. 歌曲 星めぐりの歌 ほか	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第7巻. 詩. 6. 文語詩稿五十篇. 文語詩稿一百篇. 文語詩未定稿	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第8巻. 童話. 1. 蜘蛛となめくちと狸ほか33編	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第9巻. 童話. 2. 風野又三郎ほか28編	「本文編」「校異編」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第10巻. 童話. 3. やまなしほか30編	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ

	第11巻. 童話. 4. 北守将軍と三人兄弟の医者「初期形」. グスコブドリの伝記. ポラーノの広場. 銀河鉄道の夜. 風「の」又三郎. ひのきとひなげし. セロ弾きのゴーシュ	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第12巻. 童話5・劇:その他. 『注文の多い料理店』 生前発表(新聞雑誌) 童話 雪渡り(雑誌発表形) 雪渡り(発表後手入形) やまなしほか. 生前発表初期断章「旅人のはなし」から. 復活の前. <峯や谷は> 初期短篇綴等. 「短篇梗概」等. 手紙 1~4 劇. <蒼冷と純黒>	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第13巻 上. 覚書・手帳	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第13巻 下. ノート・メモ	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第14巻. 雑纂	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第15巻. 書簡	「本文篇」「校異篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第16巻 上. 補遺・資料	「補遺・資料篇」「草稿通観篇」に分冊刊行	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	第16巻 下. 補遺・資料	「補遺・伝記資料篇」「年譜篇」に分冊刊行 肖像あり	KH361-E15 *YZ-918-ミヤ
	別巻 [1] 補遺・索引. 補遺篇		KH361-J9 *YZ-918-ミヤ
	別巻 [2] 補遺・索引. 索引篇		KH361-J10 *YZ-918-ミヤ
2-2	新版宮沢賢治童話全集(全12巻) / 編集宮沢清六, 堀尾青史. 一岩崎書店, 1978-1979.		
	1. ツェねずみ / カバー, 口絵, さし絵横山泰三		*Y7-6743
	2. ふた子の星 / カバー, 口絵, さし絵中谷千代子		*Y7-6743
	3. どんぐりと山ねこ / カバー, 口絵, さし絵深沢紅子		*Y7-6743
	4. 注文の多い料理店 / カバー, 口絵, さし絵味戸慶子		*Y7-6743
	5. よだかの星 / カバー, 口絵, さし絵赤羽末吉		*Y7-6743
	6. なめとこ山のくま / カバー, 口絵, さし絵齋藤博之		*Y7-6743
	7. オツベルと象 / カバー, 口絵, さし絵井上洋介		*Y7-6743
	8. セロひきのゴーシュ / カバー, 口絵, さし絵太田大八		*Y7-6743
	9. 風の又三郎 / カバー, 口絵, さし絵深沢省三		*Y7-6743
	10. ポラーノの広場 / カバー, 口絵, さし絵蓑田源二郎		*Y7-6743
	11. 銀河鉄道の夜 / カバー, 口絵, さし絵司修		*Y7-6743
	12. 雨ニモマケズ		*Y7-6743
絵本: 注文の多い料理店(宮沢賢治の絵本の例として)			
2-3	注文の多い料理店 / 朝倉摂絵; 宮沢賢治文. 一講談社, 1978. 12. 一(新装版日本の名作)		*Y17-6173
2-4	注文の多い料理店 / 宮沢賢治作; 小沢良吉絵. 一チャイルド本社, 1982. 11. 一(チャイルド絵本館. 日本の名作)		*Y17-9006

2-5	注文の多い料理店 / 宮沢賢治作; 島田睦子絵, 一偕成社, 1984. 6. — (日本の童話名作選)		*Y18-339
2-6	注文の多い料理店 / 宮沢賢治作; 三浦幸子絵, 一福武書店, 1984. 11.		*Y18-749
2-7	注文の多い料理店 / 宮沢賢治作; 池田浩彰絵, 一講談社, 1985. 7. — (宮沢賢治どうわえほん)		*Y18-2124
2-8	注文の多い料理店 / 宮沢賢治原作; スズキコージ絵, 一八尾: 三起商行, 1987. 11. — (ミキハウスの絵本)		*Y18-4284
2-9	注文の多い料理店 / 宮沢賢治作; おぼまこと絵, 一世界文化社, 1988. 12. — (日本の名作童話)		*Y18-3785
2-10	注文の多い料理店: 山賊版 / 宮沢賢治作; 本橋英正画・描き文字, 一源流社, 1989. 1.		*Y18-4430
2-11	注文の多い料理店: 画本宮沢賢治 / 宮沢賢治作; 小林敏也画, 一パロル舎, 1989. 7.		*Y18-5627
2-12	ちゅうもののおいりょうりてん / 宮沢賢治作; 宮本忠夫絵, 一チャイルド本社, 1989. 3. — (チャイルド絵本館, 日本の名作)		*Y18-3965
2-13	注文の多い料理店 / 宮沢賢治 (著) — くもん出版, 1992. 1. — (宮沢賢治絵童話集; 3)	監修: 天沢退二郎, 萩原昌好 画: おぼまこと・ 飯野和好	*Y18-7234
2-14	注文の多い料理店 / 宮沢賢治原作; 天沢退二郎監修; Roger Pulvers 英語; 司修絵, 一ラボ教育センター, 1998. 12 (2刷), 一 (Sounds in kiddyland; series 27)		*Y17-M99-1101
研究書、評伝など			
2-15	評伝・宮沢賢治 / 境忠一著, 一 (第3版) 一桜楓社, 1975.	宮沢賢治所蔵図書 目録あり 参考文献あり 宮沢賢治文学対照 年表 人名索引	KG567-26
2-16	年譜宮沢賢治伝 / 堀尾青史著, 一中央公論社, 1991. 2. — (中公文庫)	宮沢賢治の肖像あり	KG567-E56 *YZ-913. 6-ミヤ 253
2-17	新宮沢賢治語彙辞典 / 原子朗編著, 一東京書籍, 1999. 7.	参考文献: p. 885-945	KG567-G111 *YZ-913. 6-ミヤ 52
2-18	データベース宮沢賢治の世界: 魅せられし人々の軌跡 / 中西敏夫編, 一出版文化研究会, 1999. 1.		KG567-G164 *YZ-913. 6-ミヤ 140
2-19	宮沢賢治大事典 / 渡部芳紀編, 一勉誠出版, 2007. 8.		KG567-H86 *YZ-913. 6-ミヤ 227
2-20	宮沢賢治研究資料集成 (全21巻+別巻2冊) / 続橋達雄編, 一日本図書センター, 1990-1992.		
	1巻~21巻, 昭和17年9月~昭和40年12月の研究資料		KG567-E39 *YZ-913. 6-ミヤ 74
	別巻1, 宮沢賢治研究史, 宮沢賢治研究雑誌細目 1, 第1期総目次, 第1期執筆者索引		KG567-E39 *YZ-913. 6-ミヤ 74
	別巻2, 宮沢賢治論 草野心平著, 転換期の児童文学 楨本楠郎著, 童話作家の創作態度 楨本楠郎著, この本を読まれた方々に 坪田譲治著, 宮沢賢治研究史 続橋達雄著, 宮沢賢治研究雑誌細目 2, 第2期総目次, 第2期執筆者索引, 第1・2期作品論索引		KG567-E39 *YZ-913. 6-ミヤ 74

雑誌特集			
2-21	宮沢賢治の再検討(特集)-1- 『日本児童文学』日本児童文学者協会 / 日本児童文学者協会 編 20(5) [1974. 5] p. 13-57.		Z13-450 *Z13-450
2-22	宮沢賢治の再検討(特集)-2- 『日本児童文学』日本児童文学者協会 / 日本児童文学者協会 編 20(6) [1974. 6] p. 13-39.		Z13-450 *Z13-450
2-23	宮沢賢治の再検討(特集)-3- 『日本児童文学』日本児童文学者協会 / 日本児童文学者協会 編 20(7) [1974. 7] p. 49-64.		Z13-450 *Z13-450
2-24	宮沢賢治童話の世界 『日本児童文学』日本児童文学者協会 / 日本児童文学者協会 編. 22(3) [1976. 2]	別冊として刊行	Z13-450 *Z13-450
2-25	宮沢賢治の現在-1-<特集> 『日本児童文学』日本児童文学者協会 / 日本児童文学者協会 編. 34(11) [1988. 11] p. 6-83.		Z13-450 *Z13-450
2-26	宮沢賢治の現在-2-<特集> 『日本児童文学』日本児童文学者協会 / 日本児童文学者協会 編. 34(12) [1988. 12] p. 6-64.		Z13-450 *Z13-450
2-27	特集 いま, 賢治童話を読む 『日本児童文学』日本児童文学者協会 / 日本児童文学者協会 編. 42(11) [1996. 11] p. 13-79.		Z13-450 *Z13-450
専門誌			
2-28	宮沢賢治研究 annual ・宮沢賢治学会イーハトーブセンター編集委員会編. —Vol. 1 (1991)～. —花巻: 宮沢賢治学会イーハトーブセンター, 1991-. 一年刊 宮沢賢治学会イーハトーブセンター http://www.kenji.gr.jp/index.html 機関誌「宮沢賢治 Annual」掲載のビブリオグラフィーのデータを1巻(1990年)～15巻(2004年)まで掲載		Z13-4331
2-29	宮沢賢治. —1号(1981)～. 洋々社, 1981-. 一年刊		Z13-2466
インターネット			
2-30	青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/index.html 100作品以上掲載(件数は、連続講座当時)		
3 新美南吉			
no.	タイトル	注記	請求記号
全集			
3-1	校定新美南吉全集(全12巻+別巻2巻). 一大日本図書, 1980-1983.		
	第1巻. 童話・小説. 1. 良寛物語手毬と鉢の子. 解題	著者の肖像あり	KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第2巻. 童話・小説. 2 川く B >. 嘘. ごんごろ鐘. 久助君の話. うた時計. おぢいさんのランプ. 貧乏な少年の話. 小さい太郎の悲しみ. 手袋を買ひに. 草. 狐. 牛をつないだ樁の木. 耳. 疣. 椋の実の思出. 銭坊. 赤蜻蛉. 中秋の空. 海から帰る日. 張紅倫. 巨男の話. 解題	著者の肖像あり	KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第3巻. 童話・小説. 3 ごん狐. 百姓の足. 坊さんの足. のら犬. 和太郎さんと牛. 花のき村と盗人たち. 正坊とクロ. 鳥右衛門諸国をめぐる. お母さん達. 木の祭. 赤い蠟燭. 最後の胡弓弾き. 花を埋める. 音ちゃんは豆を煮ていた. 尻. 坂道. 家. 銭		KH436-88 *YZ-918-ニイ

	第4巻. 童話・小説. 4. 大岡越前守 ほか47編	著者の肖像あり	KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第5巻. 童話・小説. 5 抗夫. 蛾とアーク燈. 丘の銅像. 塀. 楽書. 雀. 鞠. 除隊兵. 鴛鴦. 川くA> 決闘. 登つて いった少年. <無題> 『中学二年生の時』	著者の肖像あり	KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第6巻. 童話・小説. 6 螢いろの灯. 空気ポンプ. 自転車物語. 百牛物語. 山から来る少年. 小さい薔薇の花. 父. 芍薬. 名無指物語. 鯛造さんの死. 天狗. <無題> 『北側の』 帰郷. 盆地の伴太郎. 一 枚の葉書		KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第7巻. 童話・小説. 7. 喜劇役者くA> ほか57編		KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第8巻. 詩・童謡・短歌・俳句		KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第9巻. 戯曲. 評論. 随筆. 翻訳. 雑纂 戯曲 自由を我等にほか. 評論・随筆. 翻訳 トランプほか. 雑纂		KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第10巻. 日記・ノート. 1 綴方帳. 作文草稿帳. 昭和四年自由日記(1929年) 少年少女ダイアリー(1930年 ~1931年) 文芸自由日記(1930年~1931年) スバルタノート(1930年~1931年) 解題		KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第11巻. 日記・ノート. 2 メモ&日記(1934~1935年) 昭和十二年ノート I(1937年) 昭和十二年ノート II 及 び昭和十三年 I(1937年~1938年) 出納帳(1937年) 抄録ノート(1938年) 見聞録(1938 年~1941年) 備忘録(1938年~1940年) 昭和十四年ノート I(1938年~1939年)		KH436-88 *YZ-918-ニイ
	第12巻. 日記・ノート. 3. 書簡. 画帖 昭和14年ノート III(1939年) 昭和15年 I(1939年~1940年) 安城勤務メモ(1940年 4月~1942年12月・推定) 昭和15年手帳(1941年~1942年・推定) 昭和16・17年ノート (1941年~1942年) 嬰兒殺しノート. 書簡. 画帖 三人道中. 六根晴天. 筆勢非凡		KH436-88 *YZ-918-ニイ
	別巻 1. 新美南吉年譜. 新美南吉蔵書目録		KH436-88 *YZ-918-ニイ
	別巻 2. 補遺. 新美南吉著作目録. 新美南吉研究文献目録		KH436-88 *YZ-918-ニイ
3-2	新美南吉童話選集(全10巻). 一大日本図書, 1973-1974		
	あかいろうそく / 新美南吉作; 渡辺三郎絵.	解説: 巽聖歌	*Y7-3683
	がちょうのたんじょうび / 新美南吉作; 杉田豊絵.	解説: 巽聖歌	*Y7-3830
	こぞうさんのおきょう / 新美南吉作; 遠藤てるよ絵.	解説: 巽聖歌	*Y7-3807
	こどものすきなかみさま / 新美南吉作; 谷内六郎絵.	解説: 巽聖歌	*Y7-3746
	ごんぎつねとてぶくる / 新美南吉作; 深沢省三絵.	解説: 巽聖歌	*Y7-3684 *Y8-N09-J723 (新訂版1982年 刊行)
	牛をつないだつばきの木 / 新美南吉作; 吉井忠画.	解説: 佐藤通雅	*Y7-4007
	鳥山鳥右エ門 / 新美南吉作; 野口昂明画.	解説: 佐藤通雅	*Y7-4006
	ランプと胡弓ひき / 新美南吉作; 山口晴温画.	解説: 佐藤通雅	*Y7-3911
	うた時計と狐 / 新美南吉作; 三井永一画.	解説: 佐藤通雅	*Y7-4004
	花のき村と盗人たち / 新美南吉作; 村上豊画.	解説: 佐藤通雅	*Y7-4018
絵本: ごんぎつね(新美南吉の絵本の例として)			
3-3	ごんぎつね / 新美南吉文; 朝倉摂絵. 一講談社, 昭和44. 一(日本の名作)		*Y17-518

日本の児童文学者たち—参考図書紹介

3-4	ごんぎつね / 新美南吉文; みたげんじろうえ. —ポプラ社, 昭和44. —(おはなし名作絵本; 1)		*Y17-379
3-5	ごんぎつね / 新美南吉作; 黒井健絵. —偕成社, 1986. 9. (日本の童話名作選)		*Y18-2604
3-6	えほんごんぎつね / 新美南吉文; 金沢佑光絵. —ささら書房 (発売), 1988. 4.	ガイ氏即興人形劇場上演台本より	*Y18-3498
3-7	ごんぎつね / 新美南吉作; 末崎茂樹絵. —世界文化社, 1988. 12. —(日本の名作童話)		*Y18-3788
3-8	ごんぎつね / 新美南吉作; かすや昌宏絵. —あすなる書房, 1998. 6.		*Y17-M99-19
3-9	ごんぎつね / 新美南吉作; 遠藤てるよ絵. —大日本図書, 2005. 2. —(絵本・新美南吉の世界)		*Y17-N05-H239
3-10	ごんぎつね / 新美南吉作; いもとようこ絵. —金の星社, 2005. 5. —(大人になっても忘れたくないいもとようこ名作絵本)	1985年白泉社刊行と同内容	*Y17-N05-H499
3-11	ごんぎつね / 新美南吉作; 岩本康之亮絵. —ひさかたチャイルド, 2007. 1. —(名作絵本ライブラリー)	1988年チャイルド絵本館刊行と同内容	*Y17-N07-H125
評伝・研究書など			
3-12	新美南吉の手紙とその生涯 / 巽聖歌著. —英宝社, 1962.		910. 28-N695Tn *YZ-913. 6-ニイ
3-13	新美南吉十七歳の作品日記 / 巽聖歌著. —日本図書センター, 1993. 6. —(近代作家研究叢書; 141)	解説: 続橋達雄 牧書店1971年刊の複製 著者の肖像あり	KH436-E180 *YZ-913. 6-ニイ
3-14	ごんぎつねのふるさと: 新美南吉の生涯 / 大石源三著. —改訂版. —エフエー出版, 1993. 4	新美南吉の肖像あり 新美南吉の作品: p. 188~201 新美南吉略年譜: p. 215~221 初版は1987年	KG582-E107 *YZ-913. 6-ニイ
3-15	新美南吉の世界 / 浜野卓也著. —講談社, 1981. 1. —(講談社文庫)	新美南吉略年譜: p. 256~260	KG582-139 *YZ-913. 6-ニイ
3-16	新美南吉童話論: 自己放棄者の到達 / 佐藤通雅著. —オンデマンド版. —アリス館, 2000. 7.	原本: アリス館牧 新社1980年刊 (1970年牧書店刊 行の改訂版)	KG582-H43 *YZ-913. 6-ニイ
3-17	「ごんぎつね」をつくった新美南吉: 人間・新美南吉 / かつおきんや著. —ゆまに書房, 1998. 6. —(ヒューマンブックス, 「児童文学」をつくった人たち; 10)		KG582-G57 *YZ-913. 6-ニイ
3-18	新美南吉を編む: 二つの全集とその周辺 / 保坂重政著. —アリス館, 2000. 4.		KG582-G95 *YZ-913. 6-ニイ
3-19	講座日本児童文学. 6 / 編集: 猪熊葉子 (等). —明治書院, 1973. 日本の児童文学作家. 1. 巖谷小波 (続橋達雄) 小川未明 (猪熊葉子) 鈴木三重吉-『赤い鳥』運動の組織者として (根本正義) 坪田譲治-坪田文学における「小説」と「童話」 (西田良子) 新美南吉 (斎藤寿始子) *新美南吉 (斎藤寿始子) は, p. 216-238.		KG411-22 *YZ-910-コウ
雑誌特集			
3-20	新美南吉<特集> 『日本児童文学』日本児童文学者協会. 14(10) [1968. 10] p. 16-70.		Z13-450 *Z13-450
3-21	新美南吉の再検討<特集> 『日本児童文学』日本児童文学者協会. 20(2) [1974. 2] p. 15-89.		Z13-450 *Z13-450

3-22	新美南吉童話の世界 『日本児童文学』日本児童文学者協会, 22(9) [1976. 7] p. 10-283		Z13-450 *Z13-450
3-23	50年後の新美南吉<特集> 『日本児童文学』日本児童文学者協会, 39(3) [1993. 3] p. 6-90.		Z13-450 *Z13-450
雑誌			
3-24	南吉研究. 一半田; 新美南吉研究会. 吸収後誌: 新美南吉記念館研究紀要 所蔵: 1号 (1986. 5)~43号 (2002. 8)		Z71-E33
3-25	新美南吉記念館研究紀要 = Niimi Nankichi Memorial Museum annual bulletin. 一半田; 新美南吉記念館. 一年刊 吸収前誌: 南吉研究 (9号-) 所蔵: 1号 (1994)~ 目次を1号から新美南吉記念館 HP に掲載 http://www.nankichi.gr.jp/hakkoubutu/hakkoubutu.htm		Z13-B490
インターネット			
3-26	青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/index.html 69作品掲載 (件数は、連続講座当時)		
4 金子みすゞ			
no.	タイトル	注記	請求記号
全集・作品			
4-1	金子みすゞ全集(全4巻+別冊) / 与田準一(ほか)編. —JULA 出版局, 1984. 8. 1. 美しい町 2. 空のかあさま 3. さみしい王女 別巻. 思ひでの記.	新装版 著者の肖像あり 別冊(93p): 金子み すゞノート 矢崎 節夫著	KH248-391 *YZ-911. 5-カネ
4-2	金子みすゞ童謡全集: 現代仮名づかい版(全6巻) / 金子みすゞ著; 矢崎節夫監修. —JULA 出版局, 2003-2004.		
	1. 美しい町. 上	肖像あり	KH248-H84 *YZ-911. 5-カネ
	2. 美しい町. 下		KH248-H85 *YZ-911. 5-カネ
	3. 空のかあさま. 上	肖像あり	KH248-H110 *YZ-911. 5-カネ
	4. 空のかあさま. 下		KH248-H111 *YZ-911. 5-カネ
	5. さみしい王女. 上	肖像あり	KH248-H128 *YZ-911. 5-カネ
	6. さみしい王女. 下		KH248-H129 *YZ-911. 5-カネ
4-3	繭と墓: 金子みすゞ童謡集 / 金子みすゞ著—大空社, 2003. 12.	『「季節の窓」友だ ち叢書第3集』(季 節の窓詩舎昭和45 年刊)の複製	*Y8-N04-H555
4-4	南京玉: 娘ふさえ・三歳の言葉の記録 / 金子みすゞ, 上村ふさえ著; 矢崎節夫監修. —JULA 出版局, 2003. 4.		KH248-H44 *YZ-911. 5-カネ
4-5	琅[カン]集: 童謡・小曲. 上 / 金子みすゞ編; 矢崎節夫監修. —JULA 出版局, 2005. 1.	琅玕集	KH13-H124

	琅[カン]集:童謡・小曲. 下 / 金子みすゞ編;矢崎節夫監修. —JULA 出版局, 2005. 1.		KH13-H125
4-6	ほしとたんぼぼ / 金子みすゞ作;上野紀子絵. —JULA 出版局, 1985. 1.		*Y18-1523
4-7	明るいほうへ:金子みすゞ童謡集 / 金子みすゞ著;矢崎節夫選. —JULA 出版局, 1995. 3.		*Y9-1426
4-8	明るいほうへ / 金子みすゞ作. —金の星社, 2005. 11. —(みすゞこれくしょん:金子みすゞ詩の絵本)		*Y8-N05-H1199
研究書			
4-9	童謡詩人金子みすゞの生涯 / 矢崎節夫著. —JULA 出版局, 1993. 2.	金子みすゞの肖像あり 年譜:p. 348-350	KG561-E140 *YZ911.5-カネ
4-10	「総特集」金子みすゞ:没後70年. —河出書房新社, 2000. 1. —(Kawade 夢ムック. 文藝別冊)	肖像あり 文献あり 年譜あり	KG561-G154 *YZ911.5-カネ
雑誌特集・記事			
4-11	童謡詩人金子みすゞ没後60周年<特集> 『日本児童文学』日本児童文学者協会 / 日本児童文学者協会編. 35(9) [1989. 9] p. 6-75.		Z13-450 *Z13-450
4-12	生誕一〇〇年記念 金子みすゞ 『別冊太陽』平凡社. (通号 122) [2003. 4] p. 1-157.		Z23-238 *YZ911-カネ
4-13	研究動向 金子みすゞ / 藤本 恵 『昭和文学研究』昭和文学会 / 昭和文学会編集委員会編. 51 [2005. 9] p. 84-87.		Z13-2128
5 石井桃子			
no.	タイトル	注記	請求記号
全集・作品			
5-1	石井桃子集(全7巻) / 石井桃子著. —岩波書店, 1998-1999.		
	1. ノンちゃん雲に乗る. 三月ひなのつき. 解説 移行するものたち / 天沢退二郎著		KH196-G152 *YZ918-イシ
	2. やまのこどもたち. やまのたけちゃん. いぬとにわとり. くいしんぼうのはなこさん. ありこのおつかい. ふしぎなたいこ. かえるのやくそく. にげたにおうさん. おししのくびはなぜあかい. うみのみずはなぜからい. 山のトムさん. ベンけいとおとみさん. 解説 記憶と言葉 / 金井美恵子著		KH196-G152 *YZ918-イシ
	3. 迷子の天使. 解説 迷子の天使は誰か / 河合隼雄著		KH196-G152 *YZ918-イシ
	4. 幼ものがたり		KH196-G152 *YZ918-イシ
	5. 新編子どもの図書館		KH196-G152 *YZ918-イシ
	6. 児童文学の旅		KH196-G152 *YZ918-イシ
	7. エッセイ集	年譜、著作リストあり	KH196-G152 *YZ918-イシ
5-2	ふしぎなたいこ:にほんむかしばなし / 石井桃子ぶん;清水崑え. —第21刷改版. —岩波書店, 1975. 9(第37刷:1995. 2). —(岩波のこどもの本)		*Y8-N09-J1054
5-3	おそばのくきはなぜあかい:にほんむかしばなし / 石井桃子文;初山滋え. —岩波書店, 1954. 9(第19刷:2003. 10). —(岩波の子どもの本)		*Y17-N05-H49
5-4	やまのこどもたち / 石井桃子文;深沢紅子絵. —岩波書店, 1956. 12(第18刷:2003. 10). —(岩波の子どもの本)		*Y8-N05-H221

5-5	子どもと文学 / 石井桃子等著. 一福音館書店, 1967.	執筆者: 石井桃子、 いぬいとみこ、鈴木晋一、瀬田貞二、 松居直、渡辺茂男 初版は、1960年中央公論社刊	909-1583k-h *YZ-909-イシ
5-6	幻の朱い実. 上・下 / 石井桃子著. 一岩波書店, 1994.		KH196-E229 *YZ-913. 6-イシ
翻訳書			
5-7	クマのプーさん / A. A. ミルン作; 石井桃子訳. 一新版. 一岩波書店, 2000. 6. 一(岩波少年文庫)		*Y7-N00-48
5-8	ちいさいおうち / パージニア・リー・パートン文・絵; 石井桃子訳. 一岩波書店, 1981. 3. 一(岩波の子どもの本)		*Y17-7639
5-9	ちいさなうさこちゃん / ディック・ブルーナ文・絵; いしいもこ訳. 一福音館書店, 1964. 一(子どもがはじめてであう絵本; 1)		*Y17-28- (1)
5-10	ピーターラビットのおはなし / ピアトリス・ポターさく・え; いしいもこやく. 一福音館書店, 1971. 一(ピーターラビットの絵本; 1)		*Y17-3626- (1)
5-11	児童文学論 / リリアン・H. スミス著; 石井桃子, 瀬田貞二, 渡辺茂男訳. 一岩波書店, 1964.		909-cS65z-1 *YZ-909-スミ
研究書			
5-12	講座日本児童文学. 8 / 編集: 猪熊葉子 (等). 一明治書院, 1973. 日本の児童文学作家. 3. 壺井栄 (佐藤勝) 石井桃子 (清水真砂子) 平塚武二・与田準一 (小西正保) 椋鳩十 (大原洋子) 現代作家論 (大岡秀明) * 石井桃子 (清水真砂子) は p. 53-94.		KG411-22 *YZ-910-コウ
5-13	子どもの本の現在 / 清水真砂子著. 一岩波書店, 1998. 7. 一(同時代ライブラリー) 使命感と自己解放のあいだで: 石井桃子. p. 1-49.	大和書房1984年刊の増補 石井桃子の項は増補なし	KG411-G25 *YZ-909-シミ
5-14	一九五〇年十二月二五日戦後児童文学の夜明け: 編集者石井桃子; 斎藤惇夫講演録 / 斎藤惇夫講演; 栃木子どもの本連絡会編. 一[足利]: 小林静子, 2002. 3.	会期: 平成13年8月18日-19日	KG546-H81
5-15	「喜びの地下水」を求めて: 石井桃子が児童図書館にのこしたもの / 汐崎順子, 尾野三千代編著. 一児童図書館研究会, 2010. 3.	石井桃子と児童図書館 石井桃子関連文献リスト	KG546-J41 *YZ-016. 28-ヨロ
5-16	石井桃子の世界: 子どもの本にささげた百一年の生涯 / 小倉健一著. 一[さいたま: 小倉健一], 2010. 4.	年譜あり	KG546-J39
5-17	石井桃子の世界: 心を育てる子どもの本の祭典 / 太子町立図書館編. 一太子町 (兵庫県): 太子町「子どもの心を育てる図書館活動」推進実行委員会, 1999. 11.	会期: 1999年11月20日-12月25日 年譜あり 著作目録あり	KG546-G82 *YZ-913. 6-イシ
5-18	資料でみる石井桃子の世界 / 小寺啓章編著. 一太子町 (兵庫県): 小寺啓章, 2007. 10.	太子町での展示会 図録に加筆	Y93-J8 *YZ-913. 6-イシ
5-19	石井桃子展: 本は心の宝物石井桃子からのメッセージ / 杉並区立中央図書館編. 一杉並区立中央図書館, 2001. 11.		Y121-N01-1070 *YZ-913. 6-イシ
5-20	石井桃子展 / 世田谷文学館編. 一世田谷文学館, 2010. 2.	会期・会場: 2010年2月6日-4月11日 世田谷文学館 年譜あり 著作目録あり	KG546-J42
雑誌特集			
5-21	特集 石井桃子展 『こどもとしょかん』(94) [2002. 夏] p. 2-19.		Z21-1003

5-22	特集 クマのプーさん—ピター・スウィート 『ユリイカ』青土社 36(1) (通号 488) [2004. 1] p. 41-231.	クマのプーさん書誌、クマのプーさん年表あり	Z13-1137 *YZ-933-ミル
5-23	特集 石井桃子—〇〇年のおはなし 『ユリイカ』青土社 39(8) (通号 537) [2007. 7] p. 71-233.	年譜及び作品年譜 主要作品カバーコレクションあり	Z13-1137 *YZ-913. 6-イシ
5-24	特集 石井桃子と子どもの本の100年 『飛ぶ教室』光村図書出版 (11) [2007. 秋] p. 6-57.	年譜 (作品年譜と兼ねる) あり、表紙画像あり	Z71-P267 *Z71-P267
6 赤羽末吉			
no.	タイトル	注記	請求記号
絵本以外の作品			
6-1	絵本よもやま話 / 赤羽末吉著. 一偕成社, 1983. 12.	赤羽末吉・略歴、絵本リスト: p. 244-250	KC511-97 *YZ-726. 61-アカ
6-2	私の絵本ろん: 中・高校生のための絵本入門 / 赤羽末吉著. 平凡社, 2005. 4. —(平凡社ライブラリー; 536. Off シリーズ)	初版は1983年 著作目録あり	*Y6-N05-H211
6-3	子どもと絵本の学校 / 日本子どもの本研究会編. —ほるぷ出版, 1988. 7. ・子どもの絵本は規制できるか / 赤羽末吉 p. 44-49. ・スーホの白い馬 (語りつぐ一人になれば / 大塚有三、演劇的な手法で / 赤羽末吉、心に置きみやげを残す絵本 / 山本さゆり) p. 193-199.		UG71-E7 *YZ-726. 5-コード
絵本			
6-4	かさじぞう / 瀬田貞二再話; 赤羽末吉画. 一福音館書店, 1966. 11 (64刷: 1995. 12). —(<こどものとも>傑作集; 4)		*Y17-M98-809
6-5	スーホの白い馬: モンゴル民話. 一福音館書店, 昭和42. —(日本傑作絵本シリーズ)		*Y17-268
6-6	だいくとおにろく / 松居直再話; 赤羽末吉画. 一福音館書店, 1967. 2 (65刷: 1995. 9). —(<こどものとも>傑作集; 36)		*Y17-M98-801
6-7	そら、にげる / 赤羽末吉作. 一偕成社, 1978. 11.		*Y17-6096
6-8	つるようぼう / 矢川澄子再話; 赤羽末吉画. 一福音館書店, 1979. 10. —(日本傑作絵本シリーズ)		*Y17-6687
6-9	Suho and the white horse: a legend of Mongolia / illustrated by Suekichi Akaba; translated by Yasuko Hirawa. —1st English language ed. —Indianapolis: Bobbs-Merrill, c1969.		*Y19-64
平成22年度児童文学連続講座関係			
6-10	おじさんのランプ: 新美南吉童話集 / 新美南吉著; 赤羽末吉等絵. 一岩波書店, 1965.		*Y7-381
6-11	水仙月の四日 / 宮沢賢治作; 赤羽末吉画. 一福音館書店, 1969.		*Y7-1934
6-12	セロ弾きのゴーシュ / 宮沢賢治作; 赤羽末吉絵. 一偕成社, 1989. 10. —(日本の童話名作選)		*Y18-4392
6-13	ひかりの素足 / 宮沢賢治作; 赤羽末吉絵. 一偕成社, 1990. 4. —(宮沢賢治童話傑作選; 1)		*Y8-7178
6-14	したきりすずめ / 石井桃子再話; 赤羽末吉画. 一福音館書店, 1982. 6. —(日本傑作絵本シリーズ)		*Y17-8567
研究書			
6-15	赤羽末吉の絵本: 画集 / 赤羽末吉絵. 一講談社, 2010. 5.	著作目録あり 年譜あり	KC511-J67 *YZ-726. 61-アカ

6-16	赤羽末吉 / 小西正保編. 一すばるの書房, 1977. 9. —(すばるの書房文庫, 絵本作家文庫)	赤羽末吉略歴・赤羽末吉絵本・挿絵リスト: p. 76-79	KC511-19 *YZ-726. 61-アカ
6-17	絵本を読む / 松居直著. 一新装版. 一日本エディタースクール出版部, 2004. 4. ・赤羽末吉の絵本芸術 p. 37-48. ・『つるによぼう』の技と心 p. 49-79. ・猿蟹絵本合戦 [清水崑、赤羽末吉、瀬川康男] p. 80-132.	文献あり	UG71-H39 *YZ-726. 5-マツ
6-18	絵本をみる眼 / 松居直著. 一新装版. 一日本エディタースクール出版部, 2004. 6. 赤羽末吉—物語の力と卓越した構成力 p. 114-128.		UG71-H41 *YZ-726. 5-マツ
6-19	研究とエッセー—文学と教育の周縁: 根本正義教授定年退職記念出版 / 根本正義教授退職記念出版編集委員会編. 一高文堂出版社, 2006. 12. 赤羽末吉の絵本芸術をめぐる / ヤニック・ボナン著. p. 194-215.		FC76-H390 *YZ-375-ネモ
雑誌論文			
6-20	絵本画家以前の赤羽末吉—1910~1961の記録を中心に / 久保木 健夫 『千葉敬愛短期大学紀要』(29) [2007. 3] p. 23-47.		Z22-1153
6-21	特集 生誕100年赤羽末吉 『絵本 bookend』絵本学会 / 絵本学会機関誌編集委員会 編 2009 p. 4-54.		Z71-J938 *YZ-726. 5-ブツ
7 国語教材研究			
no.	タイトル	注記	請求記号
全般			
7-1	国語教材研究大事典 / 国語教育研究所編. 一明治図書出版, 1992.	付: 主要参考文献	FC76-G1 *YZ-375-コク
7-2	文学教材の実践・研究文献目録: 復刻合本. 1 (1955年-1976年9月) / 関村亮一, 金曜会編; 浜本純逸監修. 一広島: 溪水社, 1988. 7.	索引あり	F1-G15
7-3	文学教材の実践・研究文献目録. 1976年10月~1981年9月 / 浜本純逸, 浜本宏子編. 一広島: 溪水社, 1982. 10.		F1-95
7-4	文学の力×教材の力. 小学校編 4年 / 田中実, 須貝千里編. 一教育出版, 2001. 3.	ごんぎつね収録	FC77-G124 *YZ-375-タナ
7-5	文学の力×教材の力. 小学校編 5年 / 田中実, 須貝千里編. 一教育出版, 2001. 3.	雪わたり、注文の多い料理店収録	FC77-G124 *YZ-375-タナ
7-6	文学の力×教材の力. 小学校編 6年 / 田中実, 須貝千里編. 一教育出版, 2001. 3.	やまなし収録	FC77-G124 *YZ-375-タナ
7-7	文学の力×教材の力. 中学校編 1年 / 田中実, 須貝千里編. 一教育出版, 2001. 6.	オツベルと象収録	FC77-G124 *YZ-375-タナ
宮沢賢治			
7-8	授業に生きる宮沢賢治 / 日本国語教育学会編. 一図書文化社, 1996. 6. —(シリーズことばの学び手を育てる授業; 2)		FC76-G99 *YZ-913. 6-ミヤ122
新美南吉			
7-9	授業に生きる新美南吉童話 / 日本国語教育学会編. 一図書文化社, 1995. 10. —(シリーズことばの学び手を育てる授業; 1)		FC76-G43 *YZ-913. 6-ニイ
7-10	新美南吉と単元学習: 南吉研究国語教育全国大会報告書 / 報告書編集委員会, 半田市立半田小学校編. 一半田市教育委員会, 1996. 3.		FC76-G35 *YZ-375-ニイ
7-11	新美南吉「ごん狐」研究 / 北吉郎著. 一教育出版センター, 1991. 5. —(国語教育叢書; 42)		FC77-E72 *YZ-913. 6-ニイ
金子みすゞ			
7-12	金子みすゞの詩の単元化: 「見る目」を育てる授業 / 大越和孝著. 一明治図書出版, 1997. 5. —(授業への挑戦; 156)		FC77-G49 *YZ-375-オオ

講師略歴（五十音順、敬称略）

小寺 啓章（こでら ひろあき）

大阪市立大学文学部（社会学専攻）卒。広告代理店、兵庫県龍野市立図書館司書を経て、1983年から2007年まで兵庫県太子町立図書館長を務める。現在、兵庫県子どもの図書館研究会代表、ノートルダム清心女子大学非常勤講師。

編著書『資料でみる石井桃子の世界』

遠山 光嗣（とおやま こうじ）

龍谷大学文学部史学科卒。1994年から新美南吉記念館の学芸員として、企画展や講座の開催、新美南吉に関する調査研究及びレファレンスサービスに携わる。

論文「河合弘に宛てた二十七通の手紙—『校定新美南吉全集』未収録書簡」（「新美南吉記念館研究紀要」14号）、「杉浦さちの作文にみる新美南吉の作文指導」（「新美南吉記念館研究紀要」15号）等

藤本 恵（ふじもと めぐみ）

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻博士後期課程を単位取得退学。2003年に論文「錯綜する物語—薫くみこ『十二歳の合い言葉』の魅力」で、第1回日本児童文学者協会評論新人賞（佳作）を受賞。現在、都留文科大学文学部初等教育学科准教授。

編著書『明治 大正 昭和に生きた女性作家たち—木村曙 樋口一葉 金子みすゞ 尾崎翠 野溝七生子 円地文子』（お茶の水ブックレット8）（共著）、『掘りだしものカタログ. 3 子ども部屋×小説』

宮川 健郎（みやかわ たけお）

立教大学文学部日本文学科卒、同大学大学院文学研究科日本文学専攻博士前期課程修了。宮城教育大学、明星大学勤務を経て、現在は武蔵野大学文学部教授。JBBY（社団法人日本国際児童図書評議会）副会長。国立国会図書館客員調査員（平成20年度～）

編著書『きょうはこの本読みたいな』全16巻（共編）、『きょうもおはなしよみたいな』全8巻（共編）、『現代児童文学の語るもの』、『国語教育と現代児童文学のあいだ』、『子どもの本のはるなつあきふゆ』、『名作童話を読む 未明・賢治・南吉』等

吉田 新一（よしだ しんいち）

立教大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程終了。立教大学、日本女子大学勤務を経て、立教大学名誉教授。日本イギリス児童文学学会会長、絵本学会初代会長等を歴任。元国立国会図書館客員調査員（平成17年度～平成19年度）

著書『イギリス児童文学論』、『絵本の愉しみ』、『絵本の魅力』、『ピーターラビットの世界』、『絵本・物語るイラストレーション』等

訳書『ランドルフ・コールドウェットの生涯と作品』、『宝さがしの子どもたち』等

Japanese Writers of Children's Literature
Transcript of the ILCL Lecture Series on
Children's Literature, 2010
Contents

Foreword	Yukio Ikemoto	3
Introductory Notes		4
Kenji Miyazawa's Stories and Young Readers	Takeo Miyakawa	6
Light and Darkness of Nankichi Niimi's Stories	Koji Toyama	23
Appreciation of Misuzu Kaneko's Verses	Megumi Fujimoto	51
Momoko Ishii	Hiroaki Kodera	69
The World of "Suekichi Akaba, the Visual Storyteller"		
	Shin'ichi Yoshida	102
Reference Books on Japanese Writers of Children's Literature		
	Naoko Osachi	119
About the Speakers		140

平成22年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録「日本の児童文学者たち」

平成 23 年 9 月 30 日 発行

編集・発行 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043
印刷 株式会社 丸井工文社
〒107-0062 東京都港区南青山7-1-5

I S B N 9 7 8 - 4 - 8 7 5 8 2 - 7 2 1 - 4

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。本誌のPDF版を国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) でご覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。

